一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 1 冊

買 田 岡 下 遺 跡

2004.10

香 川 県 教 育 委 員 会
国土交通省四国地方整備局

一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第1冊

買田岡下遺跡　正誤表

図版目次　　図版3（1）<u>Ⅳ区</u>（真上から）→Ⅵ区

図版目次　　図版13（1）<u>S31</u>（北から）→SB31

一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第１冊

買 田 岡 下 遺 跡

2004.10

香 川 県 教 育 委 員 会
国土交通省四国地方整備局

Ⅰ・Ⅱ区空中写真（北から）

調査区全景空中写真（東から）

序　文

買田岡下遺跡は、一般国道32号満濃バイパス建設に伴い発掘調査が行われた香川県仲多度郡仲南町十郷に所在する遺跡です。

調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成4年度に用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、古墳時代前期、平安時代前半、室町時代前半の遺構が検出されました。特に平安時代前半の遺構群には大形の掘立柱建物跡が数棟検出されたほか、帯金具・緑釉陶器などの遺物が出土するなど、有力者の屋敷跡の一部である可能性が高く、この地域の古代集落の研究を進めるうえで大変貴重な資料を提供しました。

このたび、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年8月から平成16年3月まで実施しておりました整理事業が終了し、「一般国道32号満濃バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第1冊　買田岡下遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、国土交通省四国地方整備局や関係機関及び地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成16年10月29日

香川県埋蔵文化財センター

所長　中　村　　仁

例　言

1．本報告書は、一般国道32号満濃バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、香川県仲多度郡仲南町十郷に所在する買田岡下遺跡（かいたおかしたいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、試掘調査を平成4年6月15日～18日の期間、香川県教育委員会事務局文化行政課が担当し、本調査を平成4年8月1日～平成5年3月31日の期間、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

調査組織は、本文中に記したとおりである。

4．調査・整理にあたっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

国土交通省四国地方整備局、仲南町教育委員会、買田地区連合自治会

5．報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

編集・執筆は、同センター主任文化財専門員真鍋昌宏が担当した。

なお、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年度末に廃止となったため、報告書刊行業務は香川県埋蔵文化財センターが実施した。

6．本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT.P.を基準としている。

また遺構は、下記の略号により表示している。

SB 掘立柱建物跡　　SD 溝状遺構　　SK 土坑

SP 柱穴跡

7．挿図の一部に、国土地理院地形図「善通寺」(1/25,000)、国土基本図「Ⅳ－FE67」(1/5,000) を使用した。

8．報告書の記述にあたっては、下記の二書から適宜文章を抜粋して用いた。

『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅵ　国道バイパス・県道建設予定地及び県営ほ場整備事業予定内の調査』1993年3月　香川県教育委員会

『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成4年度』1993年3月　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局（現国土交通省四国地方整備局）

本文目次

序文
例言

第１章　調査の経緯 ……………………………………………………………… 1

第１節　調査に至る経過……………………………………………………… 1
第２節　調査の経過…………………………………………………………… 2
第３節　整理作業……………………………………………………………… 2
第４節　発掘調査及び整理作業の体制……………………………………… 5

第２章　立地と環境 ……………………………………………………………… 8

第１節　地理的環境…………………………………………………………… 8
第２節　歴史的環境…………………………………………………………… 8

第３章　調査の成果 ……………………………………………………………11

第１節　調査区…………………………………………………………………11
第２節　基本層序………………………………………………………………11
第３節　遺構・遺物……………………………………………………………12
1　掘立柱建物跡 ………………………………………………………………19
2　柱穴 …………………………………………………………………………57
3　溝状遺構 ……………………………………………………………………63
4　土坑 ………………………………………………………………………… 102
5　包含層 ……………………………………………………………………… 121

第４章　まとめ ………………………………………………………………… 146

第１節　遺構の変遷………………………………………………………… 146
第２節　SD37 出土土器について ………………………………………… 152

挿図目次

第１図　調査区割り図及び試掘調査トレンチ位置図
第２図　遺跡位置及び周辺の遺跡（1/25,000）
第３図　周辺の地形
第４図　Ⅰ区中 東壁・Ⅱ区南 南壁土層図（1/40）及び調査区内土層位置図
第５図　Ⅱ区東 北壁・Ⅱ区東 トレンチ北壁土層図（1/40）
第６図　掘立柱建物跡配置図
第７図　SB01 平・断面図、出土遺物実測図
第８図　SB02 平・断面図、出土遺物実測図
第９図　SB03 平・断面図
第10図　SB04平・断面図、出土遺物実測図
第11図　SB05平・断面図、出土遺物実測図及びSA01・02平・断面図
第12図　SB06平・断面図
第13図　SB07平・断面図、出土遺物実測図
第14図　SB08平・断面図、出土遺物実測図
第15図　SB09平・断面図、出土遺物実測図
第16図　SB10平・断面図、出土遺物実測図
第17図　SB10出土遺物実測図
第18図　SB11平・断面図、出土遺物実測図
第19図　SB12平・断面図
第20図　SB13平・断面図、出土遺物実測図
第21図　SB14平・断面図
第22図　SB15平・断面図、出土遺物実測図
第23図　SB16平・断面図、出土遺物実測図
第24図　SB17平・断面図
第25図　SB20平・断面図、出土遺物実測図
第26図　SB21平・断面図、出土遺物実測図
第27図　SB22・23平・断面図
第28図　SB24平・断面図、出土遺物実測図
第29図　SB25平・断面図、出土遺物実測図
第30図　SB30平・断面図、出土遺物実測図
第31図　SB31平・断面図
第32図　柱穴配置図

第33図　SP出土遺物実測図（1）
第34図　SP出土遺物実測図（2）
第35図　SP出土遺物実測図（3）
第36図　溝状遺構配置図
第37図　SD02・05平・断面図、出土遺物実測図
第38図　SD10・12平・断面図
第39図　SD28～31平面図、出土遺物実測図（1）
第40図　SD28～31断面図
第41図　SD28～31出土遺物実測図（2）
第42図　SD28～31出土遺物実測図（3）
第43図　SD37遺物出土状況
第44図　SD37平・断面図
第45図　SD37出土遺物実測図（1）
第46図　SD37出土遺物実測図（2）
第47図　SD37出土遺物実測図（3）
第48図　SD37出土遺物実測図（4）
第49図　SD48平面図、出土遺物実測図
第50図　SD40～43平・断面図
第51図　SD40・41出土遺物実測図
第52図　SD55～57平・断面図、出土遺物実測図
第53図　SD72平・断面図
第54図　SD69・70・71・73平・断面図、出土遺物実測図
第55図　SD50・58・62～68平・断面図
第56図　SD67・68出土遺物実測図
第57図　SD74～77平・断面図、SD74出土遺物実測図（1）
第58図　SD74（2）・SD76出土遺物実測図
第59図　SD78平面図、出土遺物実測図（1）
第60図　SD78断面図、出土遺物実測図（2）
第61図　SD78出土遺物実測図（3）
第62図　SD79～83平・断面図
第63図　SD79・80・83出土遺物実測図
第64図　土坑配置図
第65図　SK01～05平・断面図、出土遺物実測図
第66図　SK07・10～12平・断面図、出土遺物実測図
第67図　SK13・14・22・25平・断面図、出土遺物実測図
第68図　SK32～35平・断面図、出土遺物実測図

第69図　SK37平・断面図、出土遺物実測図
第70図　SK36・38〜40・44平・断面図、出土遺物実測図
第71図　SK45〜47平・断面図、出土遺物実測図
第72図　SK49〜52平・断面図、出土遺物実測図
第73図　SK53平・断面図、出土遺物実測図
第74図　SK41〜43・54平・断面図、出土遺物実測図
第75図　SK56・58・59・61・66平・断面図
第76図　SK71・72・74平・断面図、出土遺物実測図
第77図　SK75〜77平・断面図、出土遺物実測図
第78図　Ⅰ区西包含層出土遺物実測図
第79図　Ⅰ区中包含層出土遺物実測図（1）
第80図　Ⅰ区中包含層出土遺物実測図（2）
第81図　Ⅰ区東包含層出土遺物実測図
第82図　Ⅱ区西包含層出土遺物実測図（1）
第83図　Ⅱ区西包含層出土遺物実測図（2）
第84図　Ⅱ区西包含層出土遺物実測図（3）
第85図　Ⅱ区西包含層出土遺物実測図（4）
第86図　Ⅱ区東包含層出土遺物実測図（1）
第87図　Ⅱ区東包含層出土遺物実測図（2）
第88図　Ⅱ区東包含層出土遺物実測図（3）
第89図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（1）
第90図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（2）
第91図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（3）
第92図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（4）
第93図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（5）
第94図　Ⅱ区包含層出土遺物実測図
第95図　Ⅲ区西包含層出土遺物実測図
第96図　Ⅵ区包含層出土遺物実測図
第97図　包含層出土遺物実測図
第98図　遺構変遷図（1）
第99図　遺構変遷図（2）
第100図　遺構変遷図（3）
第101図　遺構変遷図（4）
第102図　遺構変遷図（5）

図版目次

巻頭図版１　Ⅰ・Ⅱ区空中写真(北から)
２　調査区全景空中写真(東から)
図版１(1)Ⅰ区西・中(真上から)
(2)Ⅰ区中(東半)·東、Ⅱ区西(西半)(真上から)
図版２(1)Ⅱ区西(東半)·東·南東·南、Ⅲ区西(真上から)
(2)Ⅲ区東、Ⅳ区(真上から)
図版３(1)Ⅳ区(真上から)
(2)Ⅱ区南　全景(東から)
図版４(1)Ⅱ区南　検出遺構全景(東から)
(2)Ⅱ区東　縄文河道調査風景(西から)
図版５(1)Ⅱ区西　北壁西部断面(南から)
(2)Ⅱ区西　北壁東部断面(南から)
図版６(1)Ⅳ区　全景(西から)
(2)SB01・02(南から)
図版７(1)SB03・04(南から)
(2)SB05・06(北から)
図版８(1)SB07～09(北から)
(2)SP208(SB07)土器出土状況
図版９(1)SB10・11(北から)
(2)SB13・15(北から)
図版10(1)SB14(南から)
(2)SB16・17(北から)
図版11(1)SB20(西から)
(2)SB21(北から)
図版12(1)SB22～25(西から)
(2)SB30(南から)
図版13(1)S31(北から)
(2)SP144鉄器出土状況(北から)
図版14(1)SP1518(東から)
(2)SP1521(東から)
図版15(1)SD01　断面(北から)
(2)SD02　断面(北から)
図版16(1)SD03　断面(北から)
(2)SD04　断面(北から)
図版17(1)SD10　断面(南から)
(2)SD12　南断面(南から)
図版18(1)SD37　南半部　全景(北から)
(2)SD37　北断面(南から)
図版19(1)SD37　遺物出土状況(南から)
(2)SD37　遺物出土状況(北から)
図版20(1)SD37　遺物出土状況(北から)
(2)SD37　遺物出土状況(南から)
図版21(1)SD37　遺物出土状況(南から)
(2)SD37　遺物出土状況(北から)
図版22(1)SD37　遺物出土状況(細部)
(2)SD37　遺物出土状況(東から)
図版23(1)SD37　土器出土状況
(2)SD37　土器出土状況
図版24(1)SD37　土器出土状況
(2)SD40・41(南から)
図版25(1)SD40・41(北から)
(2)SD40　東北壁(南から)
図版26(1)SD41　北半部　土器出土状況(南から)
(2)SD78　断面(南から)
図版27(1)SK01　断面(西から)
(2)SK02　断面(東から)
図版28(1)SK03　遺物出土状況(北から)
(2)SK16　断面(東から)
図版29(1)SK18　断面(北から)
(2)SK25　断面(北から)
図版30(1)SK34　完掘(西から)
(2)SK34内柱穴鉄器出土状況(南から)
図版31(1)SK37(北から)
(2)SK37　断面(南から)

図版32(1)SK37　完掘(東から)
(2)SK37　床面敷物(西から)
図版33(1)SK44　鉄刀出土状況(北から)
(2)SK46　断面(東から)
図版34(1)SK47　木板出土状況(西から)
(2)SK47　木板出土状況(北から)
図版35(1)SK47　木板出土状況(東から)
(2)SK53　完掘(西から)
図版36(1)SK62　断面(南から)
(2)SK72　断面(東から)
図版37(1)SK74　断面(東から)
(2)SK77　遺物出土状況(東から)
図版38(1)SK77　遺物出土状況(東から)
(2)SK77　遺物出土状況(西から)
図版39(1)SK77　石出土状況(東から)
(2)SK77　石出土状況(東から)
図版40(1)SK78　遺物出土状況(東から)
(2)現地説明会
図版41　出土遺物(1)
図版42　出土遺物(2)
図版43　出土遺物(3)
図版44　出土遺物(4)
図版45　出土遺物(5)
図版46　出土遺物(6)
図版47　出土遺物(7)
図版48　出土遺物(8)
図版49　出土遺物(9)
図版50　出土遺物(10)
図版51　出土遺物(11)
図版52　出土遺物(12)
図版53　出土遺物(13)
図版54　出土遺物(14)
図版55　出土遺物(15)
図版56　出土遺物(16)

表目次

第１表　買田岡下遺跡整理作業工程表
第２表　買田岡下遺跡の周辺遺跡
第３表　掘立柱建物跡一覧表
第４表　土器観察表
第５表　石器観察表
第６表　鉄器観察表
第７表　木器観察表

付図目次

付図１　香川県買田岡下遺跡全体図（1）
付図２　香川県買田岡下遺跡全体図（2）
付図３　香川県買田岡下遺跡全体図（3）
付図４　香川県買田岡下遺跡Ｉ区中詳細図

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過

調査に至る経過は、埋蔵文化財試掘調査報告Ⅵに詳しいのでこれを引用する。

「国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財の保護については、これまで香川県教育委員会と国土交通省香川工事事務所との間で適宜協議を実施し、その適切な保護に努めてきた。

中讃地方南部の主要幹線道路である国道32号線の慢性的な渋滞を緩和する目的で整備が進められている満濃バイパス（満濃町羽間～仲南町買田）については、昭和63年11月1日付建四香第1461号で照会文書が提出されている。香川県教育委員会では、平成元年度より満濃町四条福家地区・羽間地区・吉野下地区・五条地区の用地交渉の妥結した場所において試掘調査を実施し、そのうち、吉野下地区において古墳時代～古代にかけての集落跡である吉野下・秀石遺跡（8,500㎡）、及び五条地区において古墳時代後期ごろのものと思われる古墳の墳丘の一部を確認している。平成4年度は、満濃町五条地区～仲南町買田地区の延長約880mを対象に平成4年6月15日～18日の期間で試掘調査を実施した。

事前に道路建設予定地内の現地踏査を実施し、遺物の表面採集、地形観察等により、試掘調査の必要の有無の確認および試掘場所の選定を行い、あわせて水路や公・私道の現状や重機の進入経路等を確認した。

試掘調査はトレンチ調査で、以下の方法を原則とした。

試掘トレンチは調査対象の範囲および地形、地割等を勘案して設定した。道路建設予定地内の試掘調査の場合、建設用地の両側近くにそれぞれトレンチを設定するのが有効であるが、今年度は、分布調査の結果等により、また、作付けの関係から建設予定地内の境界近くに千鳥に、地割にあわせてトレンチを設定した。トレンチの規模は幅約2mである。トレンチの掘削は重機により土層毎に掘削し、遺構等の発見される地面で一時停止して、その後は人力により掘削断面の清掃を行った。遺構等の検出後は土層柱状図・遺構配置略図を作成し、適宜写真撮影を行った。記録作成後、必要に応じてさらに深く掘削して、土層の堆積状況を観察・記録し、調査終了後旧状に埋め戻した。」

また、「トレンチは、地形等を勘案し、用地買収状況や作付け状況等から平野部に11箇所ほど設定した。

基本的な層序は、耕作土下に黄色粘土の地山が現れるが、③トレンチにおいては、耕作土下に厚さ10㎝の灰色砂質土の遺物包含層が確認された。調査の結果、①トレンチ東側の水田から微高地が広がることが確認されたが、⑦トレンチより東側の部分については、後世の地下げを受けているらしく、残存状況の悪い近代以降の土坑が検出されたのみであった。検出された遺構としては、溝・土坑があげられる。溝は、②・⑤・⑥トレンチで検出され、特に⑤トレンチで検出された幅1.4m、探さ0.2mのものには、古代～中世にか

けての須恵器片・土師器片・黒色土器椀片が出土している。また、土坑は、②・③・⑥トレンチで検出され、いずれも長さ1m以上、幅0.8m以上で方形である。

トレンチ調査及び地形観察の結果、①トレンチ東側から微高地が広がることがわかり、③トレンチの包含層から古代〜中世頃のものと思われる遺物が出土していることから、同時期もしくはそれ以前の遺構・遺物が所在するものと思われる。また、⑦トレンチ以東は近代以降の土坑の遺存状況からみてかなりの地下げを受けているものと思われ、これ以前の遺構・遺物は所在しないものと思われる。

以上のことから、第3図に示す範囲（8,000㎡）において文化財保護法に基づく適切な保護措置を講ずる必要がある。」と結論され、本調査が財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託された。（『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅵ　国道バイパス・県道建設予定地及び県営ほ場整備事業予定内の調査』1993年3月　香川県教育委員会）

第2節　調査の経過

調査は、試掘結果を受けて香川県教育委員会と現国土交通省四国地方整備局香川工事事務所の協議の結果、同年に本調査を実施することになり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託された。財団法人香川県埋蔵文化財調査センターは、同年8月1日に調査に着手し、8ヵ月の期間を要し平成5年3月31日に終了した。

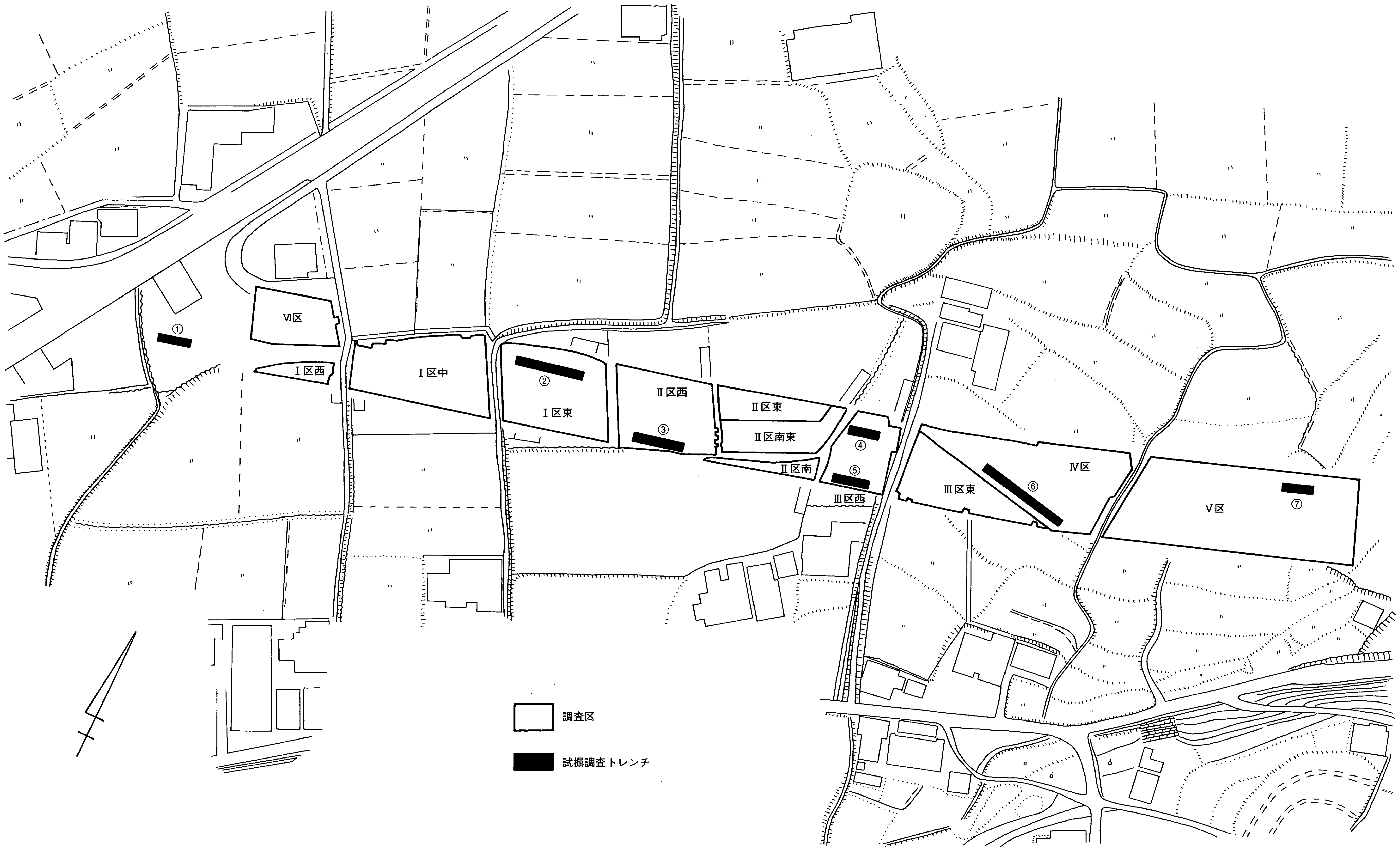
『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成4年度』1993年3月　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

第3節　整理作業

整理作業は、平成15年8月1日に開始し、平成16年3月31日に終了した。整理作業の工程は第1表のとおりである。

第1表　買田岡下遺跡整理作業工程表

区分	工程	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
職員	整理指導					■	■	■	■	■	■	■	■
	原稿執筆					■	■	■	■	■	■	■	■
遺物	接合・復元					■							
	実測・拓本						■	■					
	レイアウト										■		
	トレース										■	■	
	観察表						■	■	■	■	■		
	写真撮影										■		
	写真レイアウト											■	
遺構	遺構図整理					■		■	■				
	レイアウト									■	■		
	トレース										■	■	
	写真レイアウト											■	
印刷	編集											■	■



第１図　調査区割り図及び試掘調査トレンチ位置図

第4節　発掘調査及び整理作業の体制

平成4年度の発掘調査及び平成15年度の整理作業は次の組織で実施した。なお、例言でも触れたように、平成15年度末で財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが廃止となり、平成16年度から香川県埋蔵文化財センターに業務が移行したため、本報告の発注及び校正作業等は香川県埋蔵文化財センターで実施することとなった。組織は次のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課　　長	中村　仁
	主　　幹	菅原良弘
	課長補佐	小原克己
庶務	係　　長	宮内憲生（平成4年5月31日まで）
		源田和幸（平成4年6月1日から）
	主　　事	櫻木新士
		石川恵三子
埋蔵文化財	係　　長	藤好史郎
	主任技師	国木健司
	主任技師	北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所　　長	松本豊胤
	次　　長	市原敏則
総務	係　　長	土井茂樹
	係　　長	今田　修
	主任主事	黒田晃郎（平成4年5月31日まで）
	主任主事	大西建司（平成4年6月1日から）
調査	文化財専門員	西村尋文
	文化財専門員	高月　計
	主任技師	大久保徹也
	調査技術員	高橋佳緒里

平成15年度

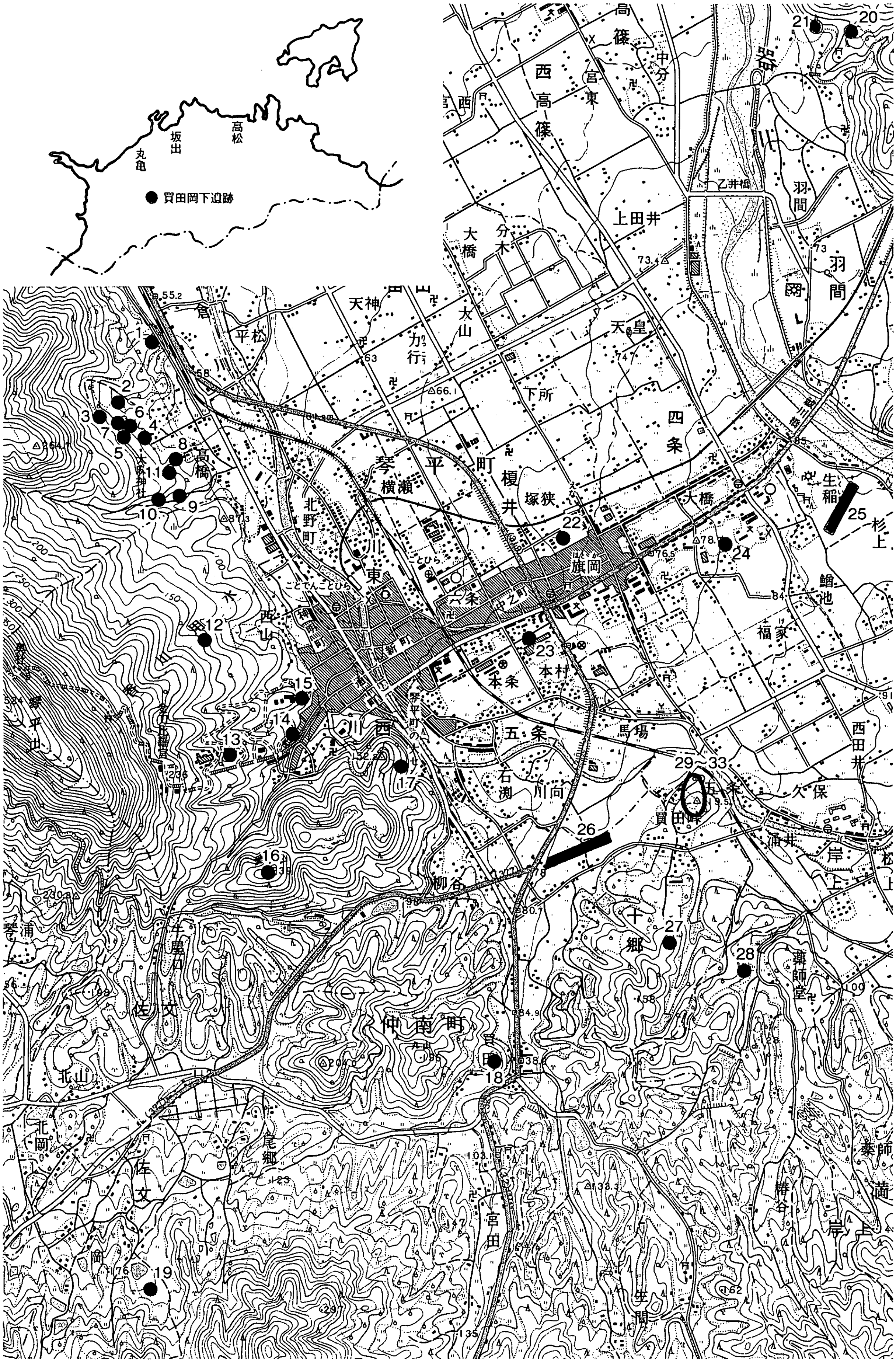
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所　　長	中村　仁
	次　　長	渡部明夫
総務	副主幹	野保昌弘
	係　　長	多田敏弘
	主　　査	塩崎かおり
	主任主事	田中千晶
整理	主任文化財専門員	真鍋昌宏
	担　当	葛西　薫、小林里美、青屋真理、東川真希子、上原慶子

平成16年度

香川県埋蔵文化財センター

総括	所　　長	中村　仁
	次　　長	渡部明夫
総務	総務課長	野保昌弘
	係　　長	松崎日出穂
	主　　査	塩崎かおり
	主任主事	田中千晶
資料普及課	課長事務取扱	渡部明夫
	校正担当	葛西　薫、辻　悦子



第２図　遺跡位置及び周辺の遺跡（1/25,000）

第２表　買田岡下遺跡の周辺遺跡

番号	種別	遺　跡　名	遺跡名ふりがな	所　在　地	時代	備　　考
1	包含地	岩崎遺跡	いわさきいせき	善通寺市大麻町岩崎		
2	包含地			善通寺市大麻町		
3	古墳	大麻神社古墳	おおあさじんじゃこふん	善通寺市大麻町上村上		
4	古墳	大麻神社２号墳	おおあさじんじゃ２ごうふん	善通寺市大麻町		
5	古墳	大麻神社３号墳	おおあさじんじゃ３ごうふん	善通寺市大麻町		
6	古墳	大麻神社４号墳	おおあさじんじゃ４ごうふん	善通寺市大麻町		
7	古墳	大麻神社５号墳	おおあさじんじゃ５ごうふん	善通寺市大麻町		
8	窯			善通寺市大麻町		
9	古墳	百合山１号	ゆりやま１ごう	善通寺市大麻町上村上		
10	古墳	百合山２号	ゆりやま２ごう	善通寺市大麻町上村上		
11	古墳	百合山３号	ゆりやま３ごう	善通寺市大麻町上村上		
12	寺院	称名院跡	しょうみょういんあと	琴平町大西山		
13	寺院	金光院跡	こんこういんあと	金刀比羅宮境内区域		
14	墓	清塚	きよづか	琴平町一ノ坂		
15	寺院	多聞院跡	たもんいんあと	琴平町札の前	中世	
16	山城	愛宕山城跡	あたごやまじょうあと	琴平町 892－1		
17	古墳	愛宕山古墳	あたごやまこふん	琴平町川西	古墳	
18	山城	丸山城跡	まるやまじょうあと	仲南町十郷買田	中世	伝　天正年間飯尾國盛
19	山城	佐文城跡	さぶみじょうあと	仲南町佐文尾郷		
20	古墳	西山西部２号墳	にしやませいぶ２ごうふん	満濃町羽間		
21	古墳	西山西部３号墳	にしやませいぶ３ごうふん	満濃町羽間		
22	城館	石川城跡	いしかわじょうあと	琴平町榎井中ノ町	中世	伝石川将監館
23	城館	本庄城跡	ほんじょうじょうあと	琴平町五条	中世	伝能勢大内蔵館 文明年間
24	寺院	弘安寺廃寺	こうあんじはいじ	満濃町四条東村	古代	伝行基（あるいは智証）開基
25	集落跡	吉野下秀石遺跡	よしのしもひでいしいせき	満濃町吉野下秀石	弥生・古墳	発掘調査
26	集落跡	買田岡下遺跡	かいたおかしたいせき	仲南町十郷買田	古墳	発掘調査
27	古墳	買田峠古墳	かいたとうげこふん	仲南町十郷買田		
28	古墳	椿谷古墳	つばきだにこふん			
29	古墳	三堺山１号墳	みさかいやま１ごうふん	満濃町五条三堺		
30	古墳	三堺山２号墳	みさかいやま２ごうふん	満濃町五条三堺		
31	古墳	三堺山３号墳	みさかいやま３ごうふん	満濃町五条三堺		
32	古墳	三堺山４号墳	みさかいやま４ごうふん	満濃町五条三堺		
33	古墳	三堺山５号墳	みさかいやま５ごうふん	満濃町五条三堺		

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

仲南町は、香川県中部（中讃地方）の西南部にあり、四国山地の北裾にあたる。買田遺跡は、高知県から香川県に抜ける国道32号線が、山間部を抜け平野部に入ったあたりに位置し、第2図にあるように、扇状地状に広がる丘陵北裾部、標高80m前後の緩斜面部に所在する。

地形は、北側に広がる三角形状で、眼前には金倉川が蛇行しながら東西に流れ、西側の丘陵にあたって北側に流れを変える。

生活域は、次節でも述べるが、古代と中世では異なると考えており、古代においてはこの金倉川の両岸に想定されるが、香川～高知のルート上に位置することを重視し、「道」にかかわる集落として発達したことも考えられる。

中世では、この緩斜面部での耕作も考えられ、緩斜面部の開墾がこの時期に本格化したことも想定される。

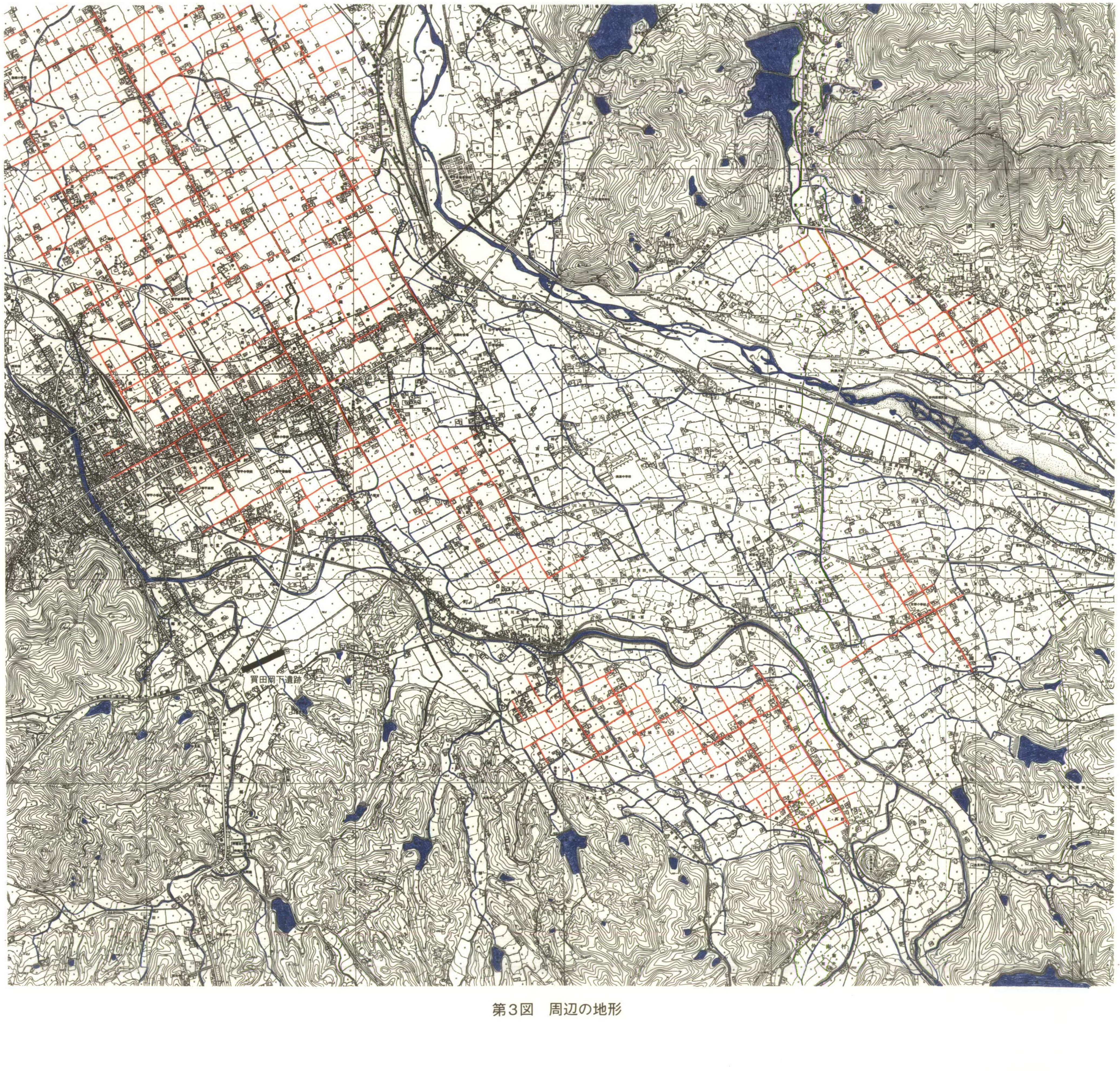
第2節　歴史的環境

この地域に所在する遺跡は、第2図・第2表や第3図にあるように、西及び南の丘陵上に古墳や中世山城が確認されているほか、北側や東側の平野部に古代寺院や条里区画、中世城館が確認されている。以下概報の記述を引用する。「背後の丘陵上には古墳時代中・後期の小古墳群の存在が知られるがその実態は詳らかではない。また白鳳期創建の弘安寺（廃寺）は金倉川を挟んで約1.3km北方に位置する。律令制下、那珂郡真野郷は金倉川湾曲部以南の南岸部分一帯に比定され、買田地区はその西部に位置するが、以東の地区とは標高120m前後の買田峠の丘陵によって隔てられており、鎌倉期には園城寺領買田庄が成立する。」

このように、古代においては真野郷の西部に位置し、条里区画が確認できないこと、郷の中心部ではなかったにもかかわらず、帯金具や緑釉が包含層からではあるが出土していること、この時期と考えられる瓦片が多数包含されていたことなどから、この時期の一般集落の範疇をやや超える内容を持つことから、買田岡下遺跡の古代集落の性格として、農村部の一般集落以上のものを考える必要があり、先にふれた香川～高知のルート上にあるという立地を最大限に評価すべきであると考えている。

また、中世に至って買田庄が成立することを受けて中世集落が成立したとも考えられ、性格の異なる二つの時期の集落が、全く別の意図で成立した可能性を考えておく。

こうした事柄については、今回の調査で古代・中世集落とも北端を検出したに過ぎず、集落の全体像が明らかになった時点でさらに検討を重ねる必要がある。



第3図　周辺の地形

第3章　調査の成果

第1節　調査区

調査は満濃バイパスの起点となる国道32号と同377号の分岐点付近から、延長約350m、面積8,000㎡を対象として実施した。調査地は南側の丘陵に沿って延び大局的には山裾緩斜面に展開するが、そこから派生する小丘陵・小開析谷数条を横断しており、微細地形をやや変化に富むものとしている。

調査は、西から東に向かってⅠ区～Ⅴ区、Ⅰ区北側の宅地部分をⅥ区として設定した。調査区割りは、水路・畦道等によって区分されている現状の水田を単位としてとらえている。調査段階では西端のⅥ区が宅地化していた以外はすべて水田となっていた。とくに東半部（Ⅲ区東部以東）は周囲の圃場整備が完了しており旧地形の観察が現状ではやや困難であった。（第1図参照）

調査区に沿って述べると、Ⅵ・Ⅰ区は安定した平坦地形が広がり、耕作土直下で遺構面が検出された。

Ⅱ区は小開析谷の出口部に当たり、Ⅰ区に比べ現地標高で約40cm低くなり、耕作土下には最大厚60cmあまりの遺物包含層が存在し、その下面が遺構面となる。Ⅲ区西部からⅣ区中央部にかけては南から派生する小支丘部にあたり最高部でⅠ区平坦面と約1mの比高を測る。水田造成時の削平及び近年の粘土採取によりこの部分の旧地形は大きく損なわれており、Ⅱ区に接した側斜面部分に若干の遺構が残存するのみである。調査区東端のⅤ区東部も北にのびる小支丘部にあたるが、大きく削平を受けた上に造成土が厚く堆積し旧地形からかなり変容している。この二筋の小支丘間、すなわちⅣ区東部からⅤ区西部は現地形でも明白な谷状の狭い低地をなしておりこの部分で小開析谷2条を検出している。

第2節　基本層序

基本層序については、第4・5図の土層図と前述したように、地形の改変等によりⅡ区には厚い包含層が検出されているが、他の地区では僅かに包含層が残るのみであった。以下、地区別で簡単に述べる。

Ⅵ・Ⅰ区は、耕作土直下で遺構面を検出した。

Ⅱ区は、耕作土の下に最大厚60cmあまりの遺物包含層が存在し、その下面が遺構面である。

Ⅱ区西・東部を中心に包含層や遺構面上においてサヌカイト剥片を採取し、その風化度合いから旧石器時代資料を含むと推定された。そのため平安時代以降の遺構の調査が完了した後に、それの包蔵状況を確認するために遺構面以下の調査を実施した。調査は、Ⅱ区東・西部に2mメッシュを設定して水平・垂直分布を確認しつつ掘り下げを行った。

この部分の遺構面（地山層表層）は主に淡黄色～黄灰色のシルト質土からなり、下位に

堅緻な黄褐色粘土層が認められる。Ⅱ区西部から東部にかけて下部の黄褐色粘土層が帯状に落ち込む部分、すなわち小規模な埋積谷を検出した。遺構面下0.2mで検出し、かなり蛇行しつつ南西から北東に抜ける。最大幅15m程度、深さ1mを測り、上層に黄灰色細砂層、下層に黄褐色粗砂層が堆積する。また局部的に最下層に植物遺体を含む黒色シルト層を見る。

縄文時代晩期の土器片若干と石鏃・スクレイパー等が出土した。形態から晩期以前にさかのぼりうる石鏃やきわめて風化の進んだサヌカイト片もわずかながら含まれるが、明確に旧石器時代に位置付け得る資料はない。遺物量は少なく、その多くは埋積谷中に混入したものと思われる。他ではサヌカイト細片等が地山表層に散漫に包含される程度で顕著な集中地点はない。また埋積谷植物遺体包含層から少量の堅果類を採取した。

前述のようにⅡ区全体が浅い谷状地形にあり上述の建物など平安期遺構面の上位には20～60cmの厚さで暗灰色シルト系の堆積層がある。同層はミクロに見れば4～5枚に区分し得る薄い水平堆積層の連続とみなし得る。最下部、すなわち地山層上面が攪拌したように乱れている。9～10世紀を中心に12世紀までの遺物を包含するが層位的に区分することは困難である。最下部まで12世紀代に下る資料が混入する。

また本層の下面で削り出し整形の畦畔状高まりを検出した。これと堆積状況などから本層は複次に及ぶ水田耕作土層の可能性がある。平安期の建物群廃絶後、おそらく12世紀以降に耕地化し、造成と耕作の繰り返しによって遺構の一部を削平し、耕地化以前の遺物を多量に混入させたものと考える。したがって本層中に包含される遺物の大半は下部の建物群に関連する資料とみてよいであろう。

Ⅲ区西部からⅣ区中央部にかけては、水田造成時の削平、近年の粘土採取によりⅡ区に接した側斜面部分で若干の遺構が検出された。

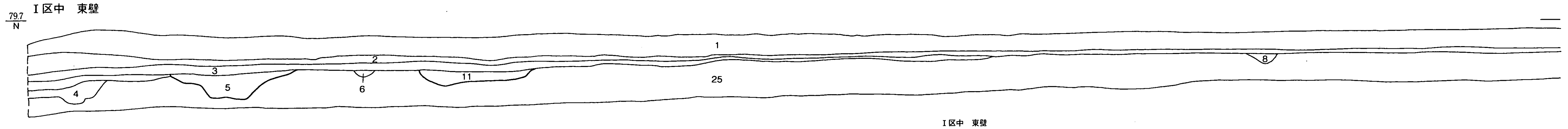
Ⅳ区東部からⅤ区西部は、明白な谷状の狭い低地である。

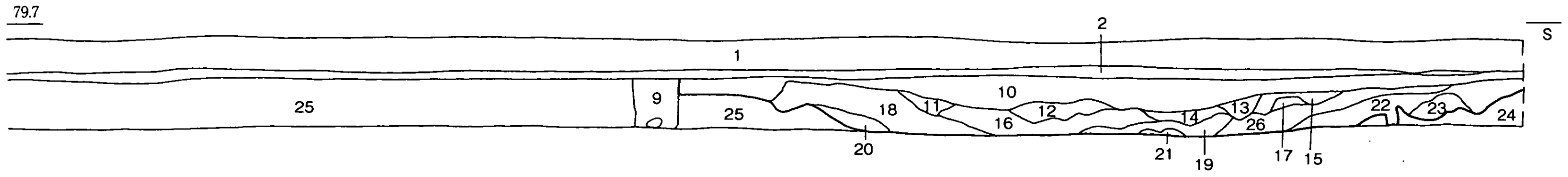
第3節　遺構・遺物

今回の調査では縄文時代・弥生時代末～古墳時代前期・同中期・平安時代・室町時代前半・江戸時代の資料を得た。このうち縄文時代・古墳時代中期は若干の遺物が出土したのみで、周辺にこの期の遺跡が展開する可能性を指摘できるにとどまる。

Ⅱ区西・南で平安時代前半期の建物群、Ⅰ区西で同時期の小溝群を確認した。建物群はⅠ区から緩やかに下がった谷出口部の低地から東側丘陵側斜面にかけて展開する。西辺から北辺は小溝によって限られ、東辺はⅢ区西部の小支丘西側面の小溝に区切られる。東西幅52mを測り、南北方向は10m検出している。本建物群の中心部分は南側用地外に位置し、今次調査ではそれの北辺部分を確認したことになる。Ⅲ・Ⅳ区の開析谷堆積土中にこの期の遺物小量を包含する。Ⅰ区西の小溝群はほぼ2m間隔で並行する浅い南北溝群で、畝状遺構の一部と思われる。

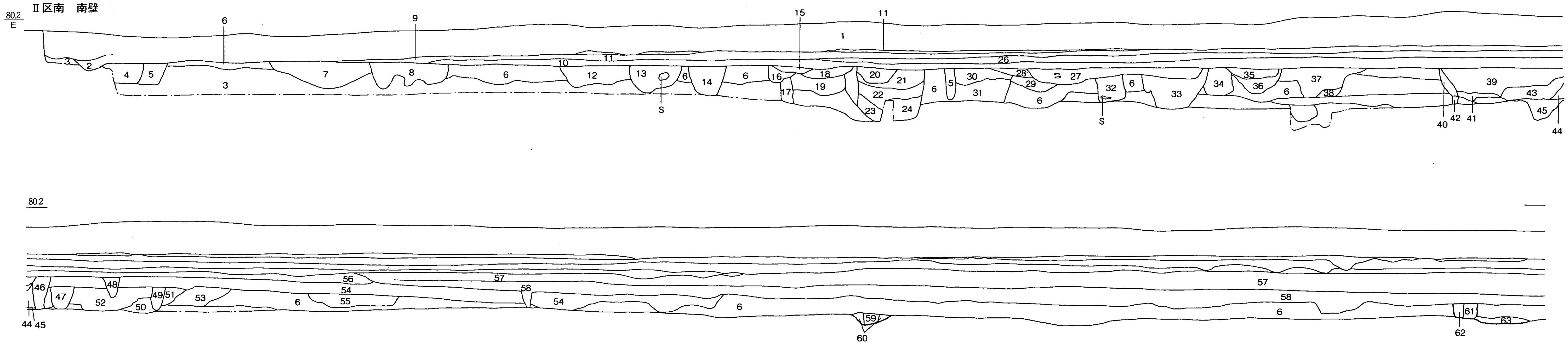
Ⅵ区はⅠ区西部の北隣の宅地跡で、地形的にはⅠ区中・西に続く平坦地である。室町時代前半の溝、江戸時代の建物など二時期にわたる遺構を検出した。

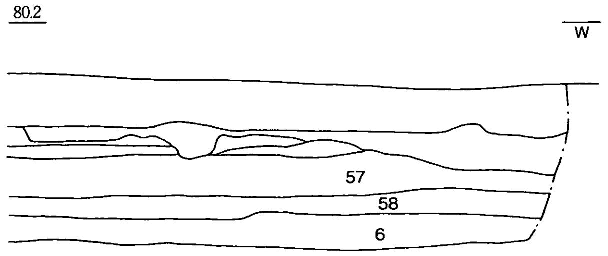


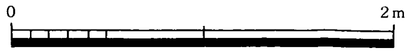


I区中　東壁

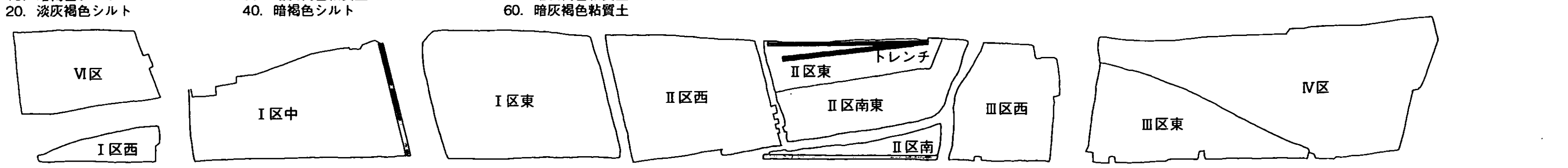
1. 黒灰色シルト（耕作土）
2. 淡橙色細砂（Fe多く含む、床土）
3. 淡灰色シルト（Mn少し含む）
4. 灰色シルト
5. 暗灰色シルト（SD48埋土）
6. 暗灰色シルト
7. 灰色シルト（SK50埋土）
8. 暗褐色粘質土
9. 暗灰色シルト
10. 灰色シルト（Fe・Mn多く含む、SD38埋土）
11. 暗黄色粘質土（SD38埋土、地山ブロックか）
12. 暗褐色粘質土（SD38埋土）
13. 暗灰褐色粘質土（SD38埋土）
14. 暗褐色粘質土（SD38埋土、地山ブロック混入）
15. 灰褐色粘質土（SD38埋土、地山ブロック少量）
16. 暗灰褐色粘質土粗砂混（SD38埋土）
17. 明黄色粘質土（SD38埋土、地山ブロック）
18. 黒褐色粘土（SD38埋土）
19. 暗灰色粘質土（SD38埋土）
20. 暗黄色シルト（SD38埋土）
21. 暗黄色粘質土（SD38埋土）
22. 灰褐色粘質土粗砂混（SD38埋土）
23. 暗黄色粘質土（SD38埋土、地山ブロック）
24. 淡黄色シルト（地山）
25. 明黄色粘質土（地山）
26. 黒褐色粘土（Fe・Mn多く含む、SD38埋土）





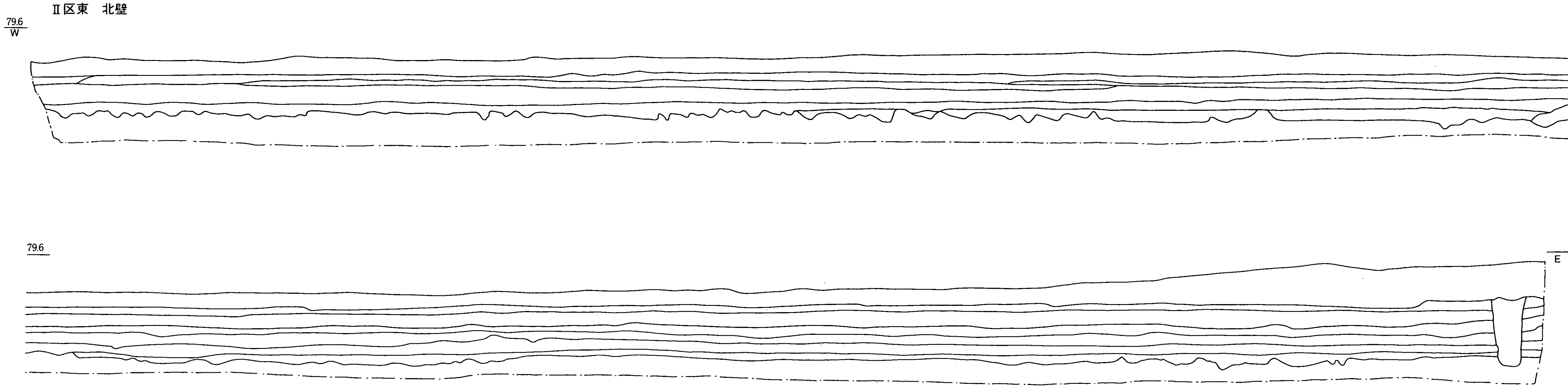


1. 黒灰色シルト
2. 明黄色粘質土ブロック
3. 明黄色粘土
4. 明灰色シルト
5. 暗灰褐色シルト
6. 暗灰色粘質土
7. 暗灰褐色シルト
8. 暗褐色シルト
9. 濁黄色シルト
10. 暗灰色シルト
11. 暗灰色シルト（旧耕土か？）
12. 暗灰色シルト（Fe多く含む）
13. 暗灰褐色シルト（Fe多く含む）
14. 暗灰褐色シルト
15. 黒灰色粘質土
16. 黒灰褐色シルト
17. 暗灰色粘質土
18. 暗灰褐色シルト
19. 暗褐色シルト
20. 淡灰褐色シルト
21. 淡黄色粘質土ブロック
22. 暗灰褐色粘質土
23. 明黄色粘土ブロック
24. 明黄色粘土ブロック
25. 暗灰褐色シルト（炭化物少し含む）
26. 淡灰色シルト（旧耕土）
27. 黒灰色粘質土
28. 暗灰褐色シルト
29. 灰褐色シルト
30. 明黄色粘土ブロック
31. 暗灰褐色粘質土
32. 暗灰褐色粘質土
33. 暗褐色粘質土（Fe少し含む）
34. 灰褐色シルト
35. 明黄色粘土ブロック
36. 暗灰褐色粘質土
37. 暗灰褐色粘質土
38. 明黄色粘土ブロック
39. 暗灰褐色粘質土
40. 暗褐色シルト
41. 暗灰褐色粘質土（炭化物・焼土多く含む）
42. 暗灰褐色シルト
43. 暗灰褐色シルト
44. 灰褐色シルト
45. 明黄色粘質土ブロック
46. 暗灰褐色シルト
47. 灰褐色シルト
48. 灰褐色シルト
49. 灰褐色シルト
50. 暗灰褐色シルトブロック
51. 暗灰褐色粘質土
52. 灰褐色粘質土（炭化物少し含む）
53. 灰褐色粘質土（炭化物少し含む）
54. 暗灰褐色粘質土
55. 暗灰褐色粘質土（炭化物多く含む）
56. 淡灰褐色シルト（旧耕土か？）
57. 暗灰色粘質土（旧耕土か？）
58. 淡灰褐色シルト（旧耕土か？）
59. 暗灰褐色粘質土
60. 暗灰褐色粘質土

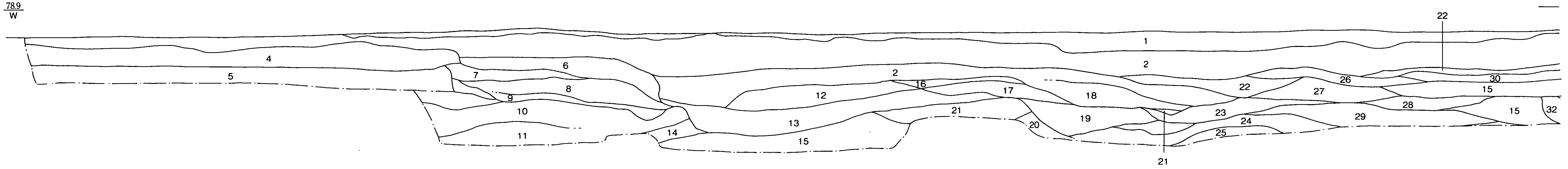


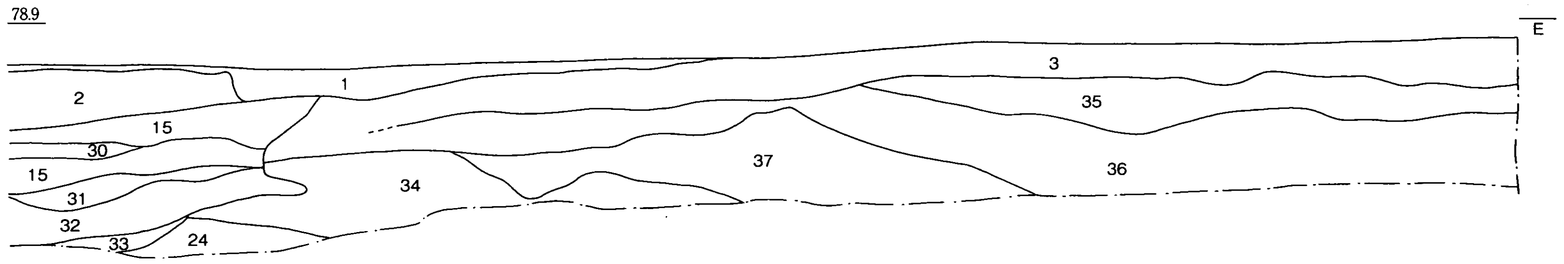
第4図　I区中 東壁・II区南 南壁土層図（1/40）及び調査区内土層位置図

Ⅱ区東　北壁



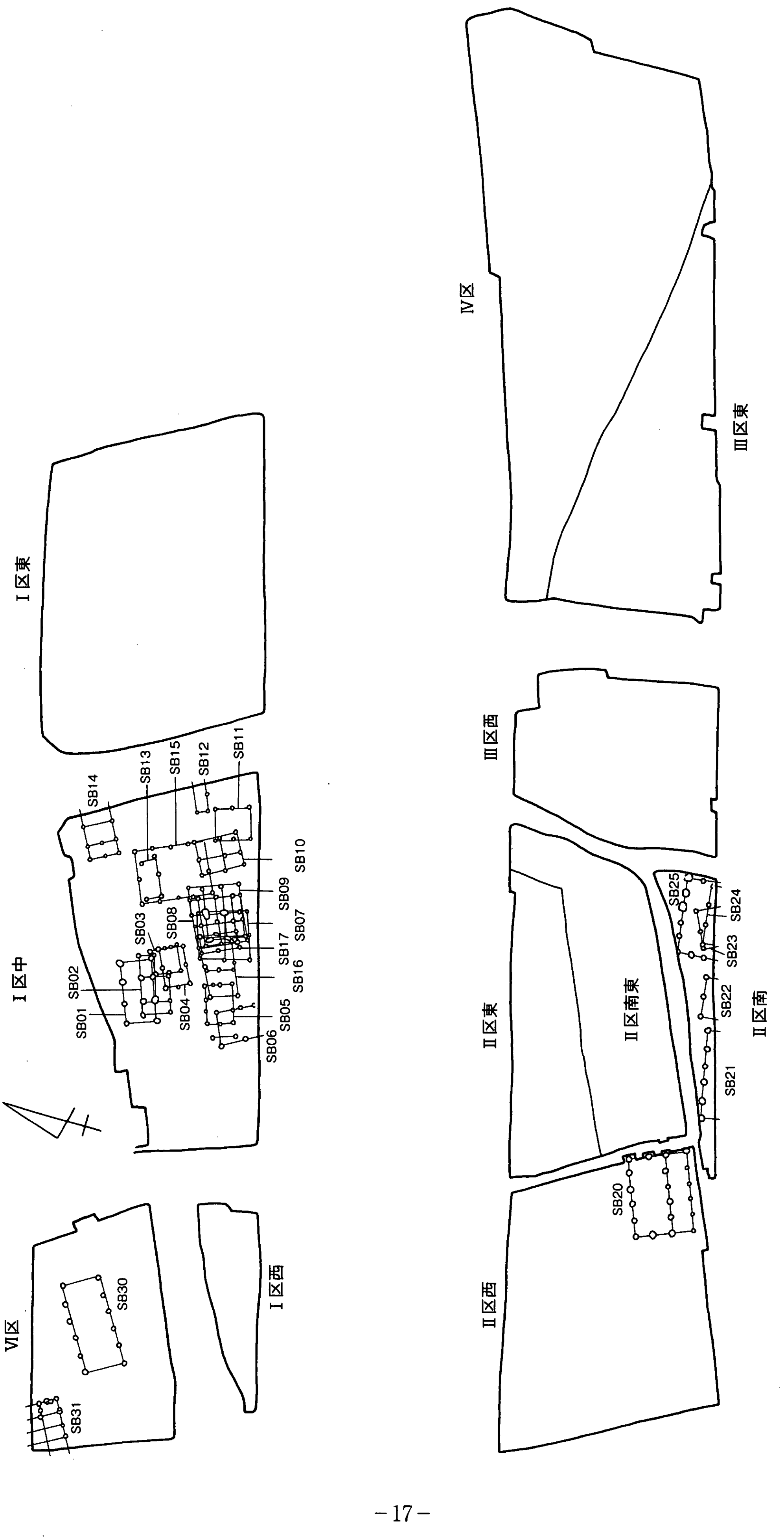
Ⅱ区東　トレンチ北壁





1. 淡灰黄色シルト
2. 淡黄灰色シルト
3. 濁黄色粘土（Mn少し含む）
4. 黄褐色粘土
5. 暗黄褐色粘土
6. 黄褐色粘土（Fe多く含む）
7. 淡黄褐色粘土
8. 黄褐色粗砂礫
9. 黄灰色粗砂
10. 淡灰黄色細砂
11. 淡黄褐色粗砂
12. 灰黄色粗砂礫
13. 黄褐色砂
14. 黄褐色細砂
15. 淡灰色粗砂礫
16. 淡灰色中砂
17. 黄褐色粗砂礫
18. 淡灰色細砂
19. 淡黄灰色粗砂礫
20. 淡灰色粗砂礫
21. 暗灰色シルト
22. 淡灰シルト
23. 暗灰色粗砂
24. 黄褐色砂礫
25. 黄灰色砂礫
26. 灰白色細砂
27. 灰中色砂
28. 淡灰褐色粗砂
29. 黒灰色シルト
30. 灰白色中砂
31. 灰色砂礫
32. 灰色粗砂
33. 灰色シルト
34. 褐色粗砂
35. 濁黄色粘土（Fe・Mn多く含む）
36. 黄灰褐色粘土（Fe・Mn多く含む）
37. 明黄色粘土・灰黄色粘土

第5図　Ⅱ区東 北壁・Ⅱ区東 トレンチ北壁土層図（1/40）



第6図　掘立柱建物跡配置図

第3表　掘立柱建物一覧表

名　称	規				模		方	向	
	梁間(間)	×	桁行(間)	梁間(m)	×	桁行(m)	面積(㎡)			
SB01	1		3	3.4		6.8	23.12	N	85	E
SB02	2		2	3.2		4.0	16.25	N	87	E
	1		1	2.3		1.5				
SB03	1		2	2.8		2.8	7.84	N	11	W
SB04	2		2	2.7		4.4	11.88	N	81	E
SB05	2		3	3.0		4.2	12.6	N	87	E
SB06	1		2	3.6		4.2	15.12	N	11	W
SB07	2		2	5.2		5.6	29.12	N	0	E
SB08	2		4	5.2		5.4	28.08	N	8	W
SB09	2		2	3.8		5.8	22.04	N	5	W
SB10	2		2	3.7		4.7	17.39	N	13	W
SB11	1		2	3.4		3.9	13.26	N	0	E
SB12	1		1以上	1.8		(2.1)	(3.78)	N	67	E
SB13	1以上		2	(2.0)		4.5	(9.0)	N	77	E
SB14	2		2	3.2		3.6	11.52	N	11	W
SB15	2		4	5.6		7.4	41.44	N	10	W
SB16	1		2	3.3		5.7	18.81	N	85	E
SB17	1		2	2.0		4.1	8.2	N	7	W
SB20	2		5	6.4		8.4	53.76	N	68	E
SB21	1以上		5	(1.4)		9.7	(13.58)	N	55	E
SB22	1以上		2	(1.0)		4.3	(4.3)	N	80	E
SB23	1以上		2	(0.8)		4.2	(3.36)	N	60	E
SB24	2		3	2.2		6.7	14.74	N	90	E
SB25	2以上		5	(3.7)		8.2	(30.34)	N	90	E
SB30	1		5	4.5		9.8	44.1	N	55	E
SB31	1以上		3以上	3.4		4.9	16.66	N	59	E

室町時代前半の遺構はⅠ区中に集中している。

本遺跡は、出土している遺物から主として古代、中世の複合遺跡であることが分かる。年代を確定させることのできる出土遺物を持たない遺構も多々あることから、ここでは遺構の種別にそって記述し、時代ごとの概要については第4章でまとめた。

なお、土器の年代観は主として下記の書を参考にした。

須恵器　佐藤竜馬「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念　考古学論叢』　1993　関西大学

土師器ほか　片桐孝浩「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大東川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』　1992　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊　空港跡地遺跡Ⅳ』　2000　香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社

1　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、第6図に示したように、Ⅰ区中央、Ⅱ区西・南、Ⅵ区で検出され、それぞれの調査区で検出された掘立柱建物跡には時間的なまとまりがある。必ずしも遺物を伴う掘立柱建物跡ばかりではなく、検出状況などを考慮すればⅠ区中央は中世、Ⅱ区西・南は古代、Ⅵ区は近世と大きく区分することが可能である。これは、南から延びる丘陵及び小開析谷の開発状況を反映するものと考えられるが、後世の土地改変（削平）もあり明確な答えを導き出せなかった。

SB01（第7図）

SB01はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（3.4m）×桁行3間（6.8m）、面積23.12㎡で主軸方位はN－85°－Eを測る。なお、Pit 3－9間、Pit 5－8間にはやや南辺に近い位置ではあるが対応する柱穴が検出されている。また、Pit 1－3、Pit 2－9の対角線の交点にも柱穴が認められる。これらの柱穴が本建物跡と関連性があるかどうかは即断できないが、掘立柱建物跡内の間取りを考える上で参考になる資料であるかも知れない。

柱穴の掘り方平面は径0.4～0.8mの円形、断面は深さ0.3～0.7mを測る逆台形もしくは二段掘りで船底状である。このような断面形状は、埋土が1層であることも考え合わせると、柱材を抜き取る際に柱材周辺を掘り込んだか、柱材を前後左右に揺さぶったことにより形成された柱穴形状と考えている

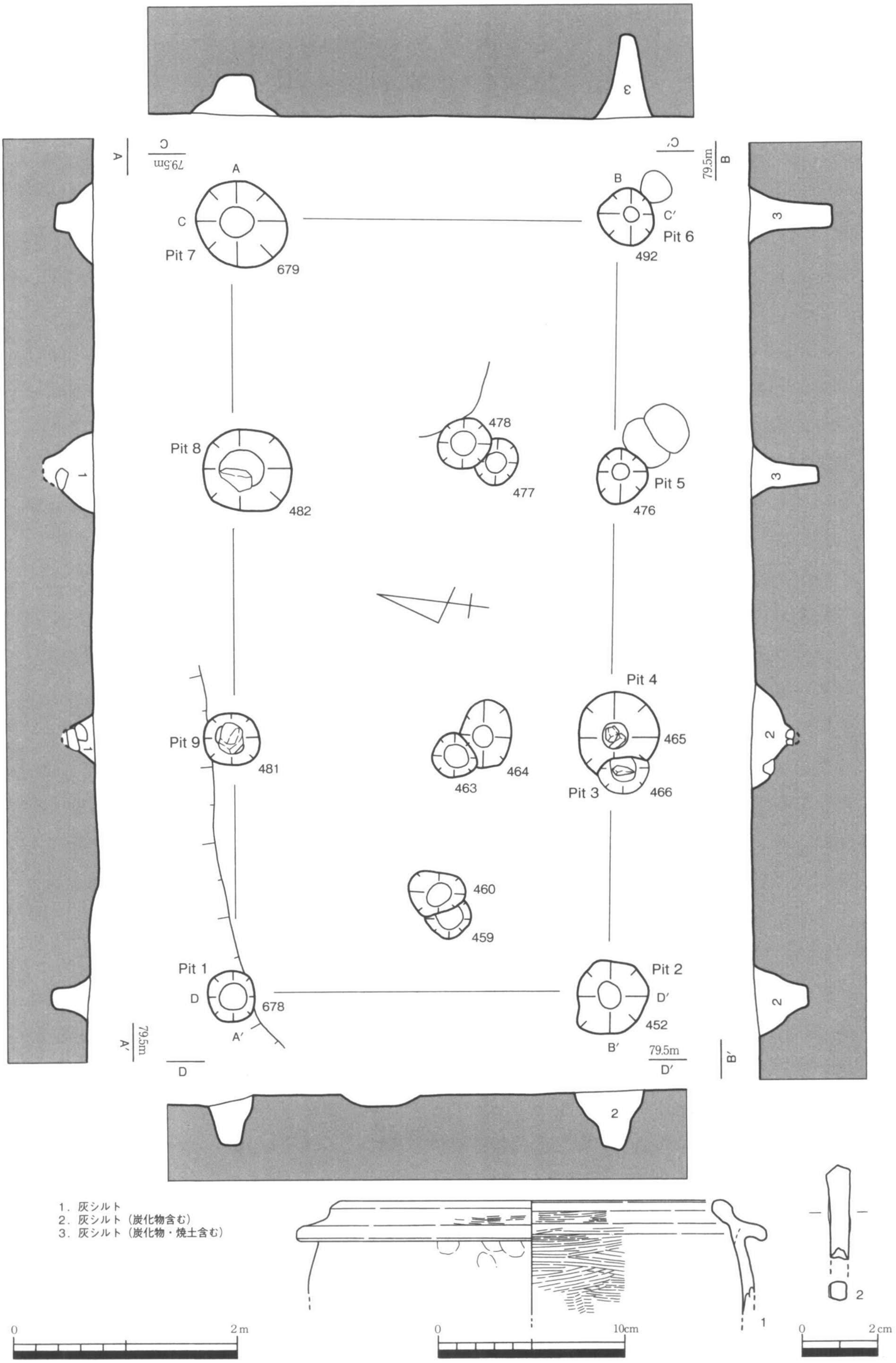
Pit 3・4・8・9には根石もしくは詰石と考えられる川原石が出土している。

遺物はPit 8から出土したもので、1は土師質羽釜、2は鉄釘の断片と考えられる。1は、鍔がやや下方に垂れ下がり、口縁部も内湾して丸く肥厚して終わる。外面はナデ調整、内面はハケ調整が顕著である。脚の有無については不明である。2は、断面形状が四角で先端部が欠損しているが、釘の可能性が高い。1の土器の時期は、その形態から片桐Ⅲ－①～⑦に比定され、14世紀～16世紀前半に位置付けられる。

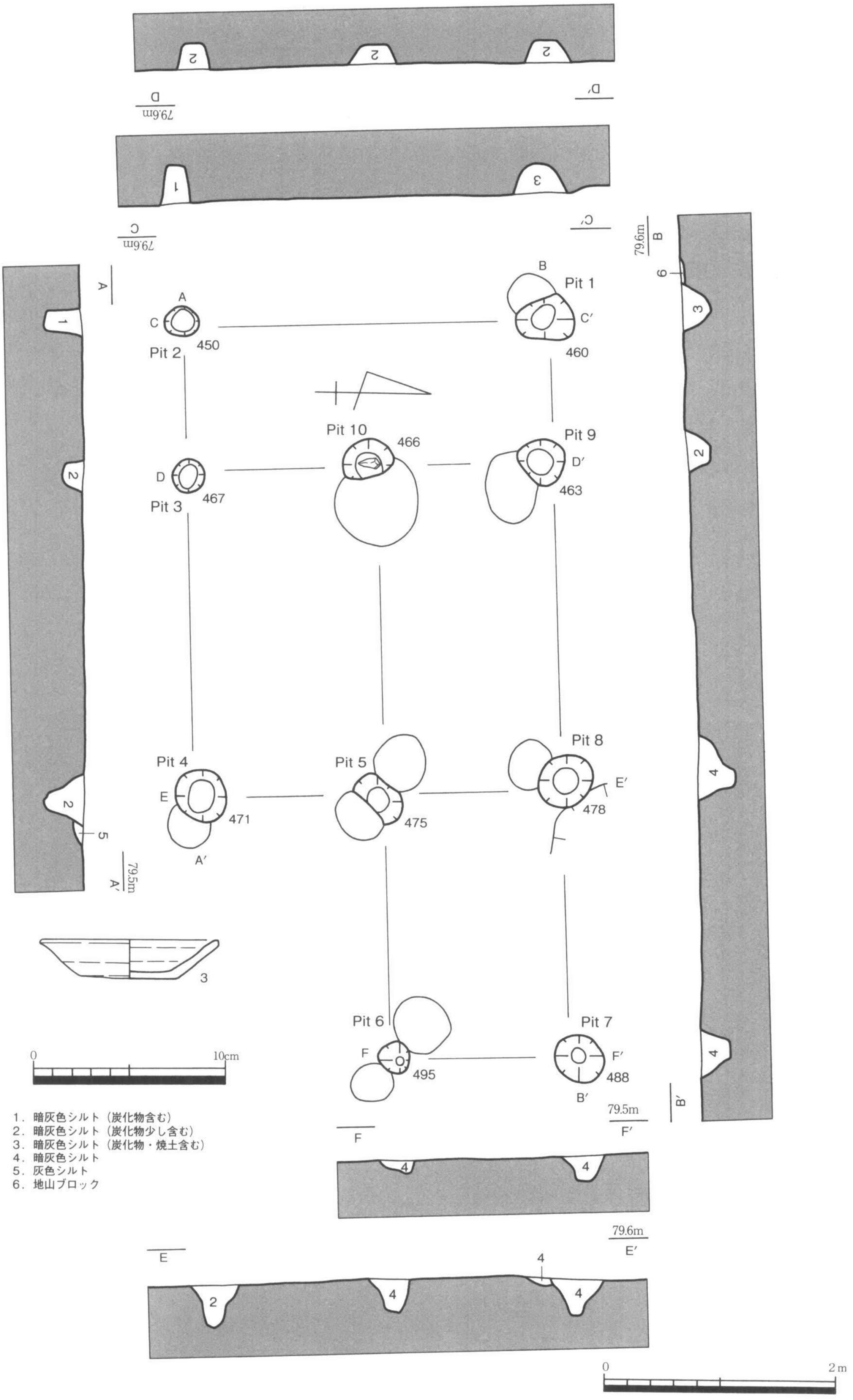
SB02（第8図）

SB02はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間西側で1間、東側で2間（3.2m）×桁行2間（4.0m）であるが、北東部分に1間幅（2.3m × 1.5m）の張り出しが見られる。東南隅に1柱穴あれば1or2間×3間になるが、検出されていない。張り出しを含めた面積は16.25㎡で主軸方位はN－87°－Eを測る。なお、Pit 5と10に注目すれば、1間×2間の南北棟の西側と東側に張り出しのある建物とも考えられる。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.5mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

Pit 7から3の土師器小皿が出土している。底面はナデ調整で、外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つことから、佐藤2000Ⅱ－4～5に比定され、13世紀第3四半期～14世紀前半に位置付けられる。



第7図　SB01平・断面図、出土遺物実測図



第8図　SB02平・断面図、出土遺物実測図

SB03（第9図）

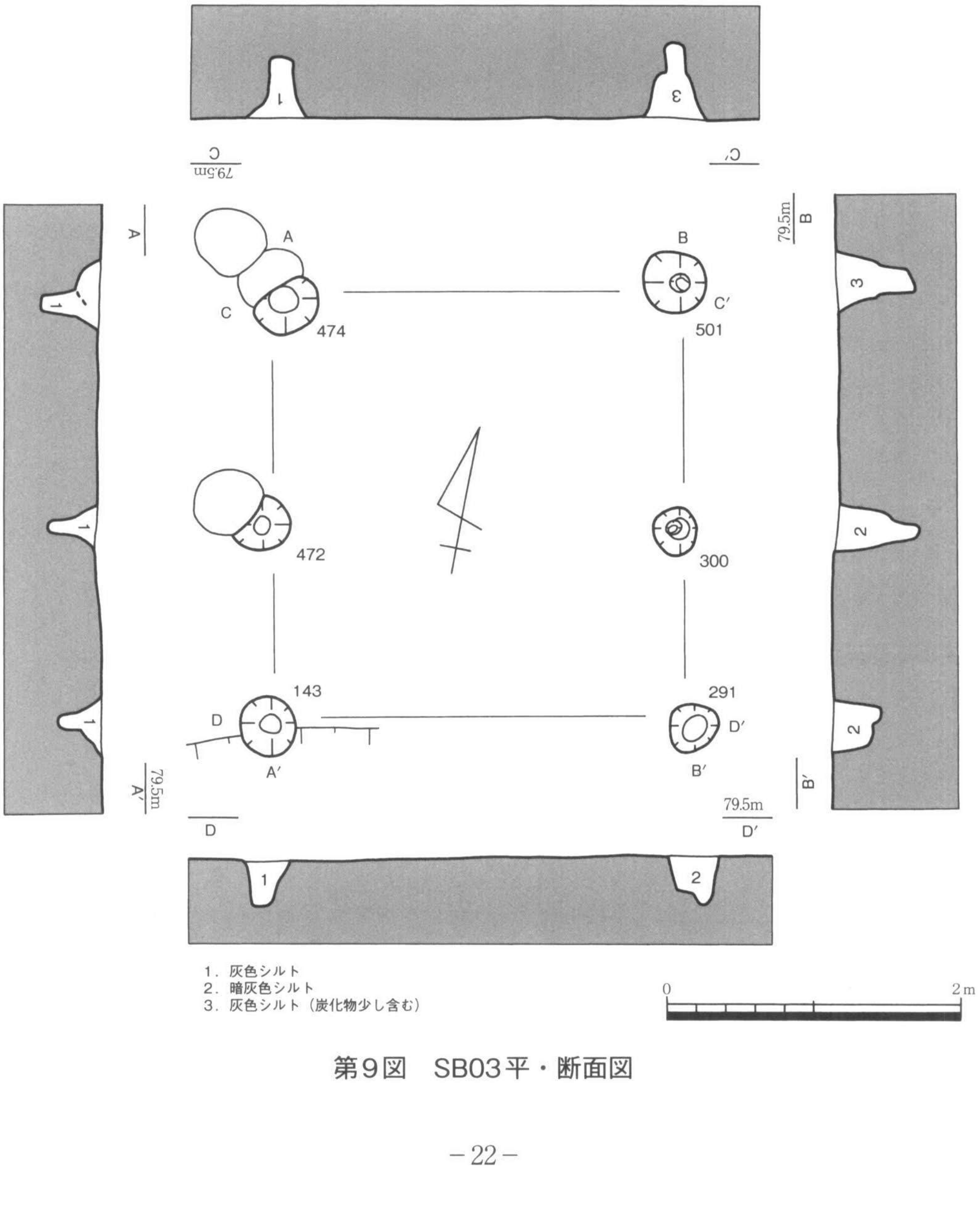
SB03はⅠ区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（2.8m）×桁行2間（2.8m）の小形建物跡で、面積7.84㎡、主軸方位はN－11°－Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

この掘立柱建物跡に伴う遺物は出土していない。

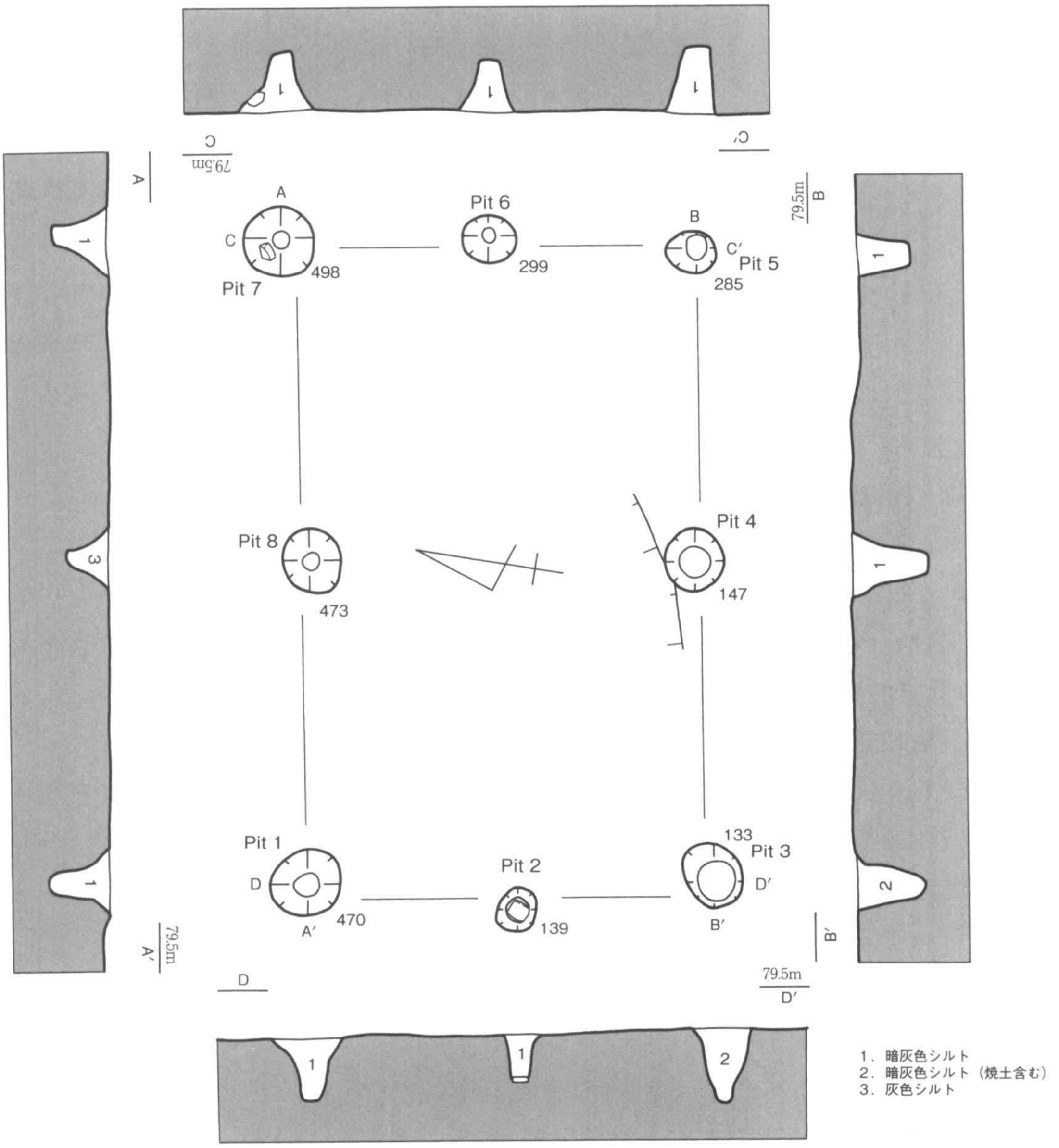
SB04（第10図）

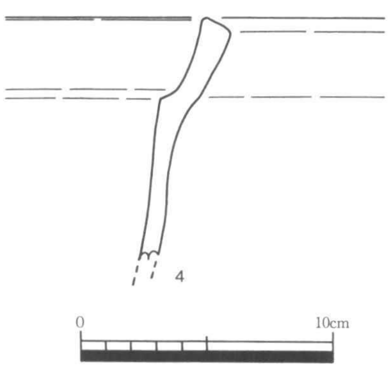
SB04はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（2.7m）×桁行2間（4.4m）で、面積11.88㎡、主軸方位はN－81°－Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.5mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

Pit 6から4の土師質土鍋口縁部片が出土している。外面は摩滅しており観察不能、内面はナデ調整である。やや直立気味の体部に内湾する口縁部を持つ。



第9図　SB03平・断面図





第10図　SB04平・断面図、出土遺物実測図

SB05（第11図）

SB05はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（3.0m）×桁行3間（4.2m）で、面積12.6㎡、主軸方位はN－87°－Eを測る。ただし、南辺は2間幅しか確認できていない。柱穴の掘り方平面は径約0.2～0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

また、東西に庇もしくはSB05に並行する柵列と考えられる柱穴が確認されている。庇と考えるにはSB05の東西辺から1.5～1.6mの距離は長すぎると考えており、柱の軸線からは若干はずれるものの建物の一部と考えても良い事例かもしれない。柵列と考えた場合、列長が短すぎることもあるが、ここでは柵列として取り扱う。

SA01は、SB05の西側にあり、Pit 間は2.7mである。

SA02は、SB05に東側にあり、2間幅でPit 間は3.2mである。

遺物は、SB05Pit 2から5の土師器小皿、SA02Pit 2から6の土師質土釜の脚部が出土している。5は、ヘラ切りの底部から外反気味に短く立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ－3～5に比定され、13世紀第2四半期～14世紀前半に位置付けられる。

SB06（第12図）

SB06はⅠ区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（3.6m）×現状で桁行2間（4.2m）の建物跡で、現状での面積は15.12㎡、主軸方位はN－11°－Wを測る。南辺が調査区外に伸びているが、Pit 3が南東隅の可能性もある。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.5mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様に柱の抜き取りによる形状の変化が考えられる。

この掘立柱建物跡に伴う遺物は出土していない。

SB07（第13図）

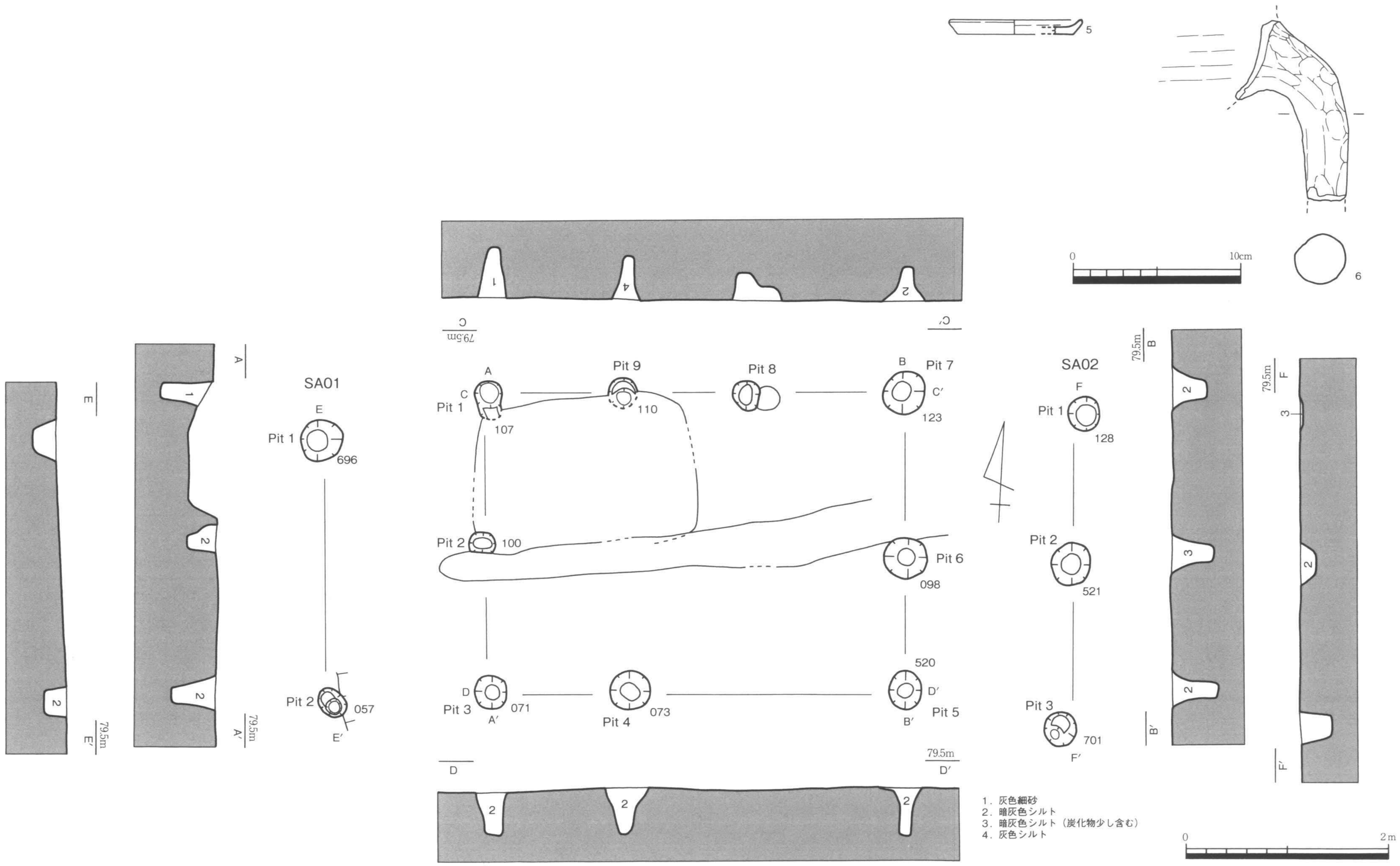
SB07はⅠ区中央で検出された東西棟の総柱掘立柱建物跡である。梁間2間（5.2m）×桁行2間（5.6m）で、面積29.12㎡、主軸方位はN－0°－Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2～0.8mの円形もしくは楕円形、断面は逆台形である。断面形状は、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化は見られず、単純な柱の抜き取りを想定している。

なお、各Pitの形状や規模にバラツキが多く見られ、断面形もまちまちであることから、総柱掘立柱建物跡の可能性に疑問を残している。

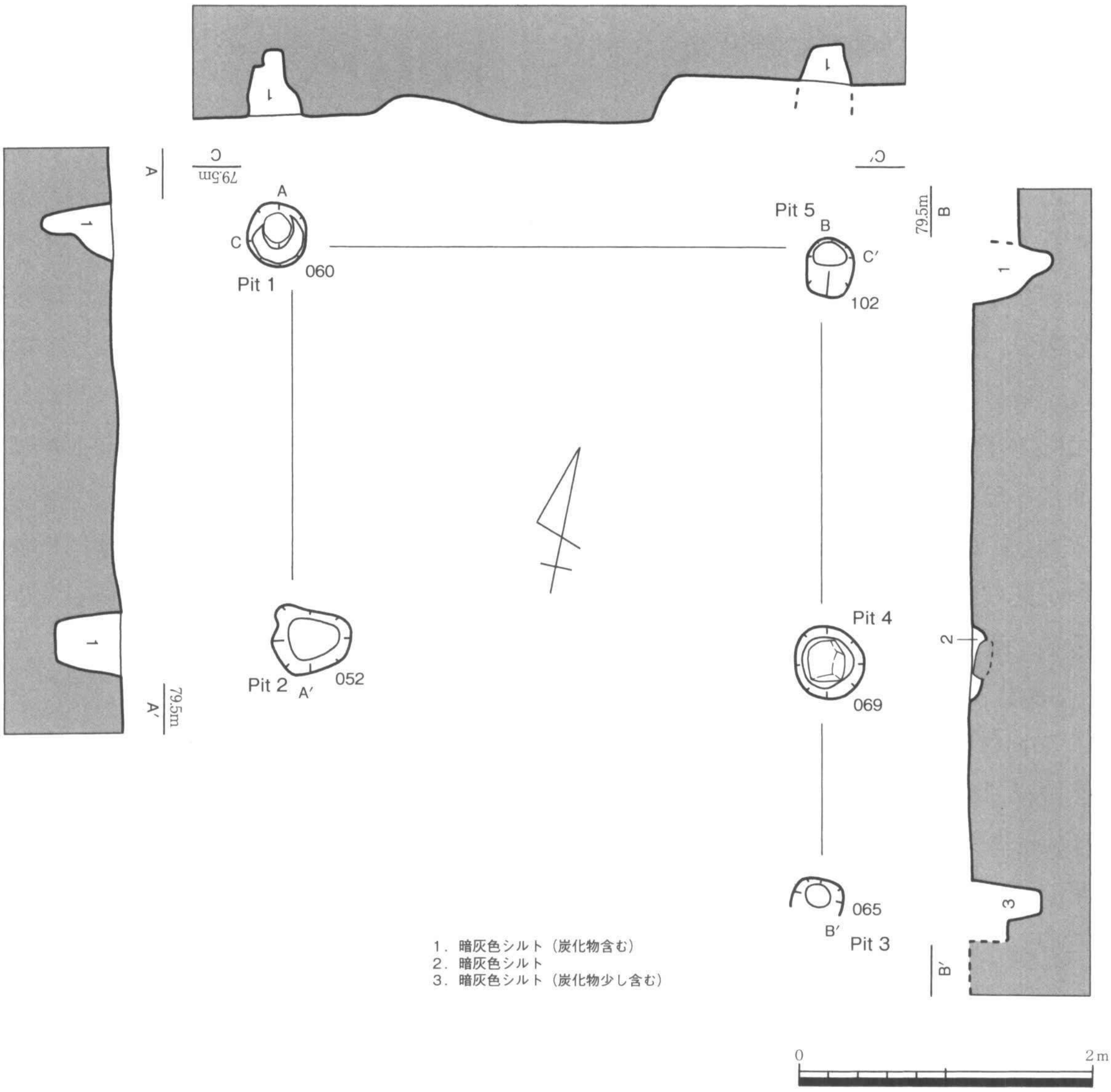
Pit 3から7の土師器小皿が出土している。7は、ヘラ切りの底部から外反気味に薄く短く立ち上がる口縁部を有し、端部は丸く終わる。内外面とも回転ナデ調整である。佐藤2000Ⅱ－3～5に比定され、13世紀第2四半期～14世紀前半に位置付けられる。

SB08（第14図）

SB08はⅠ区中央で検出された南北棟の総柱掘立柱建物跡である。梁間2間（5.2m）×桁行4間（5.4m）で、面積28.08㎡、主軸方位はN－8°－Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2～0.5mの円形もしくは楕円形、断面は逆台形もしくは逆三角形状である。断面形状



第11図　SB05平・断面図、出土遺物実測図及びSA01・02平・断面図



第12図　SB06平・断面図

は、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化とも考えられる。

なお、Pit 1−2、10−11並びにPit 4−5、7−8は間隔が狭く、Pit 2−4、8−10で構成される2間×2間の建物の附属施設か間仕切りの可能性もあるが、総柱建物である点を考慮して一体のものと考えた。

Pit内から8の東播系こね鉢（Pit 9）及び9・10（Pit 3）、11・12（Pit 14）の鉄釘が出土している。8は、底部が欠損しているが外上方に直線的に立ち上がる口縁部を有し、口縁端部を内上方に拡張して平坦面を作っている。口縁端部の一部を外側に折り曲げた単純な注ぎ口が見られる。外面には指頭圧痕が顕著に認められ、内面はナデ調整が施されている。片桐Ⅲ−①〜③　14世紀に位置付けられる。

9〜12はX線写真の観察の結果、断面が6㎜程度の四角の鉄釘と考えられるが、錆と土に覆われており明確ではない。9は頭部が少し扁平に変形し、先端部が細くやや曲がって

いる。10は上下逆の可能性もあるが先端ではなく頭部の変形と考えられた。11は9同様の形態である。12も頭部に変形が見られる。

SB09（第15図）

SB09はⅠ区中央で検出された東西棟の総柱掘立柱建物跡である。梁間2間（3.8m）×桁行2間（5.8m）、面積22.04㎡であるが、北東部分に1間幅の張り出し（1.5m × 3.0m）が見られる。この張り出し部分を含めた面積は26.54㎡で主軸方位はN－5°－Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.8mの円形もしくは楕円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化かどうかは判然としない。

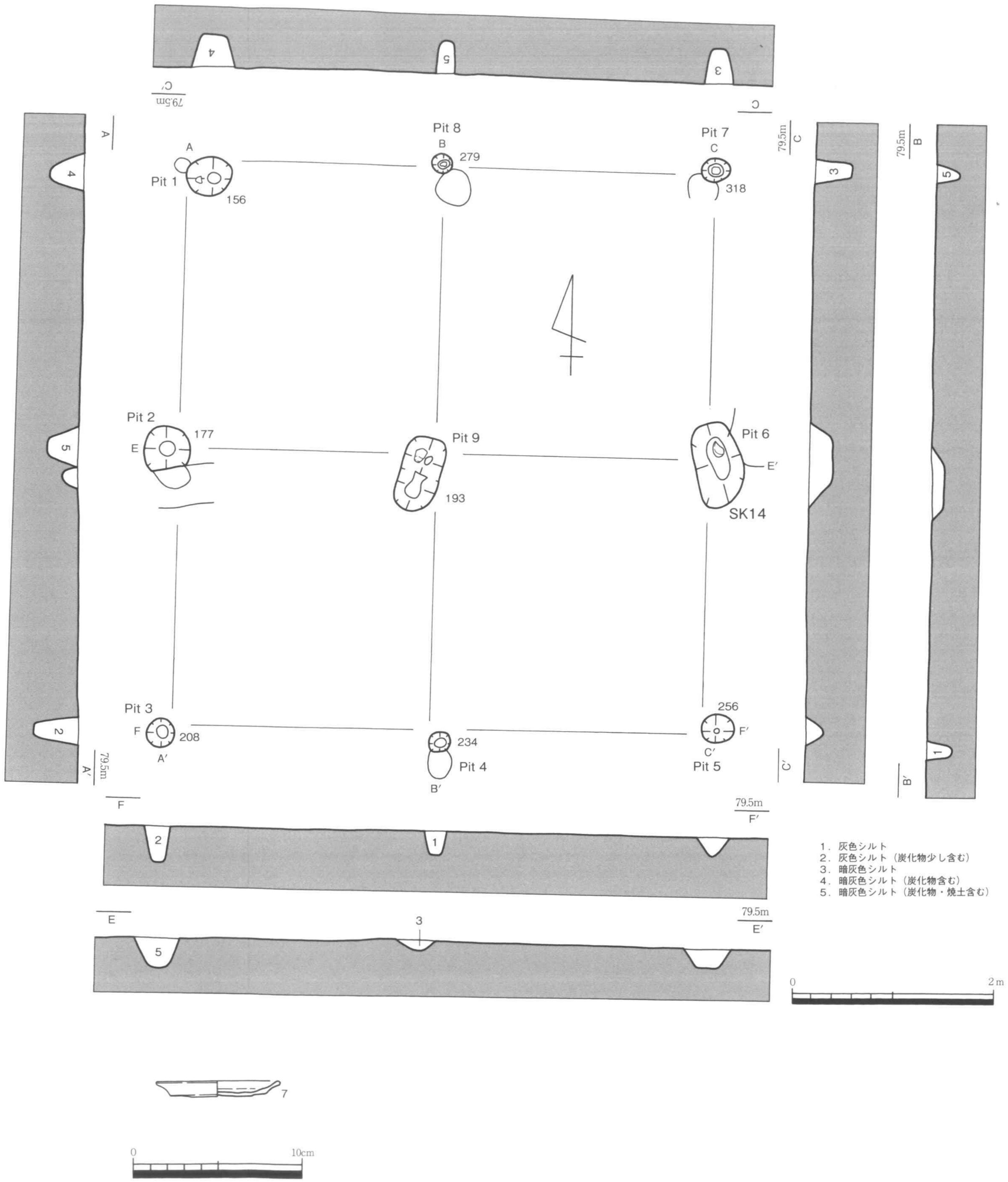
Pit内から13（Pit 5）の土師質羽釜、14（Pit 7）の鉄製刀子、15（Pit 8）の鉄釘の先端部と考えられる資料が出土した。土師質羽釜は、体部中央から内湾気味に伸び、口縁端部は丸く終わる。鍔はやや下方に下がっている。外面は指頭圧痕が顕著で、内面にはハケ調整が見られる。片桐Ⅲ－①～⑦に比定され、14世紀～16世紀前半に位置付けられる。刀子は、激しい錆化のため、形態は明確ではない。15は断面四角で先端が尖っている。

SB10（第16・17図）

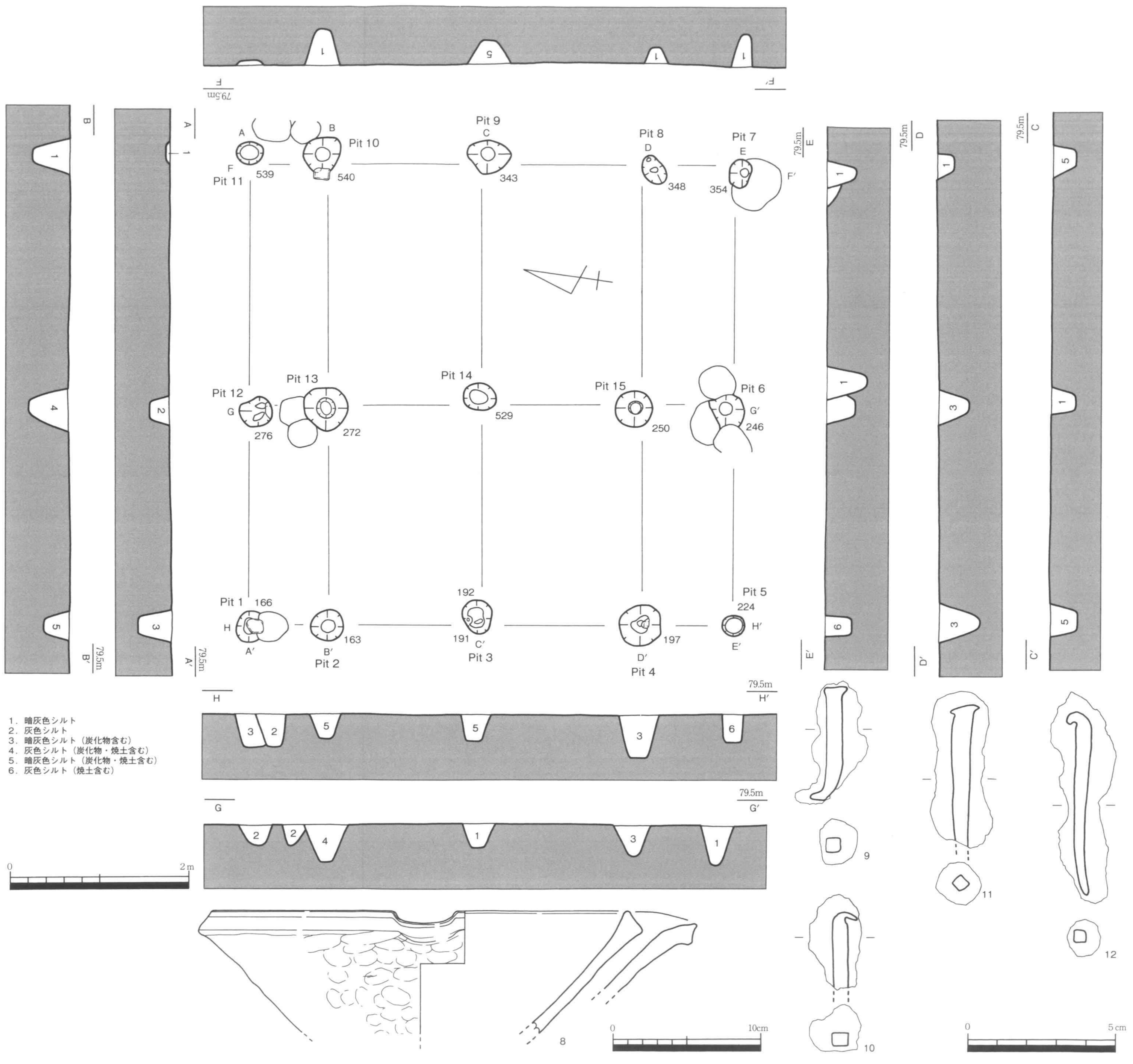
SB10はⅠ区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。現状では梁間2間（3.7m）×桁行2間（4.7m）であるが、軸線からはずれているPit 9をこの掘立柱建物跡に伴う柱穴と考えた場合は総柱掘立柱建物跡になる。面積は17.39㎡で主軸方位はN－13°－Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.4mの円形もしくは楕円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化かどうかは判然としない。

Pit内から16の砥石のほか、17・18の土師器杯、19・20の土師質土鍋や21の土師質脚付き羽釜が出土している。16の砥石がPit 1から出土したほかは、Pit 6からの一括出土である。16は、薄い長方形で、表面と両側の長側面に砥石特有の作業面が認められる。17はナデ調整の底面から外上方に内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。18は、17に比べてやや直線的な口縁部を持っている。底面はヘラ切りで、板目を残す。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。19・20とも微妙な差異はあるが、概ね口縁部の内側に段があり、口縁部はやや内湾気味に外上方に伸びている。口縁端部は平坦に仕上げている。片桐Ⅲ－⑦～⑨で16世紀。21は胴部最大径部から直線的に内傾して上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。鍔は水平に短く伸びる。外面胴部上半は指頭圧痕、下半は格子叩きが顕著である。内面は上半がナデ、下半がハケ調整である。片桐Ⅲ－③で14世紀後半（遡る可能性もある）。以上17～21の特徴からは14世紀もしくは16世紀となるが、他の掘立柱建物跡が概ね14世紀に位置付けられることから、ここでは、19・20タイプの土鍋の年代が遡るのではないかという可能性を指摘しておく。

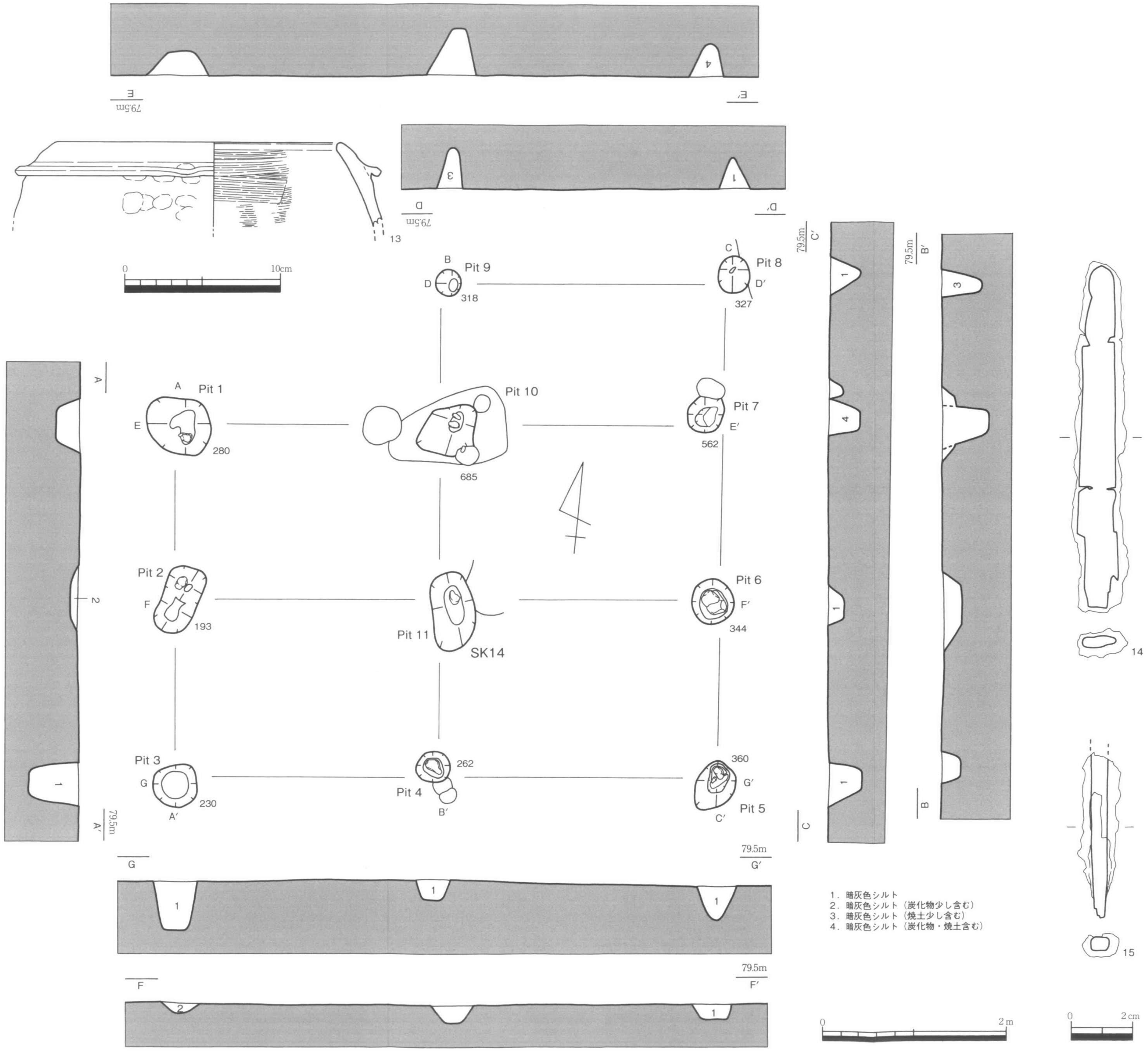
なお、佐藤竜馬「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十八冊　国分寺楠井遺跡』1995　香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財



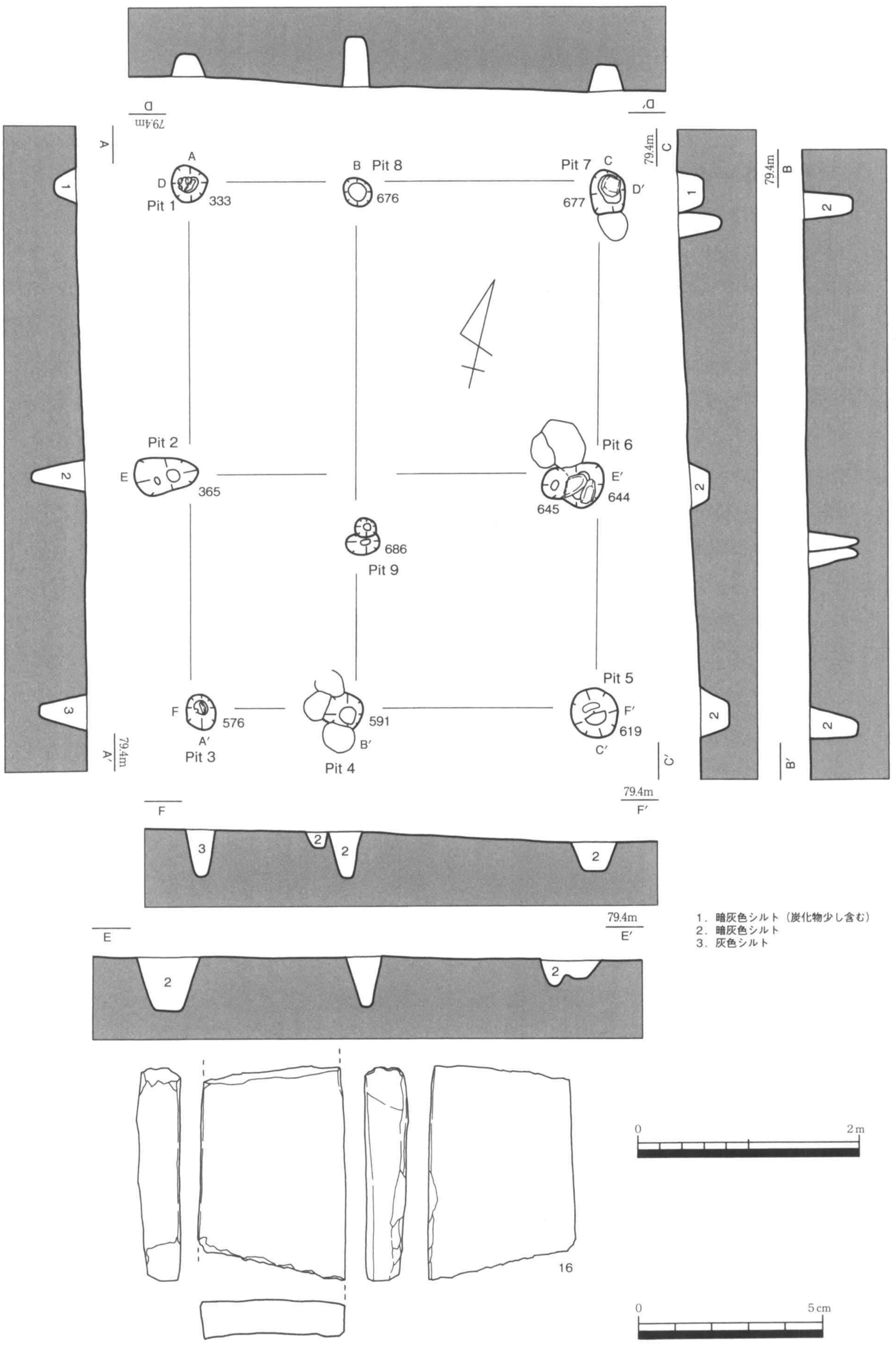
第13図　SB07平・断面図、出土遺物実測図



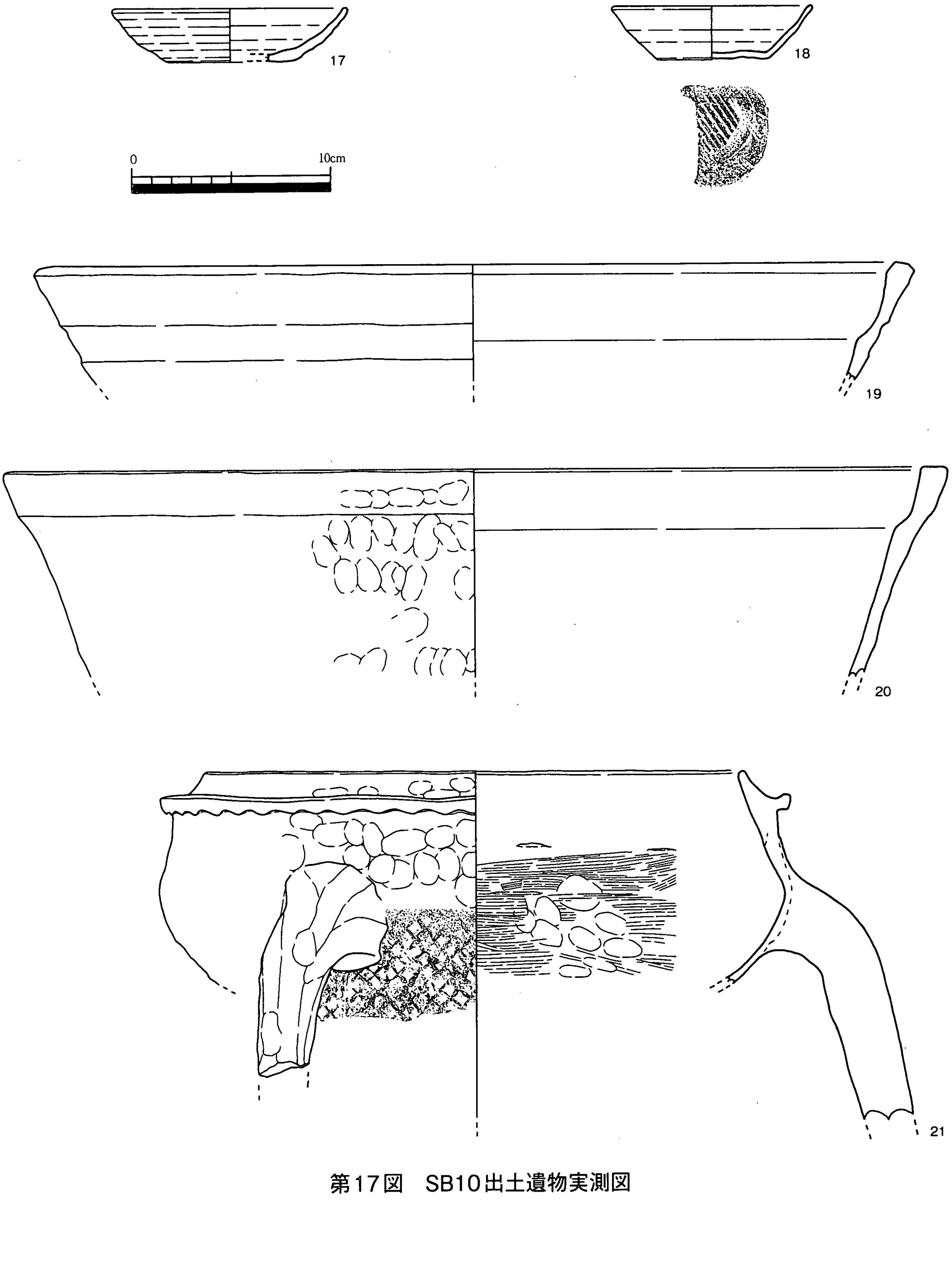
第14図　SB08平・断面図、出土遺物実測図



第15図　SB09平・断面図、出土遺物実測図



第16図　SB10平・断面図、出土遺物実測図



第17図　SB10出土遺物実測図

調査センター、日本道路公団では、このタイプの土鍋の出現期がⅡ期（14世紀前葉～15世紀前葉）とされており、楠井産の土器に限らず、同タイプの土鍋が同様の変化を遂げると考えた場合には、年代的な矛盾はない。これも今後の課題である。

SB11（第18図）

SB11はⅠ区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（3.4m）×桁行2間（3.9m）で、面積は13.26㎡、主軸方位はN－0°－Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2～0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化かどうかは判然としない。

Pit内から22（Pit 5）のスクレイパー、23（Pit 1）の銅銭の破片が出土している。前者は剥片の縁辺に片面のみ刃部加工している。この資料については、周辺の状況から混入資料と判断している。後者は約1/2の破片であり、「●元□●」と判読できるが、銭種を確定することはできなかった。中世段階に大量に流通した中国銭と考えられる。

SB12（第19図）

SB12はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。東側が調査区外に伸びると考えており、現状では梁間1間（1.8m）×桁行1間（2.1m）以上で、面積は3.78㎡以上、主軸方位はN－67°－Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3m前後の円形、断面は逆台形である。

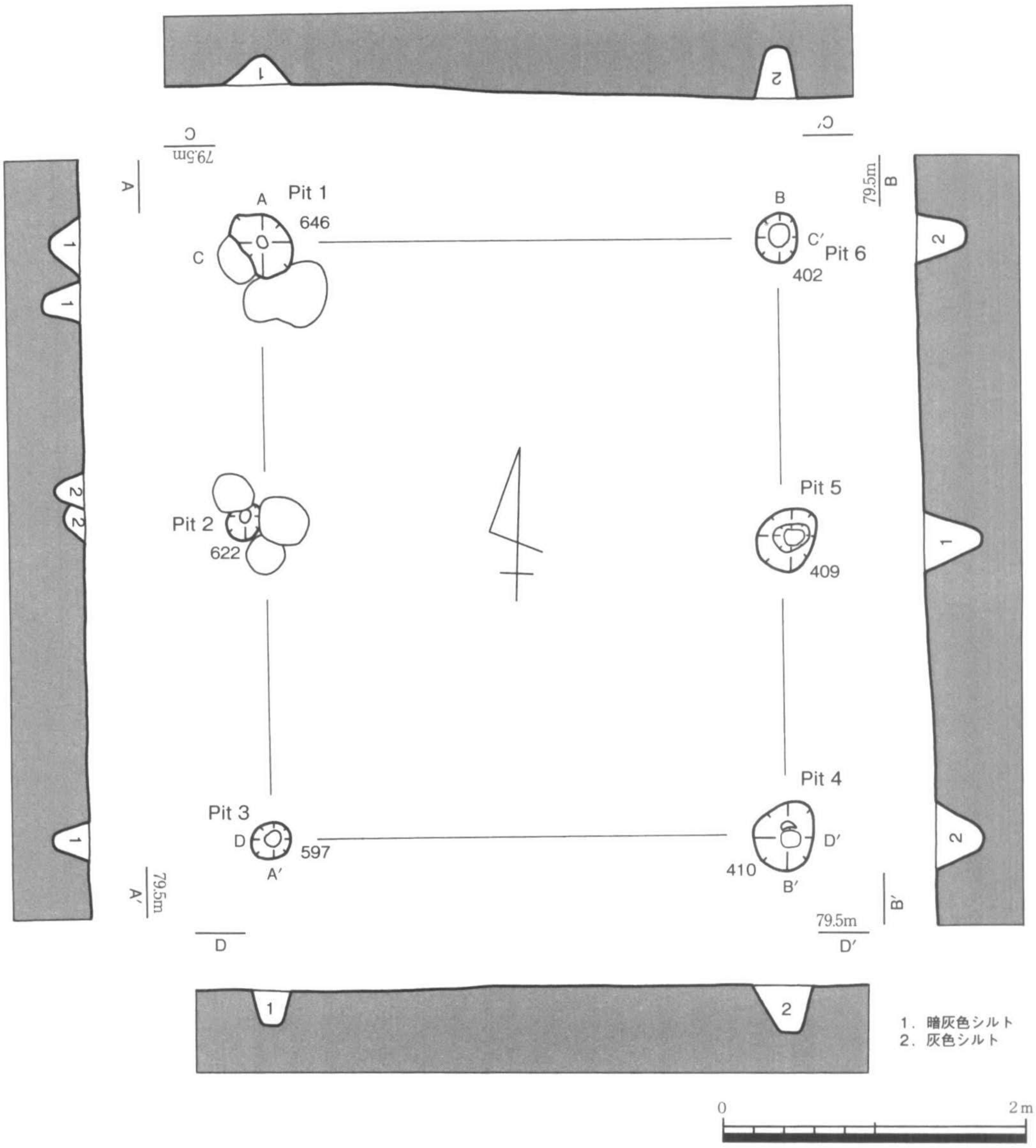
Pit内から遺物は出土していない。

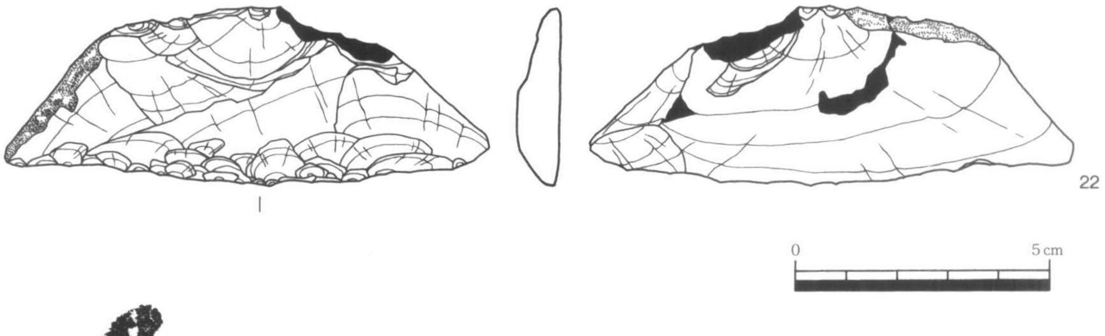
SB13（第20図）

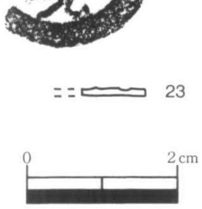
SB13はⅠ区中央で検出された東西棟と考えられる掘立柱建物跡である。梁間1間（2.0m）以上×桁行2間（4.5m）で、面積は9.0㎡以上、主軸方位はN－77°－Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.4～0.5mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化と考えられる。

Pit 3・4には根石もしくは詰石が見られる。

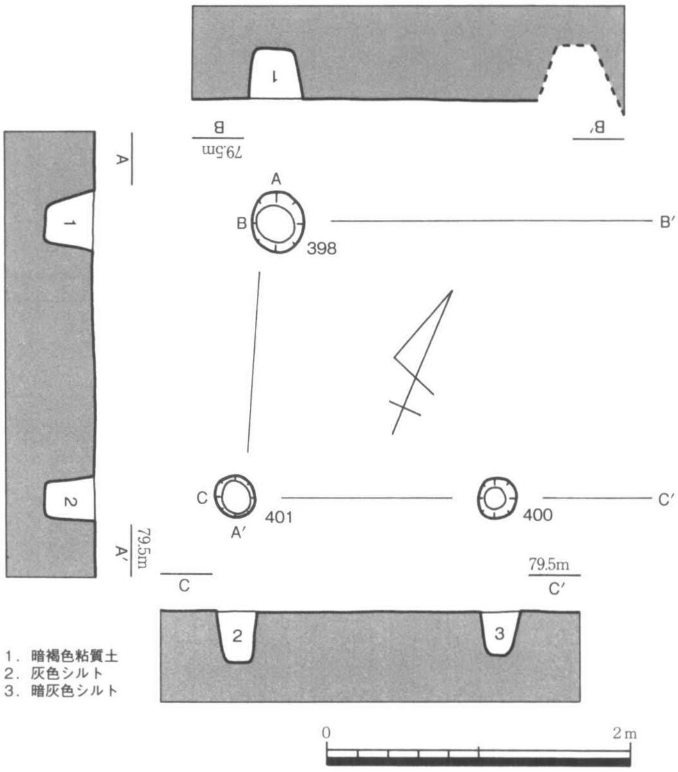
遺物は、24・25の土師器杯、26の土師器小皿、27の土師質羽釜が、いずれもPit 1から出土している。また、64の土師質土鍋がPit 4から出土している。24は、ヘラ切り底部からほぼ直線的に外上方に立ち上がる口縁部を有し、内外面とも回転ナデが施されている。底部には板目？の痕跡も若干認められる。佐藤2000Ⅱ－4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。25は底径が24に比べて小さく内湾気味の口縁部を持つ。底部はヘラ切りである。佐藤2000Ⅱ－3～4で13世紀第2～4四半期。26はヘラ切りの底部から短く直線的に立ち上がる口縁部を有し、体部と底部の境は明瞭である。佐藤2000Ⅱ－3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。27は、体部上半のみの出土で、最大径部から内湾気味に伸び、口縁端部はやや厚く、丸みを持って終わる。鍔は外下方に垂れ下がり形骸化する段階と考えられる。内外面ともハケ調整が施される。片桐Ⅲ－①～⑦で14世紀～16世紀前半。64は、逆「ハ」の字形に外反気味で外上方に伸び、口縁内側に段を持つ。また、口縁端部は平坦面が形成されている。外面は指頭圧痕や板ナデの痕跡が顕著で、内面は口縁部内側にのみ







第18図　SB11平・断面図、出土遺物実測図



第19図　SB12平・断面図

ハケ調整が施されている。片桐Ⅲ-⑦～⑨で16世紀。これは、先の19・20同様のことで、いずれもPitからの一括であることを考え、14世紀前半頃に位置付けておく。

SB14（第21図）

SB14はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（3.2m）×桁行2間（3.6m）で、面積は11.52㎡、主軸方位はN－11°－Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化と考えられる。

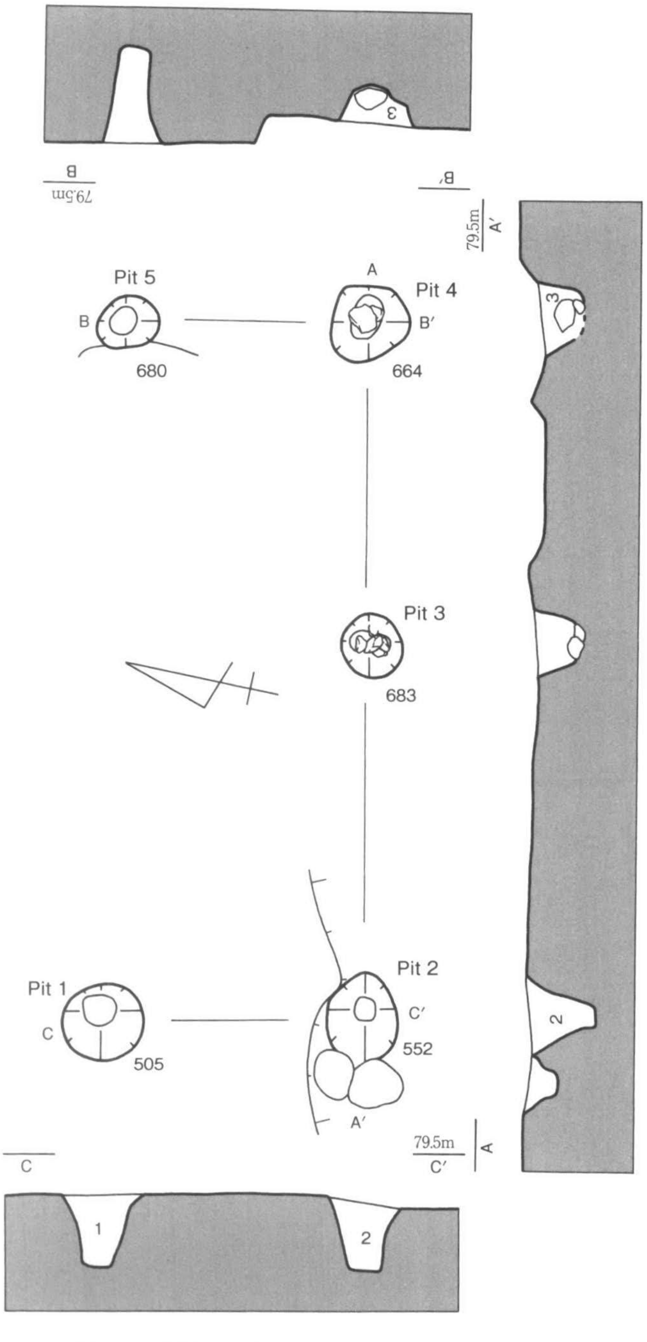
平面は、東辺が1間であることやPit 8の存在から、やや不定形な掘立柱建物跡になっている。

Pit内から遺物は出土していない。

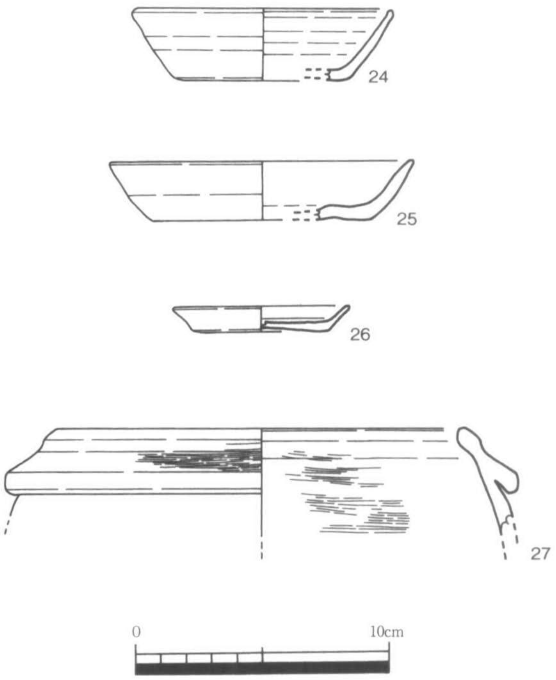
SB15（第22図）

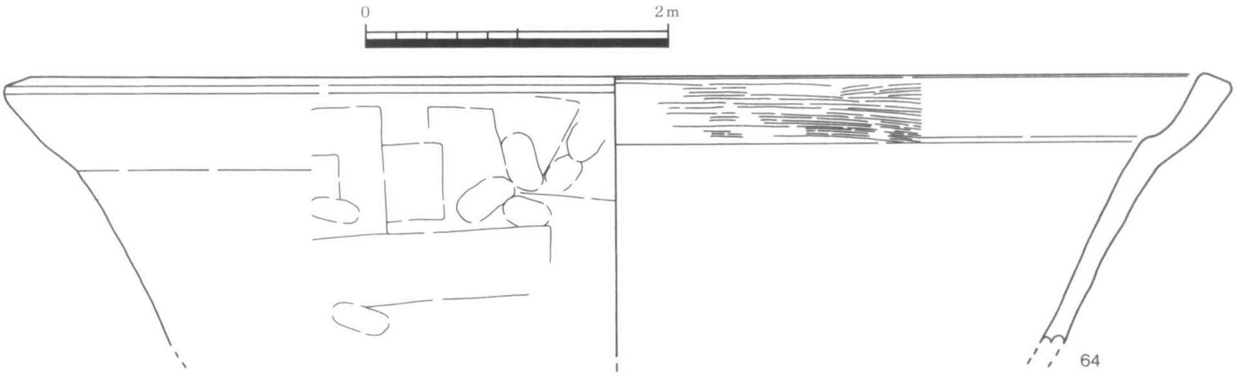
SB15はⅠ区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（5.6m）×桁行4間（7.4m）で、面積は41.44㎡、主軸方位はN－10°－Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2～0.4mの円形、断面は逆台形もしくは逆富士山形である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化と考えられる。この場合、Pit 7は除外している。Pit 7としている遺構は、径約1mの土坑で、他の柱穴との比較から見れば、この掘立柱建物跡を構成するPitを壊して後世に作られた土坑と考えられる。

Pit 9から28の土師器杯が出土している。底部は欠損しているが、やや内湾気味に外上

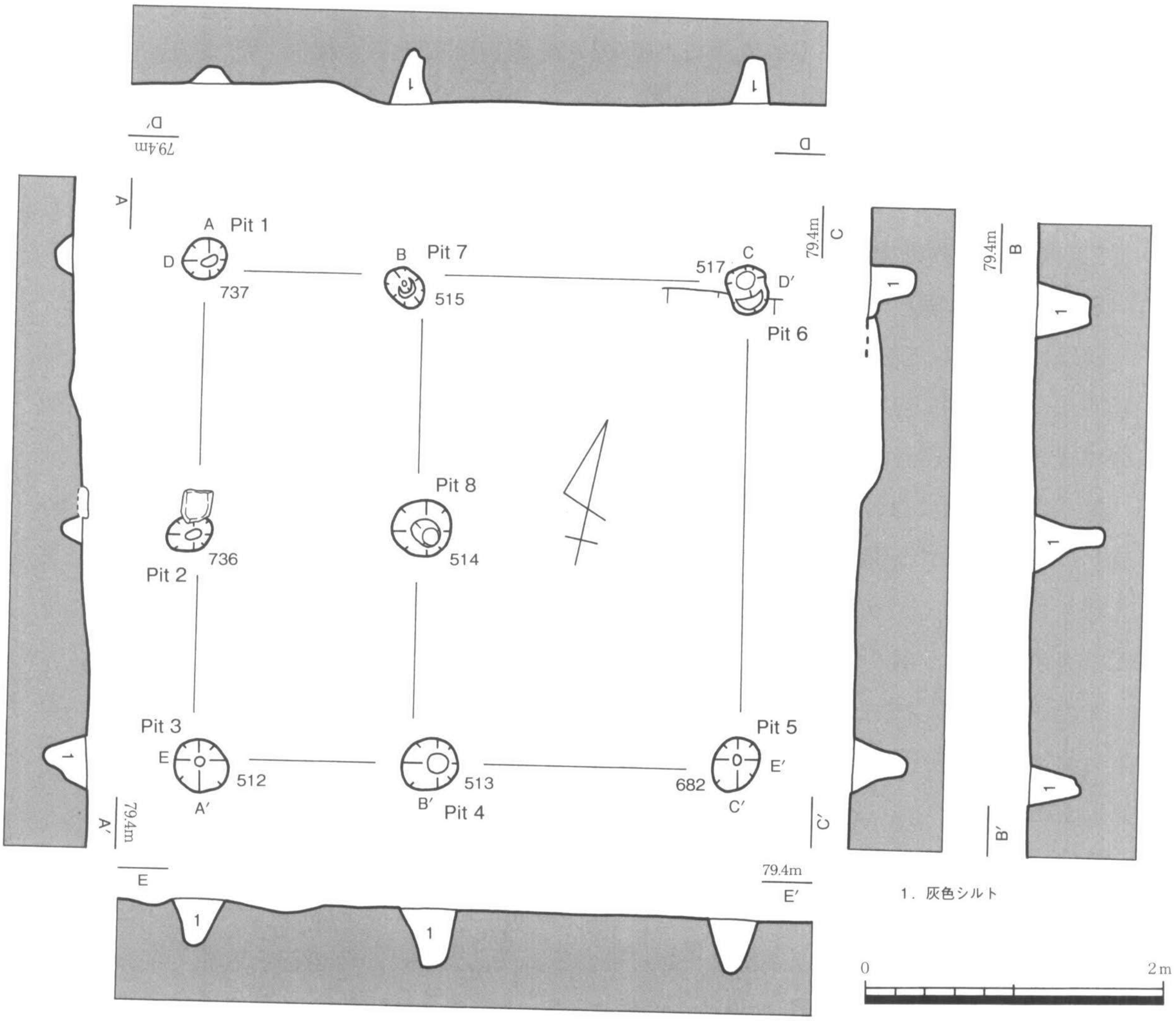


1．灰色シルト（炭化物・焼土含む）
2．暗灰色シルト（炭化物・焼土含む）
3．暗灰色シルト





第20図　SB13平・断面図、出土遺物実測図



第21図　SB14平・断面図

方に立ち上がる口縁部を持つ。

1点ではあるが、土器の特徴から佐藤2000 II－4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半に位置付けられる。

SB16（第23図）

SB16はⅠ区中央で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（3.3m）×桁行2間（5.7m）で、面積は18.81㎡、主軸方位はN－85°－Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.4mの円形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化とは考えられない。また、梁間、桁行ともやや間隔が広いため、軸線上にのらない柱穴も利用されていた可能性は否定できない。

Pit 5から29の土師器杯が出土している。底部は欠損しているが、やや内湾気味に外上方に伸び、端部が肥厚する口縁部を持つ。

1点ではあるが、土器の特徴から佐藤2000 II－3～5で13世紀に位置付けられる。

SB17（第24図）

SB17はⅠ区中央で検出された南北棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（2.0m）×桁行2間（4.1m）で、面積は8.2㎡、主軸方位はN－7°－Wを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.2～0.3mの円形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。断面形状については、SB01同様の柱の抜き取りによる形状の変化とは考えられない。

Pit内から遺物は出土していない。

SB20（第25図）

SB20はⅡ区西で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（6.4m）×桁行5間（8.4m）で、面積53.76㎡、主軸方位はN－68°－Eを測 る大型建物である。柱穴掘り方平面は径約0.4～0.7mの円形もしくは隅丸方形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。

柱穴埋土断面には、部分的に柱痕と思われる土層が認められること、柱の抜き取り穴が見られず、断面の土層にも乱れが認められないことから、SB01同様の柱の抜き取りは考え難く、地表面での切断の可能性が高い。柱の固定は、柱周辺の土を版築状に固めることでなされている。柱の径は柱痕と思われる土層の幅から見て約0.2m前後と推定される。

また、南辺の柱穴に対応して0.3～0.4mの柱穴列が検出されている。これは、本体の柱穴と比べて規模が小さくなること、本体南辺の柱穴と対応関係が明確であることから庇と判断している。

遺物は、Pit 2から30の須恵器杯蓋のつまみ、Pit 19から31の土師質土鍋口縁部片が出土している。佐藤1993Ⅰ－1～Ⅱ－5で7世紀中頃～9世紀中頃。31は半球状の体部から屈曲して外上方に短く直線的に伸び、端部を平坦に終わる。内面調整はハケ調整である。時期不明。

1点ではあるが、30の特徴や後述する同グループの掘立柱建物跡の年代から9世紀中頃に位置付けられる。ただし、31がこの時期まで遡るかどうかについては、疑問が残る。

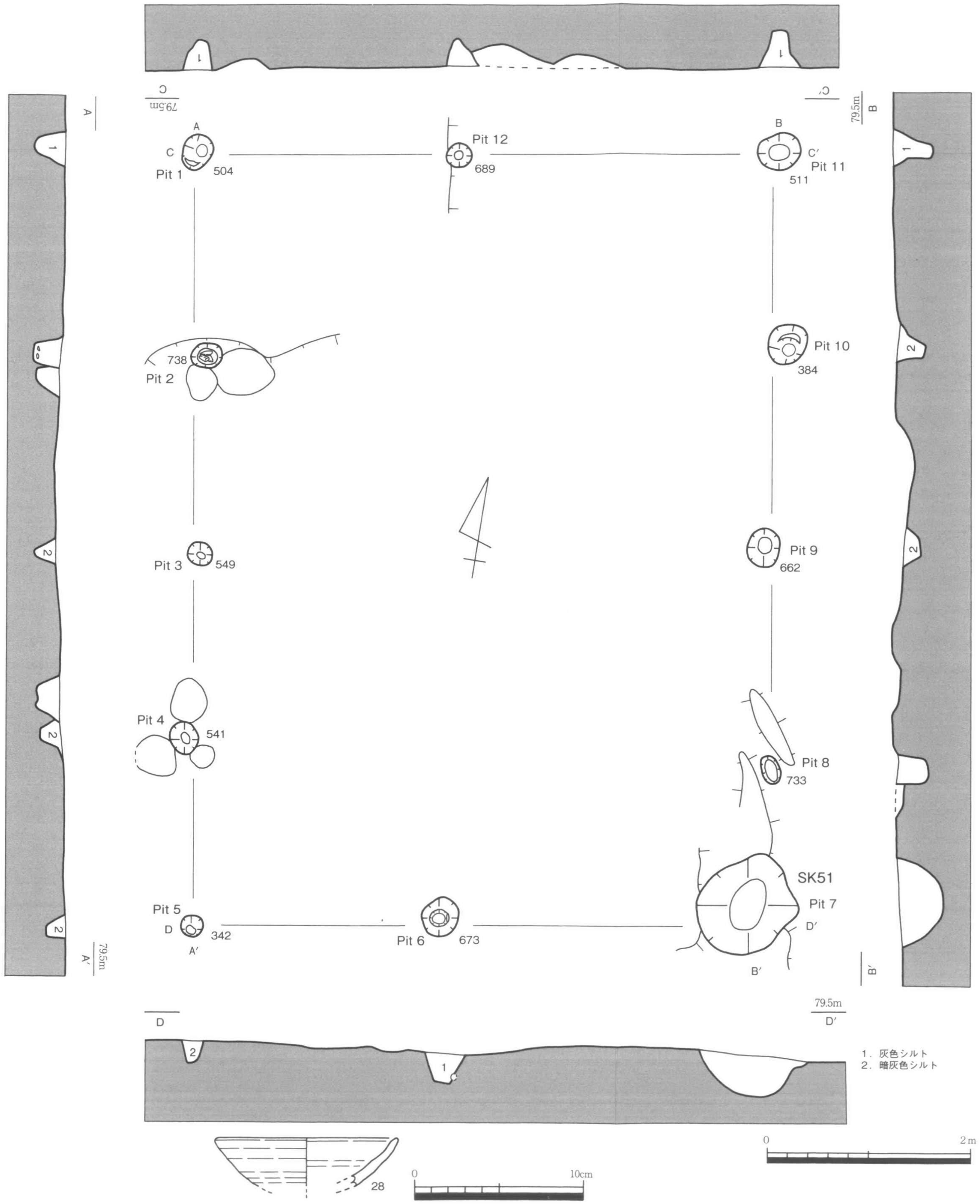
SB21（第26図）

SB21はⅡ区南で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（1.4m）以上×桁行5間（9.7m）以上で、現状での面積13.58㎡以上、主軸方位はN－55°－Eを測る大型建物と考えられるが、掘立柱建物跡の北辺のみの検出で、大半が調査区外に伸びるため正確な規模は不明である。検出されている柱穴の掘り方平面は径約0.5～0.7mの円形もしくは隅丸方形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。

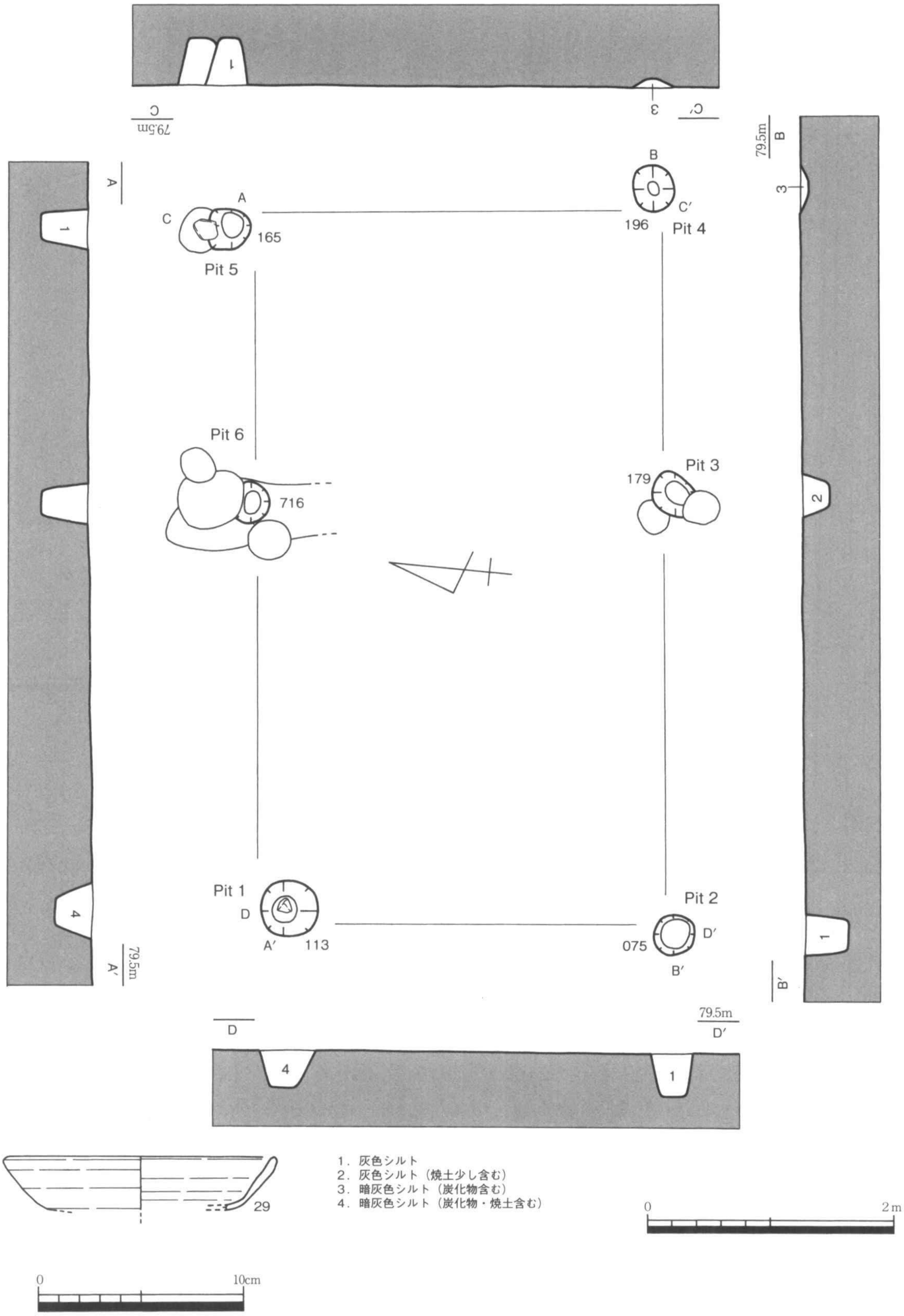
柱材についてはSB20同様、検出された断面の一部に柱痕が認められること、柱の抜き取り穴が見られず、断面の土層にも乱れがないことから、SB01同様の柱の抜き取りは考え難く、地表面で切断された可能性が高い。柱の固定は、柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。

Pit 6から32の須恵器皿が出土している。底部は残存部から見ると回転ヘラ切りで、体部はやや外反気味に外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。

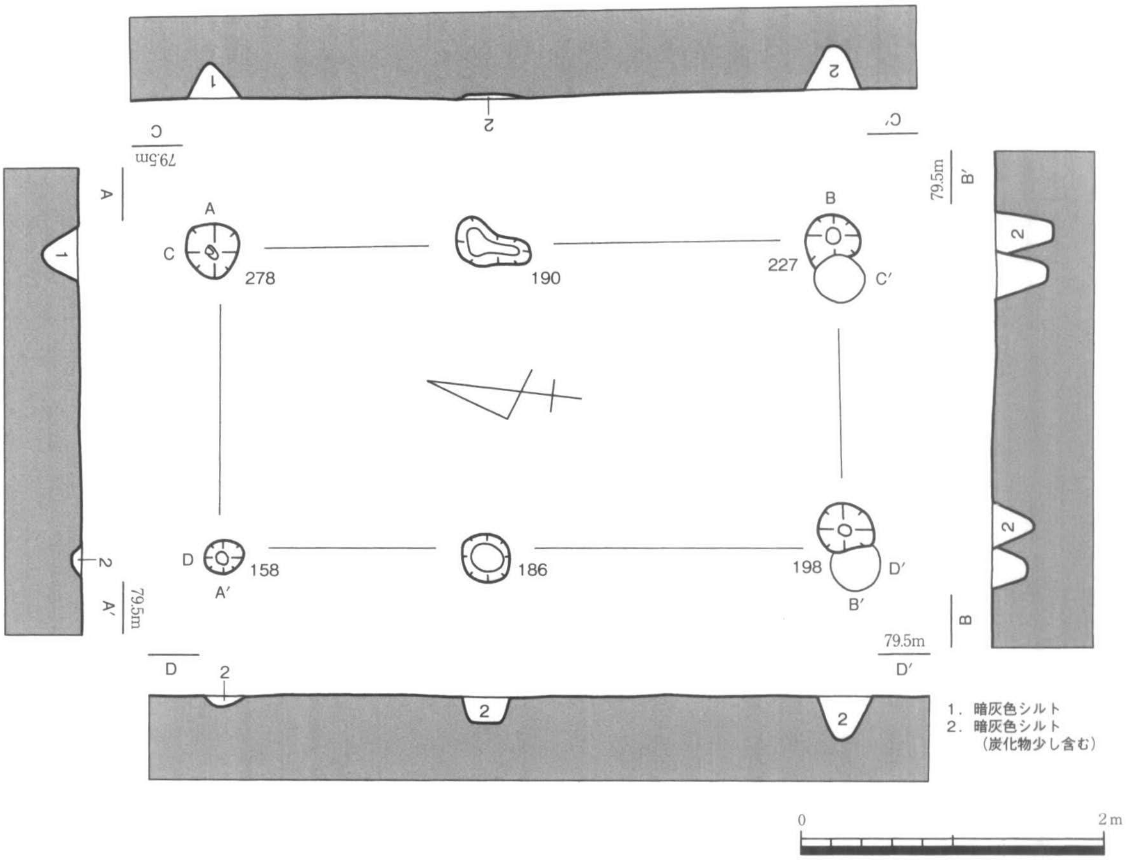
1点ではあるが、土器の特徴から佐藤1993Ⅱ－5に比定され、9世紀中頃に位置付けられる。



第22図　SB15平・断面図、出土遺物実測図



第23図　SB16平・断面図、出土遺物実測図



第24図　SB17平・断面図

SB22（第27図）

SB22はⅡ区南で検出された掘立柱建物跡である。梁間1間（1.0m）以上×桁行2間（4.3m）で、現状での面積4.3㎡以上、主軸方位はN－80°－Eを測る。大半が調査区外に伸びるため、現状では東西棟と考えているが、南北棟の可能性もある。検出されている柱穴の掘り方平面は径約0.4m前後の円形もしくは隅丸方形、断面は逆台形もしくは浅い皿型である。

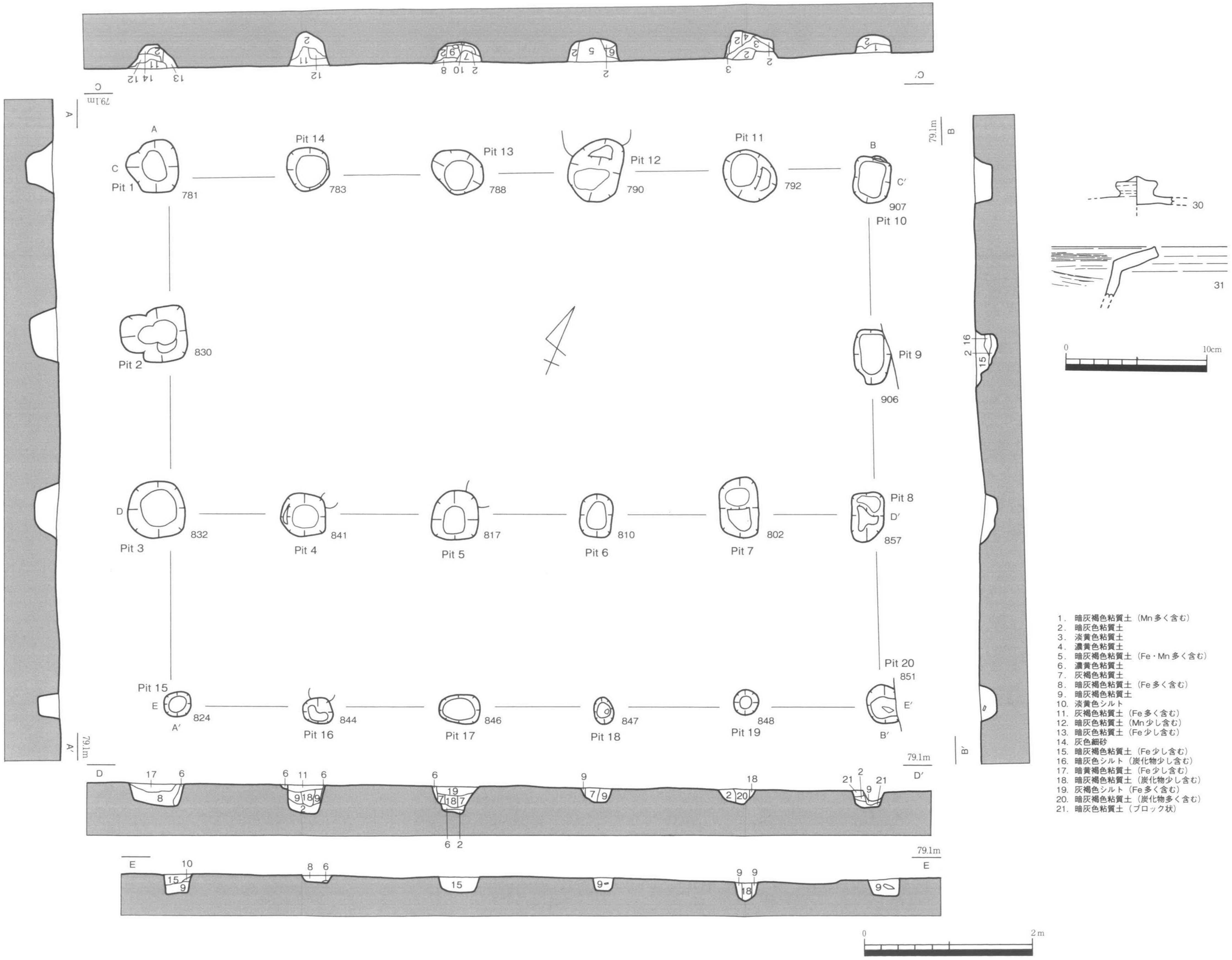
柱穴埋土断面には、SB21同様の柱痕が認められるため、柱の抜き取りは考えられず、切断された可能性が高い。柱の固定は、SB21同様柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。

Pit内から遺物は出土していない。

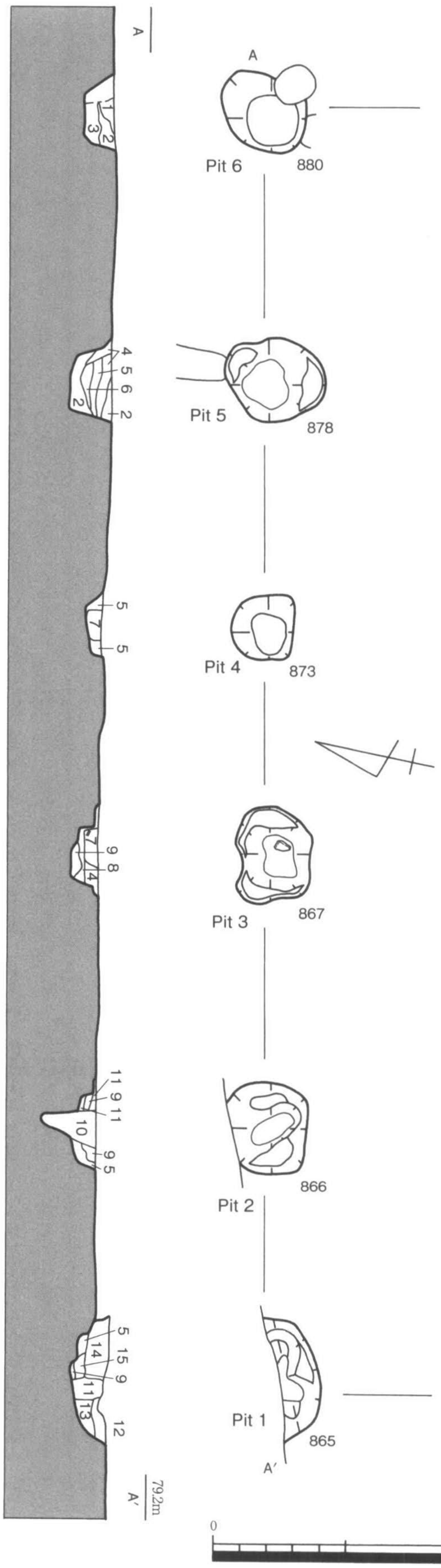
SB23（第27図）

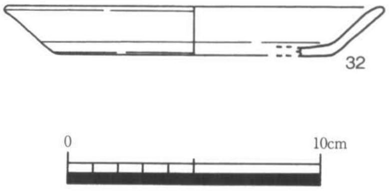
SB23はⅡ区南で検出された掘立柱建物跡である。梁間1間（0.8m）以上×桁行2間（4.2m）で、現状での面積3.36㎡以上、主軸方位はN－60°－Eを測る。大半が調査区外に伸びるため、現状では東西棟と考えているが、南北棟の可能性もある。検出されている柱穴の掘り方平面は径約0.3m前後の円形、断面は逆台形である。

柱穴埋土断面には、SB21同様の柱痕は認められず、柱の抜き取り方法については不明



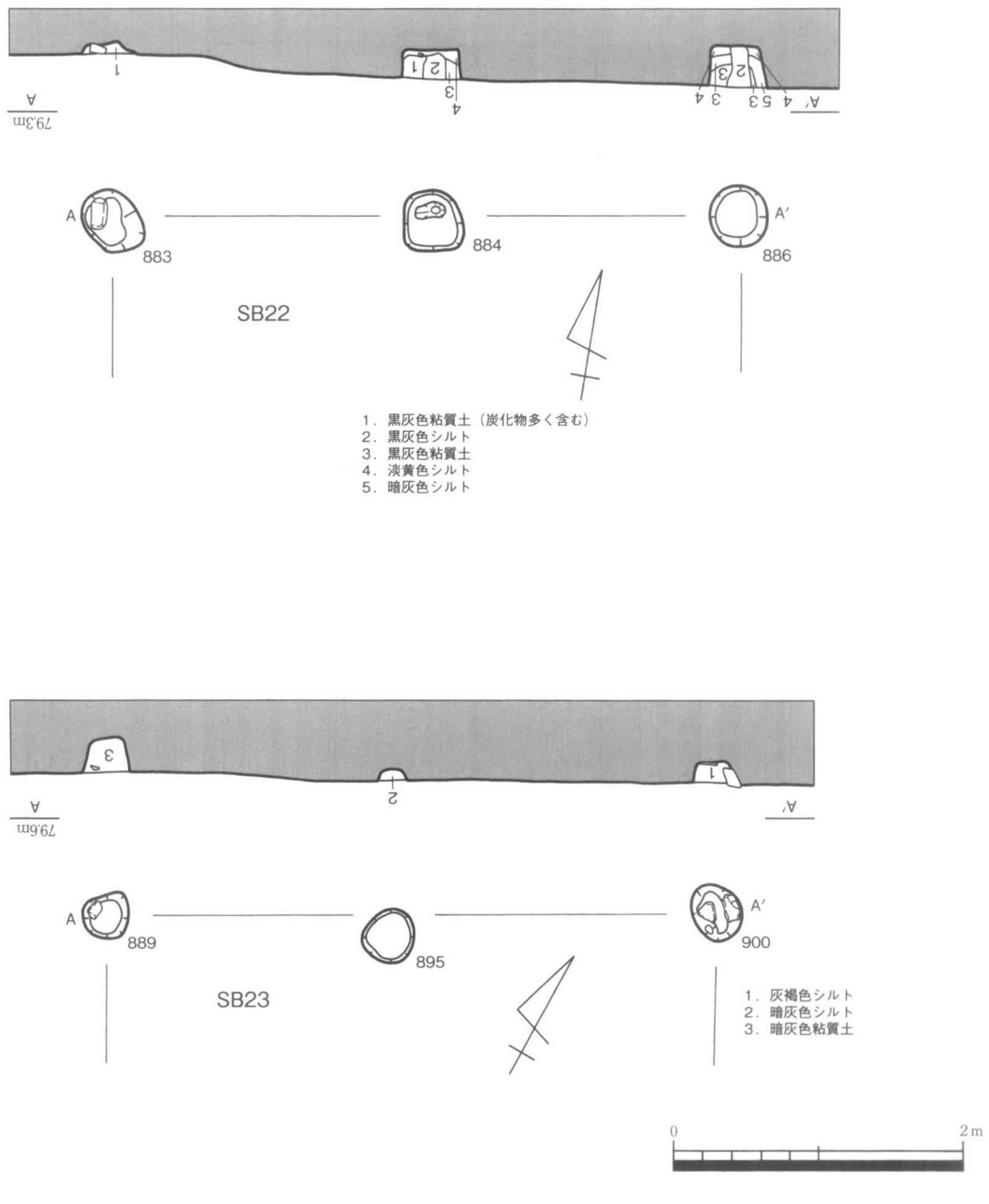
第25図　SB20平・断面図、出土遺物実測図





1．暗灰色粘質土（Fe少し含む）
2．明黄色粘質土
3．暗灰色粘質土（Fe多く含む）
4．暗灰色粘質土
5．暗灰色シルト
6．暗灰褐色粘質土（炭化物少し含む）
7．暗灰褐色シルト
8．暗灰色シルト（炭化物少し含む）
9．濃黄色粘質土
10．暗黄灰色シルト
11．暗灰褐色粘質土
12．濁黄橙色シルト
13．暗灰褐色シルト（炭化物少し含む）
14．暗灰橙色シルト（炭化物少し含む）
15．淡黄色シルト

第26図　SB21平・断面図、出土遺物実測図



第27図　SB22・23平・断面図

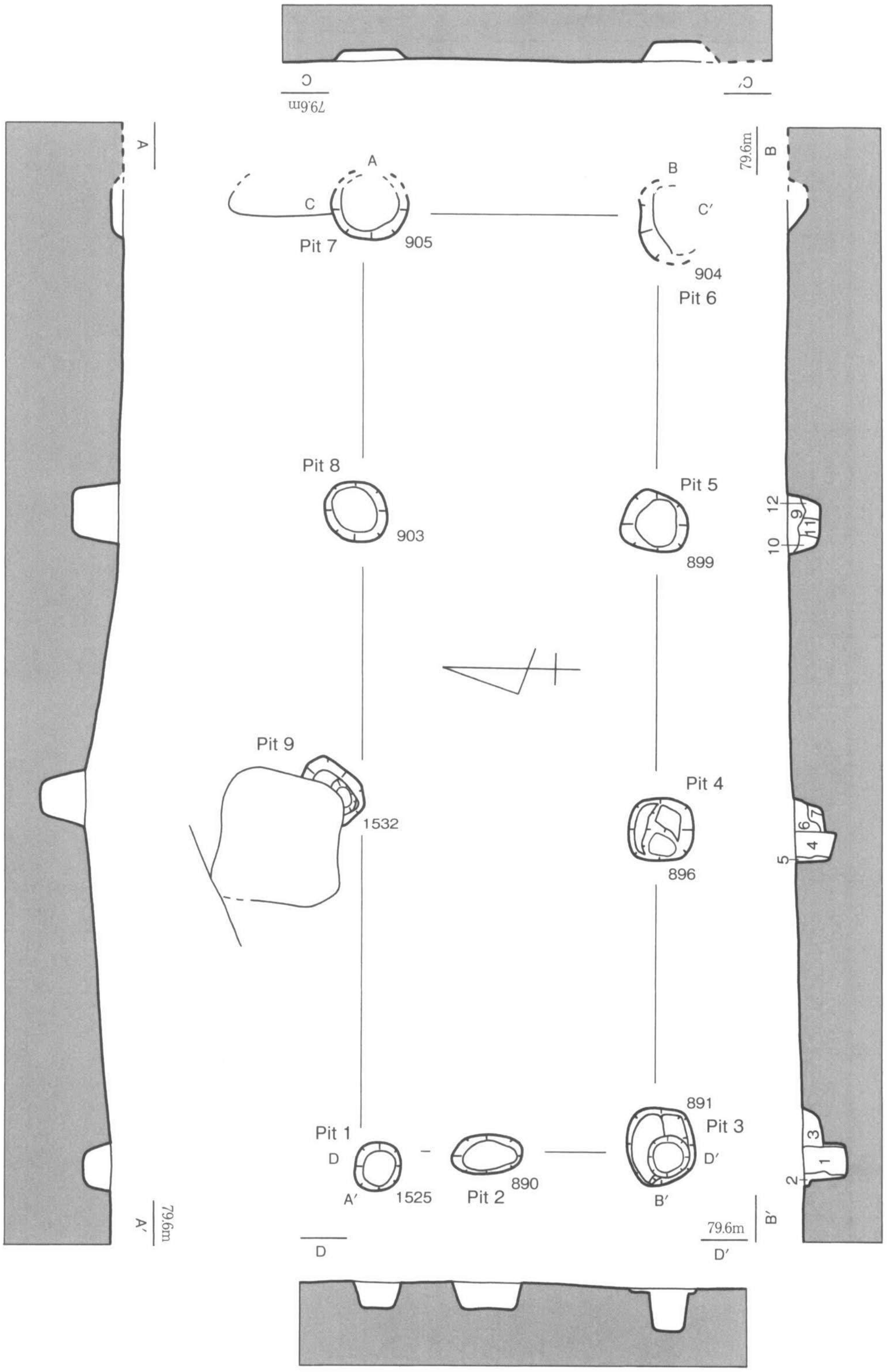
である。

Pit内から遺物は出土していない。

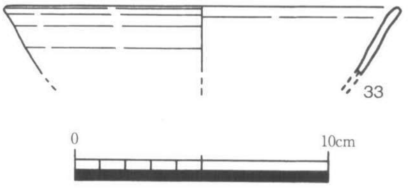
SB24（第28図）

SB24はⅡ区南で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（2.2m）×桁行3間（6.7m）で、面積14.74㎡、主軸方位はN－90°－Eを測る。調査区外に伸びる可能性は否定できないが、梁間の間隔が短く、南辺にも柱穴が確認できることから、完結した掘立柱建物跡と考えられる。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.5mの円形もしくは隅丸方形、断面は逆台形もしくは四角形である。

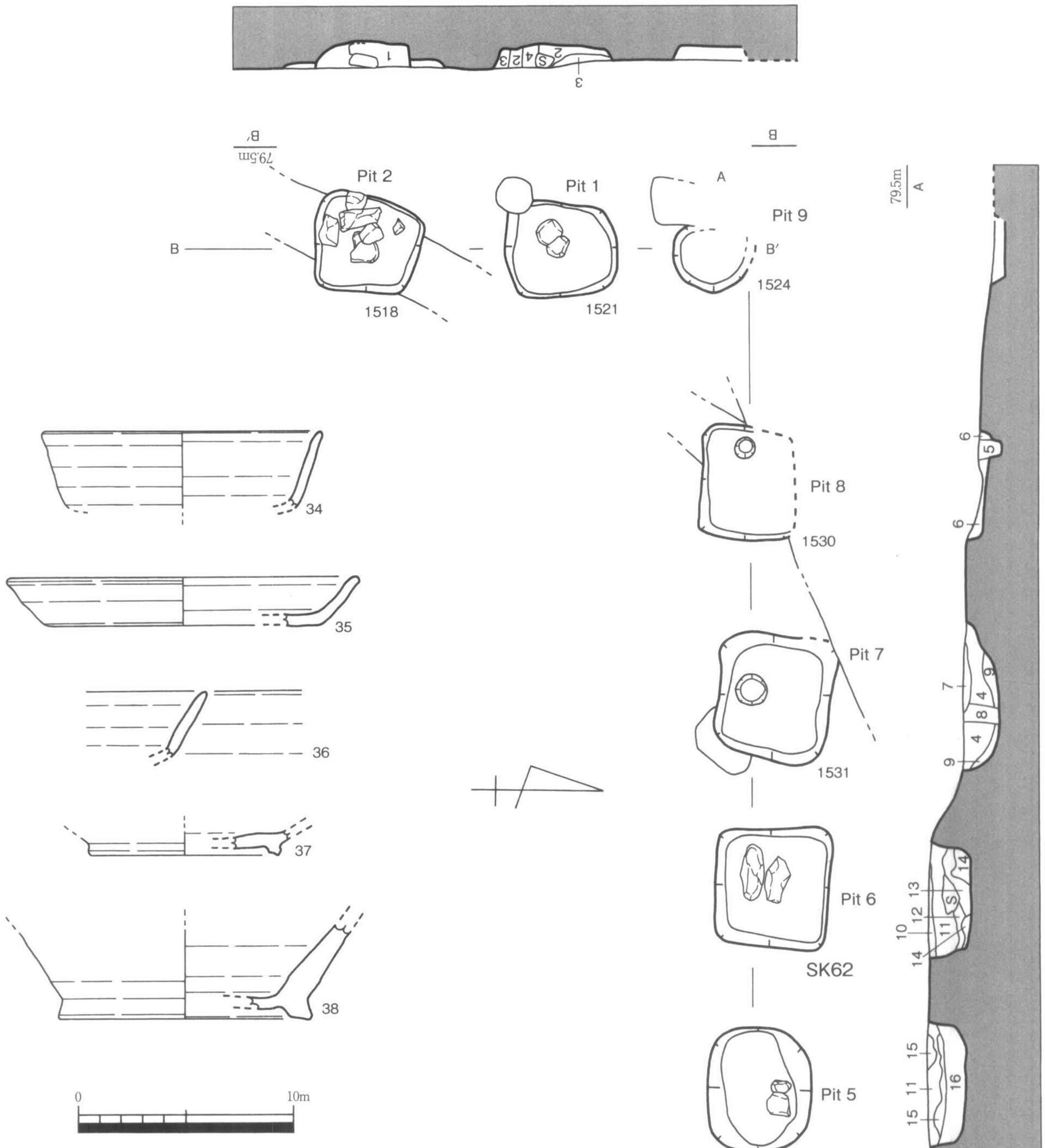
柱穴埋土断面が確認できる南辺の3柱穴でSB21同様の柱痕が認められるため、SB24を



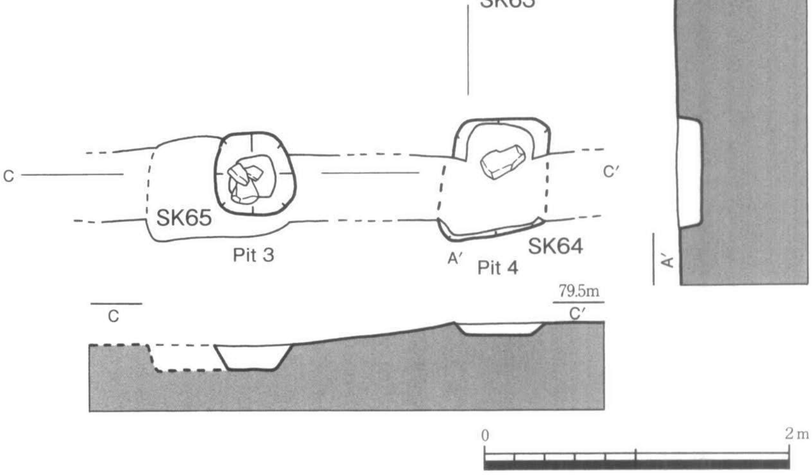
1. 黒灰色粘質土（炭化物少し含む）
2. 暗灰褐色シルト
3. 黒灰色粘質土
4. 暗灰色シルト
5. 濃黄色粘質土
6. 灰褐色シルト
7. 黒灰色シルト



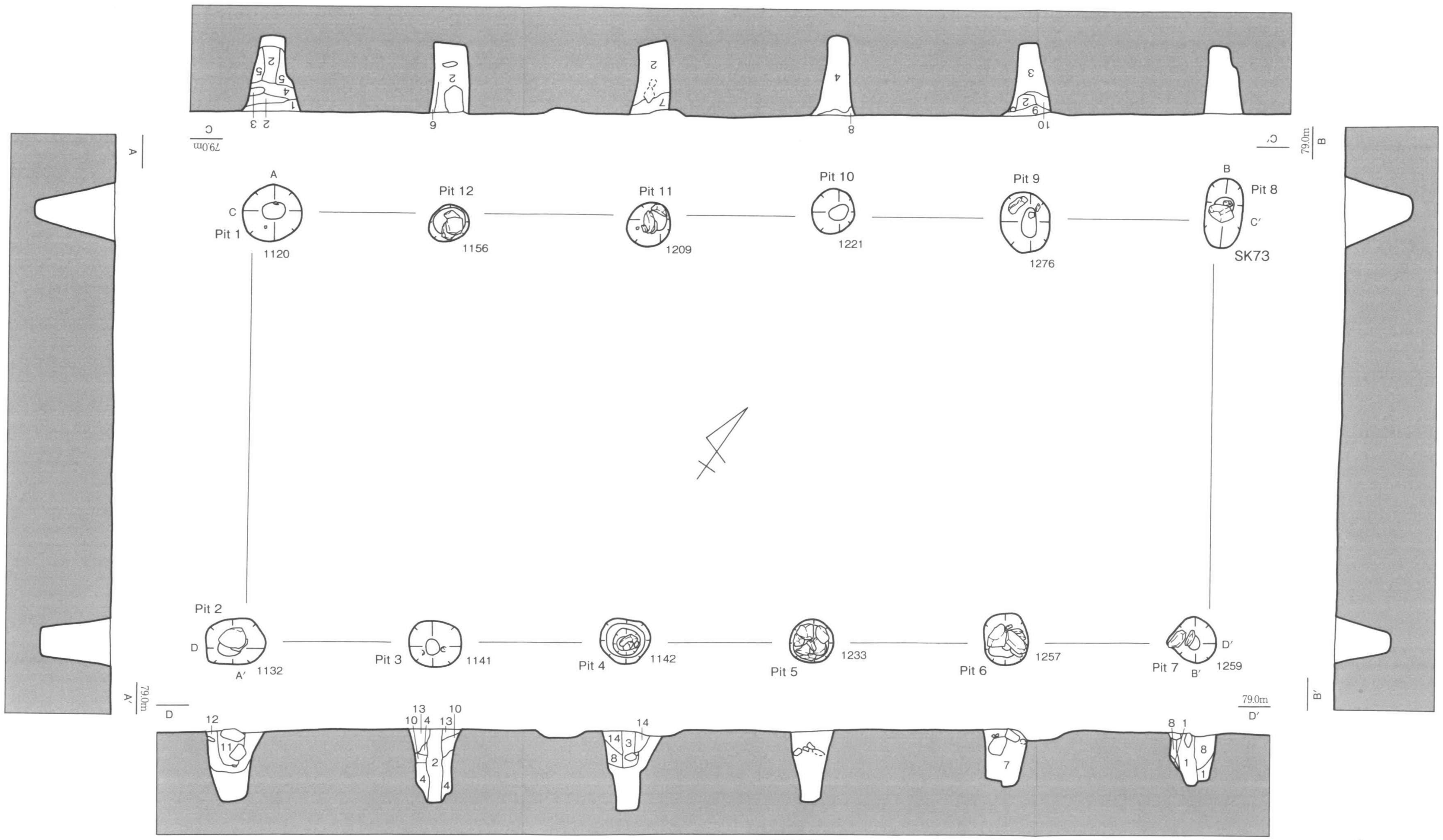
第28図　SB24平・断面図、出土遺物実測図



1. 灰褐色粘質土（Fe少、炭化物多く含む）
2. 暗灰褐色粘質土（炭化物多く含む）
3. 淡黄粘土（炭化物多く含む）
4. 暗灰褐色粘質土
5. 黒灰粘質土（炭化物多く含む、焼土含む）
6. 暗灰褐色粘質土（炭化物多く含む、焼土含む）
7. 明黄粘土（地山土）
8. 暗灰色粘質土（柱痕状）
9. 明黄粘土（地山ブロック多い）
10. 明黄粘質土（炭化物多く含む）
11. 暗褐色粘質土（炭化物多く含む）
12. 明黄粘質土（炭化物少し含む）
13. 暗褐色粘質土
14. 明黄粘質土
15. 濃黄粘質土（炭化物少し含む）
16. 暗灰褐色粘質土（炭化物多く含む）

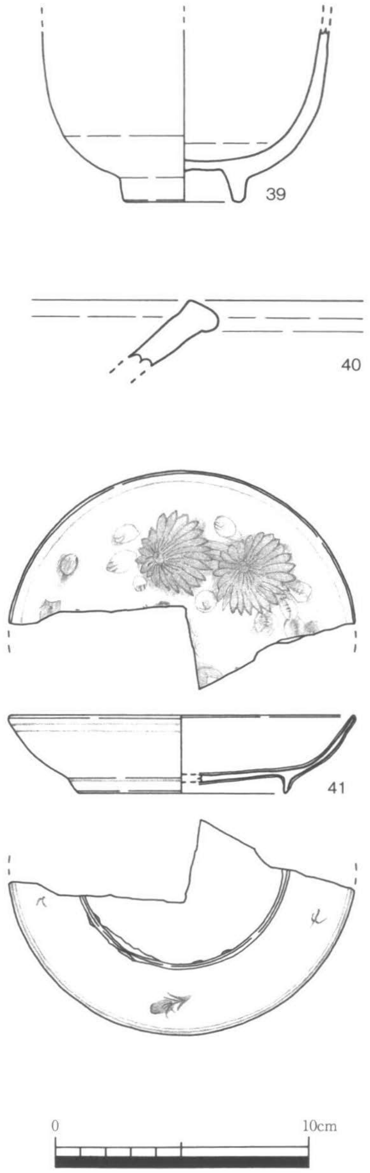


第29図　SB25平・断面図、出土遺物実測図



1．淡褐色シルト
2．暗灰色シルト
3．暗灰色シルト（Mn 多く含む）
4．灰色シルト
5．濃褐色粘質土
6．淡褐色シルト（Mn 多く含む）
7．灰色シルト（Mn 多く含む）
8．淡褐色粘質土
9．褐色粘質土
10．明褐色粘質土
11．淡茶色粘質土（Fe 多く含む）
12．灰色シルト（Fe 多く含む）
13．明茶色粘質土
14．暗灰色シルト（Fe・Mn 多く含む）
15．灰色細砂
16．灰茶色シルト

0　2m



第30図　SB30平・断面図、出土遺物実測図

構成するすべての柱穴で柱の抜き取りは考えられず、切断した可能性が高い。柱の固定は、SB21同様柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。

Pit 8から33の土師器杯が出土している。底部は欠損しているが、やや外反気味に外上方に伸び、口縁端部は丸く終わる大形の杯である。

SB25（第29図）

SB25はⅡ区南で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間2間（3.7m）以上×桁行5間（8.2m）で、現状での面積30.34㎡、主軸方位はN－90°－Eを測る。検出できたのは北辺・東辺・西辺部分であり、調査区外にどの程度伸びるかは不明である。柱穴の掘り方平面は径約0.8～1.0mの隅丸方形、断面は逆台形である。

Ⅱ区南では遺構面が2面確認され、上面で確認できたPit 5・6は概報段階では土坑として扱われている。(SK63・62) 下層面で他のPitが確認されていることから、本来は上層面からの掘り込みである。

柱穴埋土断面が確認できる柱穴の一部では、SB21同様の柱痕が認められるため、柱の抜き取りは考えられず、切断した可能性が高い。柱の固定は、SB21同様柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。

遺物は、34の須恵器杯、35の須恵器皿がPit 2から、36の須恵器皿、37の須恵器皿はPit 7から、38の須恵器壺底部がPit 1から出土している。

34はやや内湾気味に外上方に伸び、端部が外反して細く終わる。このため、口縁端部内側は明瞭な稜線が認められる。佐藤1993Ⅱ－2で8世紀中頃。35は平坦な底面から僅かに内湾し、端部が小さく外反する口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ－3で8世紀後半。36は直線的に外上方に伸び、端部が細くなって終わる。8世紀中頃～9世紀中頃。37は底面と体部の屈曲部の底部側に四角く直立する脚部を持つ。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。38は体部との屈曲部から外側に張り出す脚部を持つ。佐藤1993Ⅱ－2で8世紀中頃。

以上のことから9世紀中頃に位置付けられる。

SB30（第30図）

SB30はⅥ区で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（4.5m）×桁行5間（9.8m）で、面積44.1㎡、主軸方位はN－55°－Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.4～0.5mの円形もしくは隅丸方形、断面は四角及び逆富士山形である。

柱穴埋土断面が確認できる柱穴の一部では、SB21同様の柱痕が認められるため、柱の抜き取りではなく、切断した可能性が高い。柱の固定は、SB21同様柱周辺の土を版築状に薄く固めることでなされている。柱の径は約0.2m前後と推定される。また、埋土1層のみのPitもあることから、当然柱の抜き取りも想定される。なお、埋土がPit中位程度で区画されているものも見られ、柱の長さなどを調整した痕跡と考えられる。

Pit内出土遺物として次の3点がある。39（Pit 8）の陶器椀、40（Pit 1）の土師質土鍋口縁部片、41（Pit 9）の染付け皿である。39は、やや深めの椀で、高台部も高い。40は、

半球状の体部から外上方に屈曲する土鍋と考えているが、時期は不明である。41は肥前系磁器染付皿で、見込みには菊花文、外面にも文様を描く。

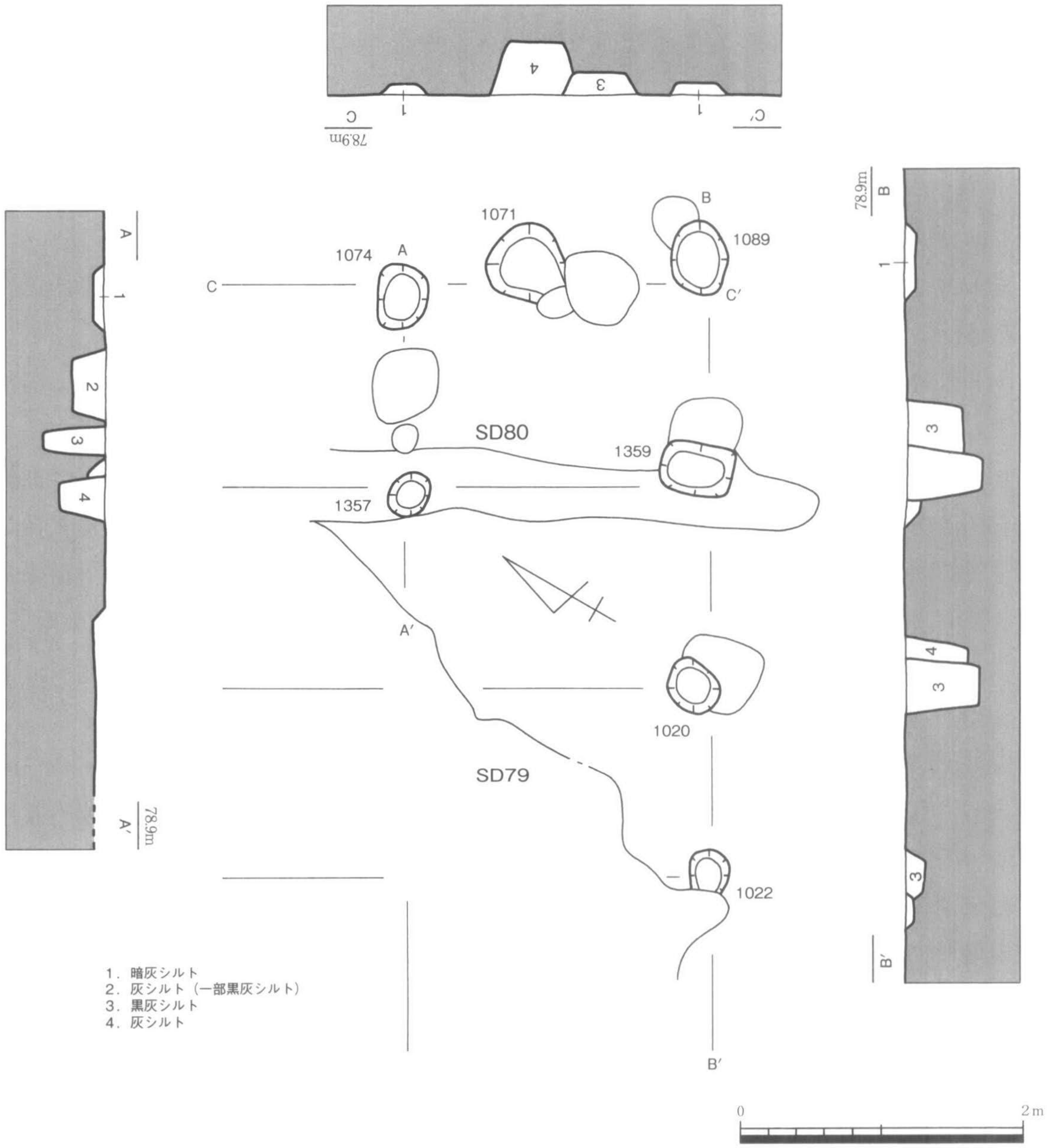
これらの特徴から19世紀前半～幕末頃に位置付けられる。

SB31（第31図）

SB31はⅥ区北西隅で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。梁間1間（3.4m）以上×桁行3間（4.9m）以上で、現状での面積16.66㎡、主軸方位はN－59°－Eを測る。柱穴の掘り方平面は径約0.3～0.4mの円形もしくは隅丸方形、断面は四角及び逆台形である。

現状でも北西部の柱穴は確認されておらず、SD79に切られていると考えられる。

Pit内から遺物は出土していない。



第31図　SB31平・断面図

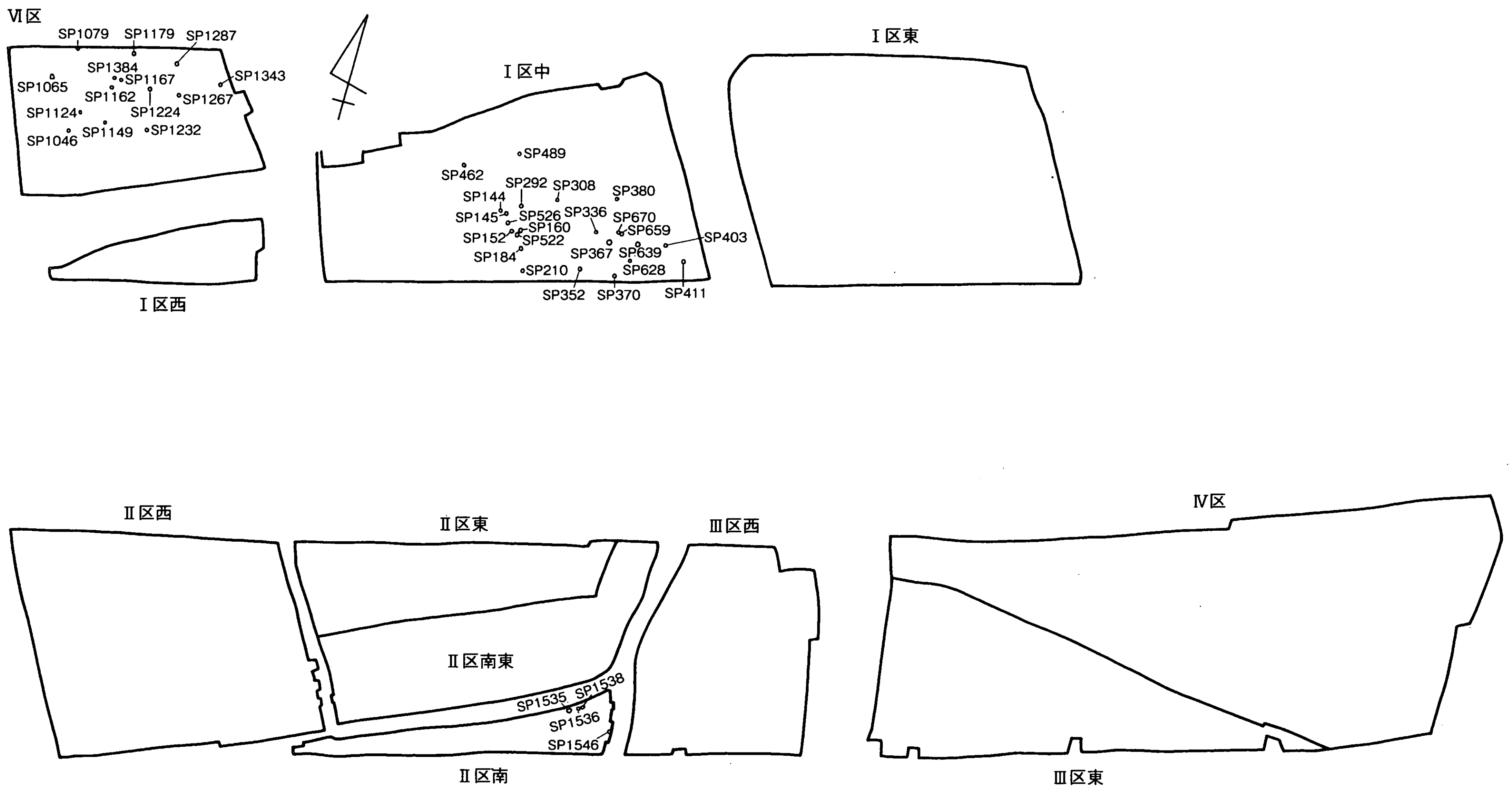
2　柱穴（第32～35図）

柱穴は、全調査区で凡そ1,500穴程度確認されているが、その大半は掘立柱建物跡や柵列を構成するものとして位置付けることができなかった。掘立柱建物跡や柵列と認識されるものは、基本的に四角形を構成するか、一直線に並ぶかと、埋土の色・質などの要件を満たしているものである。今回の調査でも、単独で検出されている掘立柱建物跡（SB20・30など）が、四角形を基本とする構成となっているため、検出段階及び整理段階でもこれを基準として精査した。しかし、構成を確認できない柱穴がこれほど大量に見られることは、より複雑な建物構造や簡易な施設、単独で機能するものなどの存在も想定され、今後の検討を要する項目の一つである。

以下、これらの柱穴から出土した遺物について記述する。なお、掲載は柱穴番号順としている。

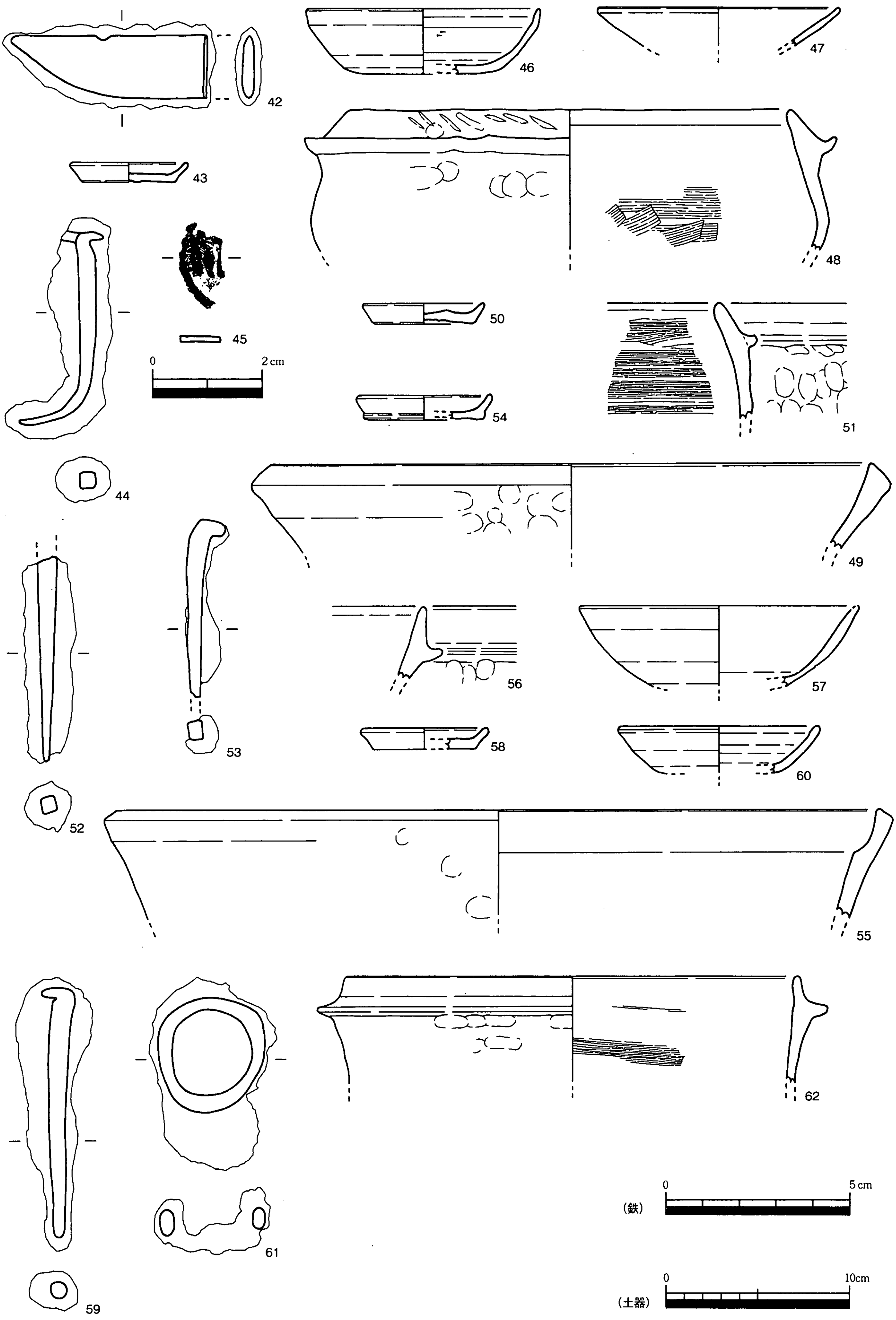
42（SP144）は鉄刀の切先片である。43（SP145）は土師器小皿で、底面はヘラ切り、他は内外面とも回転ナデが見られる。佐藤2000 Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。

44（SP152）は鉄釘である。先端部が釣り針状に曲がっており、頭部は変形している。45（SP160）は銅銭片で、「●宝●●」と読むことができる。銭種は明確にできなかった。46（SP184）は土師器杯で、内湾気味に立ち上がる体部を有し、口縁端部は細く終わる。佐藤2000 Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。47（SP210）は土師器杯で、外上方に直線的に立ち上がる体部を有し、口縁端部は細く終わる。48（SP292）は土師質羽釜で、体部下半を欠損している。体部中央から直線的に内上方に立ち上がり、端部は細く終わる。鍔はやや受け口状に小さく伸びている。外面は指頭圧痕、内面はハケ調整が見られる。片桐Ⅲ-①～⑦14世紀～16世紀前半。49（SP308）は土師質鉢で、口縁部のみの出土である。口縁部は体部から肥厚しながら端部に至り、端部に平坦面を作る。外面には指頭圧痕が顕著に見られる。片桐Ⅲ-⑥～⑦で15世紀後半～16世紀前半。50（SP336）は土師器小皿で、ヘラ切りの底部から短く外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000 Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。51（SP352）は土師質羽釜片で、鍔は短く水平に伸びる。外面は指頭圧痕、内面はハケ調整が顕著である。片桐Ⅲ-①～⑦で4世紀～16世紀前半。52（SP367）は鉄釘の先端部である。断面は四角く、先端は尖る。53（SP370）は鉄釘の頭部である。断面は四角く、頭部は変形している。54（SP380）は土師器小皿で、ヘラ切りの底部から短く外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000 Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。55（SP403）は土師質土鍋口縁部片で、口縁部内側に段を持つ。片桐Ⅲ-⑦～⑨で16世紀。56（SP411）は土師質羽釜口縁部片で、鍔は短く水平に伸びる。時期不明。57（SP462）は土師器椀で、半球状の体部を有し、口縁端部は細く終わる。佐藤2000 Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。58（SP489）は土師器小皿で、ヘラ切りの底部から外上方に短く外反して立ち上がる。佐藤2000 Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。59（SP522）は鉄釘で、頭部は変形している。先端部は欠損している

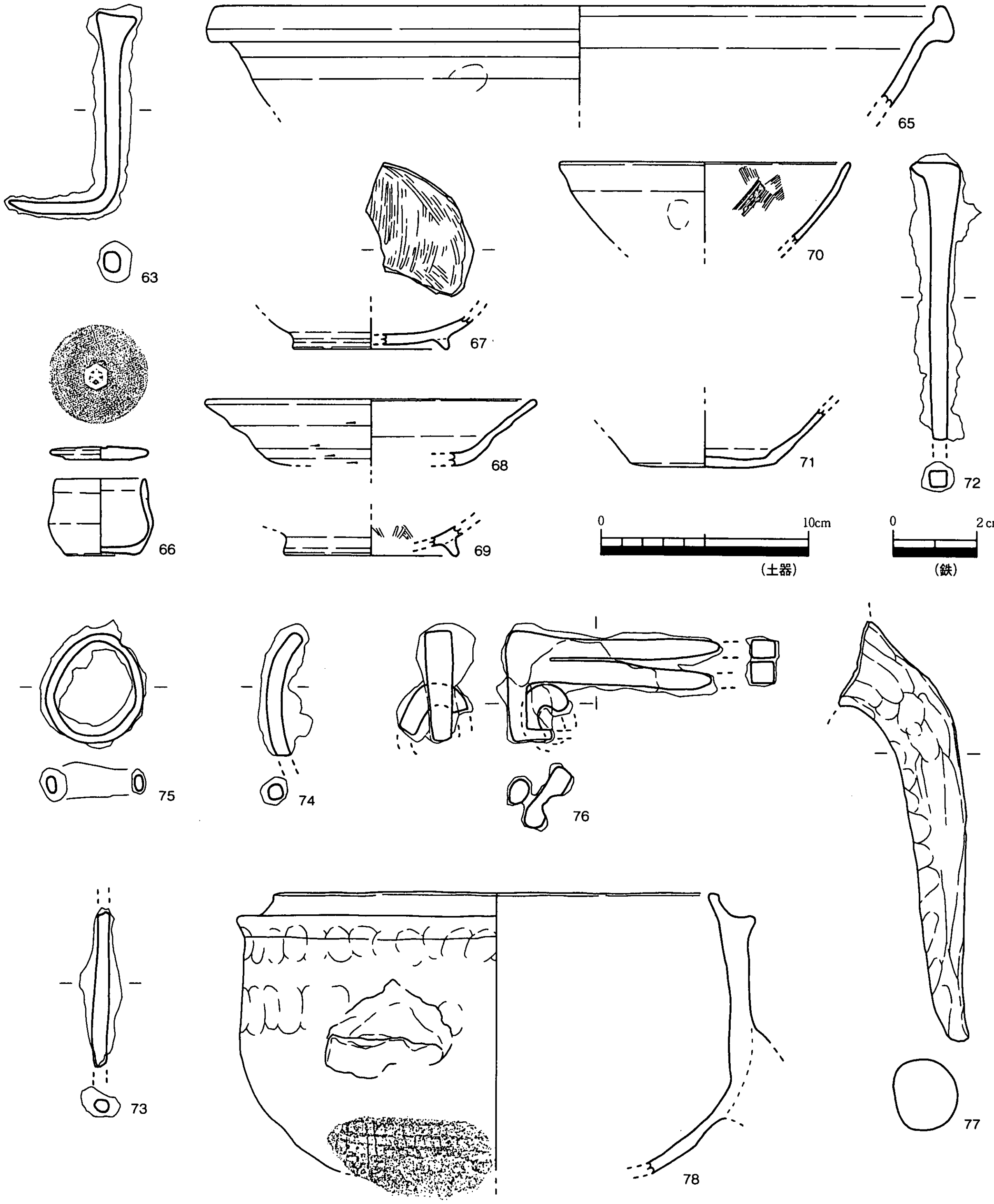

Ⅵ区
SP1079
SP1179
SP1287
SP1384
SP1167
SP1343
SP1065
SP1162
SP1224
SP1267
SP1124
SP1149
SP1232
SP1046
Ⅰ区西
Ⅰ区中
SP489
SP462
SP292
SP308
SP380
SP144
SP145
SP526
SP336
SP670
SP160
SP659
SP152
SP522
SP403
SP184
SP367
SP639
SP210
SP628
SP352
SP370
SP411
Ⅰ区東
Ⅱ区西
Ⅱ区東
Ⅱ区南東
SP1535
SP1538
SP1536
SP1546
Ⅱ区南
Ⅲ区西
Ⅳ区
Ⅲ区東

第32図　柱穴配置図

可能性が高い。60（SP526）は土師器杯で、底部から内湾気味に外上方に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。61（SP628）は不明鉄製品で、X写真ではリングが確認できるが、用途は不明である。62（SP639）は土師質羽釜で、ほぼ直立する体部に水平に伸びる鍔を持つ。時期不明。63（SP659）は鉄釘で、L字状に曲がっている。頭部は変形しており、先端部は尖って終わる。65（SP670）は土師質鉢の口縁部で、直線的な体部に上下に肥厚して端部に面を作る。内外面ともナデ調整を施す。片桐Ⅲ-②～③で14世紀。66（SP1046）は陶器の小壺で、扁平な蓋を持つ。蓋中央には亀甲形の中に大の刻印を持つ。体部は、底部から外上方に直線的に伸び、最大径部で内上方に屈曲したのち垂直に伸びて口縁部に至る。近世資料と考えるが時期は不明である。67（SP1065）は土師器椀である。高台は三角形状にやや外に伸び、内面はヘラミガキが顕著である。12～13世紀頃ヵ。68（SP1079）は土師器杯で、丸みを持った底部から一端内湾し、そののち外反して口縁端部に至る。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。69（SP1124）は黒色土器椀の底部で、高台は三角形状にやや外に伸び、内面にはヘラミガキが見られる。12～13世紀頃ヵ。70（SP1149）は土師器杯で、内湾気味に外上方に立ち上がる口縁部を持つ。71（SP1162）は土師器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は欠損している。72（SP1167）は先端部を欠損している鉄釘で、頭部が変形している。73～76はSP1179から出土した鉄製品である。73は鉄釘の部分と考えられ、頭部・先端とも欠損している。74も鉄釘の部分と考えられるが、湾曲しており、頭部・先端とも欠損しているため、他の製品の可能性がある。75は61同様のリングで、用途は不明である。76はいくつかの資料が錆着しており、まとまって一つの製品を構成するものかどうかさえ不明である。75のリングと同様の資料も断片的ではあるが認められる。77（SP1224）は土師質土鍋もしくは羽釜の脚で、ほぼ完存している。78（SP1232）は土師質羽釜で、脚が欠損している。半球状の体部から短く屈曲して口縁部を形成している。屈曲部からほぼ水平に伸びる鍔が見られる。体部外面上半は指頭圧痕、下半は格子叩きが顕著である。内面はナデ調整が施されている。片桐Ⅲ-④で15世紀前半。79（SP1267）は土師質羽釜である。口縁部は内傾して丸く終わる。鍔は水平に短く伸び、形骸化の傾向が見られる。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。80（SP1287）は土師質土鍋の口縁部で、内面に段を持つ。段部分にはハケ調整が施されている。片桐Ⅲ-⑦～⑨で16世紀。81（SP1343）は土師質擂鉢で、底部から外上方に内湾気味に伸び、口縁端部は肥厚して終わる。内面には8条を1単位とした卸目がある。片桐Ⅲ-⑧～⑨で16世紀。82（SP1384）は土師質羽釜である。口縁部は内傾して丸く終わる。鍔は水平に短く伸び、形骸化の傾向が見られる。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。83（SP1535）は須恵器杯蓋の乳頭状つまみである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。84・85はSP1536から出土している。84は須恵器杯で、高台は垂直に四角く立ち上がる。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。85は須恵器杯蓋で、扁平な形状で端部は丸く終わる。つまみ部分は欠損している。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。86～

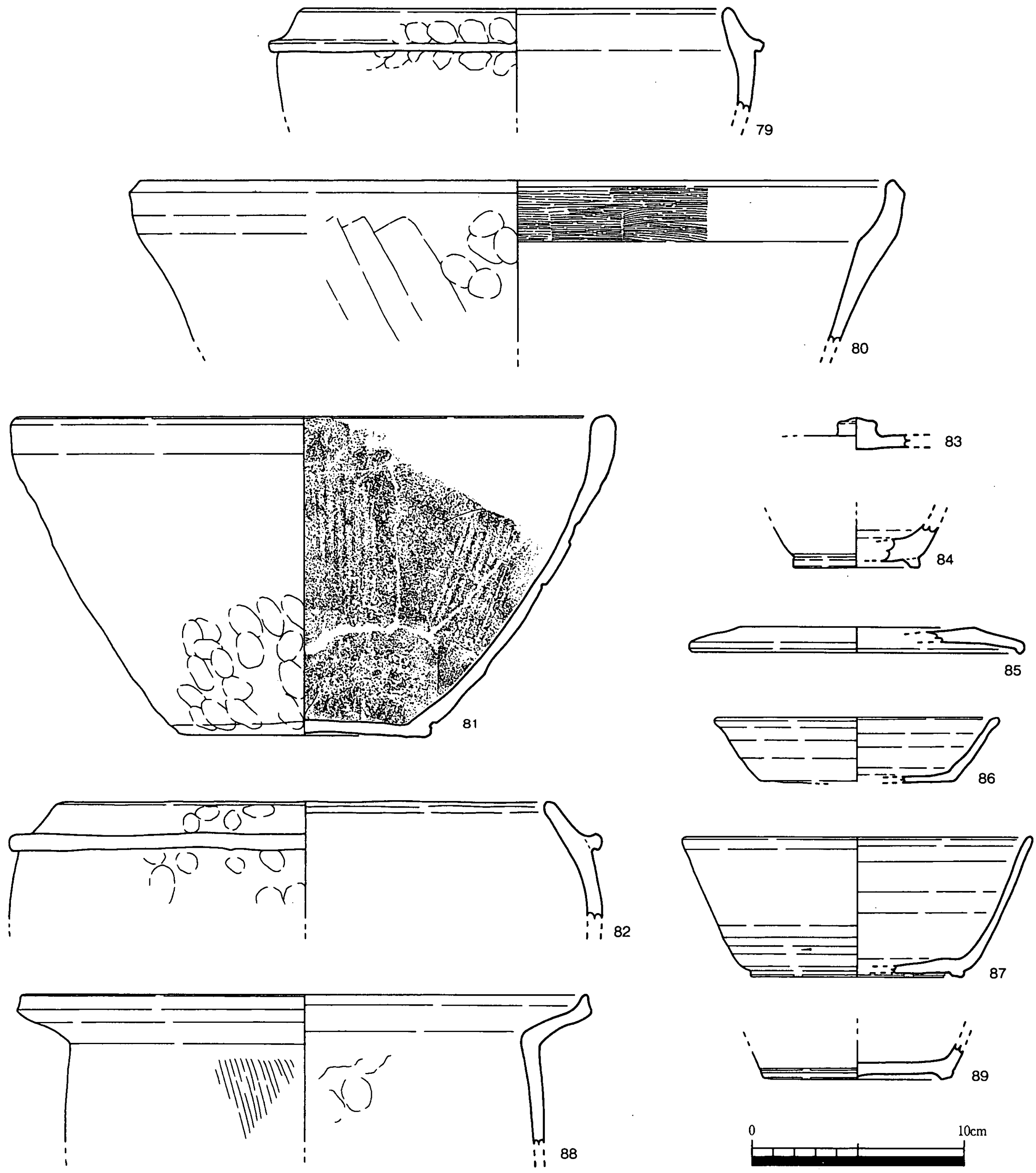


第33図　SP 出土遺物実測図（1）



第34図　SP出土遺物実測図（2）

88はSP1538から出土している。86は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から外上方に直線的に伸び、口縁端部は丸く終わる。佐藤1993Ⅲ−1で9世紀後半。87は須恵器高台付杯で、低く扁平な高台を持つ。体部は外上方にやや内湾気味に立ち上がる。底面はヘラ切りで仕上げられている。佐藤1993Ⅱ−2〜5で8世紀中頃〜9世紀中頃。88は土師質土鍋で、直立する体部から屈曲して外上方に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張する。これ



第35図　SP出土遺物実測図（3）

らの資料から片桐Ⅰ－②～④で10世紀。89（SP1546）は須恵器高台付杯の底部で、外に四角く伸びる高台を持つ。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。

以上のように、Pit出土の資料についても、掘立柱建物跡の年代にほぼ分かれることから、大きくは二時期の集落跡であるといえる。

3　溝状遺構

溝状遺構は、第36図に示したようにすべての調査区で検出されおり、それぞれ時代や性格を異にしているが、ここでは遺物が出土しているものを中心に、特徴的な溝状遺構を単体で取り上げて記述する。

SD02（第37図）

SD02は、Ⅰ区西で検出された小規模な溝で、検出長2.0m、上面幅1.1m、深さ0.12mを測り、断面は浅い皿状である。溝は北端部分のみ検出しており、遺構の性格は不明である。出土遺物は90の土師質羽釜片1点である。鍔は水平に伸びた後、外上方に屈曲するやや古相を呈する資料である。1点のみの出土であるが、この資料が溝の廃絶時期を示すものであれば、片桐Ⅰ－①～②に比定され9世紀後半～10世紀前半に位置付けることができる。

SD05（第37図）

SD05は、Ⅰ区西で検出された小規模な溝で、検出長5.0m、上面幅0.8m、深さ0.06mを測り、断面は浅い皿状である。溝は北端、南端が調査区外に伸びている。また、SK01とSD08に切られており、これらの遺構に先行することは間違いない。なお、北端部はⅥ区では検出できていない。出土遺物はなく、性格は不明である。

SD10（第38図）

SD10は、Ⅰ区中央で検出された溝で、検出長12.5m、上面幅0.5m、深さ0.18mを測り、断面は逆台形である。埋土は1層で、淡灰褐色細砂からなる。溝は北端が調査区外に伸びている。南端は自然消滅する。出土遺物はなく、性格は不明である。

SD12（第38図）

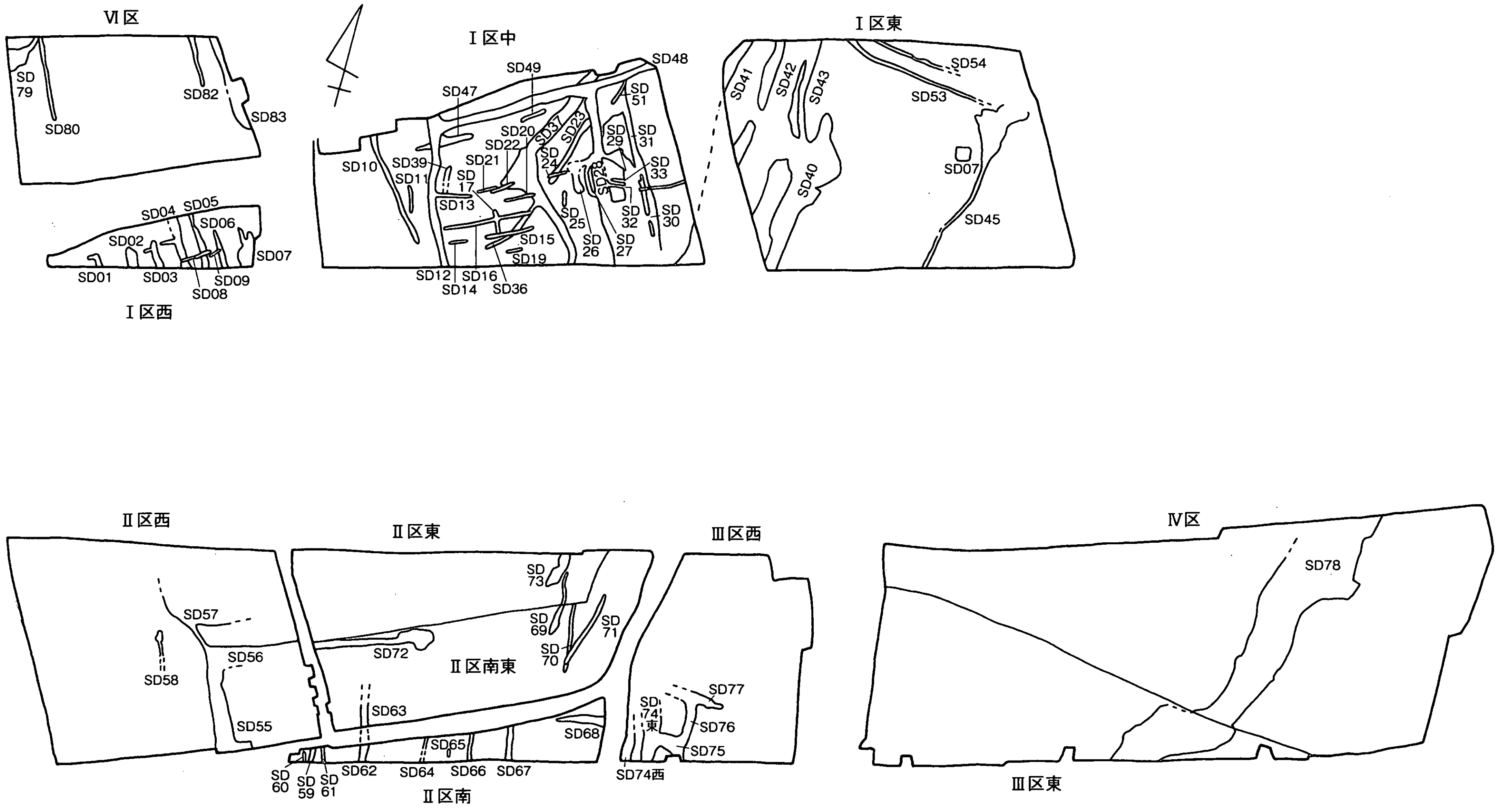
SD12は、Ⅰ区中央で検出された溝で、検出長15.5m、上面幅0.9m、深さ0.1mを測り、断面は浅い皿状である。埋土は1層で、暗灰色シルトからなる。溝は北端部分で東に直角に分岐（SD48）しているほか、ほぼ中央部で同様の分岐（SD13）が見られる。掘立柱建物跡との関係から、検出されている掘立柱建物群を囲む溝と考えられる。出土遺物はない。

SD28～31（第39～42図）

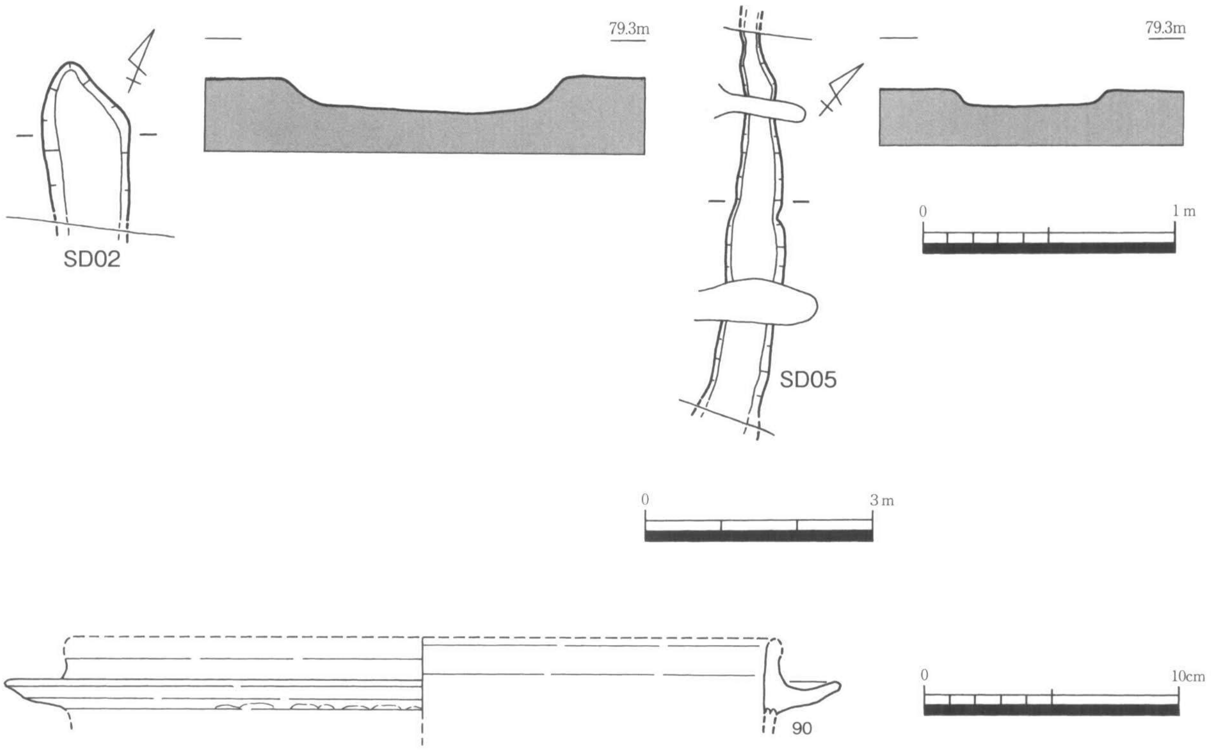
SD28～31は、Ⅰ区中央で検出された溝群で、SD48から直線的に東に連続して伸びる部分と、SD48との合流部から南に伸びる部分からなるSD28が基本となり、ほぼ中央部で大きくは3本（SD28・29・30）に分岐する。また、これと並行して東側にSD31がある。SD31は北側でオーバーフローしており、断面1のとおりSD28に先行する状況を示すが、南側ではSD28～31と合流し、切りあい関係は見当たらない。規模は、SD28が検出長25.2m、上面幅1.0m、深さ0.1m、SD29が検出長13.6m、上面幅1.3m、深さ0.14m、SD30が検出長10.6m、上面幅0.8m、深さ0.2m、SD31が検出長19.9m、上面幅0.7m、深さ0.06mを測り、断面は浅い皿状である。断面2～4のとおり、SD30が徐々に埋没していく様相を示すのに対して、他の溝状遺構は埋土が1層からなるものが多い。

出土遺物は、第39図91～95の鉄製品及び第41・42図の土器類96～112がある。

91・92は鉄片で、全体形状は不明である。93は短冊状の鉄板を釣り針のように曲げた

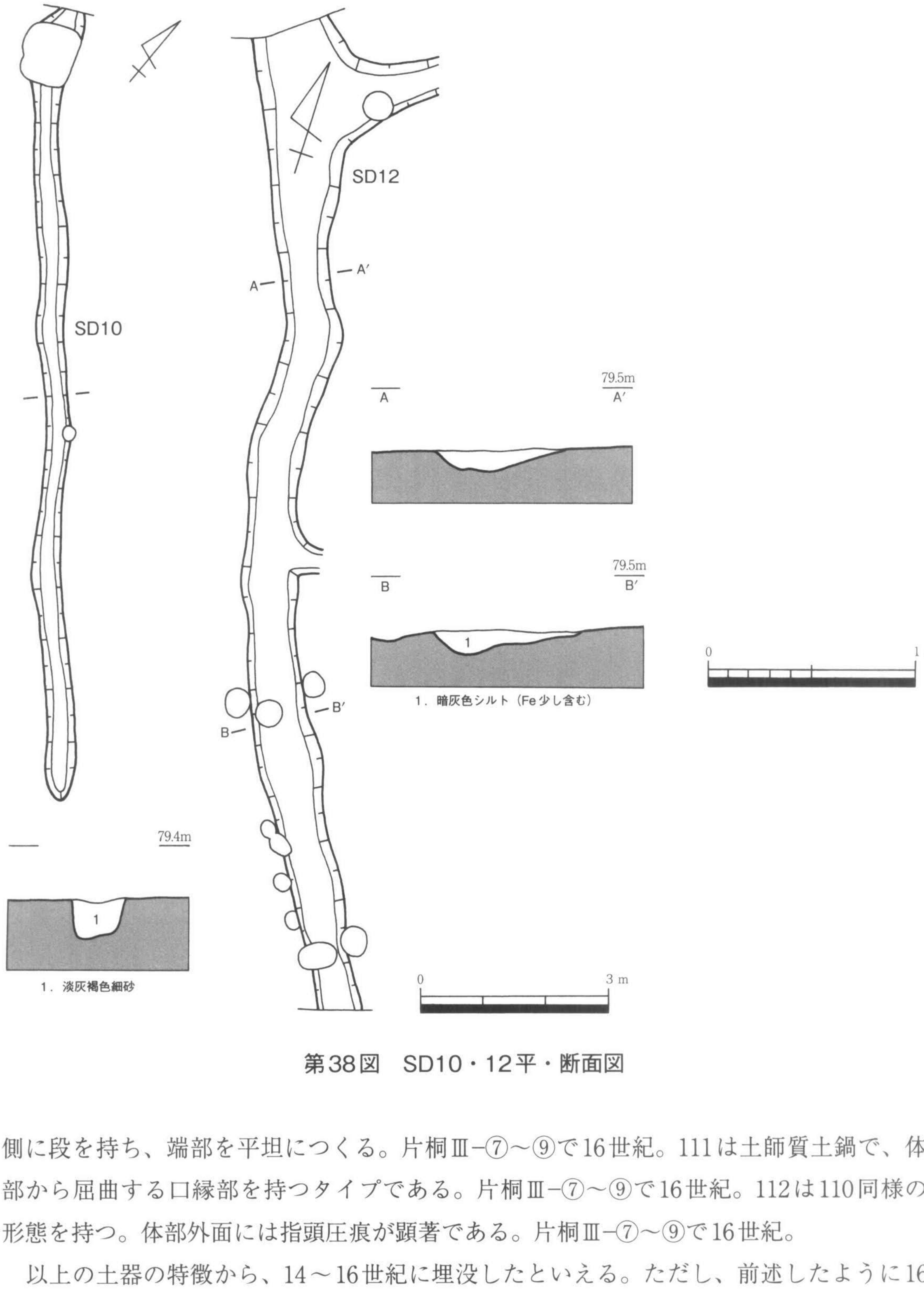


第36図　溝状遺構配置図



第37図　SD02・05平・断面図、出土遺物実測図

もので用途は不明である。94は鉄釘で頭部が変形しているほか、先端部も直角に折れ曲がっている。使用によるものヵ。95も鉄釘と考えられるが、頭部・先端部とも欠損しているため断定できない。96は土師器杯で、回転ナデ調整が施される。佐藤2000 Ⅱ−4〜5で13世紀第3四半期〜14世紀前半。97も土師器杯でナデ調整である。佐藤2000 Ⅱ−4〜5で13世紀第3四半期〜14世紀前半。98は96・97に比べて深く、器壁も厚い。佐藤2000 Ⅱ−4〜5で13世紀第3四半期〜14世紀前半。99は土師器杯で、底部に回転ヘラ切りと板目圧痕が見られる。100は土師質擂鉢で6条を1単位とする卸目が見られる。時期不明。101は土師器小皿でヘラ切りの底部を持ち、浅い。佐藤2000 Ⅱ−3〜5で13世紀第2四半期〜14世紀前半。102は土師質こね鉢で口縁部を上下に拡張して面を作る。片桐Ⅲ−②〜③で14世紀。103〜109は土師質羽釜である。103はほぼ直立する体部に水平で短い鍔がつく。口縁部は少し内傾し、端部は丸く終わる。底面は格子状叩きが認められる。片桐Ⅲ−①〜⑦で14世紀〜16世紀前半。104は103と比べて浅く、脚がつく。調整などは同様である。片桐Ⅲ−③で14世紀後半。105は口縁部が前2者と比べて長い。片桐Ⅲ−①〜⑦で14世紀〜16世紀前半。106は、口縁部と鍔部分を一体として製作しているため、鍔部分の器壁が厚い。片桐Ⅲ−①〜⑦で14世紀〜16世紀前半。107も同様の器形である。片桐Ⅲ−①〜⑦で14世紀〜16世紀前半。108は口縁部が内傾して長い。鍔は水平に伸び、端部は細く終わる。片桐Ⅲ−①〜⑦で14世紀〜16世紀前半。109は口縁部が短く内傾する。鍔も短く形骸化している。片桐Ⅲ−①〜⑦で14世紀〜16世紀前半。110は土師質土鍋の口縁部で、内



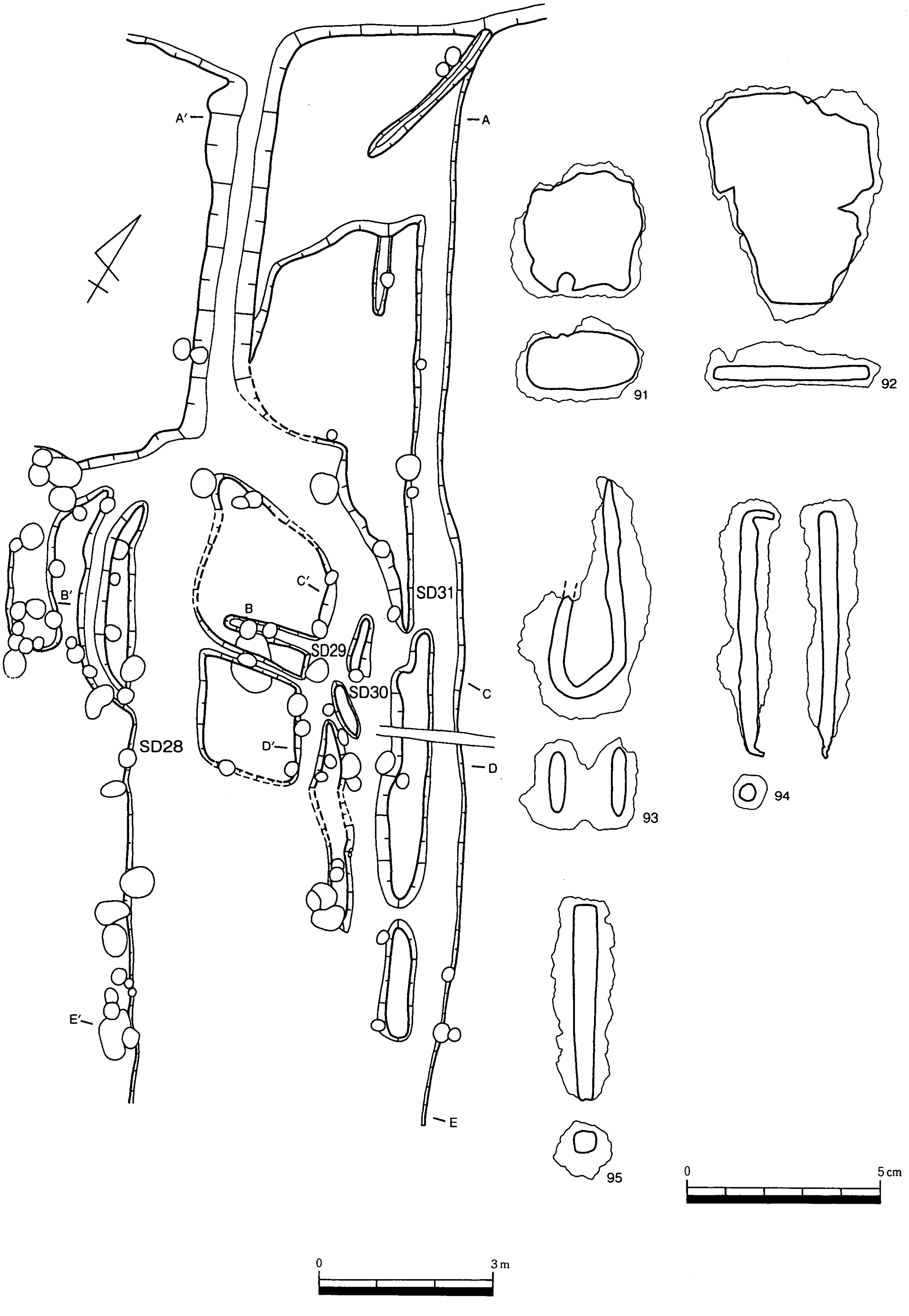
第38図　SD10・12平・断面図

側に段を持ち、端部を平坦につくる。片桐Ⅲ-⑦～⑨で16世紀。111は土師質土鍋で、体部から屈曲する口縁部を持つタイプである。片桐Ⅲ-⑦～⑨で16世紀。112は110同様の形態を持つ。体部外面には指頭圧痕が顕著である。片桐Ⅲ-⑦～⑨で16世紀。

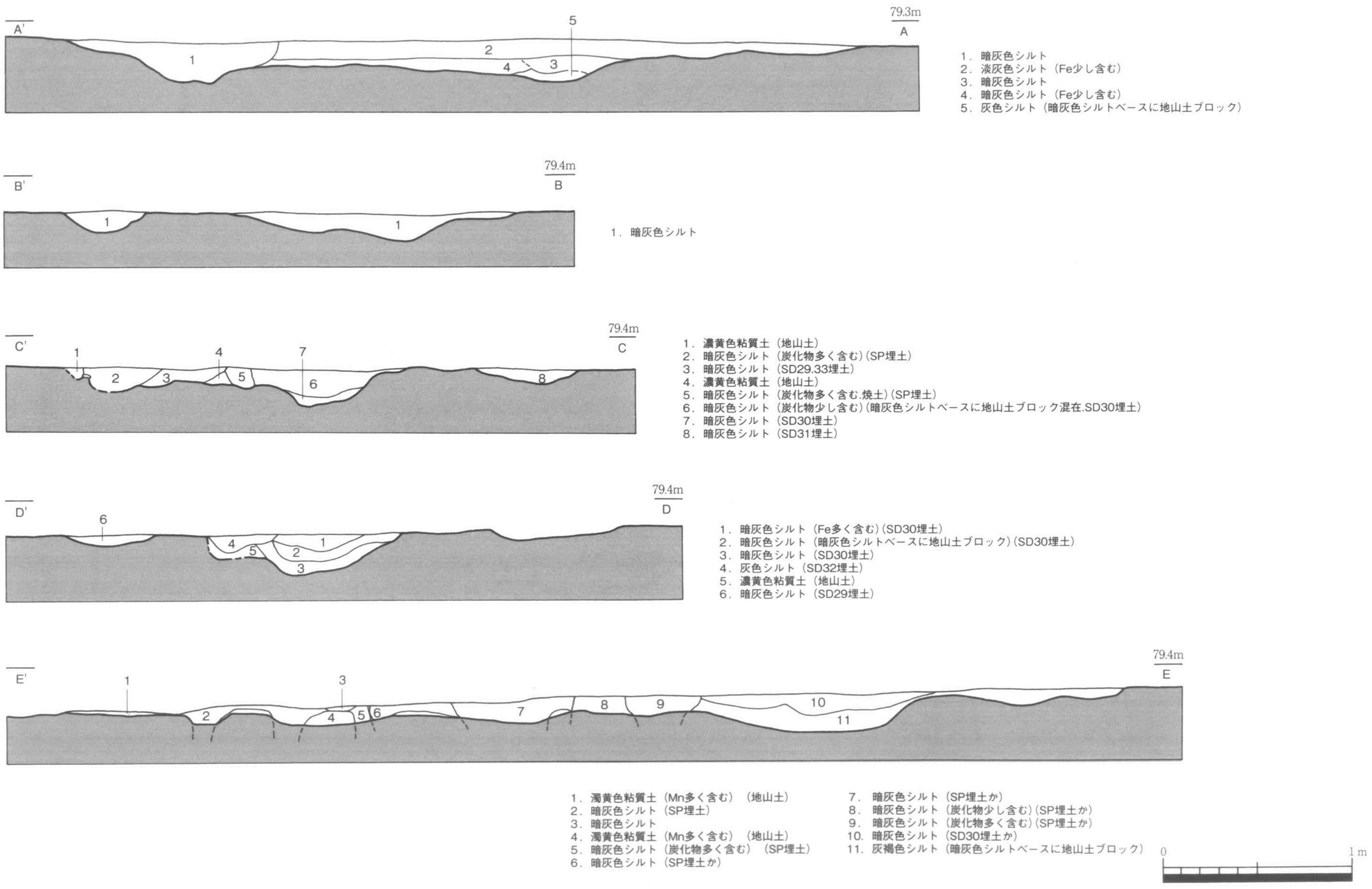
以上の土器の特徴から、14～16世紀に埋没したといえる。ただし、前述したように16世紀に位置付けられる資料が土師質土鍋に限られる点は留意する必要がある。

SD37（第43～48図）

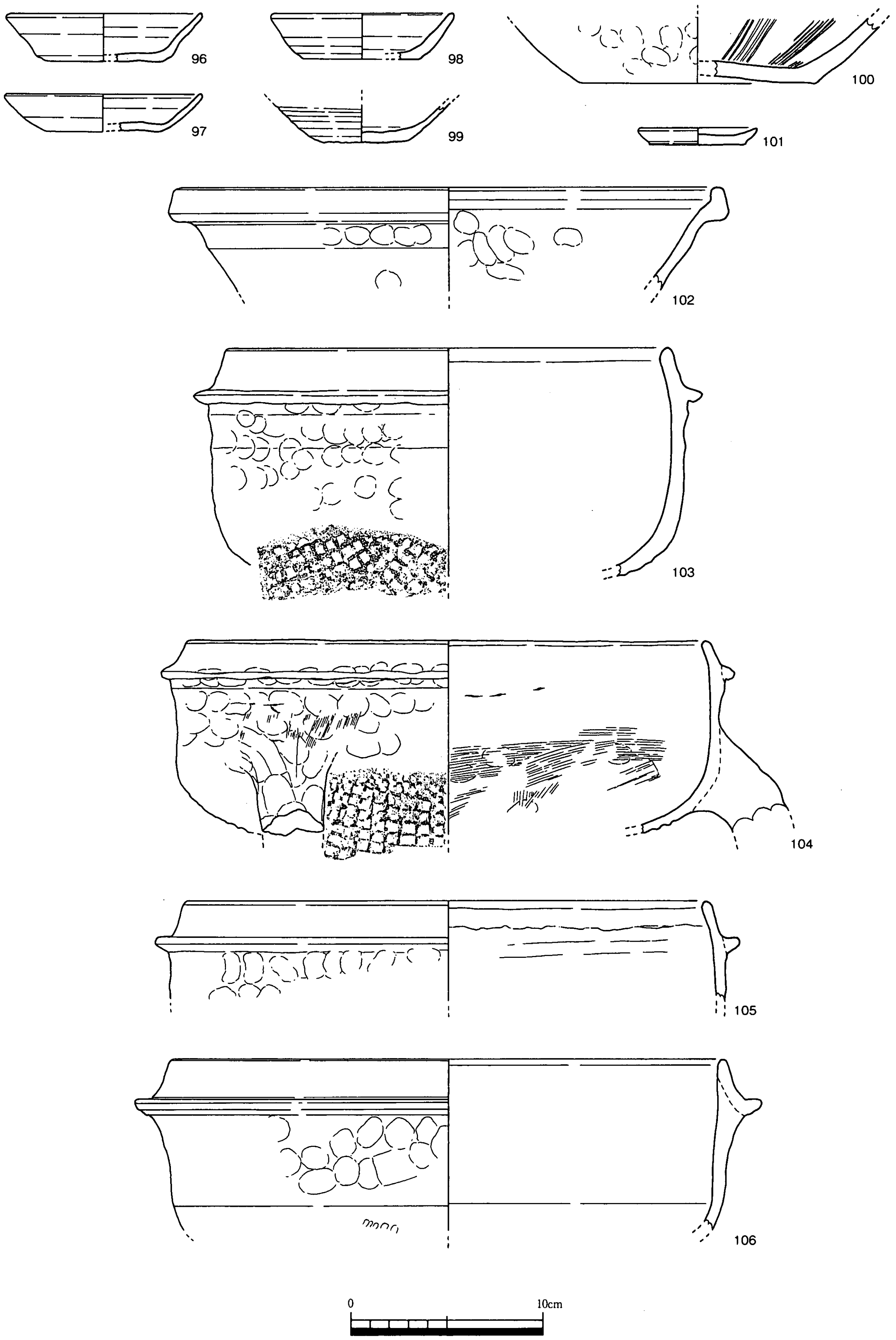
SD37は検出長28.7m、上面幅0.8～5.1m、深さ0.46～0.7m、断面はＵ字もしくは逆台形を呈する小規模な溝で、「く」の字状に屈曲して北に流れる。本溝が半ば以上埋没した段階で古式土師器50個体分以上が投棄されている。断面Ｂ－Ｂ'では、土層1～3が上層、こ



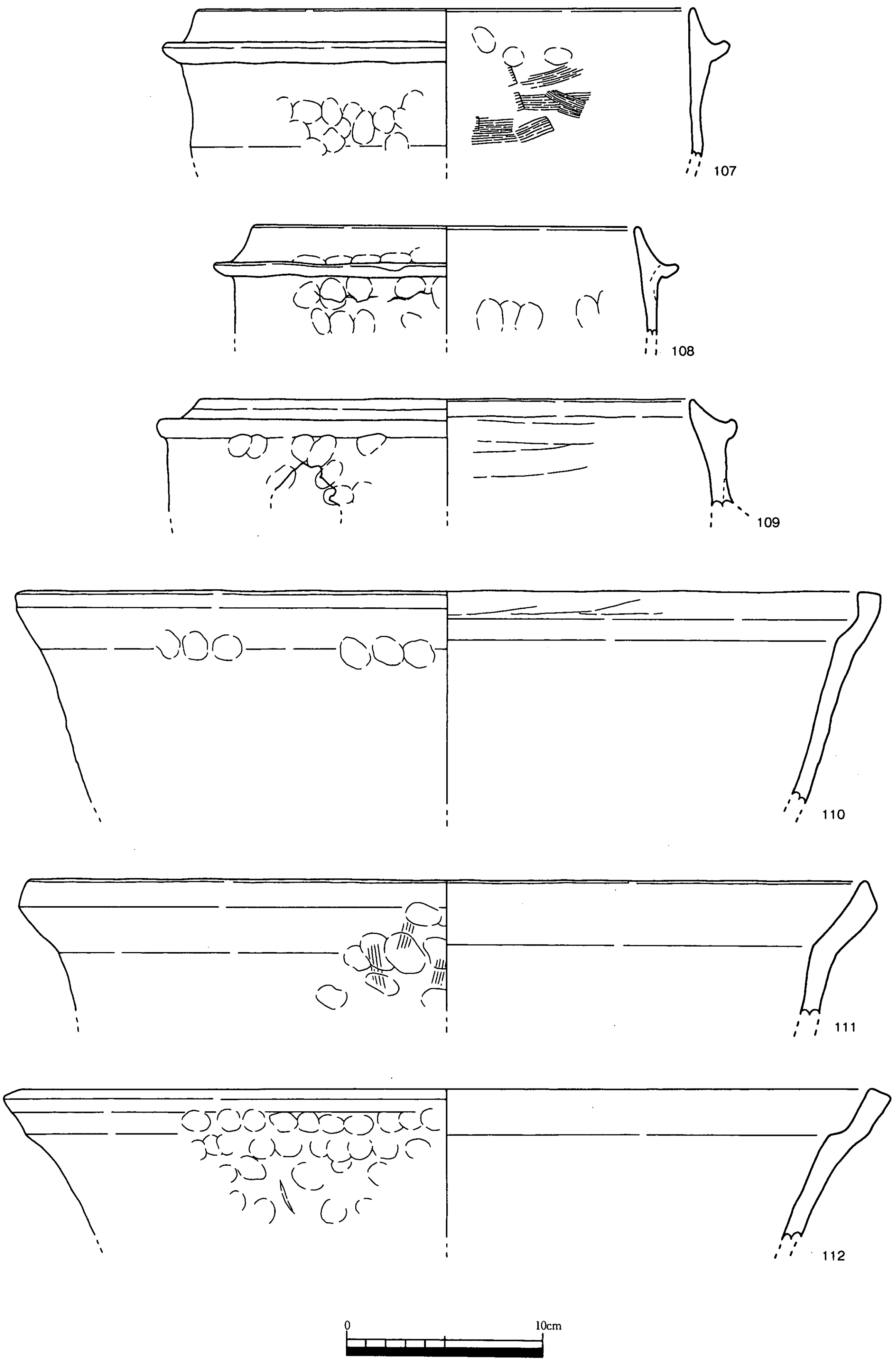
第39図　SD28～31平面図、出土遺物実測図（1）



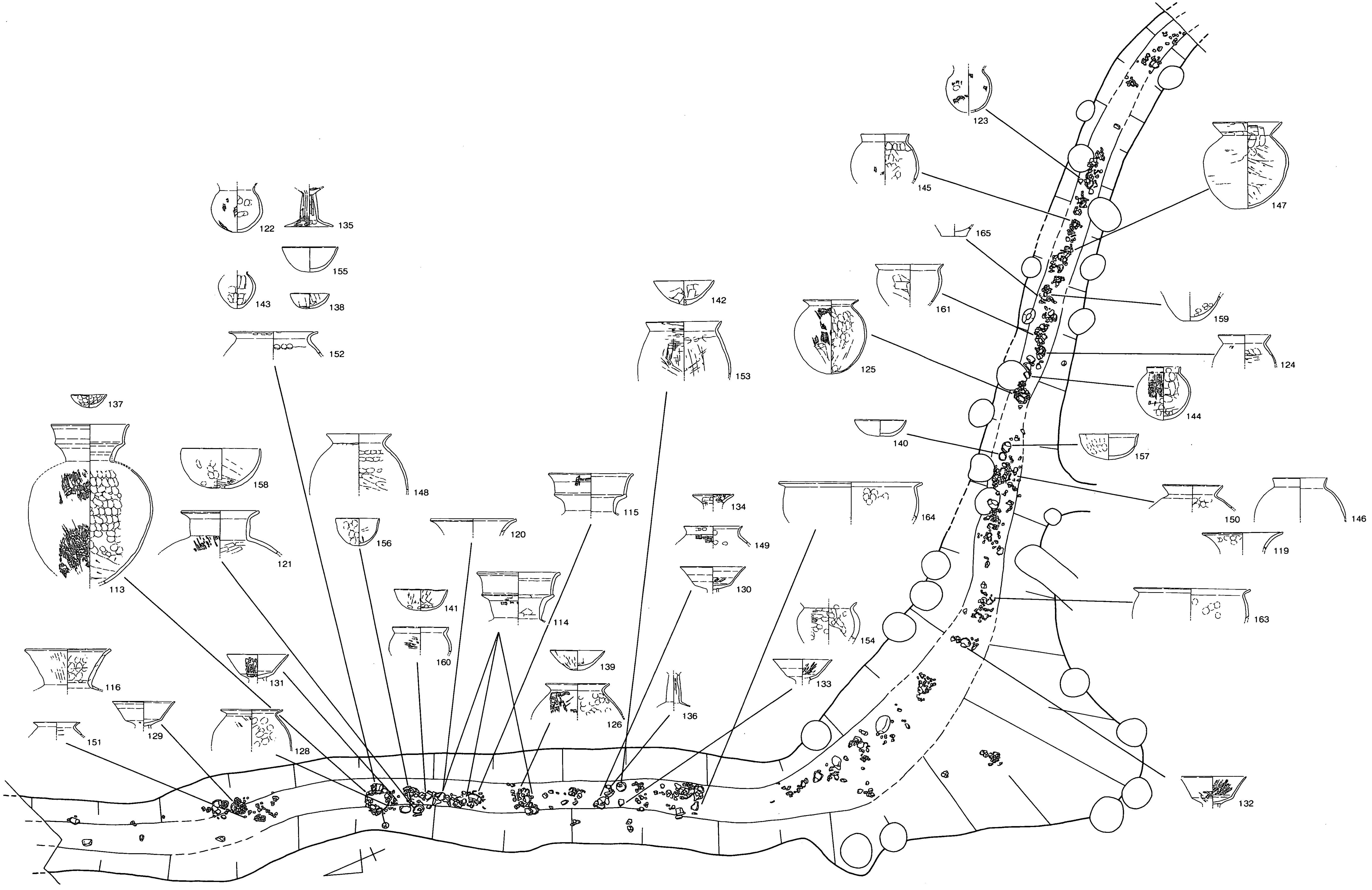
第40図　SD28～31断面図



第41図　SD28～31出土遺物実測図（2）



第42図　SD28～31出土遺物実測図（3）

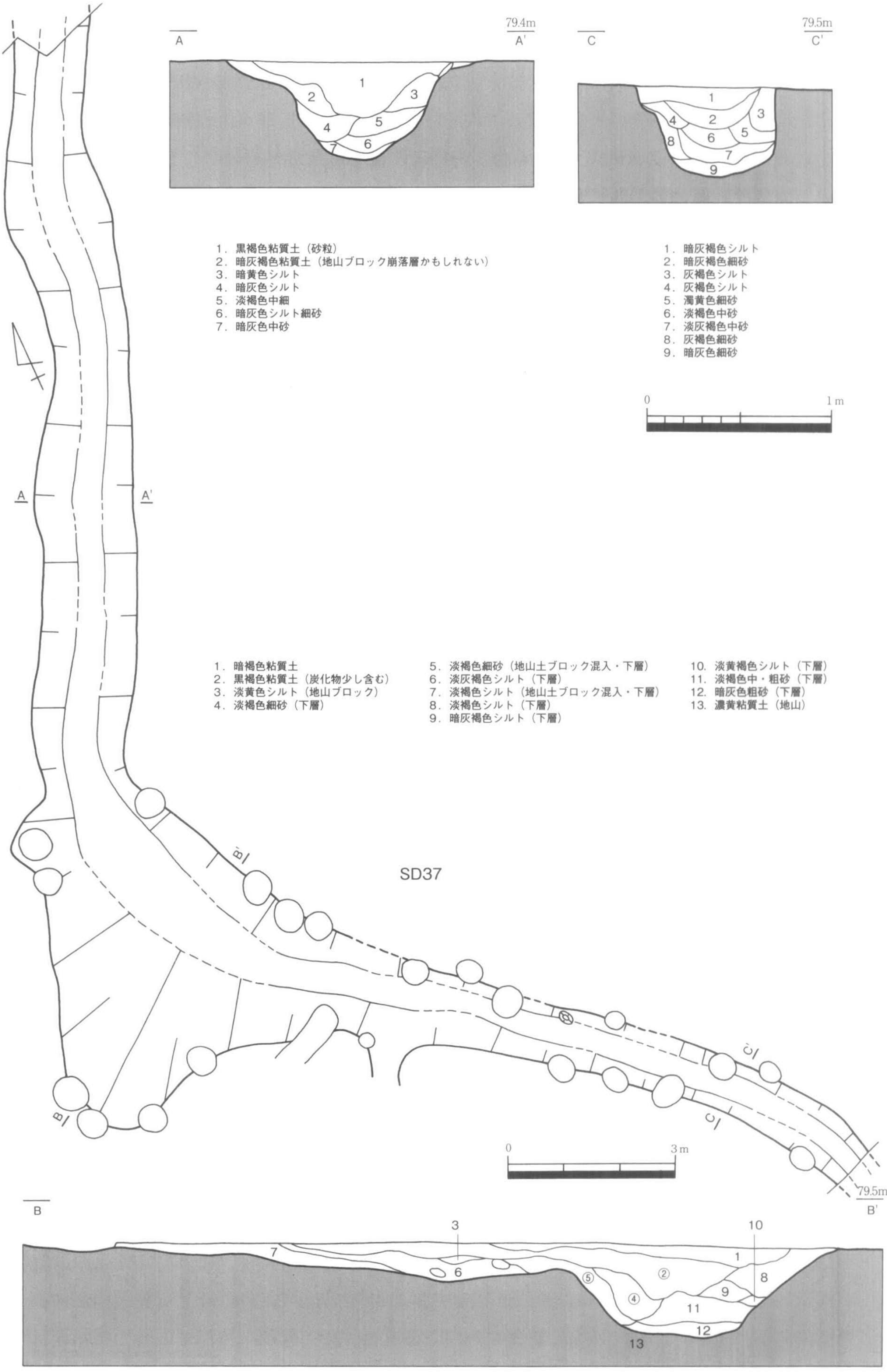


第43図　SD37遺物出土状況

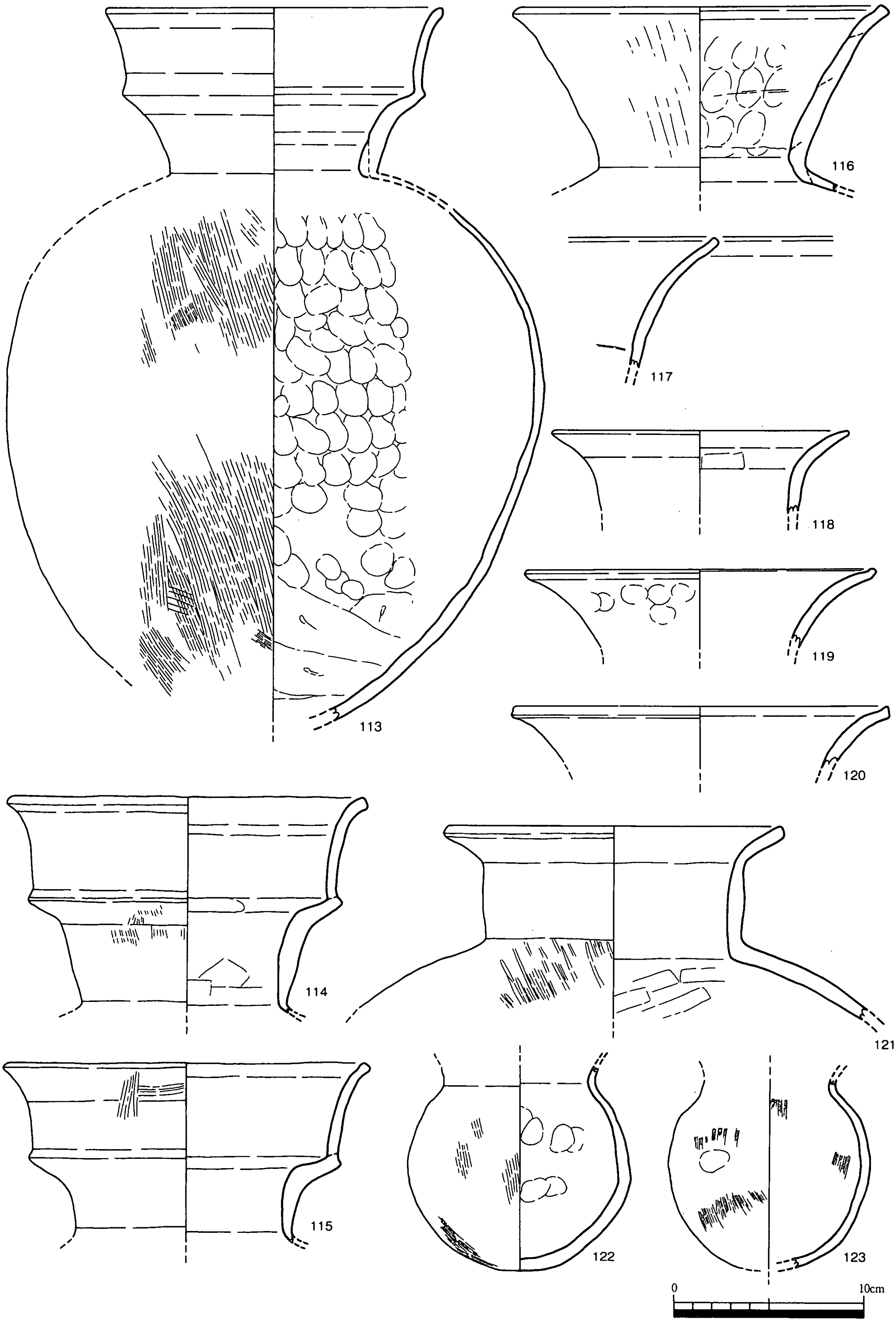
れ以外が下層に相当する。下層は、この溝状遺構が徐々に埋没する過程を表現しているが、上層については、他の断面からも土器を包含する埋土が短期間で形成されていることが分かる。このことは、多量の土器が投棄されていたことから隣接地点に当該期の集落域が存在すること、土器の投棄がSD37の廃絶と密接に関係すると考えられることから、SD37の廃絶が集落の廃絶と同時期になされた可能性が高い。また、投棄された土器は、以下のとおり複数形式の土器を含まないと考えられるため、ごく短期間機能した集落と考えられる。

113～123は壺である。113は広口壺である。口縁部と体部は接合しないが、図上で復元を試みた。口縁部は体部から外反気味に外上方に伸びた後、垂直方向に角度を変えて再び外反気味に立ち上がる。二重口縁壺の形骸化したものととらえることができる。体部は肩部に最大径があり、やや尖り気味の丸底になると考えられる。体部外面は全面ハケ調整であるが、底部付近にハケ調整の下に叩き目が観察される。内面は底部のみヘラ削りが認められ、他は指頭圧痕が顕著である。114も広口壺の口縁部で、113に比べてやや長く、口縁端部に面を持つ。115は形態的には113同様であるが、口縁端部は114の形態である。116はラッパ状に開く広口壺で、体部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。外面は板ナデ後ナデ調整が施され、内面は指頭圧痕が顕著である。117は116同様の器形である。118は体部からやや垂直に立ち上がった後外反する口縁部を持つ広口壺である。119・120は116同様の広口壺であるが、口縁部の高さがやや低くなるタイプと考えられる。121は118同様、体部から垂直に立ち上がった後、外反ではなく短く屈曲する口縁部を持つ。体部外面にはヘラミガキの痕跡が認められる。また、内面は板ナデである。122は小型丸底壺で、球形の体部に外反する口縁部を持つが、欠損しており長さ・形状は不明である。体部外面はハケ調整、内面は指頭圧痕が見られる。123も122とほぼ同様である。

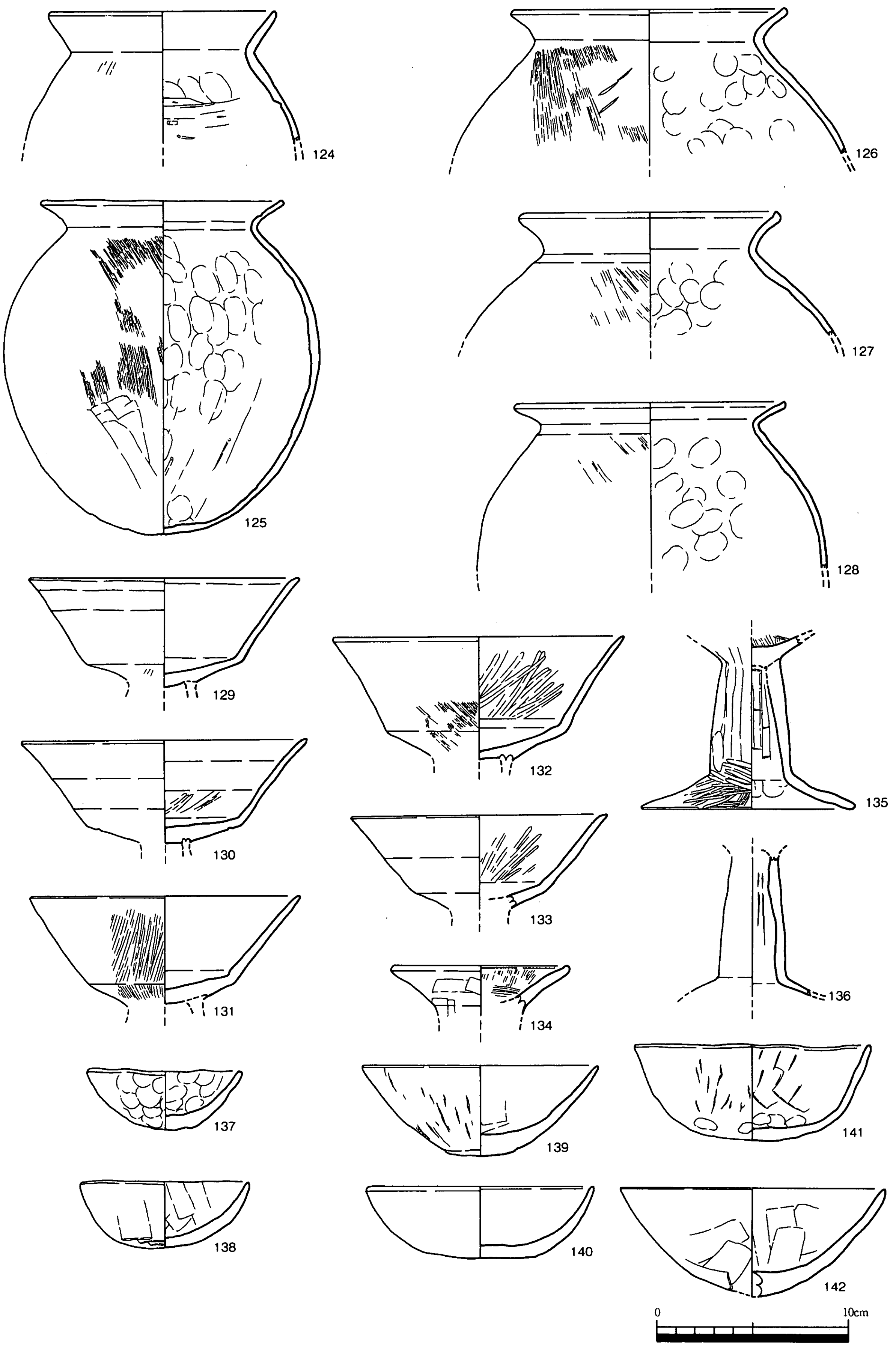
124～128、147～154は甕である。124は体部上半のみの出土で、体部の形状は不明であるが、体部から外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。内面は体部中位以下にヘラ削りを行っていると考えられる。125は球形の体部に短く外上方に立ち上がる口縁部を持つ。体部外面は中位以上がハケ調整、下位は板ナデである。内面は下位にヘラ削り、中位以上に指頭圧痕が顕著である。口縁端部は上方に少し摘み上げている。126は125とほぼ同様であるが、全体に器壁が厚い。127は、口縁部が内湾気味に立ち上がり端部はやや肥厚している。128は125に近い形態であるが、調整が125ほど顕著でない。147は肩部に最大径があり、「く」の字に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。調整は外面がナデ、内面は頸部より少し下までヘラ削りである。148は最大径が体部中位にあると考えられる資料で、内面調整が中位までヘラ削り、上位は指ナデである。149は頸部の屈曲が明瞭ではなく、折り曲げ口縁と考えられる。体部外面は叩き目が明瞭に残っている。150は「く」の字に直線的に立ち上がる口縁部を持ち、端部は上方に少し拡張されている。151は口縁部が外反して立ち上がる。152は149同様、折り曲げ口縁と考えられる。153は最大径が体部中位にあり、すこし「く」の字に屈曲する口縁部を持つ。口縁部・体部とも外面に叩き目が残り、折り曲げ口縁であることが分かる。内面は頸部より少し下までヘラ削りが見られ



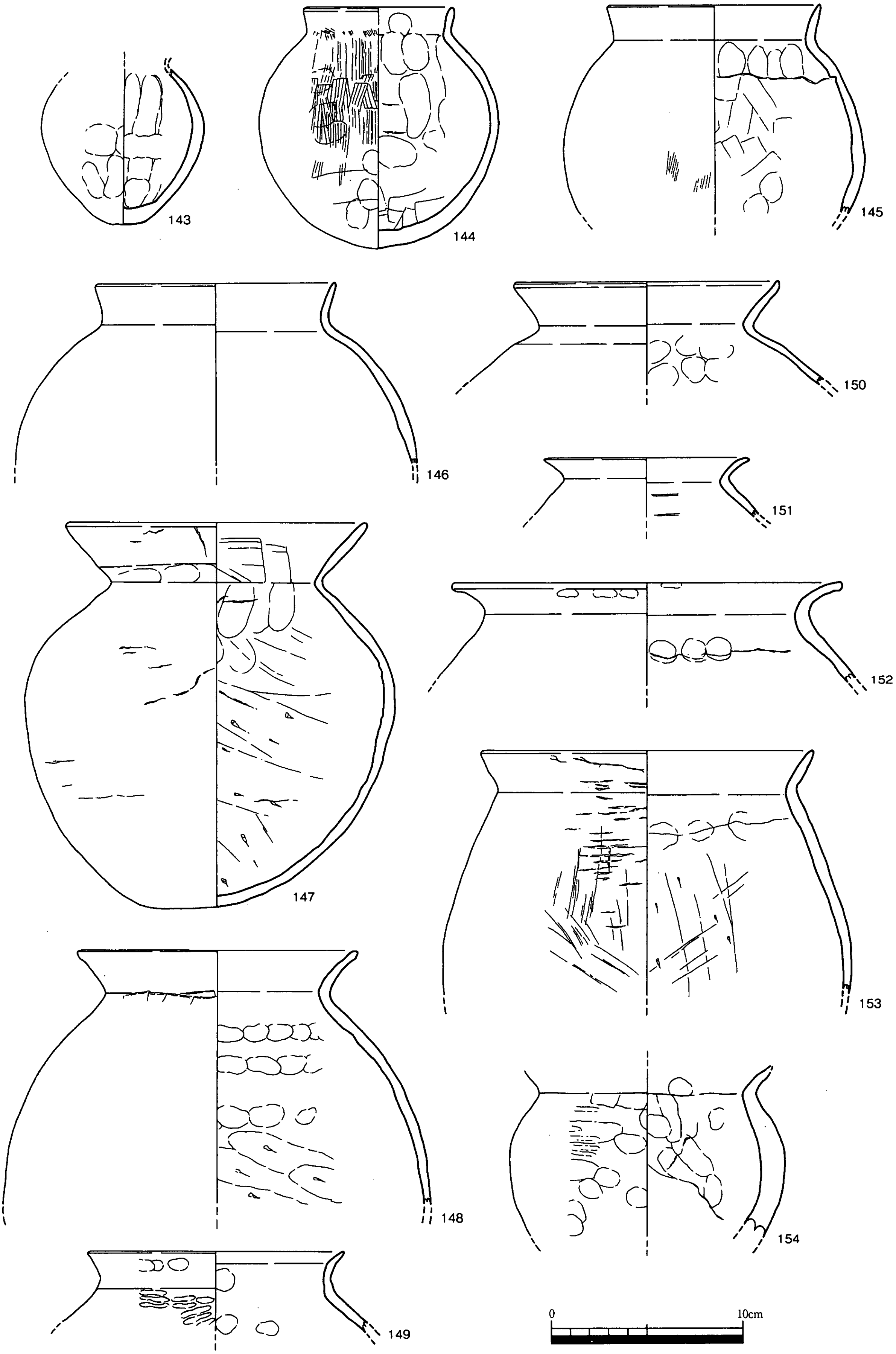
第44図　SD37平・断面図



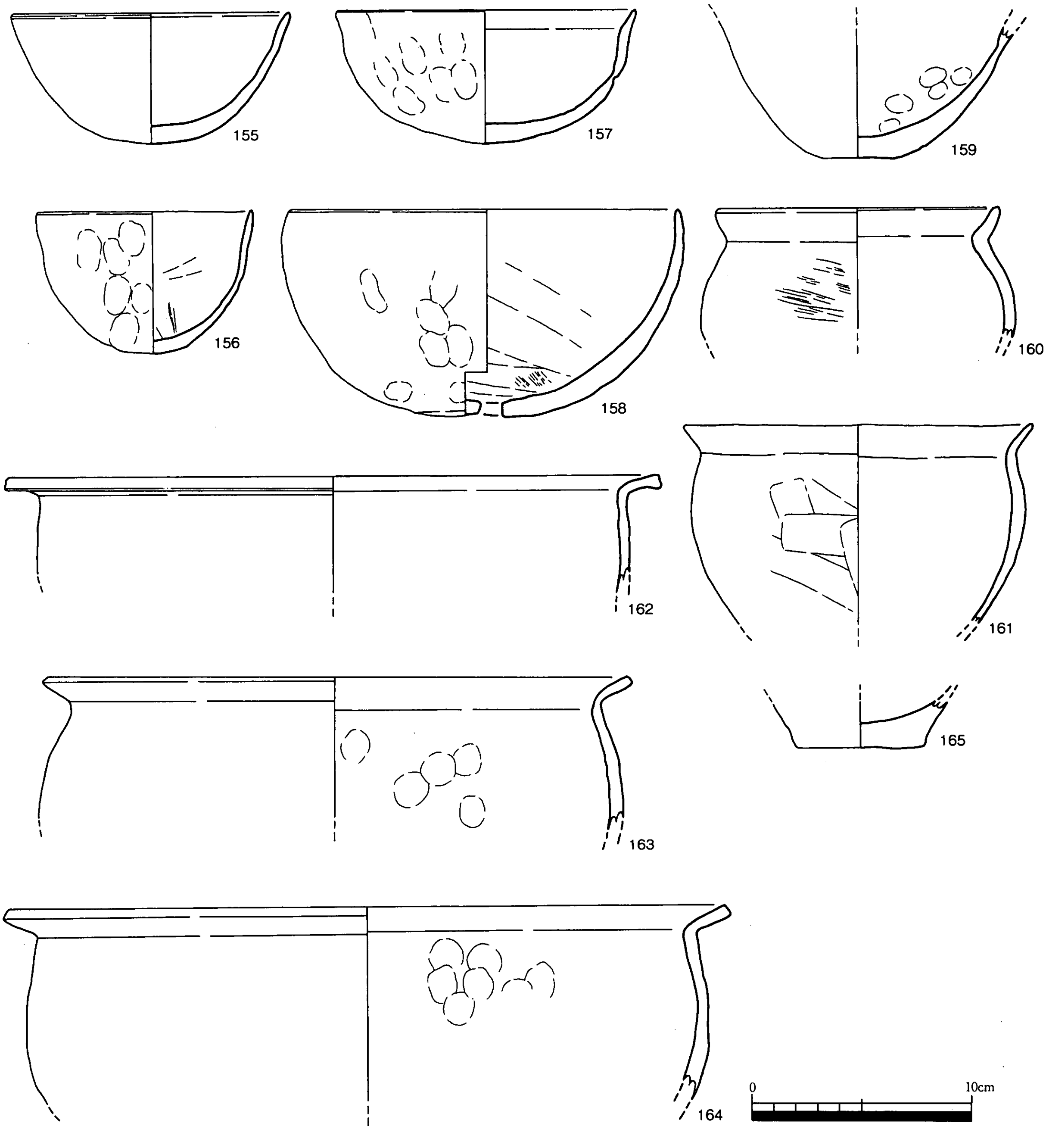
第45図　SD37出土遺物実測図（1）



第46図　SD37出土遺物実測図（2）



第47図　SD37出土遺物実測図（3）



第48図　SD37出土遺物実測図（4）

る。154は球形の体部に「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ。体部外面には叩き目が見られる。体部器壁は厚く、鉢に分類すべき資料かもしれない。

129～133、135、136は高杯である。129～133は高杯杯部で、杯部と脚部の境から短く外上方に伸びた後、屈曲して長く立ち上がる口縁部を持つ。口縁部はやや外反気味に立ち上がる129～130・132と直線的に立ち上がる131とがある。133は屈曲がやや不明瞭となるタイプで、このグループの中では後出する要素と考えられる。調整は、ややバラツキがあるものの杯部外面をハケ調整、内面をヘラミガキするものが多い。135・136は脚部である。やや開き気味の筒部から低く「ハ」字に開き端部に至る。135では筒部外面を指ナ

デ、内面をヘラ削り、脚端部外面をヘラミガキ、内面をナデ調整している。136は筒部が細くなっており、後出する要素と考えている。

134は小型器台の受部で、脚部は欠損している。受部は低く逆「ハ」の字になっている。

137～142、155～164は鉢である。137は小形の鉢で、所謂「手捏ね土器」である。内外面とも指頭圧痕が顕著である。138は丸底の鉢で内外面とも板ナデで仕上げている。139はやや丸みを持った平底の鉢で、底部から内湾気味に立ち上がる。140は丸底の鉢で、底面をヘラ削りで仕上げている。141は半球状のやや深めの鉢である。142はやや尖底気味の鉢で、内外面に板ナデが施されている。

143～146は小形壺である。143は卵形の体部を持ち、底部は少し平たい丸底である。調整は内外面とも指ナデである。144～146は球形の体部に短く直立気味に立ち上がる口縁部を持つ。144は外面ハケ調整、内面指ナデである。145・146は口縁部が144に比べてやや長く外反する。155は半球状の鉢で、内外面ともナデ調整を施す。底部は丸底である。156は半球状の鉢で、底部は不明瞭ながら平底である。157は口縁端部が細く終わり、これに伴い内側に明瞭な稜線を持つ。158は鉄鉢形の鉢で、底面に穿孔が見られる。159は不明瞭な平底を持つもので、壺の底部の可能性がある。160は最大径が体部中位より上にあり、「く」の字に立ち上がる短い口縁部を持つ。161は半球状の体部から「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ。162は逆「L」字の口縁部を持つもので、端部は平坦につくる。内外面とも摩滅しており、弥生時代前期に遡る資料の可能性がある。163は半球状の体部から「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ。甕に分類すべき資料の可能性がある。164も163同様の資料であるが、口縁部が低く広がること、明らかに口縁部が最大径を持つことから、鉢と考えている。

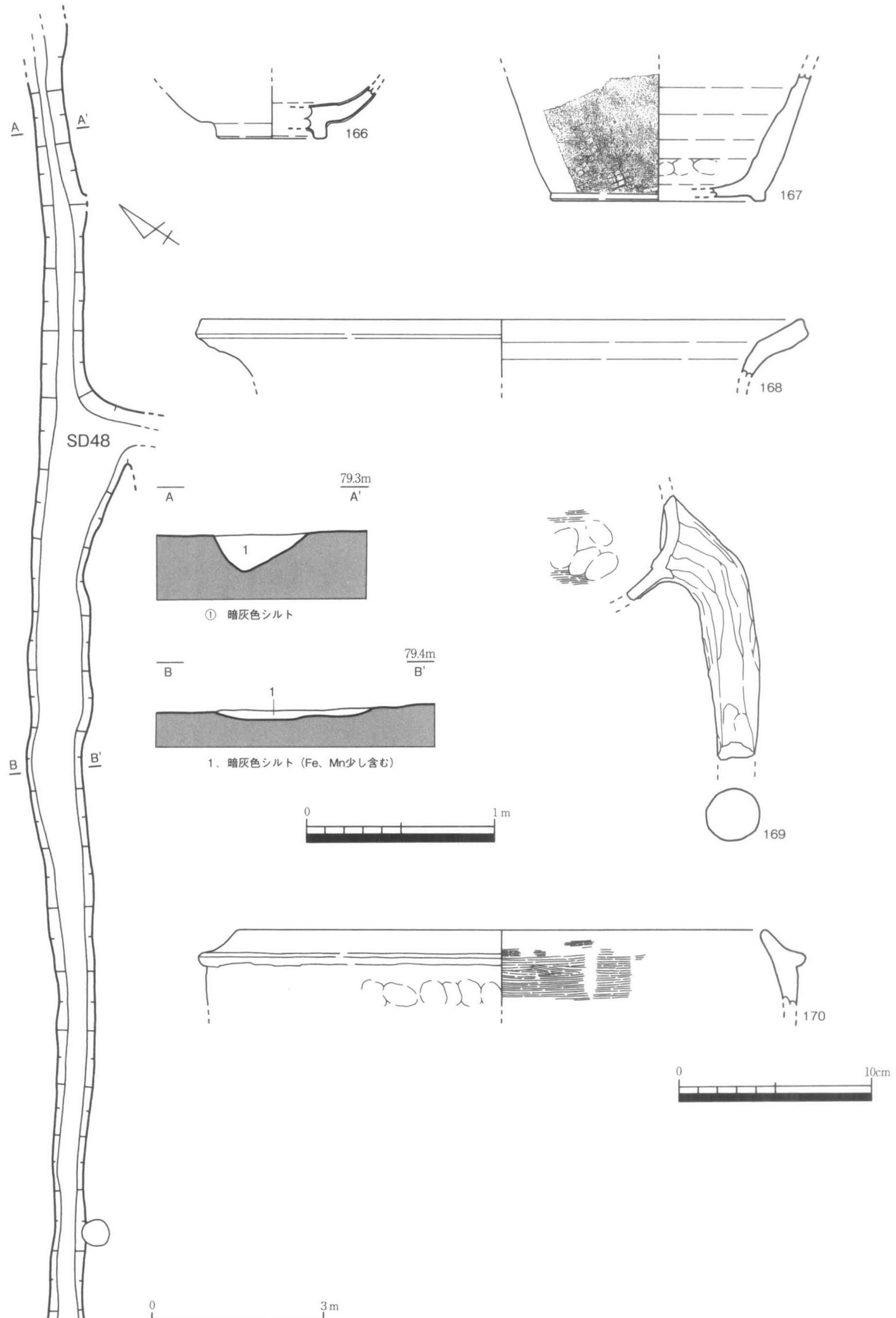
165は壺もしくは甕の底部である。明瞭な平底を持つことや他の資料には見られないことから、同時期ではなく、先行する可能性もある。

SD37出土土器の年代的な位置付けについては第4章第2節でふれる。

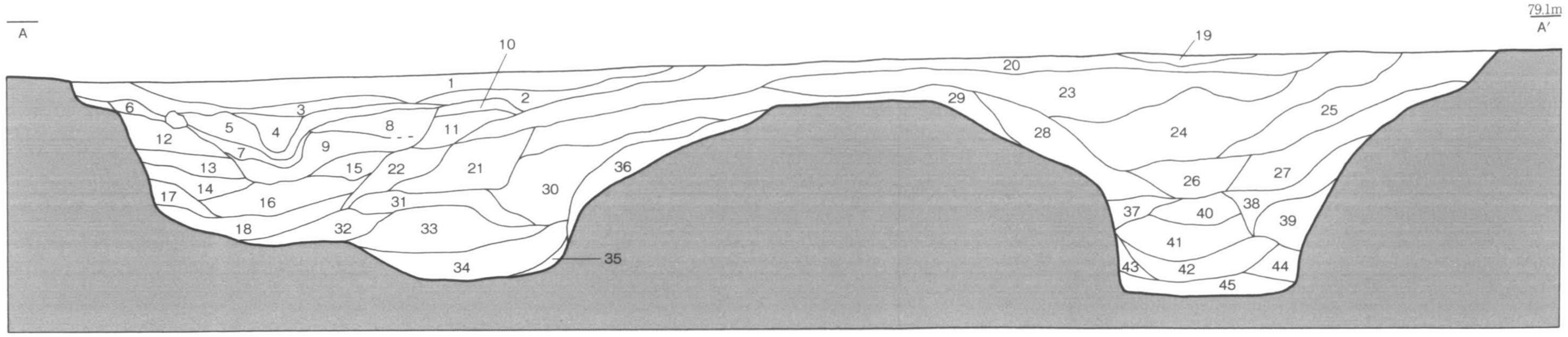
SD48（第49図）

SD48は、Ⅰ区中央の北辺で検出された東西に伸びる溝で、検出長22.3m、上面幅1.0m、深さ0.2mを測る。先にもふれたように、SD12・28に連続する溝で、SD37を切っている。集落の北辺を画する性格の溝と考えられるが、北側が調査区外になるため、断定はできない。断面はA断面では上面の広いU字状、B断面では浅い皿状で検出され、それぞれ埋土は1層であり、短期間での廃絶が考えられる。

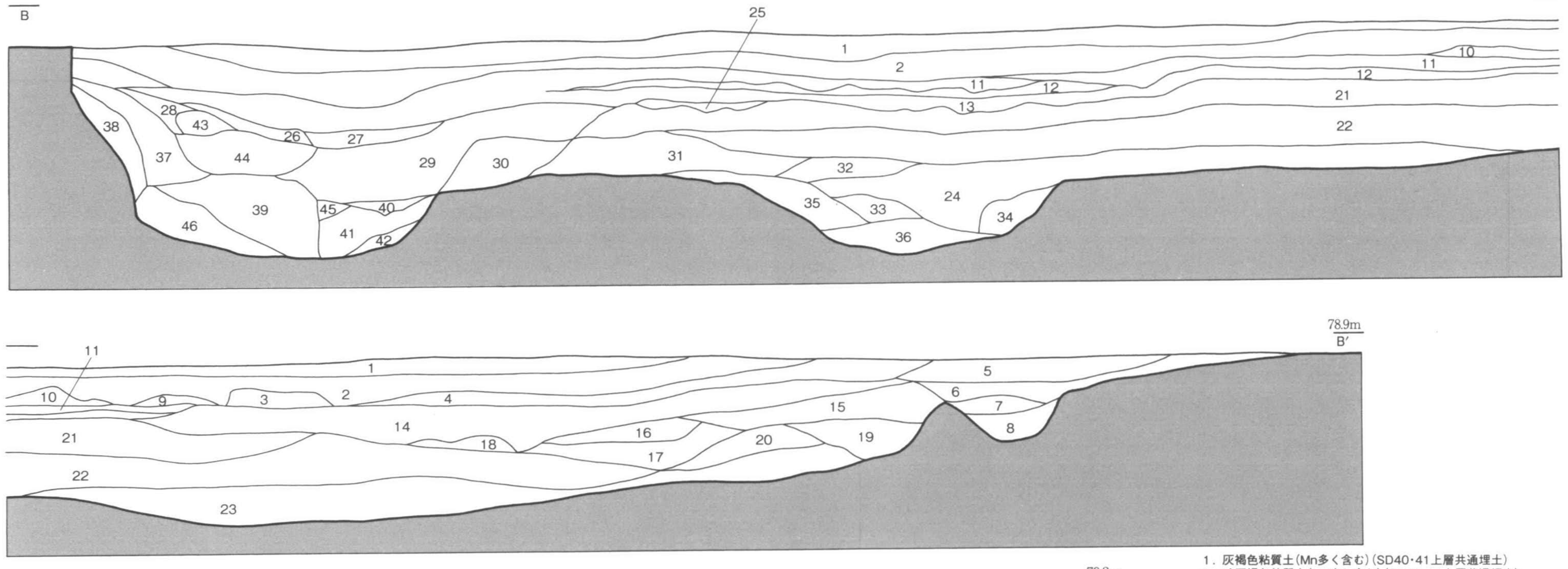
出土遺物は166～170の5点である。166は青磁椀である。高台部も含め施釉されている。13～14世紀ヵ。167は須恵器壺底部で、低い高台を持つ。体部下位には格子叩き目が見られる。9世紀代。168は土師質甕の口縁部で、外上方に伸び、肥厚する。時期不明。169は土師質土鍋・羽釜の脚で、先端部を欠損している。170は土師質羽釜の口縁部で、内湾する口縁部に形骸化した鍔を持つ。内面はハケ目が顕著である。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。



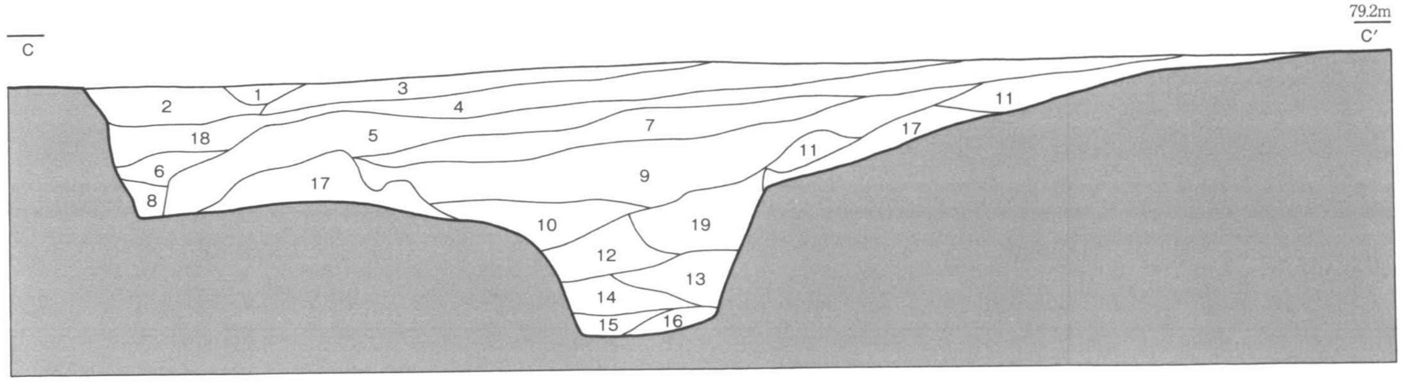
第49図　SD48平面図、出土遺物実測図



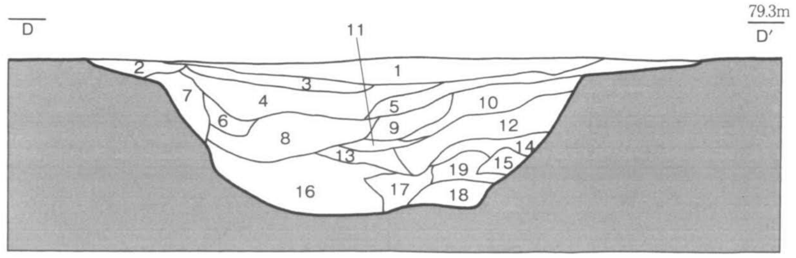
1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色シルト
3. 暗褐色シルト
4. 黒褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土
6. 黒褐色粘質土
7. 黒褐色シルト
8. 灰褐色シルト
9. 淡褐色粗砂
10. 黒褐色シルト
11. 暗褐色シルト
12. 淡褐色粗砂
13. 淡灰色粗砂
14. 淡灰色細砂
15. 淡灰褐色細砂
16. 淡灰色粗砂
17. 淡灰色細砂
18. 淡灰色中砂
19. 暗灰色シルト
20. 暗褐色粘質土
21. 灰褐色シルト
22. 灰褐色シルト
23. 暗灰褐色粘質土
24. 暗褐色シルト(粘性あり)(砂粒)
25. 暗灰褐色シルト(粘性あり)(砂粒)
26. 灰褐色シルト
27. 褐色シルト
28. 褐色シルト
29. 淡褐色粘質土



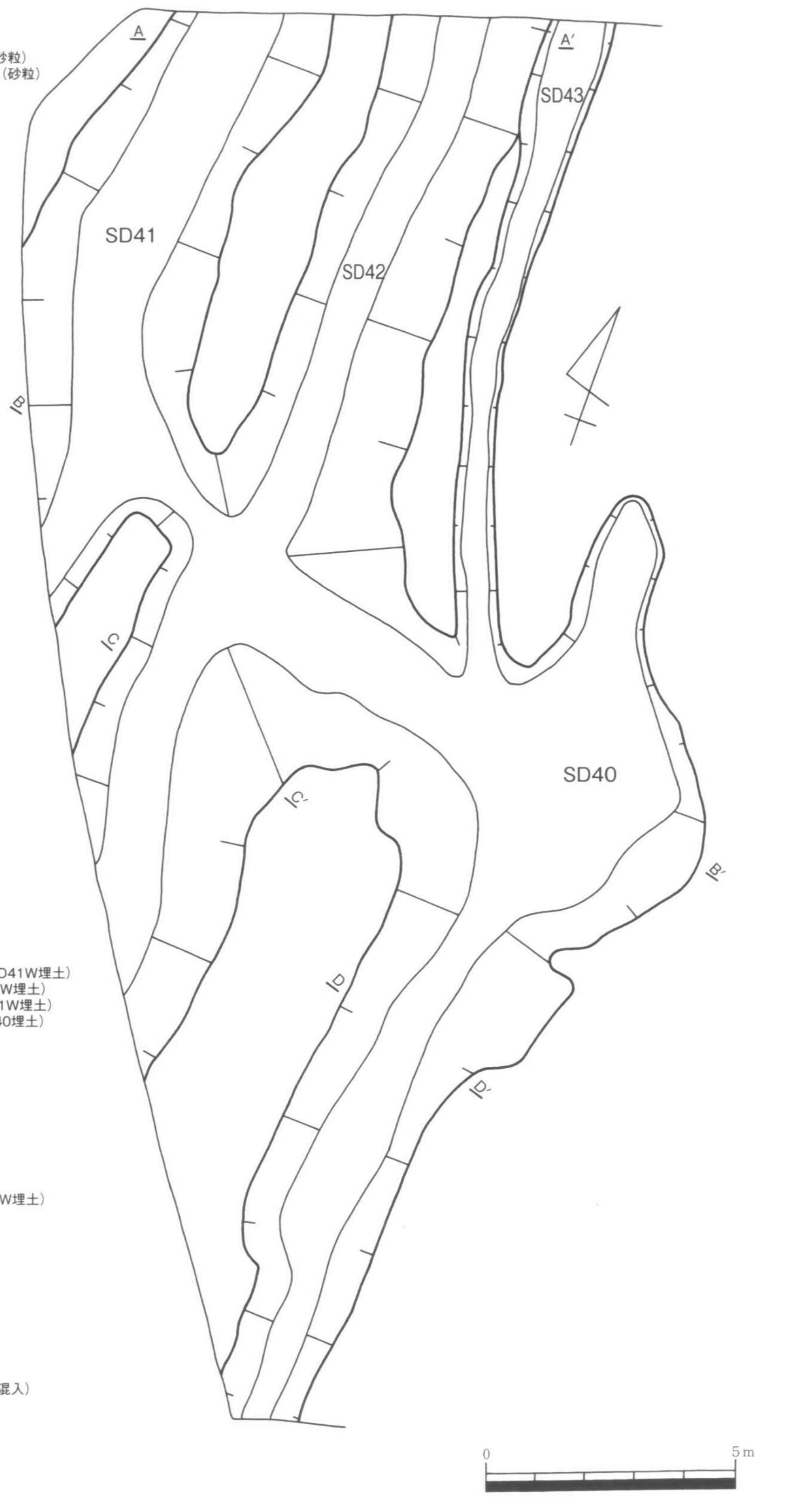
1. 灰褐色粘質土(Mn多く含む)(SD40・41上層共通埋土)
2. 暗灰褐色粘質土(Mn少し含む)(SD40・41上層共通埋土)
3. 黄褐色中砂(Fe多く含む)(SD40・41上層共通埋土)
4. 淡黒粘土(SD40・41上層共通埋土)
5. 濁黄シルト(SD40・41上層共通埋土)
6. 暗灰色シルト(SD40・41上層共通埋土)
7. 淡褐色中砂(Fe多く含む)(SD40・41上層共通埋土)
8. 暗灰色中砂(SD40・41上層共通埋土)
9. 暗灰褐色粘質土(SD40・41上層共通埋土)(10と同じ)
10. 暗灰褐色粘質土(SD40・41上層共通埋土)(9と同じ)
11. 淡黒粘土(SD40・41上層共通埋土)
12. 暗灰色細砂(SD40・41上層共通埋土)
13. 淡黒粘質土(SD40・41上層共通埋土、11と類似するが砂質やや強い)
14. 暗灰褐色シルト(SD40・41上層共通埋土)
15. 淡褐色中砂(SD40・41上層共通埋土)
16. 淡褐色中砂(SD40・41上層共通埋土)
17. 暗灰色シルト(SD40・41上層共通埋土)
18. 灰色中細砂(SD40・41上層共通埋土)
19. 淡灰色細砂(SD40・41上層共通埋土)
20. 灰色中砂(Fe多く含む)(SD40・41上層共通埋土)
21. 灰褐色シルト(SD40埋土)
22. 淡褐色中・粗砂(Fe多く含む)(SD40埋土)
23. 淡灰褐色中・粗砂(SD40埋土)
24. 淡灰褐色中粗砂(SD40埋土)
25. 淡灰色細砂(SD40埋土)
26. 暗灰色シルト(SD41W埋土)
27. 暗灰色粗砂(SD41W埋土)
28. 暗灰色シルト(炭化物多く含む)(SD41W埋土)
29. 暗灰色シルト(Fe少し含む)(SD41W埋土)
30. 濁黄色シルト(SD41W埋土)(SD41W埋土)
31. 灰色シルト(炭化物少し含む)(SD40埋土)
32. 灰色粗砂(SD40埋土)
33. 淡灰褐色中砂(SD40埋土)
34. 暗灰色シルト(SD40埋土)
35. 褐色中砂(SD40埋土)
36. 淡褐色粗砂(SD40埋土)
37. 暗灰色シルト(SD41W埋土)
38. 濃黄色粘質土(地山)
39. 灰褐色粗砂(SD41W埋土)
40. 淡褐色シルト(SD41W埋土)
41. 灰色細砂(SD41W埋土)
42. 褐色粗砂(Fe・Mn多く含む)(SD41W埋土)
43. 淡褐色粗砂(Fe多く含む)
44. 淡灰褐色粗砂(Fe少し含む)
45. 淡灰色中砂(SD41W埋土)
46. 暗灰色粗砂(SD41W埋土)



1. 淡灰色シルト(SD41上層埋土)
2. 暗褐灰色粘質土(SD41上層埋土)
3. 暗灰褐色粘質土(SD40～41上層共通埋土)
4. 黒褐色粘質土(SD40～41上層共通埋土)
5. 暗褐色粘質土
6. 淡灰褐色粗砂(SD41W埋土)
7. 暗褐色粘質土(固化粗砂礫混入)
8. 灰色中砂(SD41W埋土)
9. 淡褐色シルト(7より固化粗砂礫多い)
10. 暗黄色中砂(礫)
11. 濁黄色粘質土
12. 暗灰色シルト(粗砂礫少量混入)
13. 暗灰色シルト(炭化物少し含む)
14. 淡灰色中粗砂
15. 灰白色中粗砂(暗灰色シルト ラミナ状混入)
16. 淡褐色中砂
17. 明黄色粘質土(地山層)
18. 淡黒色粘土(SD41上層埋土)
19. 灰黄色細中砂(地山類似で崩落土か)



1. 暗灰褐色粘質土(Fe・Mn少し含む)
2. 淡黄色シルト(地山土崩落)
3. 暗灰褐色粘質土(地山土ブロック混入)
4. 暗灰褐色シルト
5. 暗灰褐色細砂
6. 淡黄シルト(地山ブロックと④層ブロック混在)
7. 濁黄色シルト(地山土崩落)
8. 淡灰褐色中粗砂
9. 淡褐色細砂
10. 暗灰色細砂
11. 暗灰色中砂(炭化物少し含む)
12. 灰色細砂(炭化物少し含む)
13. 淡灰細砂(暗灰シルト ラミノ状混入)
14. 淡灰色シルト(炭化物多く含む)(黄色にブロック少量混入)
15. 暗灰褐色粘質土(炭化物少し含む)
16. 灰褐色粗砂
17. 暗灰色細砂
18. 暗灰色粗砂
19. 濁黄色粘質土(ブロック)(ブロック状混在)



第50図　SD40～43平・断面図

出土遺物の年代はSD28出土遺物の年代と齟齬がなく、14世紀に位置付けることができる。

SD40～43（第50・51図）

SD40～42はⅠ区東で検出された北流する大形溝、SD43は同地区で検出されたSD40に伴う小水路で、断面は逆台形状である。SD41の南端はⅠ区中央の東端で僅かに検出された。時間的な先後関係は、SD41・42が並行して存在し、ある程度埋没した段階でSD41から分岐し、SD42を横断してSD40への流れがある。土層断面D－D'の状況からは、SD40の開削時期がSD41・42とほぼ同時と考える状況にない。ただSD41・42に重なる最終流路の堆積状況から類推すれば、SD40の1～5層が最終流路に伴うものとも考えられるので、これ以下の堆積は最終埋没以前に形成されており、開削時期がSD41・42と同時期まで遡る可能性が高い。

各溝の規模は次のとおりである。

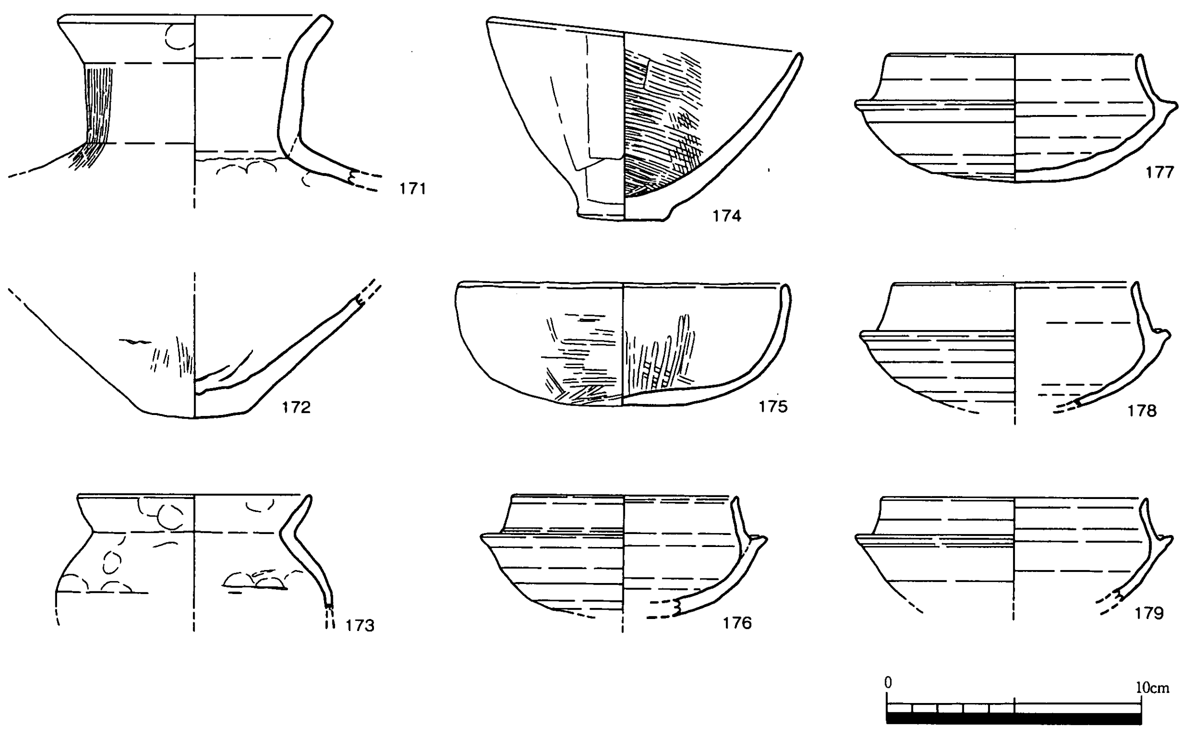
SD40は、検出長16.8m、上面幅2.2～3.0m、深さ0.9～1.3mを測る。

SD41は、検出長24.2m、上面幅3.4m、深さ1.0mを測る。

SD42は、検出長16.4m、上面幅2.8m、深さ1.08mを測る。

SD43は、検出長11.2m、上面幅0.7mを測る。

出土遺物は171～179がSD40・41から出土している。171は体部から直立して立ち上がる頸部に、少し屈曲する短い口縁部を有する。頸部から体部にかけてハケ目が見られる。172は壺の底部で、不安定な平底を持つ。173は小型丸底壺で、最大径部から上のみ出土している。体部は球形で、「く」の字に短く内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。174は



第51図　SD40・41出土遺物実測図

平底の鉢で、外面調整は板ナデやナデ、内面はハケ目が顕著である。175は丸底の鉢で、内外面ともヘラミガキが観察される。176～179は須恵器杯身で、口縁部は長く直立し、口縁端部内側に段を持つ。171～175の資料中、173・175が下川津Ⅵ式、その他が下川津Ⅴ式に相当すると考えられ、176～179は古墳時代中期TK47　5世紀後半に比定できる資料である。

出土資料の層位からみて、弥生時代後期後半頃にSD40～42の3条の溝が開削され、半ば以上が埋没した状態で、古墳時代中期頃に3条の溝を1条の溝（SD40からSD42を横断してSD41に続く）として再利用したものと考えられる。SD43はこの段階に付加された溝である。

これらの溝群は規模・形態・方向から山裾の谷部より取水して北方低地部に給水する灌漑水路と考えられる。

SD55～57・72（第52・53図）

Ⅱ区西のSD55～57、Ⅱ区東の72は一連の溝で、規模はSD55が検出長11m、上面幅1.6m、深さ0.26m、SD56・72が検出長24.2m（SD56が10.0m、SD72が12.7m）、上面幅0.7～2.1m、深さ0.06～0.24m、SD57が検出長3m、上面幅0.5m、深さ0.1mを測る。配置からSB21と関連する溝と考えられる。溝は、SB21の北辺（SD56)、西辺（SD55）を画する状態を呈しており、北西のコーナーから短く延びるSD57によって北側に広がる低湿地状の落ちに水を流すような構造を示している。また、SD56はⅡ区東のSD72につながり、東端は不整形な土坑状の浅い落ち込みで終わっている。形態的には、この地点の湧水を北側に排水する機能と、SB21に附属する溝との両者の機能を有していたものと考えられる。

SD55～57の断面からは、流水の痕跡があまり認められず、堆積土も比較的ブロック状に堆積していたと考えられ、最終的には一時に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物はSD55・56から180～183の4点が出土している。180は、土師器椀で低い高台を持つ。181は須恵器杯で底部はヘラ切りされている。7世紀後半～9世紀後半頃。182は土師器椀で、四角く外に踏ん張る高台を持つ。183は土師質土鍋の口縁と考えられる。

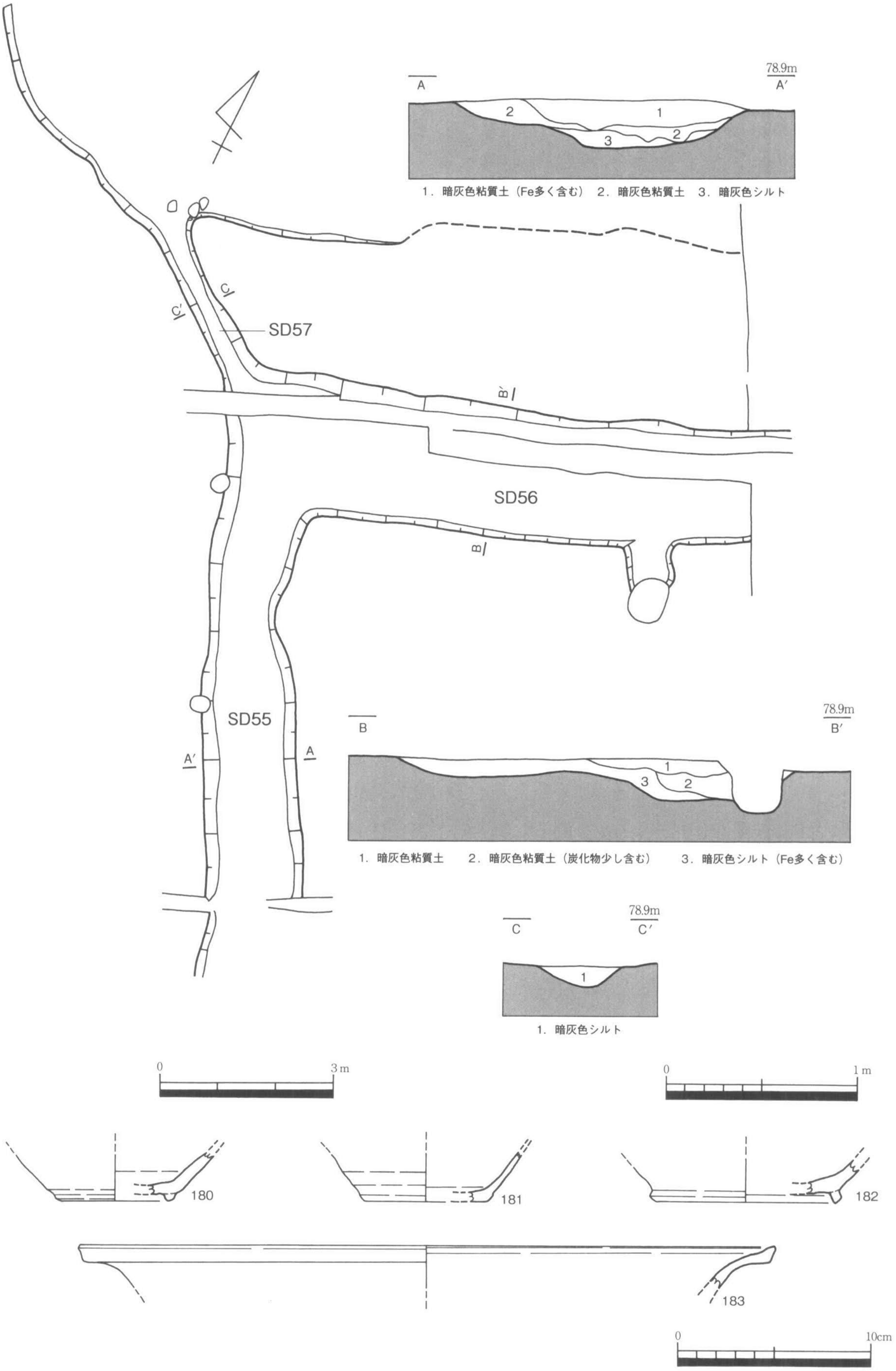
埋没時期は9世紀後半頃に位置付けることができる。

SD69～71・73（第54図）

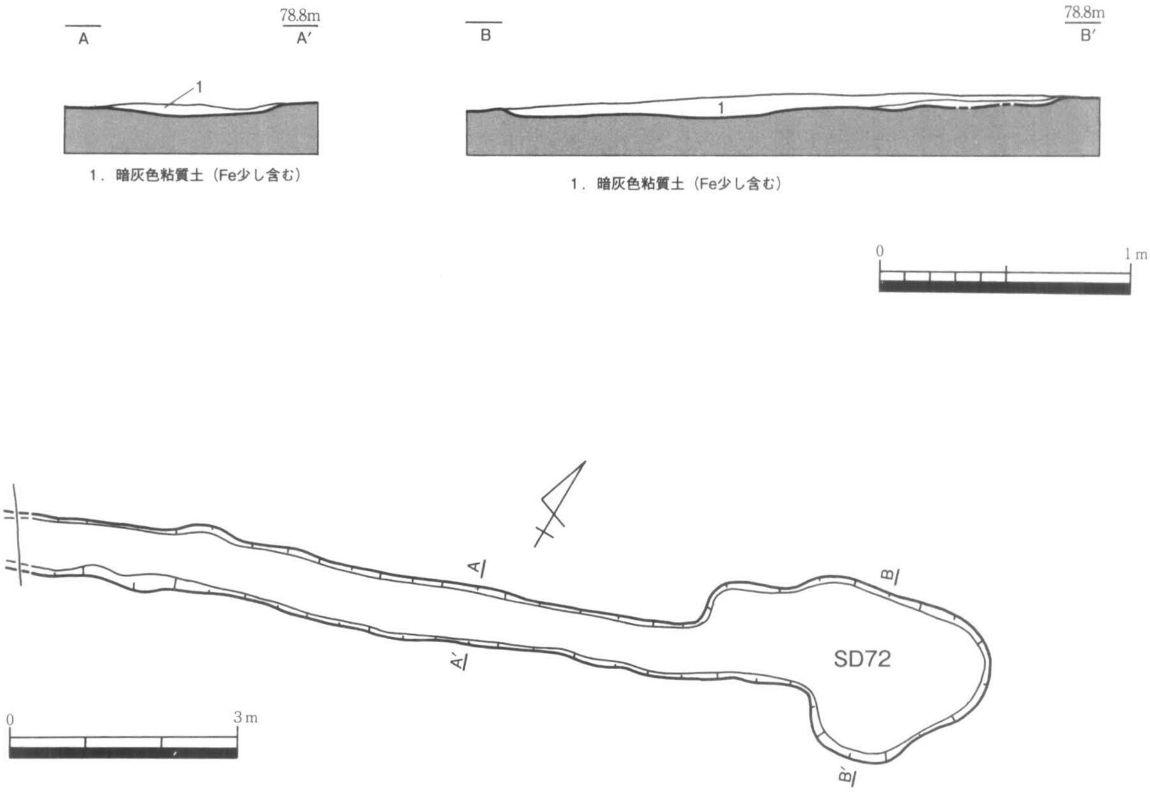
SD69～71・73は、いずれもⅡ区東で検出された南北に伸びる溝で、SD69が検出長7.0m、上面幅0.8m、深さ0.16m、SD70が検出長7.5m、上面幅0.5m、深さ0.1m、SD71が検出長8.7m、上面幅0.6m、深さ0.1m、SD73が検出長4.0m、上面幅1.2m、深さ0.16mを測り、断面はすべて逆台形である。SD69・73が不整形、SD70・71が直線的に伸びるが、南端付近でクロスしている。状態からは、溝の最深部を残した削平と考えられ、その性格は不明である。出土遺物は、SD69から出土した184のみである。184は須恵器杯で、底部から体部への移行がなだらかである。7世紀後半～9世紀後半頃に位置付けることができる。

SD50（第55図）

SD50は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長1.1m、幅0.5m、深さ0.06mを測る。断面は浅い皿状を呈し、出土遺物はない。Ⅱ区西及びⅡ区東で延長を確認することができない。



第52図 SD55～57平・断面図、出土遺物実測図



第53図　SD72平・断面図

SD62・63（第55図）

SD62・63は、それぞれⅡ区南及びⅡ区東で検出された南北に伸びる溝で、一連の溝であると判断できるので、一対で考える。検出長5.7m（SD62が1.5m、SD63が1.7m）、幅0.8～0.9m、深さ0.04～0.1mを測る。断面は浅い皿状を呈し、出土遺物はない。北端は削平により残存しなかった可能性が高い。なお、SB22の柱穴に切られており、これに先行する年代である。

SD64（第55図）

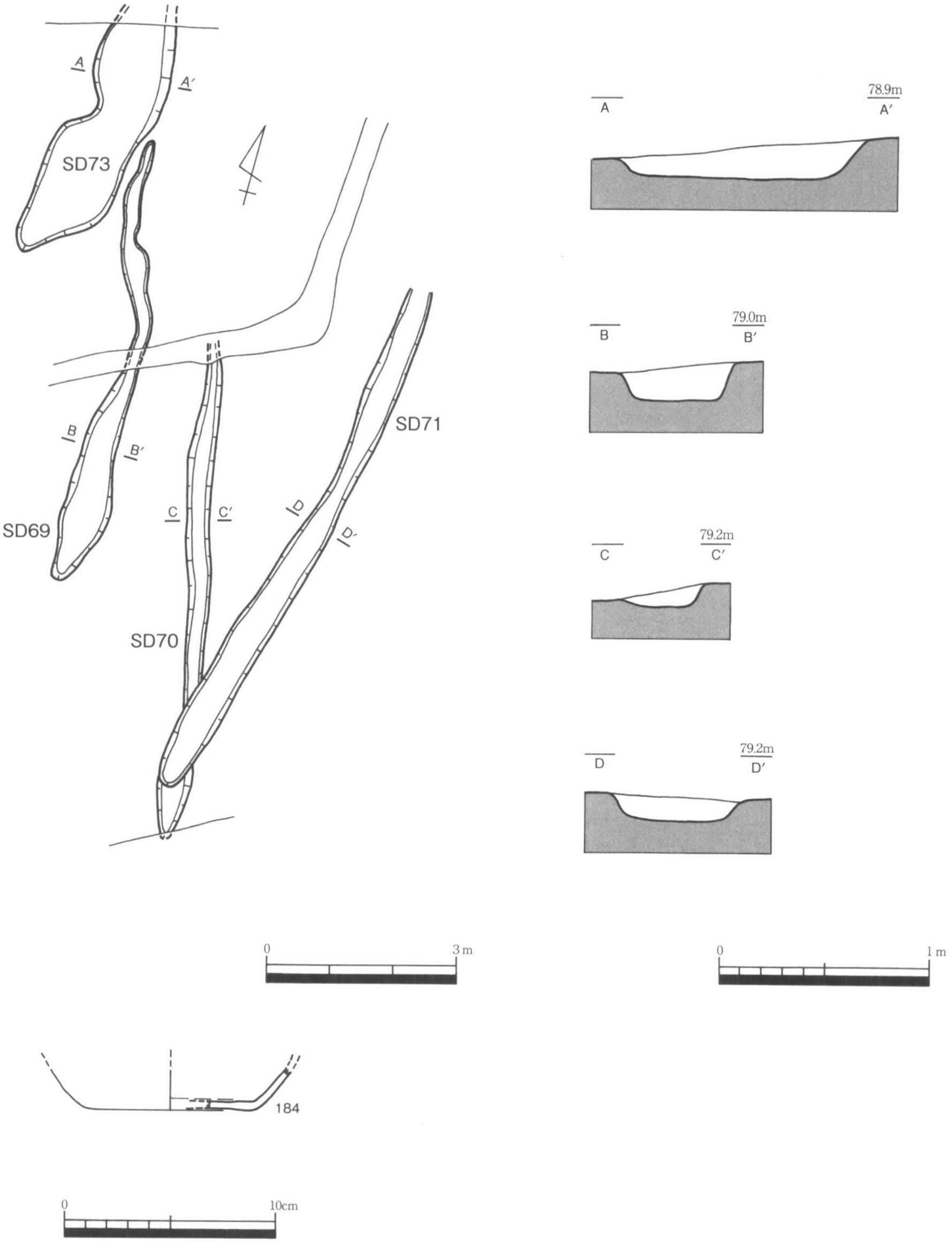
SD64は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長1.3m、幅0.3m、深さ0.1mを測り、断面は浅い逆台形である。出土遺物はない。南端をSB22の柱穴に切られており、それ以上南には伸びない。また、Ⅱ区東で延長を確認することができない。

SD65（第55図）

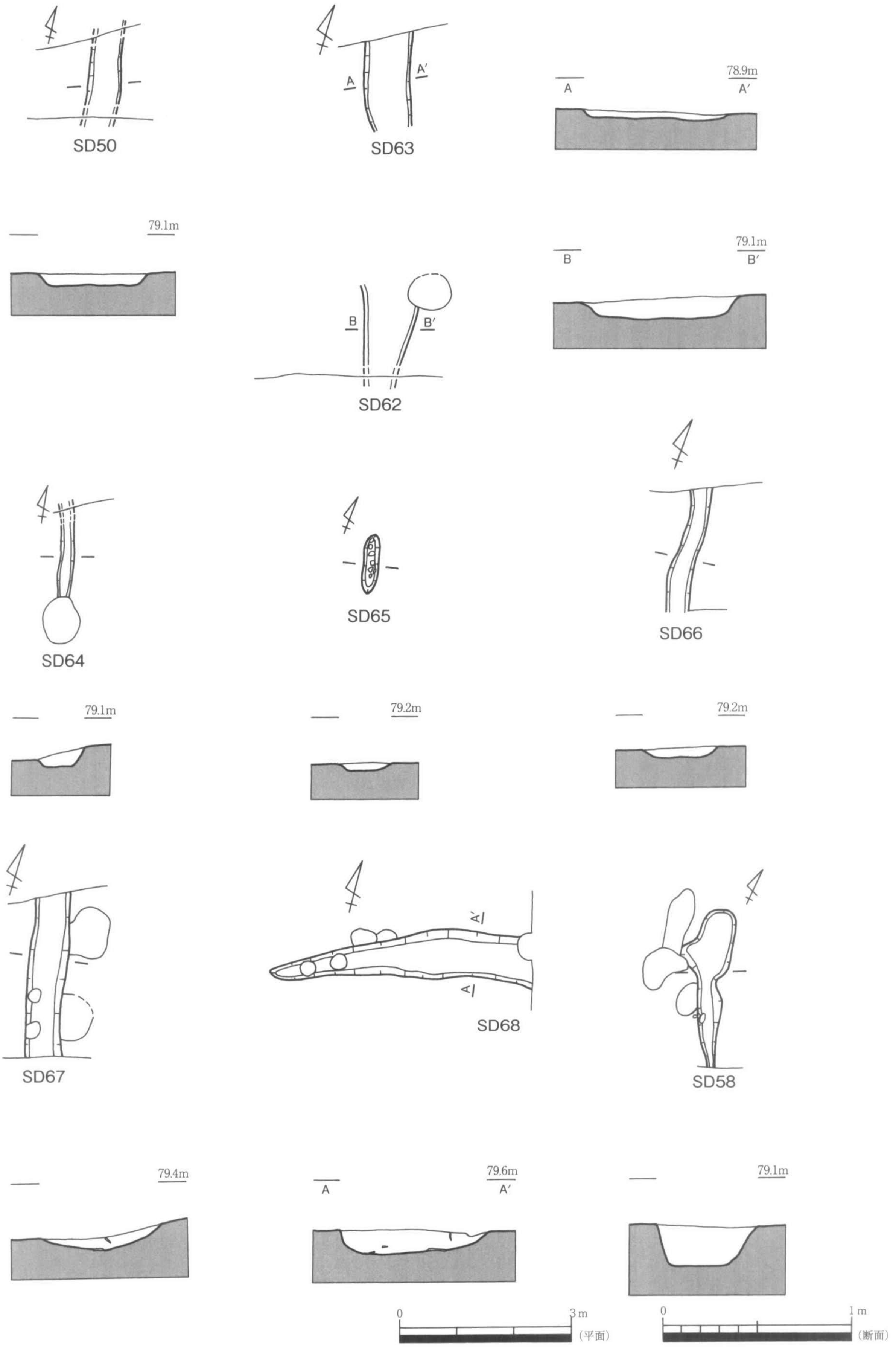
SD65は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長1.0m、幅0.3m、深さ0.04mを測り、断面は浅い皿状である。出土遺物はない。平面形は長楕円形を呈し、北へ伸びる可能性もないことから、上面の削平を想定する必要がある。

SD66（第55図）

SD66は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長2.3m、幅0.3m、深さ0.04mを測り、断面は浅い皿状である。出土遺物はない。Ⅱ区東で延長を確認することができない。



第54図　SD69・70・71・73平・断面図、出土遺物実測図



第55図　SD50・58・62～68平・断面図

SD67（第55・56図）

SD67は、Ⅱ区南で検出された南北に伸びる溝で、検出長2.9m、幅0.6m、深さ0.06mを測り、断面は浅い皿状である。出土遺物は、土師器杯1点である。185は、ヘラ切りの底部から外上方に直線的に伸びる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ－3～5で13世紀に位置付けることができる。

Ⅱ区東で延長を確認することができない。

SD68（第55・56図）

SD68は、Ⅱ区南で検出された東西に伸びる溝で、検出長4.7m、幅0.7m、深さ0.12mを測り、断面は浅い皿状である。出土遺物は、186～189の4点である。186は土師器杯で、ヘラ切りの底部から、少し外反気味に外上方に伸びる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ－3～5で13世紀。187は須恵器壺口縁部で、体部から外反気味に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部には平坦面をつくる。佐藤1993Ⅱ－2～Ⅲ－4で8世紀中頃～10世紀後半。188は須恵器杯で、四角く外に張る高台を持つ。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。189は土師質甕で、砲弾型の体部に「く」の字に外反する口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張する。片桐Ⅰ－②～④で10世紀。以上のことから、埋没年代を10世紀に位置付けることができる。

位置的には、Ⅲ区西で検出されているSD74（西）につながる可能性が高い。

SD58（第55図）

SD58は、Ⅱ区西で検出された南北に伸びる溝で、検出長2.7m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。断面は逆台形を呈し、出土遺物はない。調査区内での延長を確認することができない。形状は、削平された溝の最深部のみと言った状況である。

SD74～77（第57・58図）

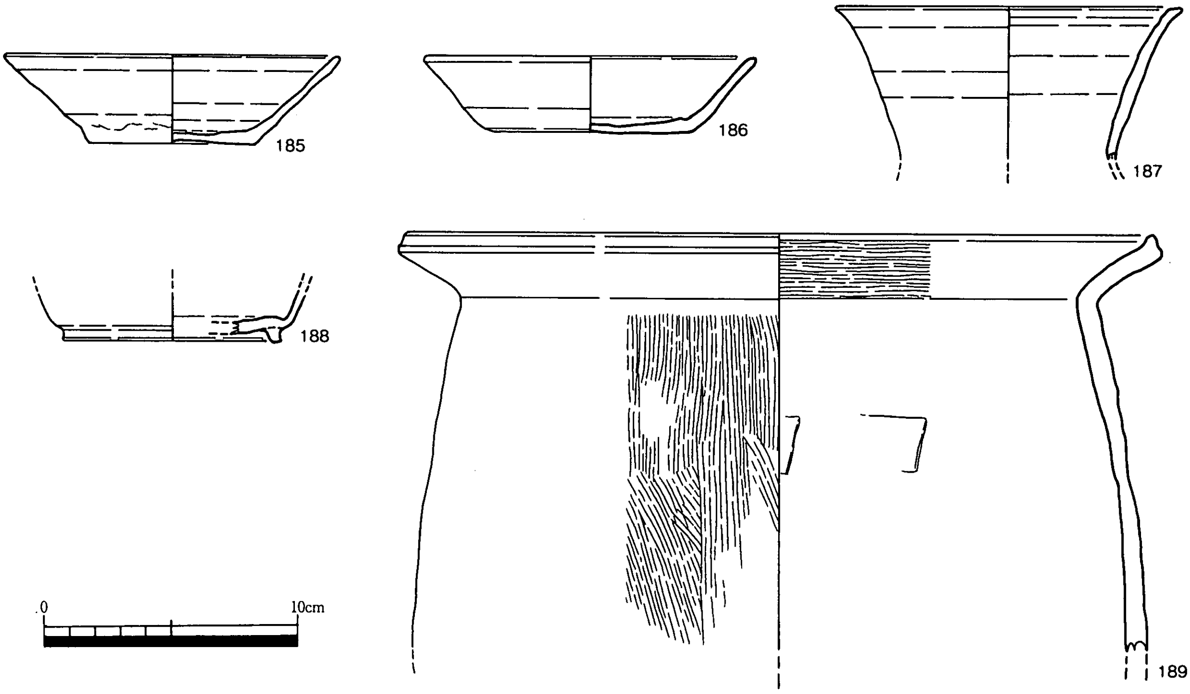
SD74～77は、いずれもⅢ区西で検出された溝で、SD74（西）（東）・SD76が南北に、SD75・77が東西にそれぞれ伸びる。調査区北側は削平を受けており、一部の検出に止まっている事から性格は不明である。

規模は、SD74（西）が検出長2.5m、上面幅1.2m、深さ0.3m、SD74（東）が検出長3.7m、上面幅1.6m、深さ0.24m、SD75が検出長3.1m、上面幅1.8m、深さ0.2m、SD76が検出長5.3m、上面幅1.2m、深さ0.2m、SD77が検出長2.7m、上面幅0.8m、深さ0.16mを測る。

狭い範囲ではあるが、SD74（西）とSD74（東）は平行して伸びることから、一連のものとして理解すべきであると考えられる。

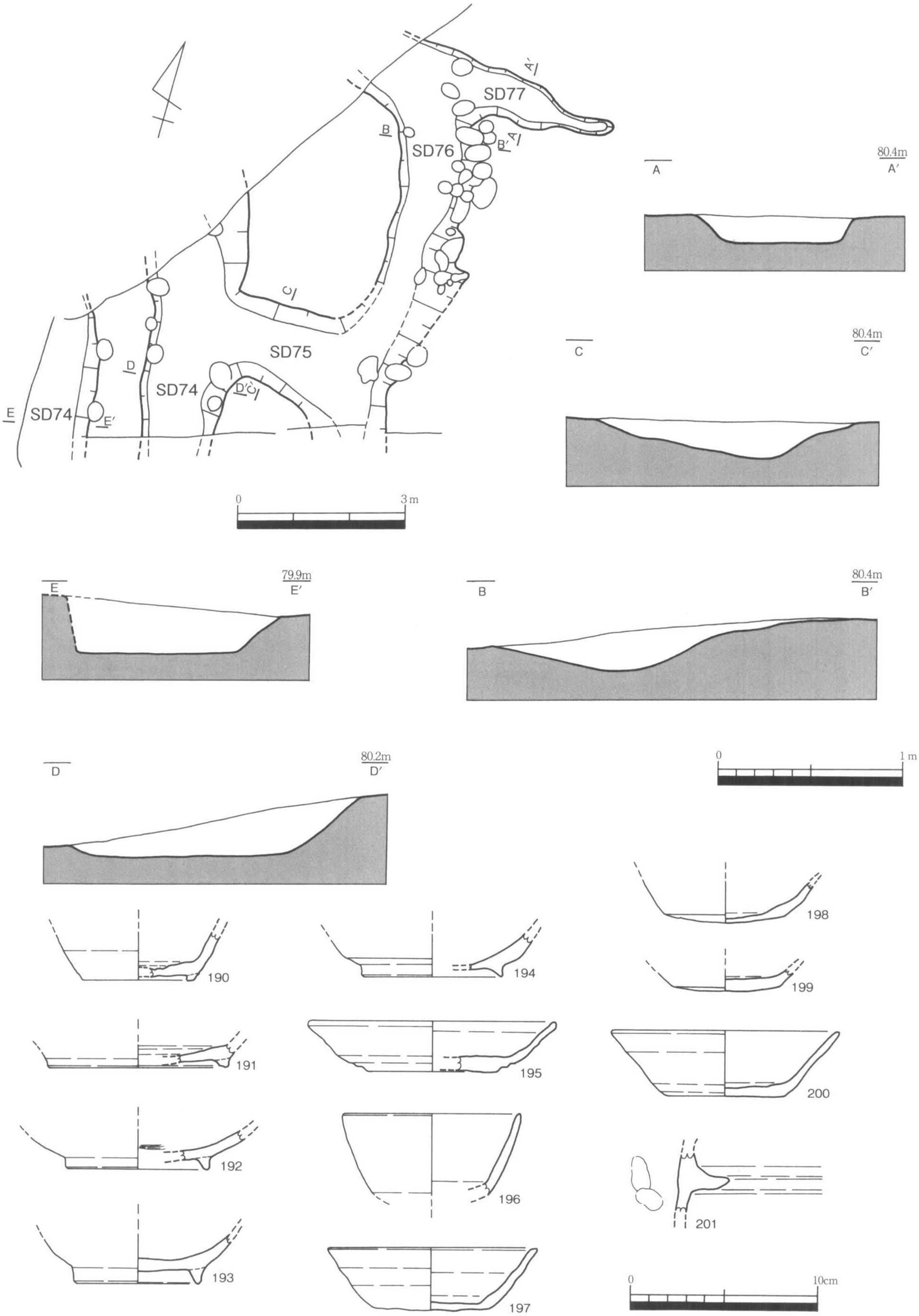
遺物は、SD74から190～204・206～214・216～217の26点、SD76から205、215の2点が出土している。

190は器壁が厚く、小形の須恵器杯と考えている。四角く低い高台を持つ。佐藤1993Ⅲ－1～3で9世紀後半～10世紀中頃。191は須恵器杯の高台部分で、逆台形の低い高台を持つ。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。192は黒色土器椀で、三角形の高台を持ち、内面にヘラミガキが見られる。12～13世紀頃ヵ。193は土師器椀で、三角形の高台を

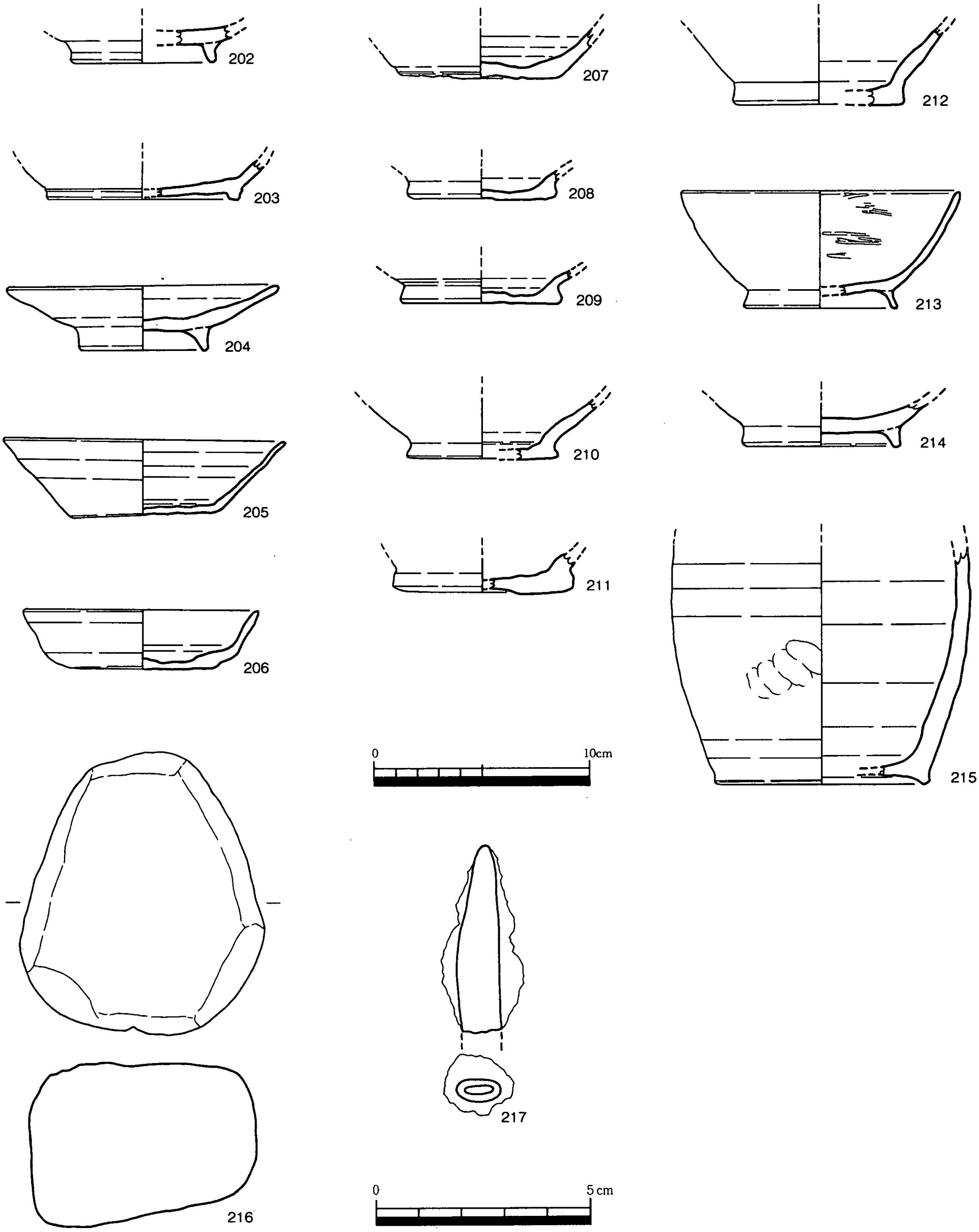


第56図　SD67・68出土遺物実測図

持つ。194は黒色土器椀で、三角形の高台を持つ。ヘラミガキは確認できない。12～13世紀頃ヵ。195は土師器杯で、ヘラ切りの削り出し高台のような円板高台で、やや内湾気味に外上方に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。196は須恵器杯である。体部はやや内湾気味に上方に伸び、口縁端部は丸く終わる。7世紀後半～9世紀後半頃。197は土師器杯でヘラ切りの底部から直線的に外上方に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。198も土師器杯でヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。199も土師器杯で、ヘラ切り後ナデ調整を施した底部を持つ。200は土師器杯でヘラ切りの底部から外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。201は土師質羽釜の鍔部分で、水平に伸び受け口状に上に収束する。古相を残す資料である。片桐Ⅰ-①～②で9世紀後半～10世紀前半。202は黒色土器椀で三角形の高台を持ち、見込み部分にヘラミガキが確認できる。12～13世紀頃ヵ。203は須恵器杯で、ややかかと上がりの低い高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。204は土師器小型器台で、高い三角形の高台、やや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。片桐Ⅱ-⑥で12世紀後半。206・207は土師器杯で、ヘラ切りの底部から外上方に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。208～212は土師器円盤状杯で、円板高台を持つ。片桐Ⅱで11～13世紀。209の底面はヘラ切りである。213は黒色土器椀で、板状の高台である。内面にはヘラミガキが確認できる。片桐Ⅱ-③で11世紀後半。214は土師器椀で、三角形の高台を持つ。216は歪な円柱形の石で、上面の角部分が丸みを帯びている。製品かどうかは不明である。217は鉄釘の先端部と考えられる。ただし、断面が四角くなく、他の製品を考えるべきかもしれない。



第57図　SD74～77平・断面図、SD74出土遺物実測図（1）

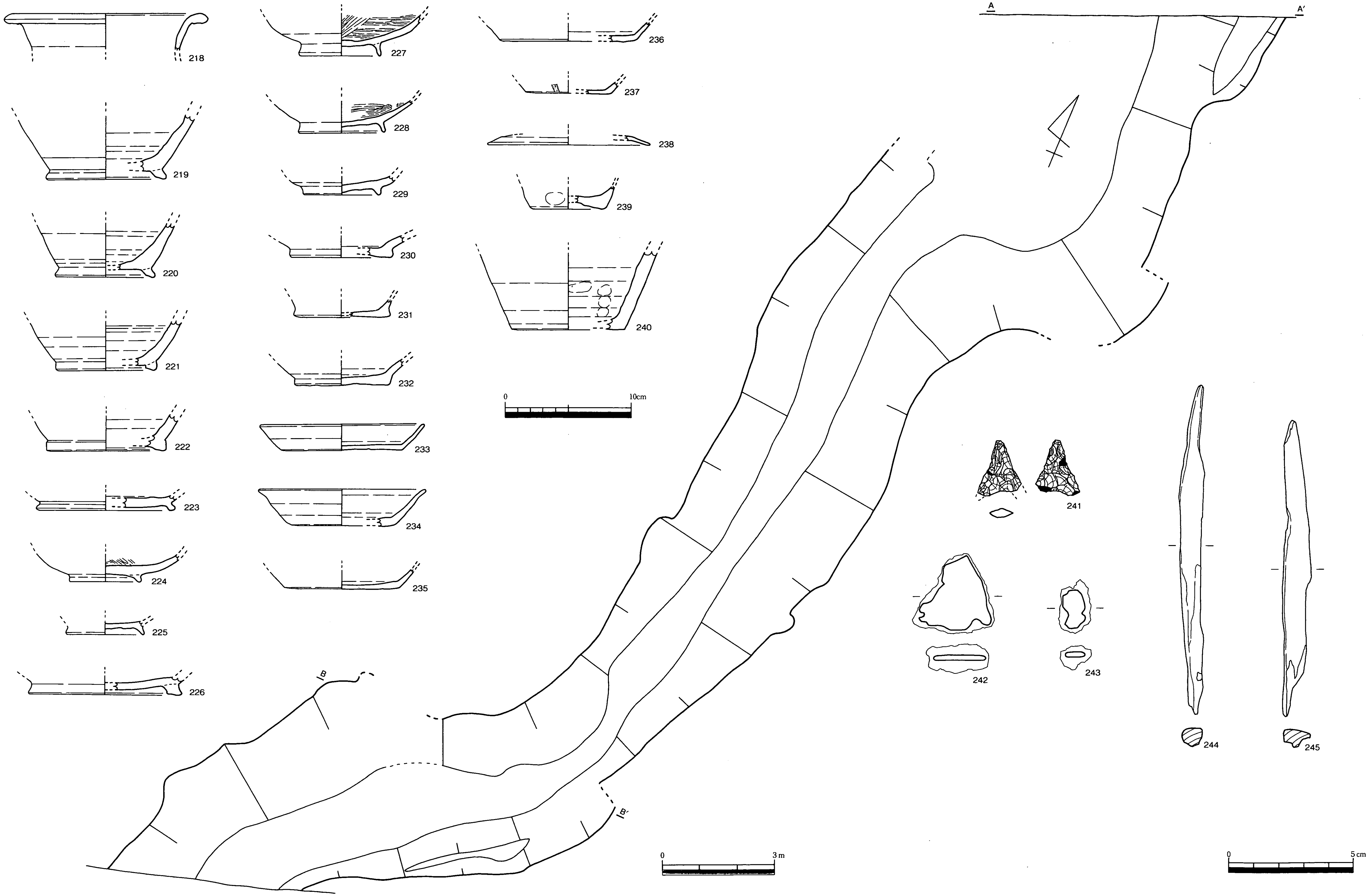


第58図　SD74（2）・SD76出土遺物実測図

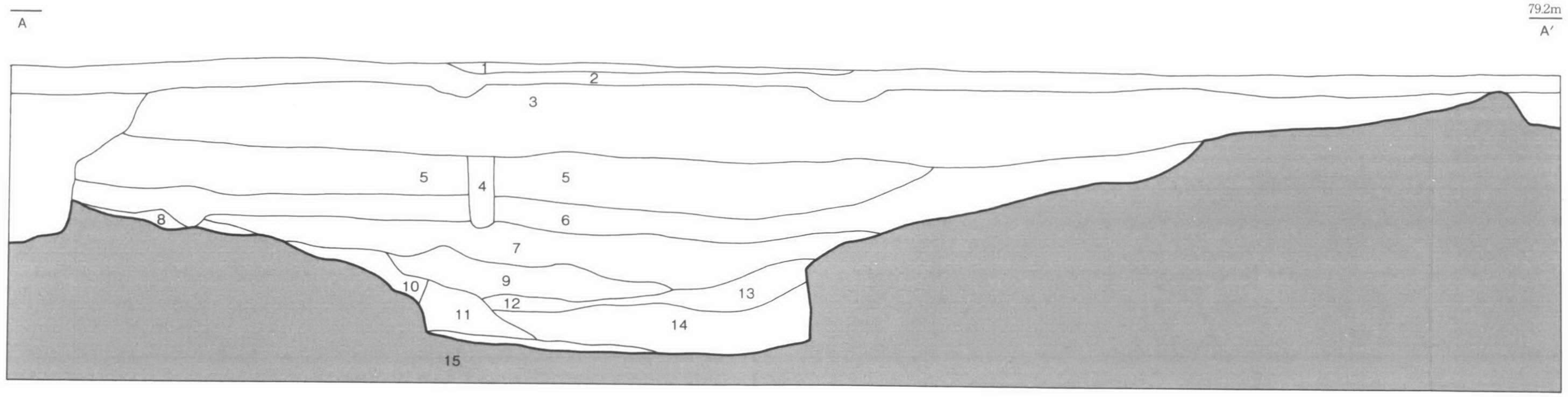
205は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に立ち上がる口縁部を持つ。器壁が薄い。佐藤1993Ⅲ−1で9世紀後半。215は須恵器壺で、低く外側に踏ん張る高台を持つ。体部はビア樽のような形である。佐藤1993Ⅱ−2で8世紀中頃。

以上のことから、10世紀と13世紀の遺物に分けることができる。

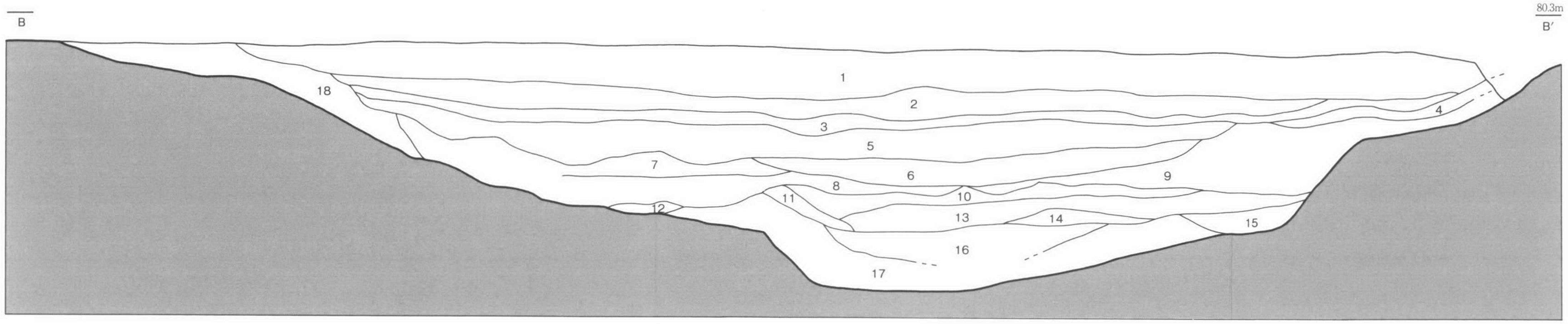
出土遺物から見て、この一群の溝は、同時期に機能していたものと考えられ、北側・東



第59図　SD78平面図、出土遺物実測図（1）

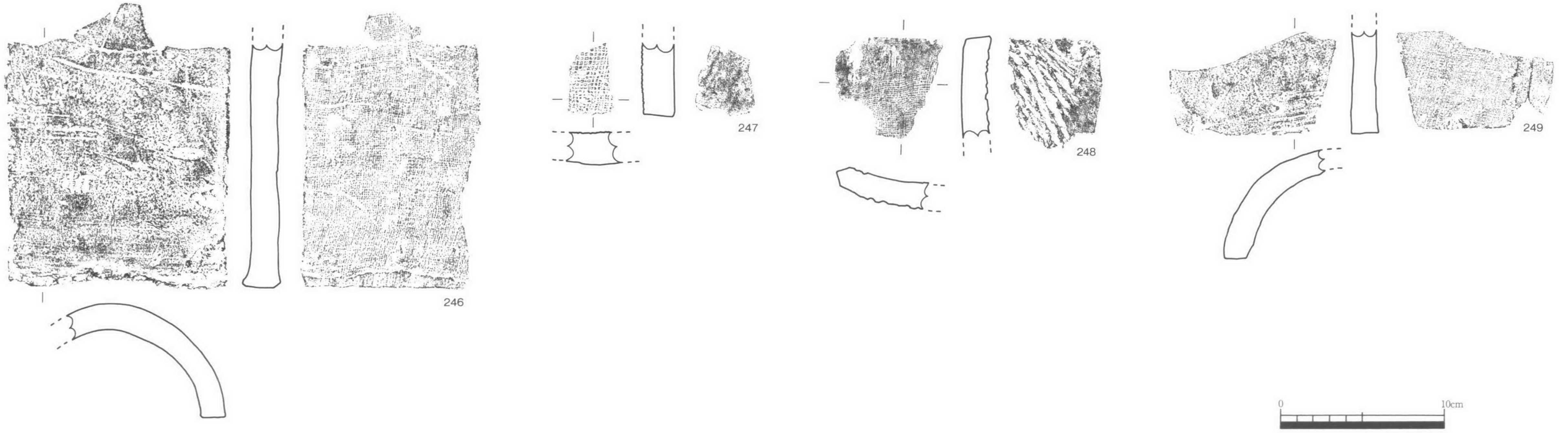


1. 黒褐色粘質土（耕土）
2. 淡灰褐色粘質土（ブロック）（ブロック状堆積、おき土か撹乱土）
3. 暗灰色シルト（Fe少し含む）
4. 灰色シルト（柱穴状）
5. 淡灰色シルト（Fe多く含む）
6. 灰色シルト（Fe少し含む）
7. 暗灰色粘質土（粘性弱い）（Fe少し含む）
8. 暗灰色粘質土（粘性弱い）（7と同一層）
9. 暗灰色シルト（炭化物多く含む）
10. 淡灰黄色シルト（Fe少し含む）
11. 淡灰色細砂
12. 淡灰色シルト
13. 灰色シルト
14. 灰色細砂
15. 褐色中砂（Fe多く含む）（鉄分が多く沈着し、固化している）



1. 淡褐色シルト（Fe多く含む）
2. 灰褐色シルト
3. 暗灰色粘質土
4. 暗灰色粘質土
5. 暗灰色粘質土
6. 淡灰色細砂（炭化物少し含む）
7. 明橙色シルト（地山類似土）
8. 淡灰色細砂
9. 濃黄色シルト（地山類似土）
10. 灰白色細砂
11. 淡黄灰色シルト
12. 淡灰色中細
13. 暗灰橙色粘質土
14. 暗灰色粘質土
15. 暗灰色粘質土
16. 淡灰色粗砂
17. 淡灰色シルト
18. 淡黄灰色シルト（地山類似土）

0　1m



第60図　SD78断面図、出土遺物実測図（2）

側の状況からすれば、Ⅱ区南で検出されている掘立柱建物跡群の東を画する溝と考えられるが、集落を取り囲む溝であるなど具体的な機能は不明である。また、掘立柱建物跡群が廃絶後も一部機能が残り、中世集落の廃絶と同時期にほぼその機能を終えたことが分かる。

SD78（第59～61図）

SD78は、Ⅲ区東で検出された大溝で、やや蛇行するが南北に伸びる。検出長34.5m、上面幅3.0～8.5m、深さ1.36mを測る。断面観察の結果、下層部分は東西からの流入土によって交互に堆積している様子が見られることから、自然埋没の状況を呈するものと考えられる。

遺物は、218～256の39点が出土している。

218は須恵器壺の口縁部で、大きく外反しながら伸び端部は肥厚して丸く終わる。佐藤1993Ⅱ−2～Ⅲ−4で8世紀中頃～10世紀後半。219は須恵器壺の底部で、外側に踏ん張る高台を持つ。佐藤1993Ⅱ−2で8世紀中頃。220は219と同形でやや小ぶりな壺である。佐藤1993Ⅱ−2で8世紀中頃。221も219とほぼ同形であるが、高台が外側に踏ん張らず、ほぼ垂直である。佐藤1993Ⅱ−2で8世紀中頃。222は221と同形である。佐藤1993Ⅱ−2で8世紀中頃。223は須恵器杯で、外に踏ん張る形の高台を持つ。佐藤1993Ⅱ−1～5で8世紀～9世紀中頃。224は土師器椀で、三角形の高台を持ち、内面にはヘラミガキが見られる。225は土師器椀の高台で、板状の高台である。226は須恵器壺底部片で、外側に踏ん張る高台を持つ。佐藤1993Ⅱ−2で8世紀中頃。227・228は黒色土器椀で、ほぼ垂直に下る高台を持ち、内面には井桁上のヘラミガキが見られる。12～13世紀頃ヵ。229は土師器椀で、三角形の高台を持つ。230はヘラ切りの円板高台を持つ土師器円盤状高台杯である。片桐Ⅱで11～13世紀。231は円板高台に近い平底の底部を持つ土師器円盤状高台杯である。片桐Ⅱで11～13世紀。232はヘラ切りの円板高台を持つ土師器円盤状高台杯である。片桐Ⅱで11～13世紀。233は須恵器皿で、底面はヘラ切りで、口径に対して器高は低い。佐藤1993Ⅱ−3で8世紀後半。234も土師器杯で、底部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ−3～5で13世紀。235も土師器杯で、底面にはヘラ切りの痕跡が見られる。236は須恵器皿で、底面にはヘラ切りが確認できる。口縁部を欠損しており、あまり伸びないと判断して皿に分類した。8世紀中頃～9世紀中頃。237は須恵器杯底部片である。7世紀後半～9世紀後半頃。238は須恵器杯蓋で、扁平な天井部から下方に屈曲して端部に至る。端部は丸く終わる。つまみ部分は欠損している。佐藤1993Ⅱ−2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。239は土師器杯ヵ。やや上げ底気味の器壁の厚い器形で、極端に薄い器壁で外上方に立ち上がると思われる。240は須恵器壺底部である。平坦な底部から直線的に開く体部を持つ。佐藤1993Ⅲ−1～4で9世紀後半～10世紀後半。241は石鏃で、所謂「凹基式」に属する。小形で縄文時代のものと考えられる。242・243は鉄器片である。2点とも扁平な断面を持つが、製品は不明である。244・245は木片で、製品かどうか不明である。但し、先端部が尖っていることから人口品と考えている。246は丸瓦で、凸面に縄目の叩きが認められる。247は平瓦で、須恵質の焼きである。凸面に縄目の

叩きが、凹面に布目が観察できる。248も平瓦で、247同様である。249は丸瓦で、須恵質である以外は246同様である。250は磨製石斧の基部と考えられるもので、上下面とも人為的な研磨が行われていると思われるが、先端部が欠損しているため定かではない。251は石鏃で、片方の返しが欠損している。252はサヌカイトの剥片で、特に刃部調整は見られない。253は縁辺に細かな剥離が見られることから、特に調整を加えているわけではないが、使用痕と考えてスクレイパーとした。254・255ともサヌカイトの剥片である。256は四角形をした板片で、上下は折られた痕跡がある。上面は平で、人為的な加工を考えうるが、製品としては明確な位置付けはできない。

以上の資料から、10世紀と13世紀の2群に分けることができ、それぞれの時期に機能していたと考えられる。

SD79～83（第62・63図）

SD79～83は、Ⅵ区で検出された溝で、調査前に所在していた建物や近世と考えられるSB30・31に伴わない。

SD79は、他の溝と方位が異なりやや東に振れ、南側が大きく膨らんでいる。検出長3.5m、上面幅0.5～2.2m、深さ0.16mを測る。

遺物は、257・258、261・262、264・265の6点がSD79から出土した。257は土師器杯の口縁部で、内外面とも回転ナデ調整である。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。258も土師器杯で、底部にヘラ切りの痕跡が見られる。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。261・262は土師器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に開く口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。264・265は円板高台の土師器円盤状高台杯で、265にはヘラ切りの痕跡が明瞭である。片桐Ⅱで11～13世紀。

以上の資料から14世紀頃に埋没した可能性が高い。

SD80は、検出長8.8m、上面幅0.5m、深さ0.16mを測る。

遺物は、263の1点がSD80から出土している。263は土師質小皿で、ヘラ切りの底部から短く外上方に立ち上がる器形である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。

SD79同様、14世紀に埋没したと考える。

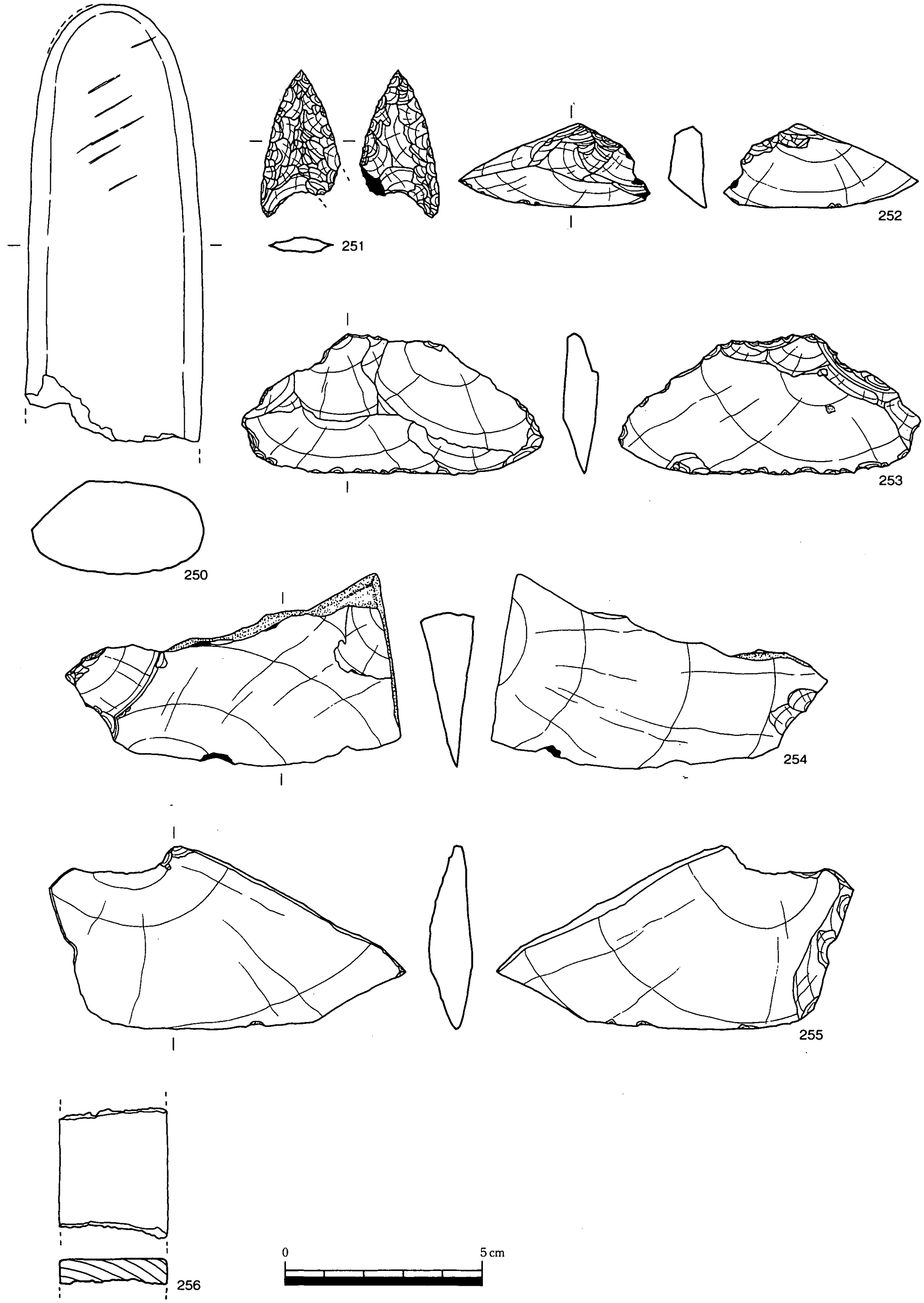
SD81は、検出長0.7m、上面幅0.1m、深さ0.06mを測る。

SD82は、検出長5.1m、上面幅0.4m、深さ0.16mを測る。

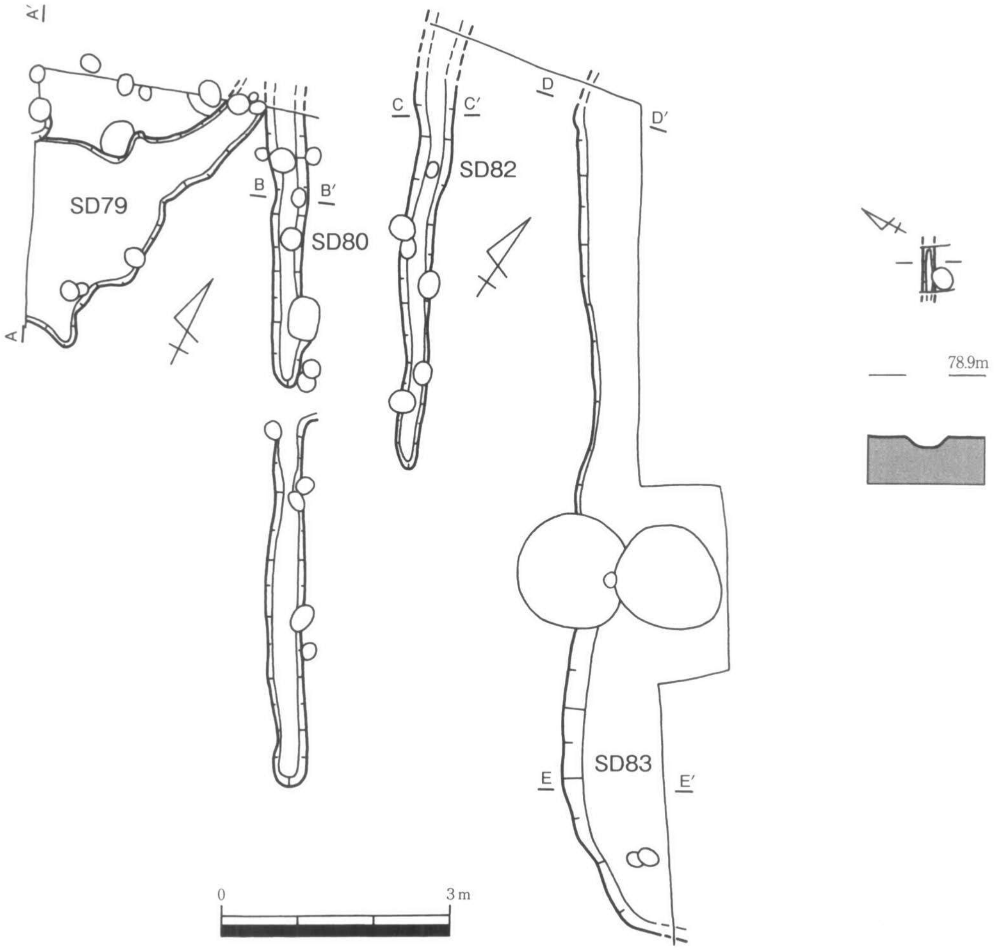
SD83は、検出長10.7m、上面幅0.7～1.3m、深さ0.2mを測る。

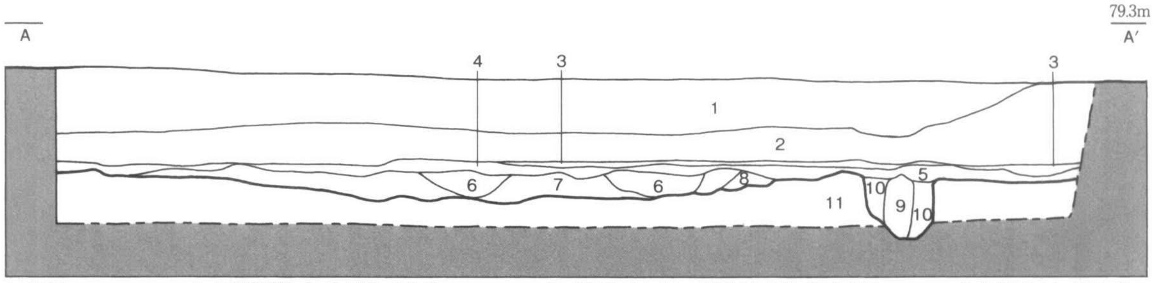
遺物は、259・260・266～268の5点がSD83から出土した。259は土師器杯で、内湾気味に外上方に伸び、端部が細く終わる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。260も土師器杯で底面にヘラ切りが認められる。口径に比べて器高が低く、皿に近い器形である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。266は土師器椀で、外に踏ん張る形の三角形の高台を持つ。267はサヌカイトの剥片で、二次調整は見られない。268は砥石である。

SD79・80同様に14世紀頃に埋没したと考えられる。

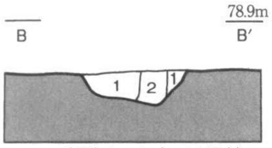


第61図　SD78出土遺物実測図（3）



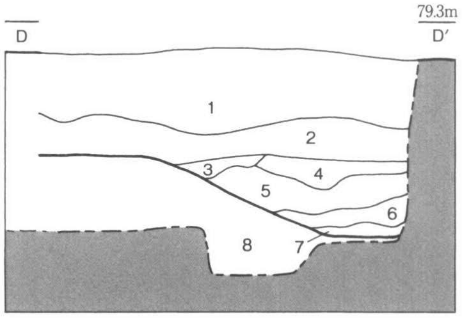


1. 造成土
2. 暗灰色シルト（耕作土）
3. 淡灰色シルト（床土）
4. 明橙色粘質土（Fe 多く含む、床土か）
5. 淡橙色粘質土（Fe 多く含む、床土か）
6. 黒灰色シルト（Mn・炭化物少し含む）（SD79 埋土）
7. 暗灰色シルト（Mn・炭化物少し含む）（SD79 埋土）
8. 淡灰色シルト（焼土ブロック含む）（SD79 埋土）
9. 黒灰色シルト（SP 柱痕）
10. 暗灰色シルト（SP 埋土）
11. 淡黄色シルト（地山土）

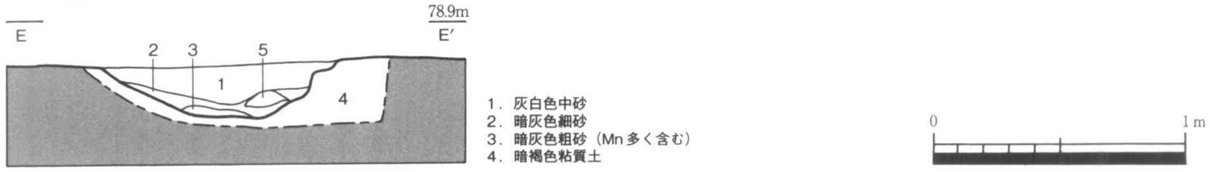


1. 暗灰色シルト（SD80 埋土）
2. 黒灰色シルト（SP 埋土）

1. 白灰色中砂（SD82 埋土）
2. 暗灰色粗砂（Mn 多く含む）
3. 灰色中砂

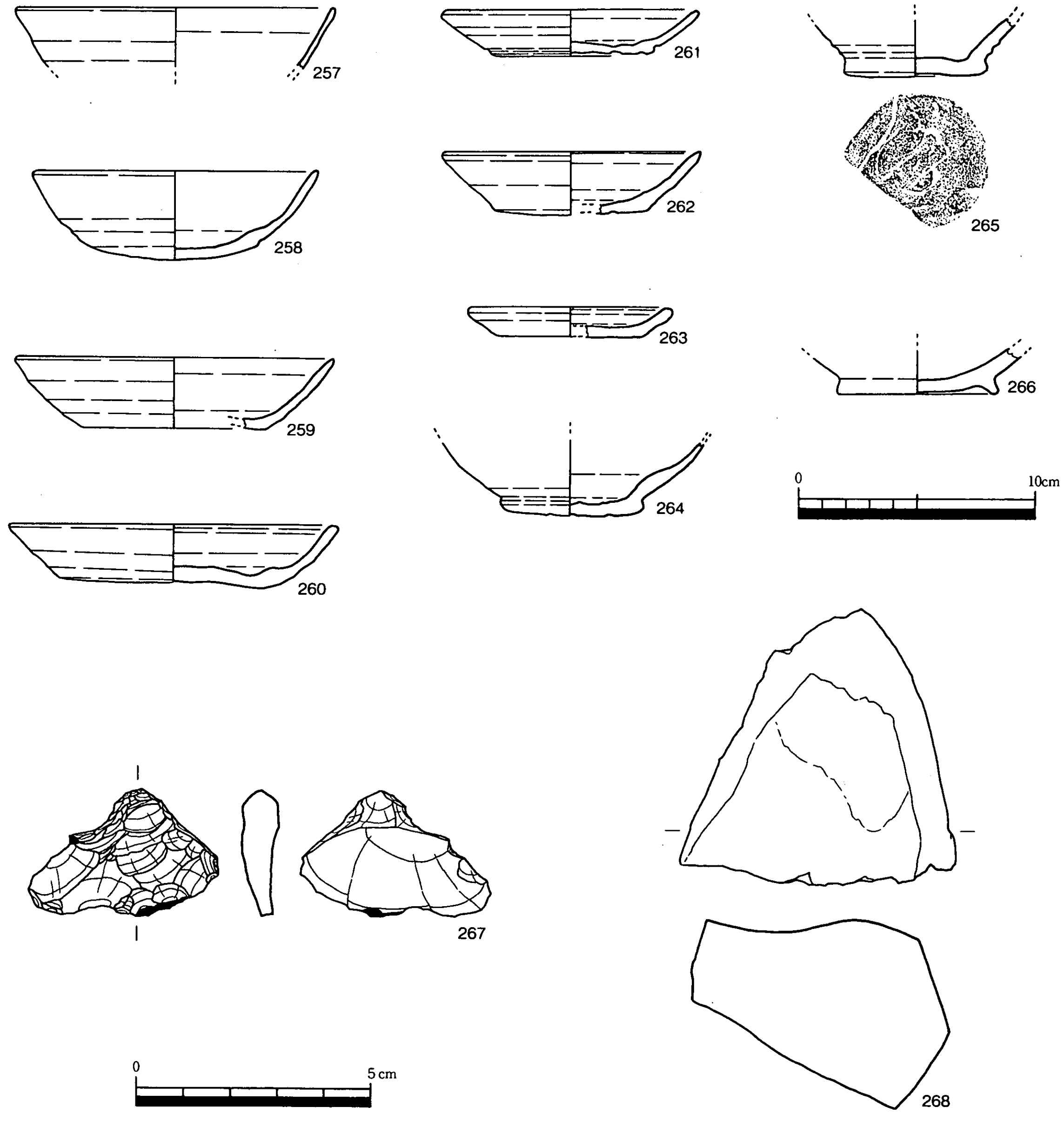


1. 造成土、花崗土
2. 黒灰色シルト（耕作土）
3. 褐橙色粘質土中砂混（SD83 埋土）
4. 褐橙色粘質土中砂混（SD83 埋土）
5. 暗灰色シルト（Mn 多く含む、SD83 埋土）
6. 淡灰色中砂（SD83 埋土）
7. 暗灰色細砂（SD83 埋土）
8. 淡黄褐色粘質土（地山）



1. 灰白色中砂
2. 暗灰色細砂
3. 暗灰色粗砂（Mn 多く含む）
4. 暗褐色粘質土

第62図　SD79～83平・断面図



第63図　SD79・80・83出土遺物実測図

4　土坑

土坑は、柱穴よりも規模的に大きなものや性格が不明なものを含んで相対的に認識している。掲載している土坑中にも、溝状遺構に分類すべきものも含まれる可能性があるが、原則的には現地調査での判断を尊重している。ただし、明らかに掘立柱建物跡を構成する柱穴と判断したものは分類替えをしている。

第64図は、本遺跡の土坑分布略図である。この図のとおり、土坑はすべての調査区で検出されおり、それぞれ時代や性格を異にしているが、ここでは遺物が出土しているものを中心に、特徴的な土坑を単体で取り上げて記述する。

SK01（第65図）

SK01はⅠ区西で検出された土坑で、検出長辺5.3m、短辺1.1m、深さ0.24mの隅丸長方形の本体東辺に長さ1.2m、上面幅0.2mの溝状の張り出しが認められる。この張り出しはSD05を切っている。断面は浅い皿状である。

出土遺物は269の土師器椀底部片のみである。

SK02（第65図）

SK02はⅠ区西で検出された土坑で、長辺0.88m、短辺0.54m、深さ0.1mの楕円形である。土坑中に石が認められ、断面は浅い皿状である。

SK03（第65図）

SK03はⅠ区西で検出された土坑で、長辺2.0m、短辺0.76m、深さ0.16mの楕円形を呈し、断面は浅い皿状である。

出土遺物は270～272の3点ある。270は黒色土器椀で、高台が外側に踏ん張っている。12～13世紀頃ヵ。271は須恵器壺の底部で、全体的には円筒形である。272も須恵器壺の底部であるが、外上方に内湾気味に立ち上がる体部を持つ。佐藤1993Ⅲ−1～4で9世紀後半～10世紀後半。270の資料から13世紀に位置付けておく。

SK04（第65図）

SK04はⅠ区西で検出された土坑で、長辺1.32m、短辺0.54m、深さ0.1mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

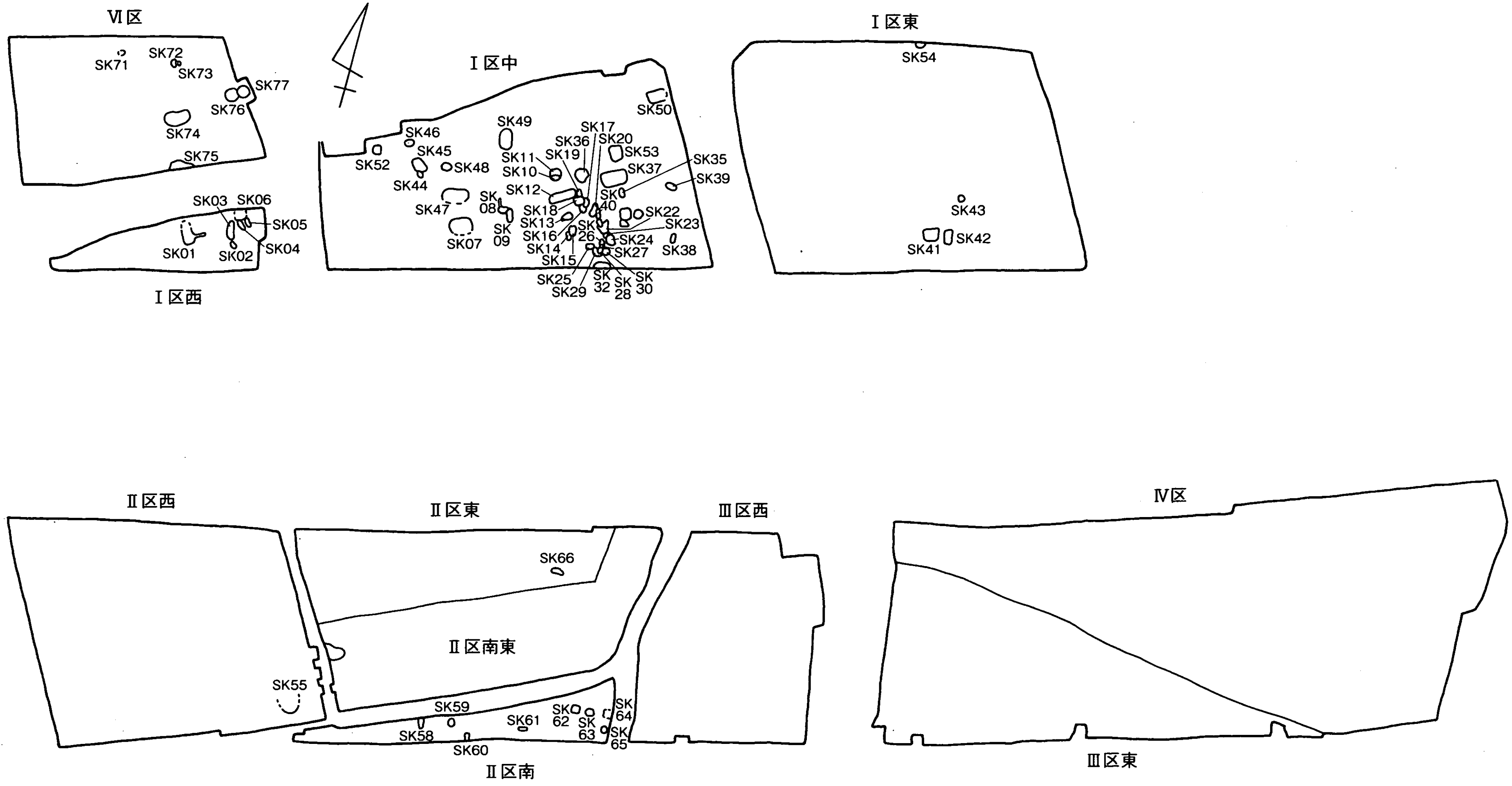
SK05（第65図）

SK05はⅠ区西で検出された土坑で、長辺1.1m、短辺0.46m、深さ0.18mの楕円形を呈し断面は浅い逆台形である。

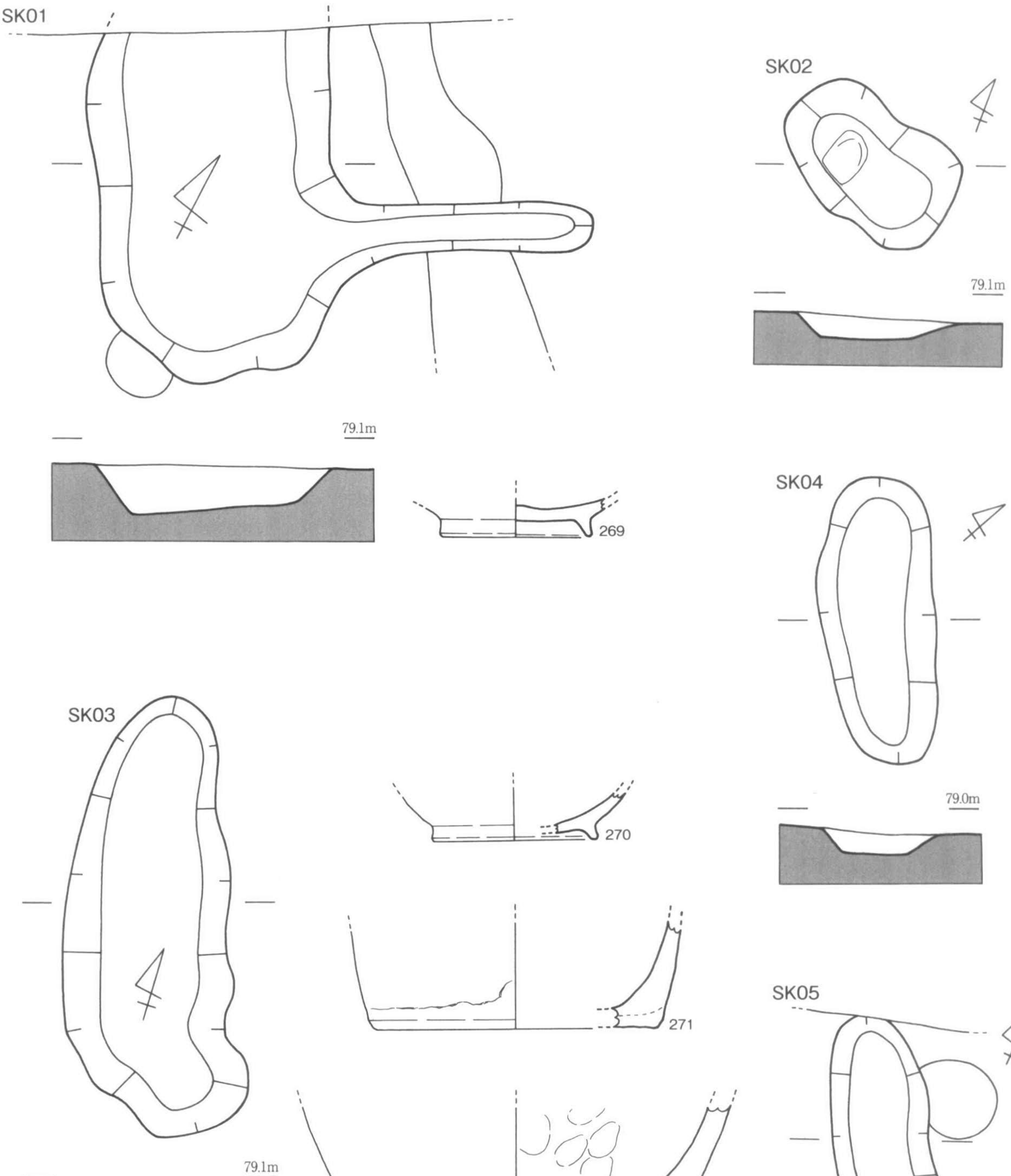
SK07（第66図）

SK07はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺2.16m、検出短辺1.36m、深さ0.32mの隅丸方形を呈し、断面は逆台形である。

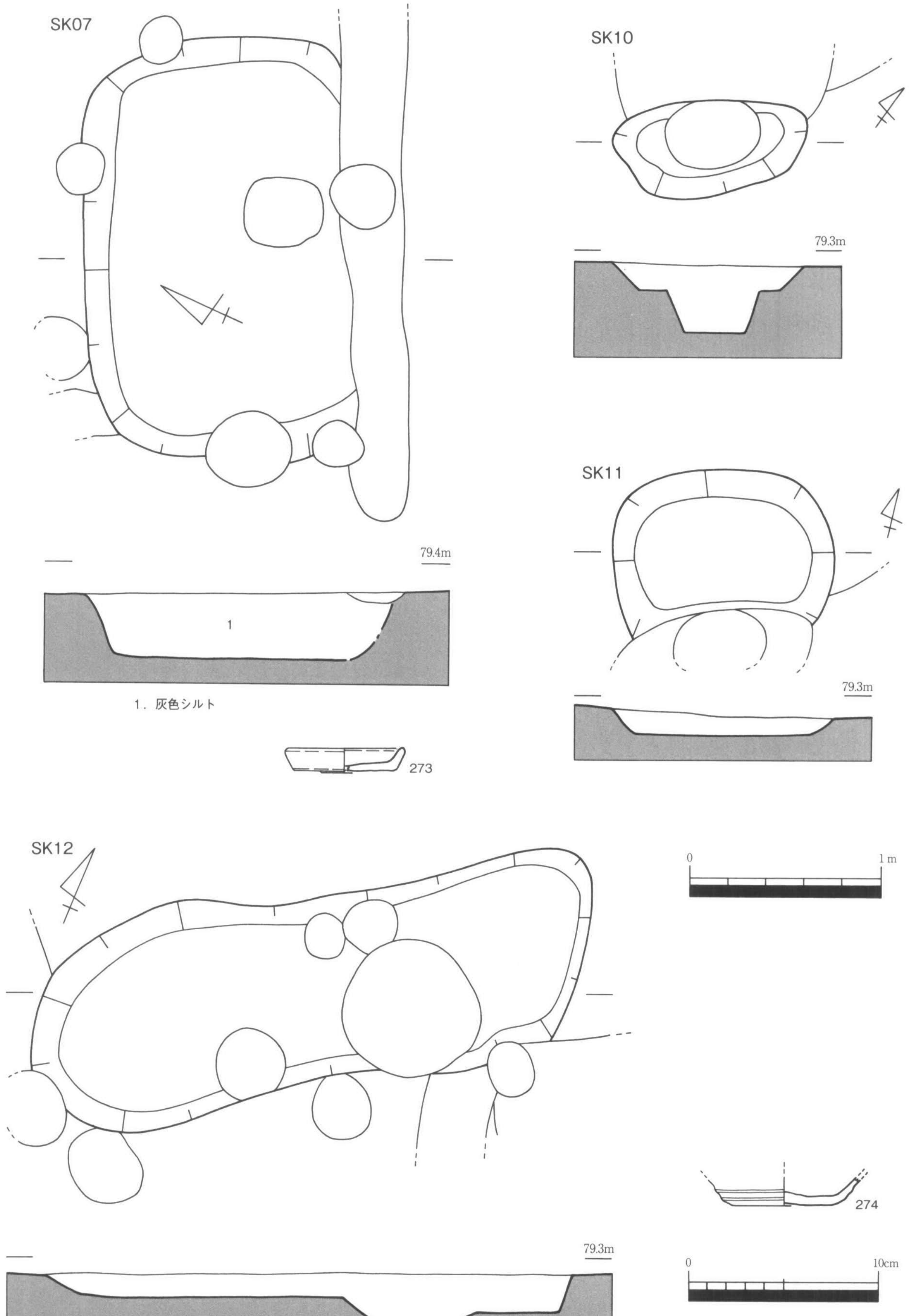
出土遺物は273の1点で、ヘラ切りの底部から短く直線的に立ち上がる口縁部を持つ土師質小皿である。佐藤2000Ⅱ−3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半に位置付けることができる。


Ⅵ区
SK71
SK72
SK73
SK77
SK76
SK74
SK75
SK03
SK06
SK05
SK04
SK01
SK02
Ⅰ区西
Ⅰ区中
SK46
SK45
SK48
SK52
SK44
SK47
SK49
SK11
SK10
SK12
SK08
SK09
SK07
SK36
SK19
SK17
SK20
SK53
SK37
SK18
SK13
SK16
SK14
SK15
SK25
SK29
SK40
SK26
SK32
SK28
SK30
SK22
SK23
SK24
SK27
SK38
SK35
SK39
SK50
Ⅰ区東
SK54
SK43
SK42
SK41
Ⅱ区西
SK55
Ⅱ区東
SK66
Ⅱ区南東
SK59
SK58
SK60
SK61
SK62
SK63
SK64
SK65
Ⅱ区南
Ⅲ区西
Ⅳ区
Ⅲ区東

第64図　土坑配置図



第65図　SK01～05平・断面図、出土遺物実測図



第66図　SK07・10～12平・断面図、出土遺物実測図

SK10（第66図）

SK10はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.0m、短辺0.5m、深さ0.34mの楕円形を呈し断面は二段掘りの逆台形である。SK11・SD23を切っている。

SK11（第66図）

SK11はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.16m、検出短辺0.74m、深さ0.14mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。SK10に切られており、SD23を切っている。

SK12（第66図）

SK12はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺3.0m、短辺1.1m、深さ0.26mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

出土遺物は274の1点で、ヘラ切りの底部から外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持つ土師器杯である。

SK13（第67図）

SK13はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.3m、短辺0.88m、深さ0.5mの隅丸三角形を呈し断面は二段掘りの逆台形である。

出土遺物は275の1点で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀に位置付けることができる。

SK14（第67図）

SK14はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺0.9m、短辺0.46m、深さ0.2mの楕円形を呈し断面は逆台形である。

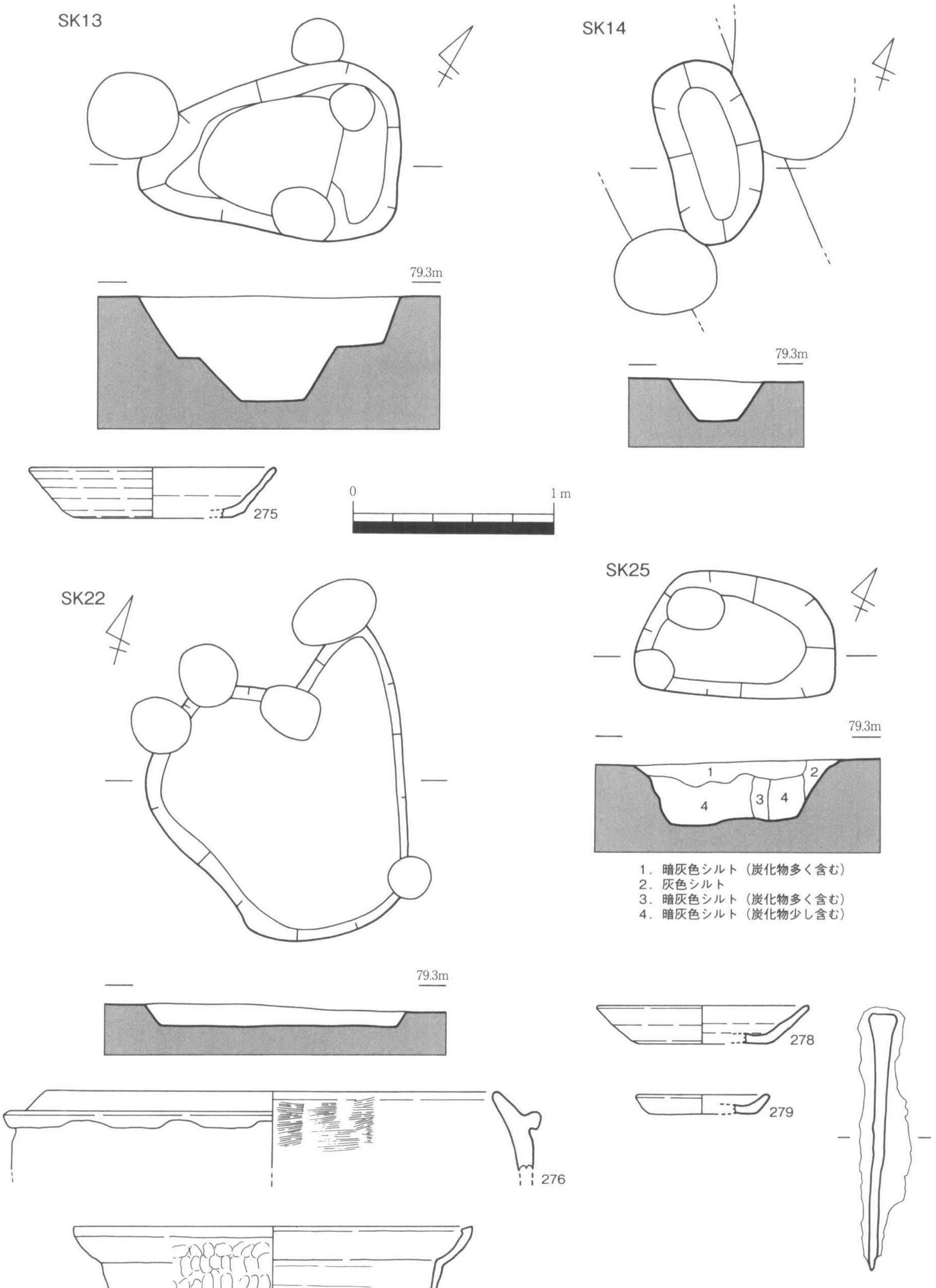
SK22（第67図）

SK22はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.4m、短辺1.34m、深さ0.12mのいびつなハート形を呈し断面は浅い皿状である。

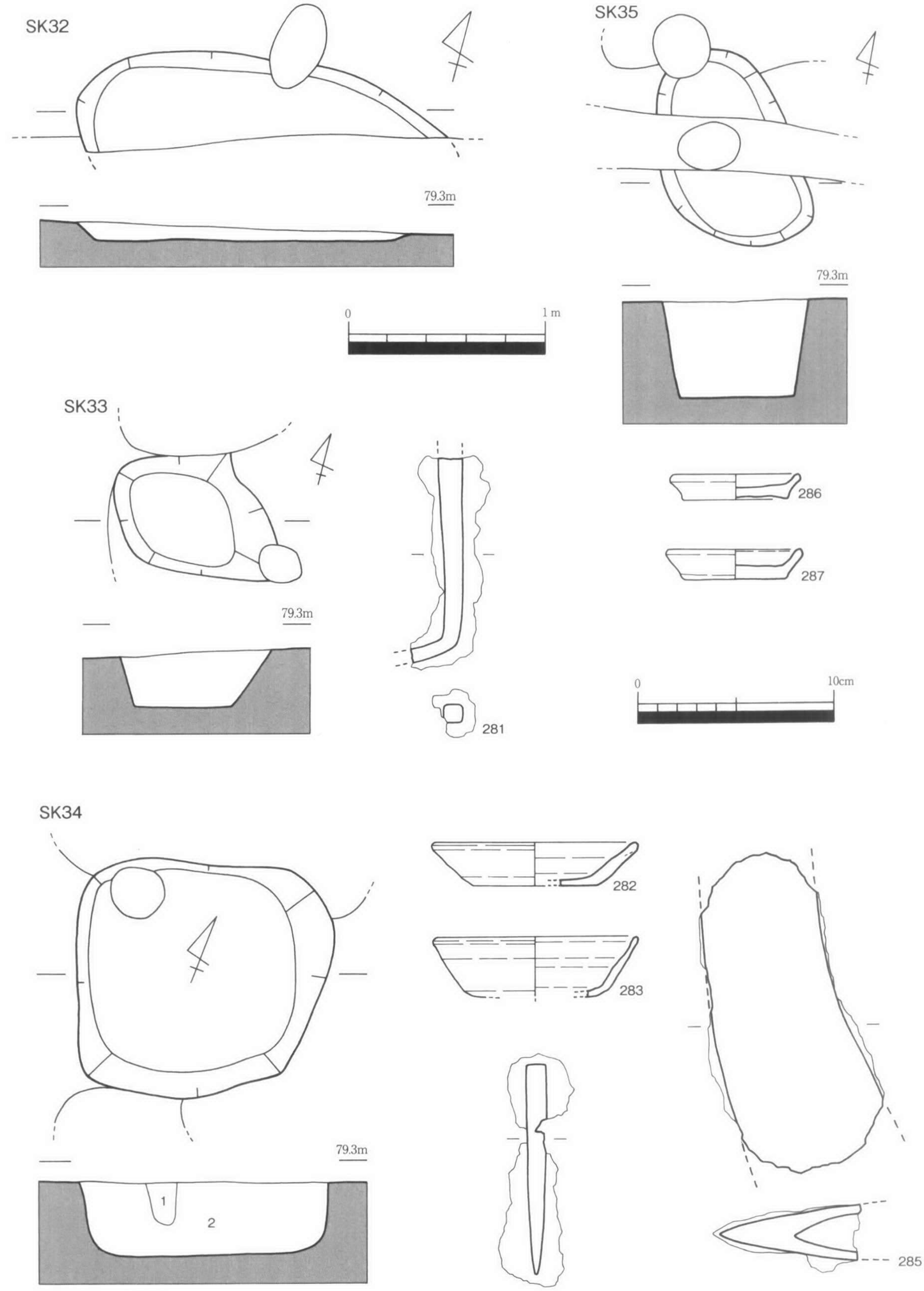
出土遺物は276～280の5点である。276は土師質羽釜で、半球状の体部に短い鍔がほぼ水平に伸びる。口縁部内側はハケ調整が見られる。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。277は土師質土鍋で、丸みを帯びた逆台形の体部から内湾気味に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は平坦面を作り出している。口縁部が受け口状になるため内面に明瞭な屈曲線を持つ。底部は格子叩きが顕著で、他は指ナデで調整されている。片桐Ⅱ-⑧～⑨で13世紀。278は土師器杯で、口径に比べて器高が低い。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。279は土師質小皿で、短く直線的に延びる口縁部を持つ。底部にはヘラ切りの痕跡が明瞭である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。280は鉄釘である。これまでの出土例よりも断面の厚みが薄い。以上の資料から14世紀に位置付けることができる。

SK25（第67図）

SK25はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.0m、短辺0.6m、深さ0.3mの楕円形を呈し断面は逆台形である。埋土は5層からなり、ブロック状の堆積が見られるが、柱痕の痕跡とも考えられる縦方向の土層もあり、柱穴の可能性もある。ただし、埋土上面まで伸び



第67図　SK13・14・22・25平・断面図、出土遺物実測図



第68図　SK32～35平・断面図、出土遺物実測図

ず、柱穴の場合は柱を切り取り、後に最終埋没したことになり、遺構上面が削平を受けていることを考えると疑問を呈する状況である。

SK32（第68図）

SK32はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.9m、検出短辺0.48m、深さ0.1mの南辺が調査区外に伸びるものの楕円形を呈するものと考えられる。なお、断面は浅い皿状である。

SK33（第68図）

SK33はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺0.92m、短辺0.66m、深さ0.28mのややいびつな隅丸方形を呈し断面は逆台形である。

出土遺物は281の1点で、鉄釘と考えられる。先端部が「L」字状に曲がっている。

SK34（第68図）

SK34はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.26m、短辺1.2m、深さ0.38mの隅丸方形を呈し断面は四角形である。

出土遺物は282～285の4点である。282は口径に比べて器高が低い土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。283はヘラ切りの底部からやや内湾気味に上方に立ち上がる口縁部を持つ土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。284は鉄釘と考えられるが、断面が四角くなく、他の製品を考えるべきかもしれない。頭部は明確に確認できず、欠損している可能性が高い。285は鉄製鋤先の破片であるが、全体の大きさ等は不明である。282・283から14世紀に位置付けることができる。

SK35（第68図）

SK35はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.02m、短辺0.7m、深さ0.47mの楕円形を呈し断面は逆台形である。

出土遺物は286～287の2点である。286・287とも土師質小皿で、ヘラ切りの底部から外反気味に短く立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半に位置付けることができる。

SK37（第69図）

SK37はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺2.84m、短辺1.6m、深さ0.7mの隅丸長方形を呈し断面は四角形である。底面に樹皮を敷き詰めた痕跡が認められた。

形状及び樹皮を敷き詰めた痕跡から考え、貯蔵施設として機能し、廃絶時に埋め戻されたものと考えられるが、埋土は複雑な様相を示す。底面の樹皮面に人為的に土を被せて面を作り、この後深さ2/3程度まで埋め戻し、再び自然埋没状態で埋まっている。大きくは上中下の3層ととらえることができる。この土層状態については明確な解釈を持ち合わせていない。今後の課題とする。

出土遺物は288～295の8点である。288はヘラ切りの底部から短く立ち上がる口縁部を持つ土師質小皿である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。289はヘラ切りの底部から直線的に開く口縁部を持つ土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世

紀第3四半期～14世紀前半。290も土師器杯であるが、器壁が289よりも厚く、やや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。291も土師器杯であるが、ヘラ切り？の底部から底径に対して大きく広がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。292は291と同形の土師器杯であろう。293は土師質土鍋の口縁部で、口縁端部を肥厚させ、口縁部内側に段を持つ。片桐Ⅲ-⑦～⑨で16世紀。294は土師質羽釜で、直立した体部に水平方向に短く伸びる鍔を持つ。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。295は青磁椀の底部で、見込み部分にヘラ描で文様が見られる。13～14世紀ヵ。以上の資料から14世紀に位置付けるのが妥当であろう。

SK36（第70図）

SK36はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺3.4m、短辺0.78m、深さ0.3mの楕円形を呈し断面は逆台形である。SD28から分岐した溝とも考えられるが、溝状遺構との接点に柱穴がかたまって存在するため、厳密には切りあい関係があるのかどうかは不明である。ここでは、単体の土坑と考えておく。

SK38（第70図）

SK38はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.06m、短辺0.54m、深さ0.34mの楕円形を呈し断面は逆台形である。

出土遺物は296の1点で、白磁椀の口縁部と考えられる。口縁端部外側を肥厚させて終わる。

SK39（第70図）

SK39はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.1m、短辺0.66m、深さ0.08mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

SK40（第70図）

SK40はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.1m、短辺0.48m、深さ0.58mの楕円形を呈し断面は四角形である。

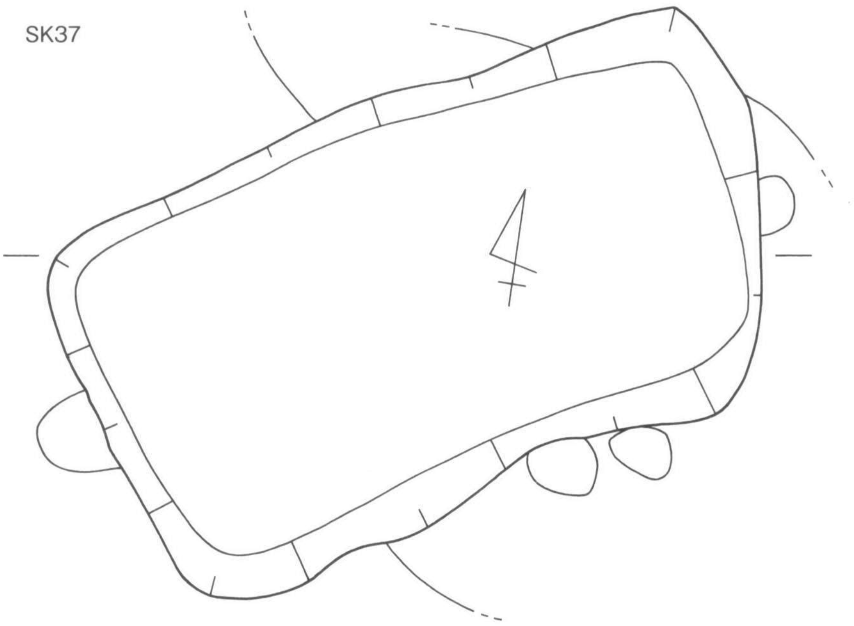
出土遺物は297の1点で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ土師器杯である。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半に位置付けることができる。

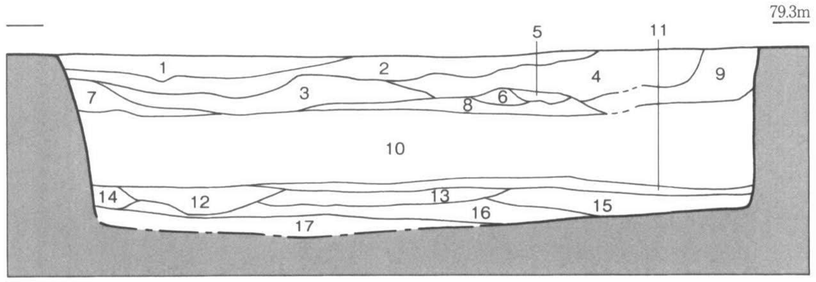
SK44（第70図）

SK44はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺0.9m、短辺0.64m、深さ0.14mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

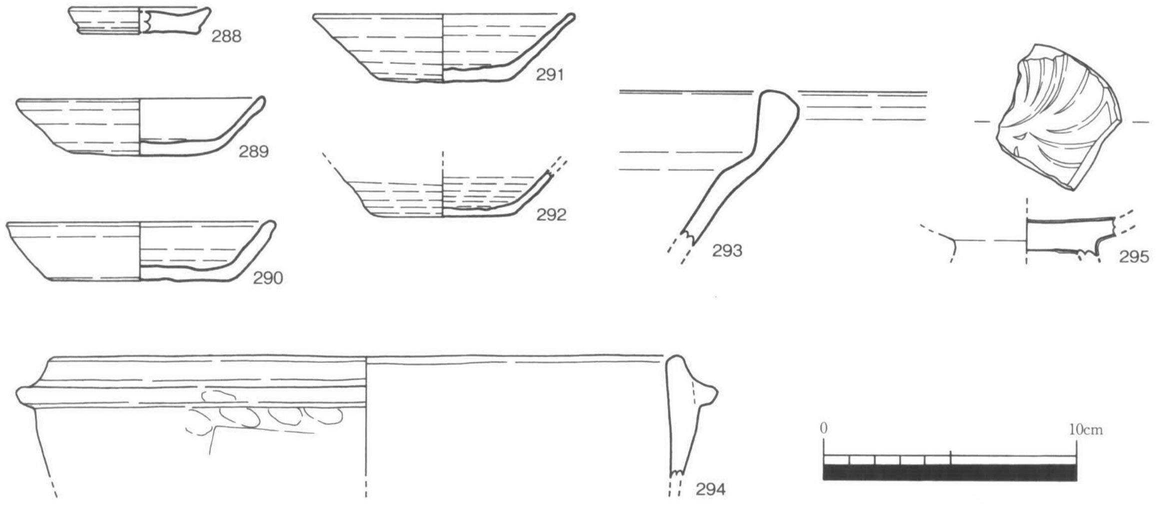
SK45（第71図）

SK45はⅠ区中央で検出された南北主軸の長辺1.56m、短辺1.0m、深さ0.1mの土坑墓で中世集落の西辺溝外方に単独で営まれる。遺骸は残存していないが短刀（298）1口を副葬する。全体を錆で覆われており、X線写真から見て、全長30cm、刃部長25cm、最大幅2.6cm、厚み0.6cmを測る。

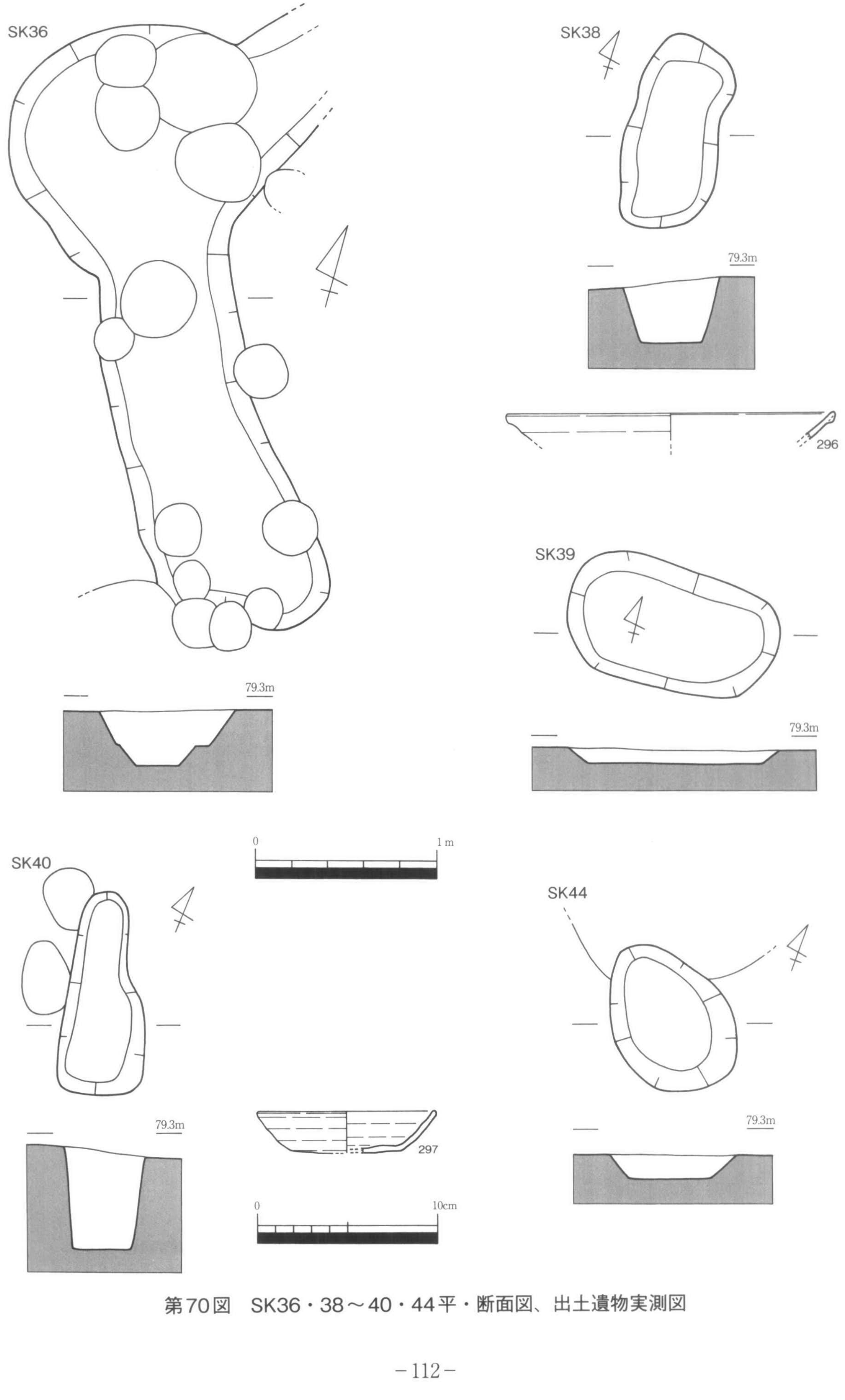




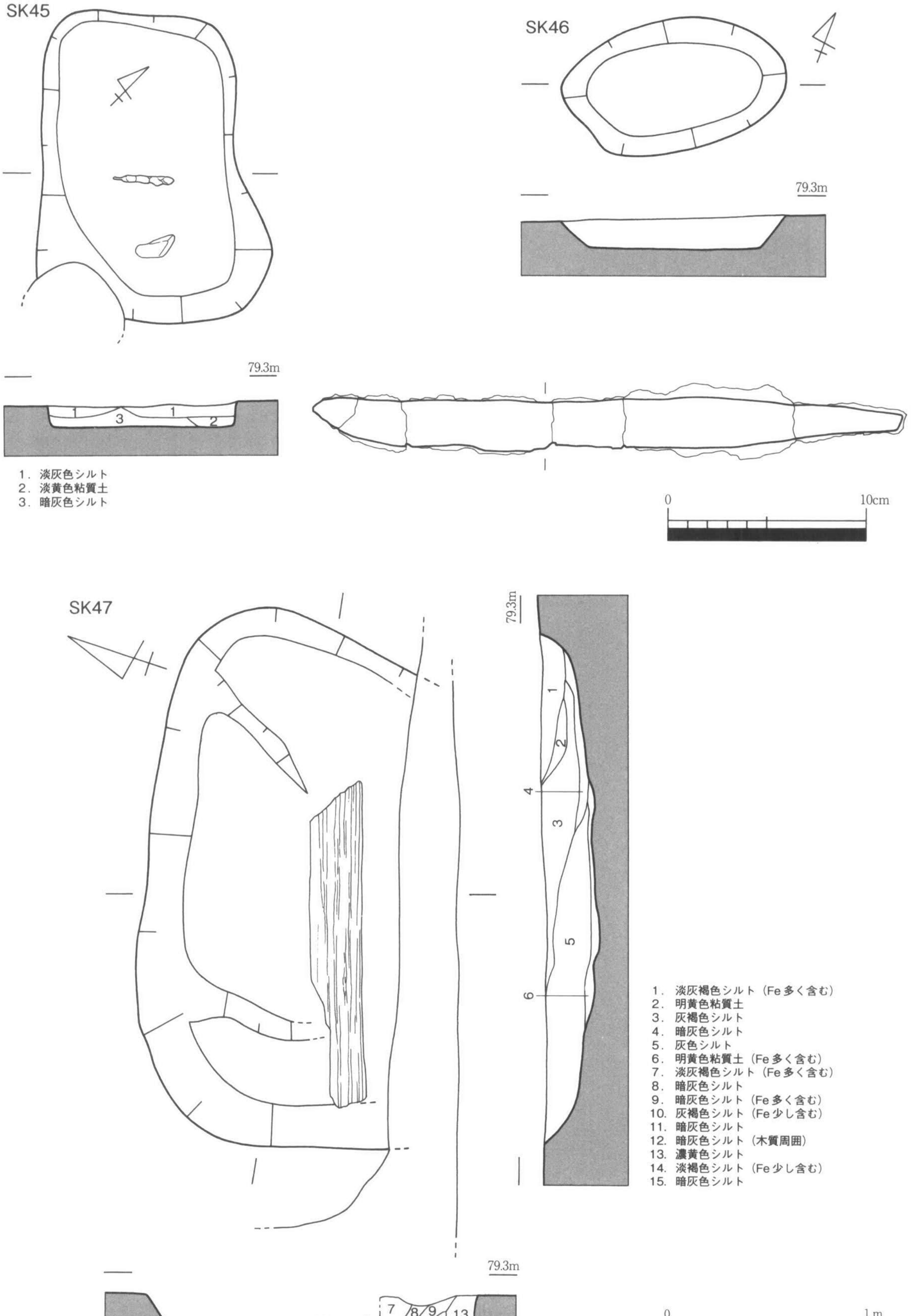
1．灰色シルト（Mn少し含む）
2．暗灰色シルト（Mn少し含む）
3．灰色シルト（炭化物少し含む）
4．暗灰色シルト（炭化物多く含む）
5．暗灰橙色細砂（炭化物多く含む）
6．灰色シルト
7．灰色シルト（地上ブロック混入）
8．明黄色粘質土
9．淡灰色シルト（Mn少し含む）
10．淡褐色シルトブロック
11．淡橙色粘質土
12．濃橙色粘質土
13．暗灰色シルトブロック
14．淡灰色シルトブロック
15．灰色シルト
16．淡灰色粘質土ブロック
17．淡灰黄色シルト



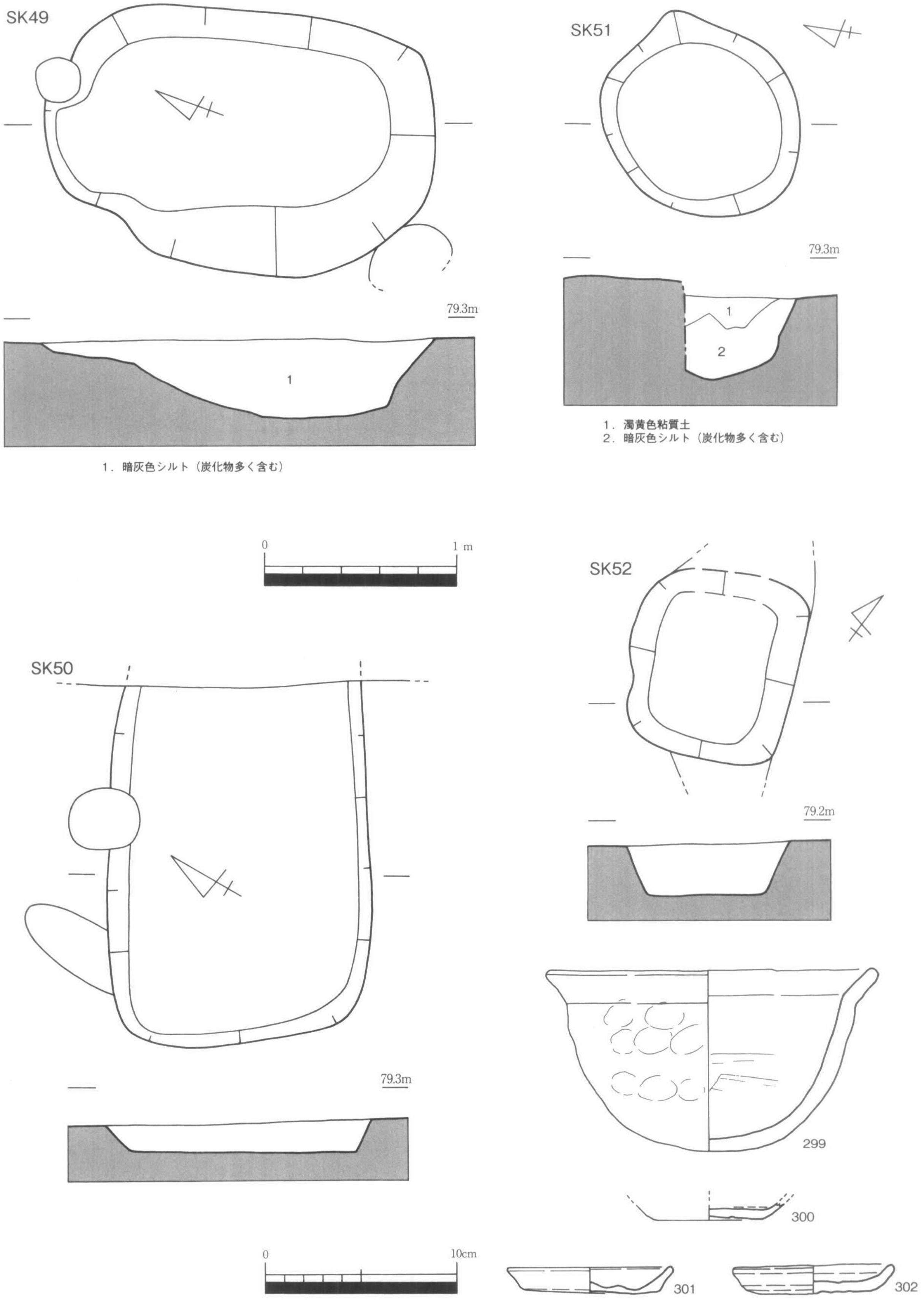
第69図　SK37平・断面図、出土遺物実測図



第70図　SK36・38～40・44平・断面図、出土遺物実測図



第71図　SK45～47平・断面図、出土遺物実測図



第72図　SK49～52平・断面図、出土遺物実測図

SK46（第71図）

SK46はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.14m、短辺0.66m、深さ0.16mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

SK47（第71図）

SK47はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺2.7m、検出短辺1.26m、深さ0.26mを測る隅丸長方形の土坑で、南辺をSD13に切られている。床面には板材を敷き詰めた痕跡が認められた。埋土は西から東への流入土が顕著で、貯蔵施設として使用された後、自然埋没したものと考えられる。

SK49（第72図）

SK49はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺2.04m、短辺1.34m、深さ0.4mの楕円形を呈し断面は片側が深くなる船底状である。

SK50（第72図）

SK50はⅠ区中央で検出された土坑で、検出長辺1.86m、短辺1.38m、深さ0.16mの四角形を呈し断面は浅い皿状である。

SK51（第72図）

SK51はⅠ区中央で検出された土坑で、径1.0m、深さ0.42mの円形を呈し断面は逆台形である。

SK52（第72図）

SK52はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺0.98m、短辺0.88m、深さ0.26mの方形を呈し断面は逆台形である。

出土遺物は299～302の4点である。299は土師質土鍋で、半球状の体部に、短く屈曲する口縁部を持つ。300はヘラ切りの底面を持つ土師器杯である。301はヘラ切りの底部から短く直線的に立ち上がる口縁部を持つ土師質小皿である。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。302も土師質小皿である。ヘラ切りの底面から丸みを持って短く立ち上がる。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半に位置付けることができる。

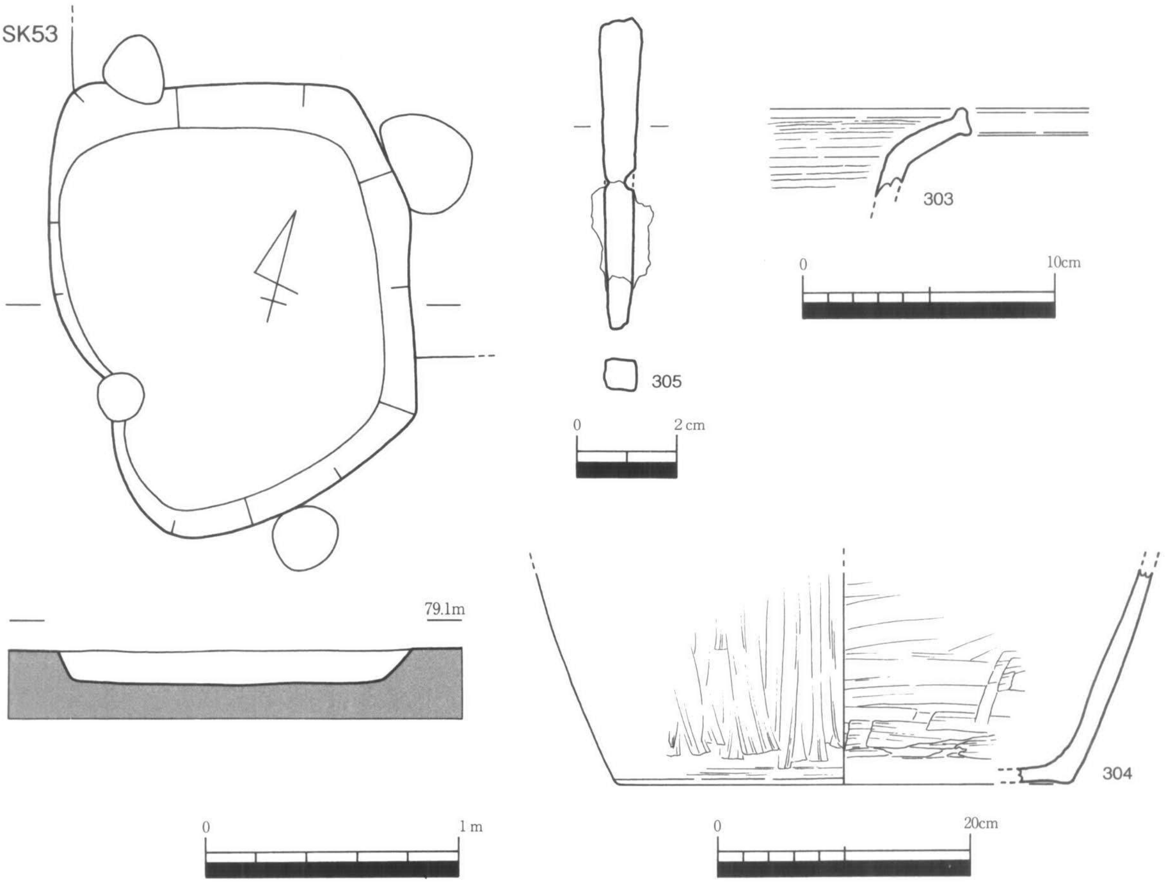
SK53（第73図）

SK53はⅠ区中央で検出された土坑で、長辺1.8m、短辺1.44m、深さ0.14mのいびつな方形を呈し断面は浅い皿状である。

出土遺物は303～305の3点である。303は土師質甕の口縁部片で、外反する口縁部の端面を強く横ナデし、上下に拡張した状況になっている。内面はハケ調整を施している。片桐Ⅱ-①で11世紀前半。304は備前焼甕底部片と考えられ、ヘラ削りが見られる底面から直線的に外上方の延びる体部を持つ。305は鉄釘の先端部で、断面は四角である。頭部は欠損していると考えられる。

SK41（第74図）

SK41はⅠ区東で検出された土坑で、長辺1.64m、短辺1.3m、深さ0.28mの隅丸方形を呈し断面は浅い皿状である。



第73図　SK53平・断面図、出土遺物実測図

SK42（第74図）

SK42はⅠ区東で検出された土坑で、長辺1.52m、短辺0.98m、深さ0.06mの隅丸方形を呈し断面は浅い皿状である。

出土遺物は3061点で、板目痕を残す底面から短く立ち上がる口縁部を持つ土師質小皿である。佐藤2000Ⅱ−3〜5で13世紀第2四半期〜14世紀前半に位置付けることができる。

SK43（第74図）

SK43はⅠ区東で検出された土坑で、長辺0.86m、短辺0.76m、深さ0.18mの隅丸三角形を呈し断面は逆台形である。

SK54（第74図）

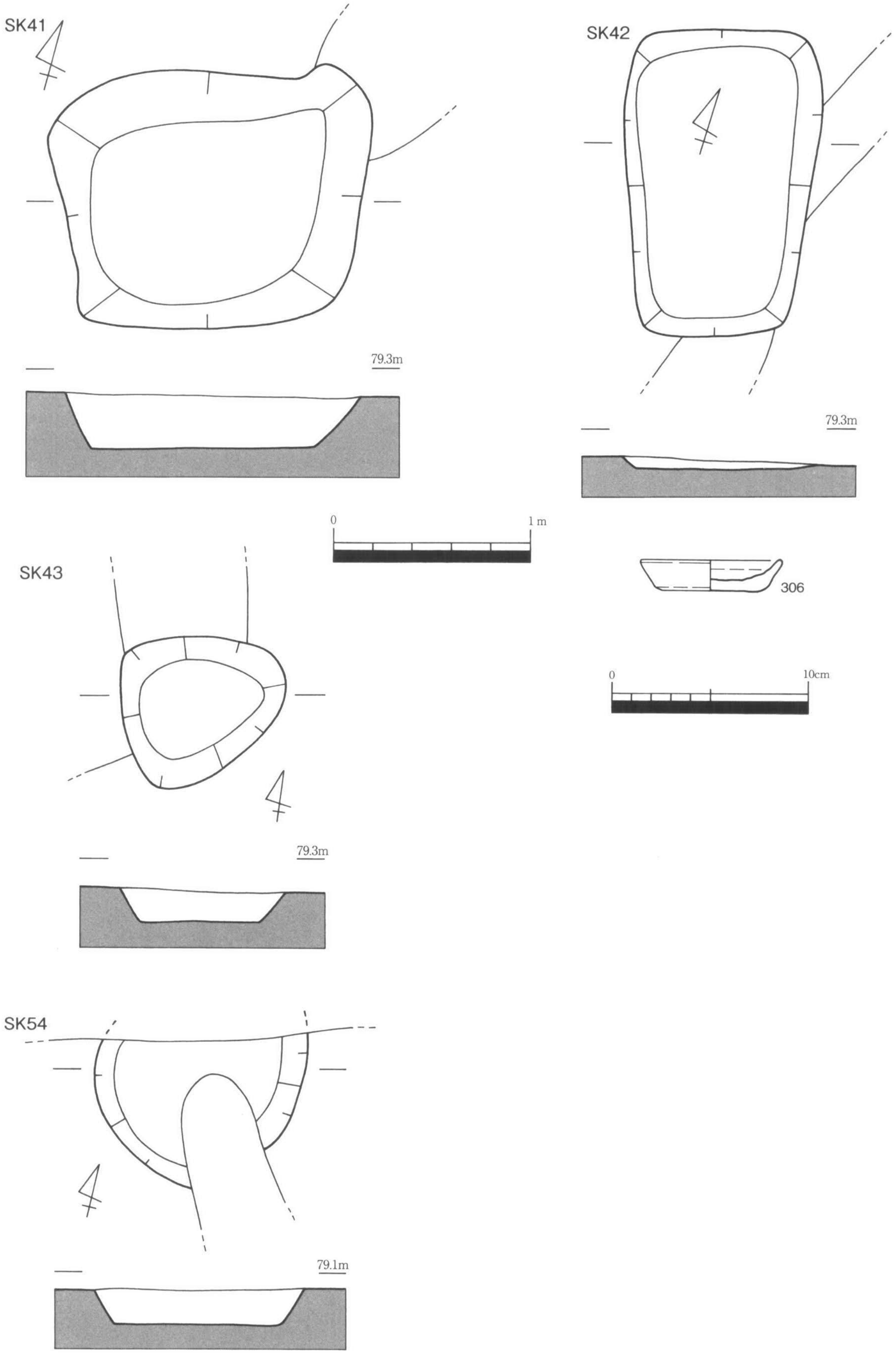
SK54はⅠ区東で検出された土坑で、北側が調査区外に伸びているが、現状では径1.06m、深さ0.16mの円形を呈し断面は逆台形である。

SK56（第75図）

SK56はⅡ区南で検出された土坑で、検出長辺1.96m、短辺1.64m、深さ0.1mの不定形を呈し断面は浅い皿状である。

SK58（第75図）

SK58はⅡ区南で検出された土坑で、検出長辺0.88m、短辺0.58m、深さ0.1mの三角形



第74図　SK41～43・54平・断面図、出土遺物実測図

を呈し断面は浅い皿状である。北側は調査区外に伸びる。

SK59（第75図）

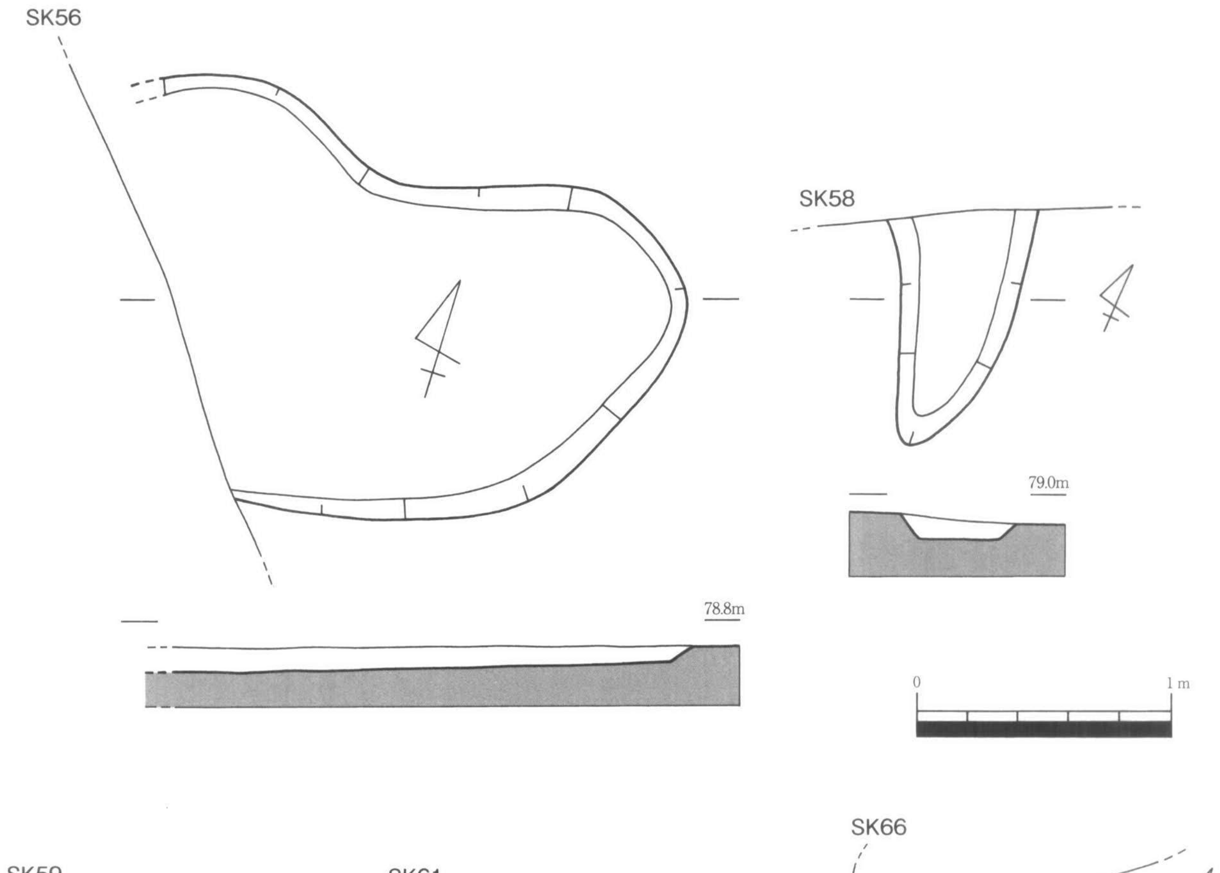
SK59はⅡ区南で検出された土坑で、検出長辺0.8m、短辺0.6m、深さ0.12mの四角形を呈し断面は浅い皿状である。北側は調査区外に伸びる。

SK61（第75図）

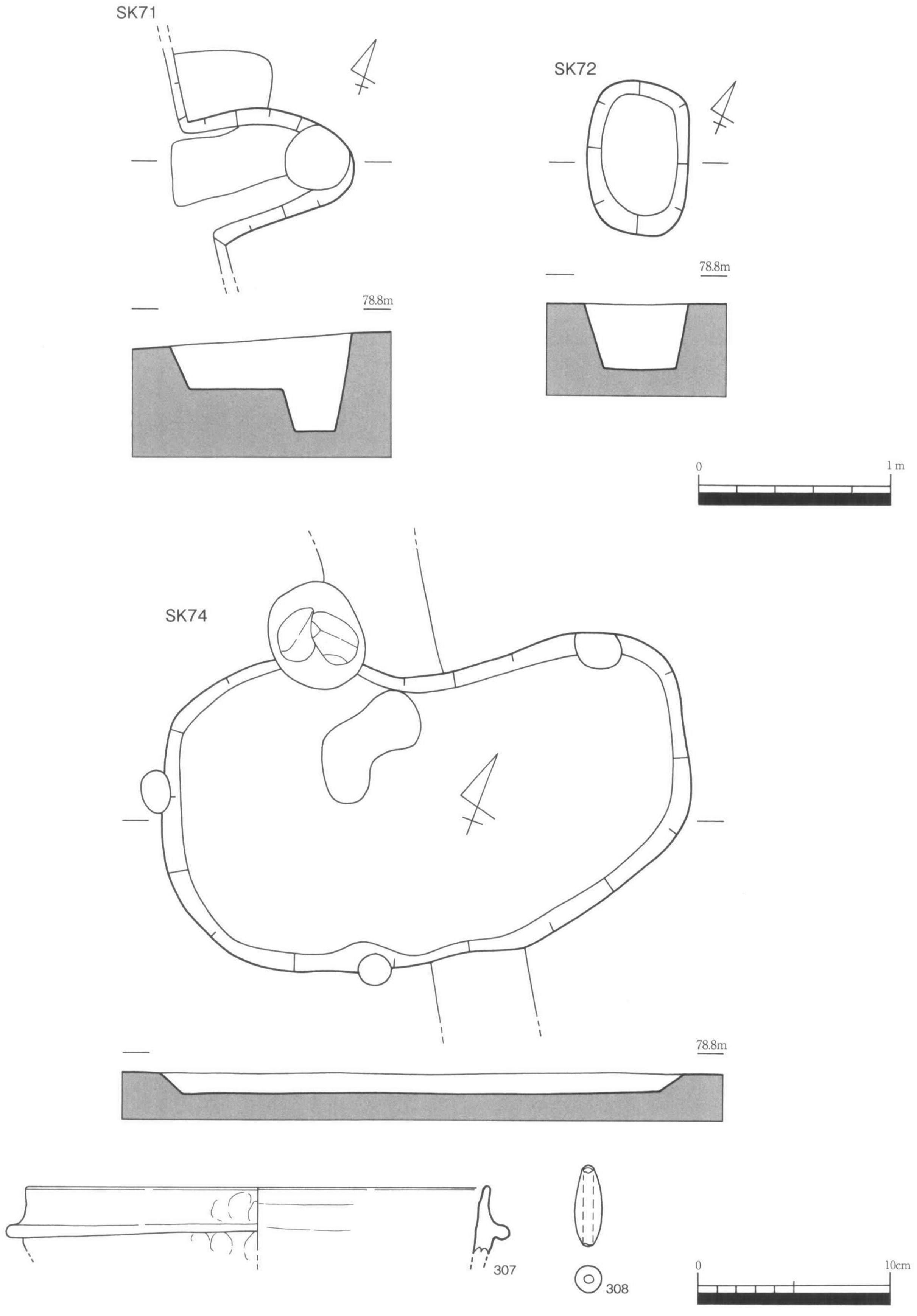
SK61はⅡ区南で検出された土坑で、長辺0.96m、短辺0.46m、深さ0.05mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

SK66（第75図）

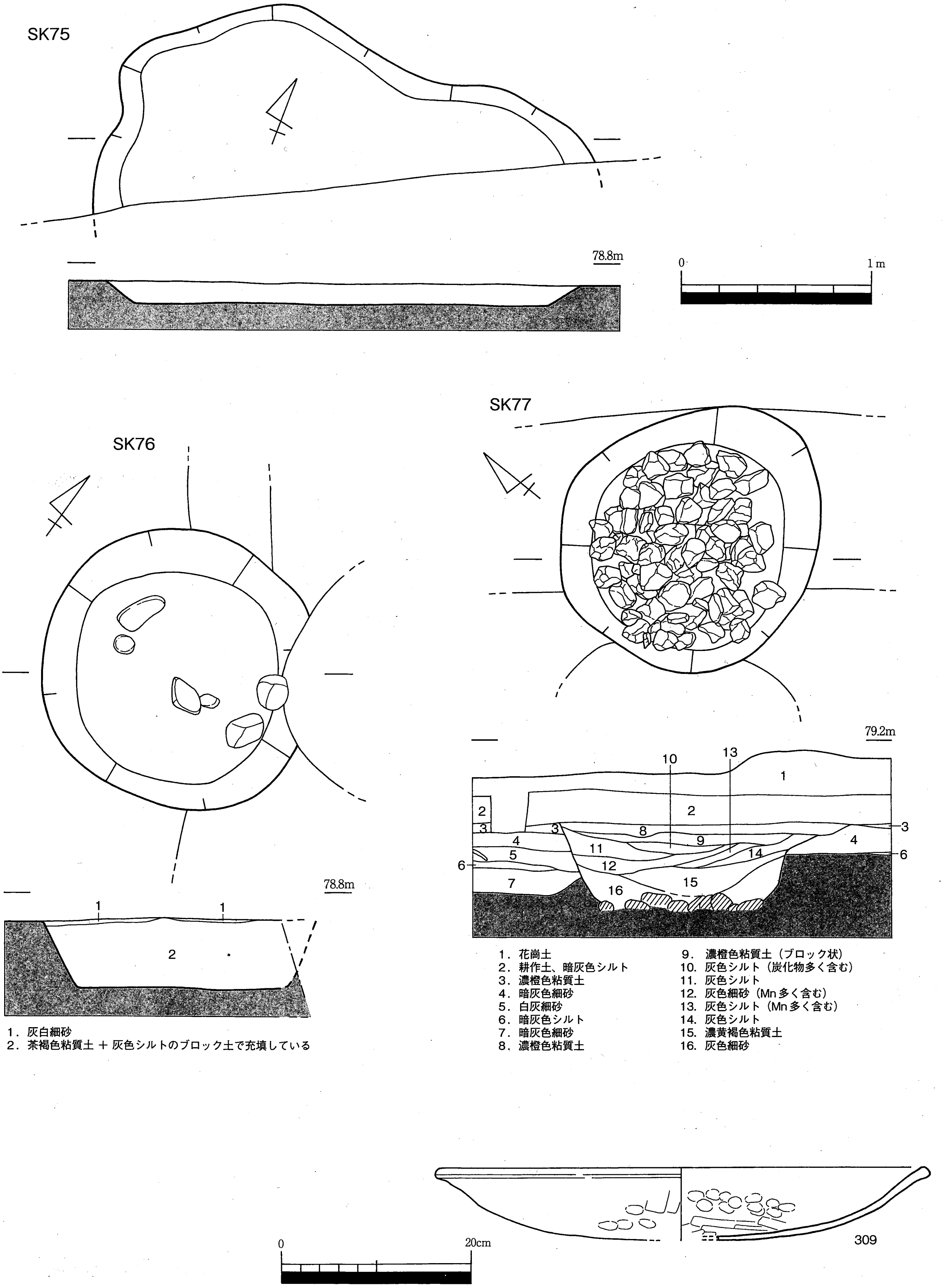
SK66はⅡ区南で検出された土坑で、長辺1.26m、短辺0.62m、深さ0.1mの不定形を呈し断面は浅い皿状である。



第75図　SK56・58・59・61・66平・断面図



第76図　SK71・72・74平・断面図、出土遺物実測図



第77図　SK75～77平・断面図、出土遺物実測図

SK71（第76図）

SK71はⅥ区で検出された土坑で、検出長辺0.8m、短辺0.66m、深さ0.24～0.48mの不定形を呈し断面は二段掘りである。

SK72（第76図）

SK72はⅥ区で検出された土坑で、長辺0.8m、短辺0.52m、深さ0.32mの隅丸方形を呈し断面は逆台形である。

SK74（第76図）

SK74はⅥ区で検出された土坑で、長辺2.7m、短辺1.6m、深さ0.1mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

出土遺物は307と308の2点である。307は土師質羽釜で、外傾する体部に短い鍔を持つ。時期不明。308は紡錘形の土錘である。

SK75（第77図）

SK75はⅥ区で検出された土坑で、南辺が調査区外に伸びるため、長辺2.6m、検出短辺1.0m、深さ0.12mの楕円形を呈し断面は浅い皿状である。

SK76（第77図）

SK76はⅥ区で検出された土坑で、径1.5m、深さ0.36mの円形を呈し断面は逆台形である。

SK77（第77図）

SK77はⅥ区で検出された土坑で、径1.4m、深さ0.46mの円形を呈し断面は逆台形である。Pit底には拳大の円礫が敷き詰められている。埋土は周辺からの土砂の流入を物語るものであり、自然埋没の状況であると考えられる。

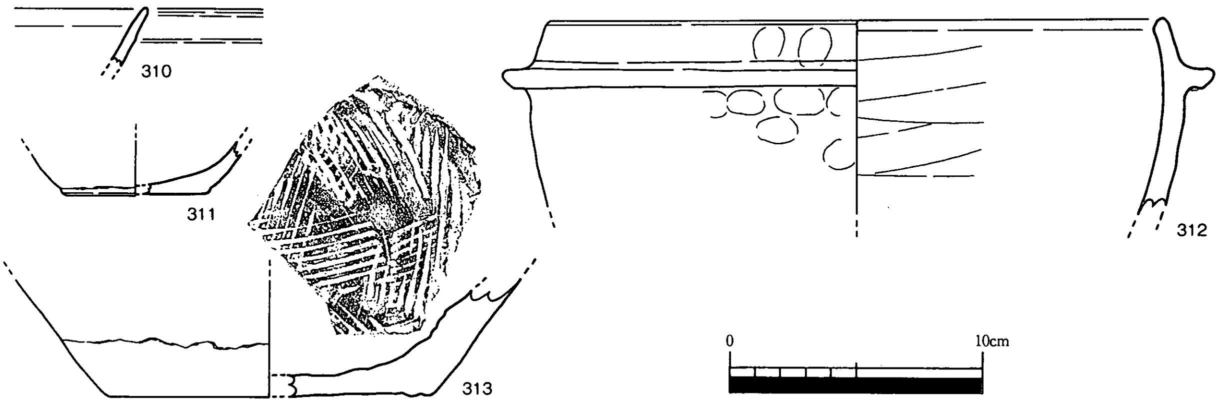
309は土師質焙烙である。浅い皿状の体部に肥厚した口縁端部を持つ。内底部分に板ナデが見られるほか、指押さえが顕著である。近世の所産であると考えられる。

5　包含層

包含層出土の資料は、その地区の遺構の年代とほぼ同様の年代を与えることができる。このことは、本遺跡の遺構群が、小規模な開析谷を挟んだ小丘陵を単位として構成されているため、それぞれの遺構群が南北方向に伸びることが確認される。このことから、南側に広がる同時期の遺跡に伴う資料が、後世包含層資料として堆積したものと考えられる。

①　Ⅰ区西包含層（第78図）

310は青磁椀口縁部片で、外面に沈線が1条見られる。13～14世紀ヵ。311は土師器杯底部で、ヘラ切り底である。312は土師質羽釜で、半球状の体部から水平で短い鍔がある。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。313は備前焼？擂鉢で、内側底面の卸し目は「×」、側面にも卸目が見られる。



第78図　Ⅰ区西包含層出土遺物実測図

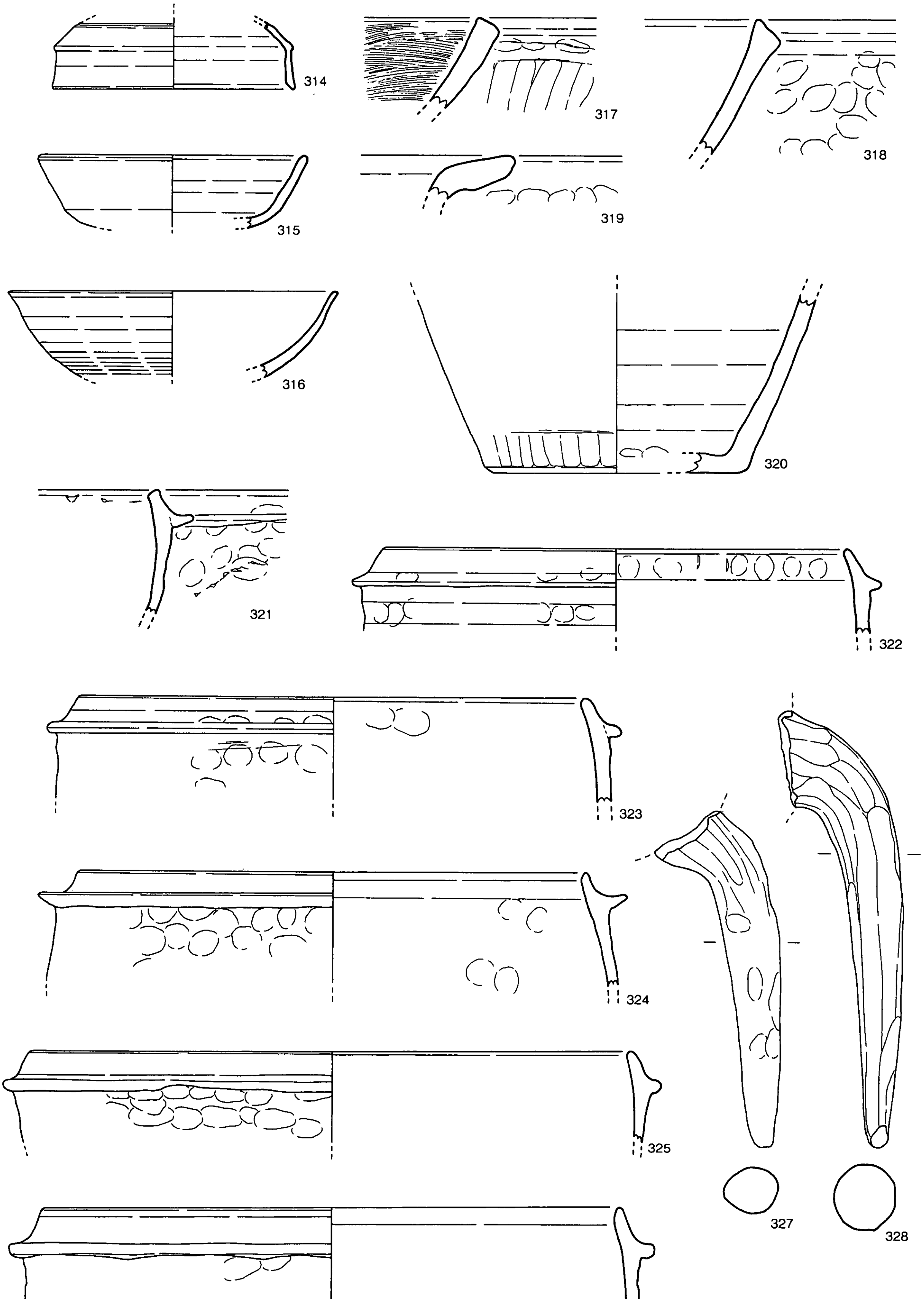
②　Ⅰ区中包含層（第79・80図）

中性集落跡がまとまって検出された調査区である。

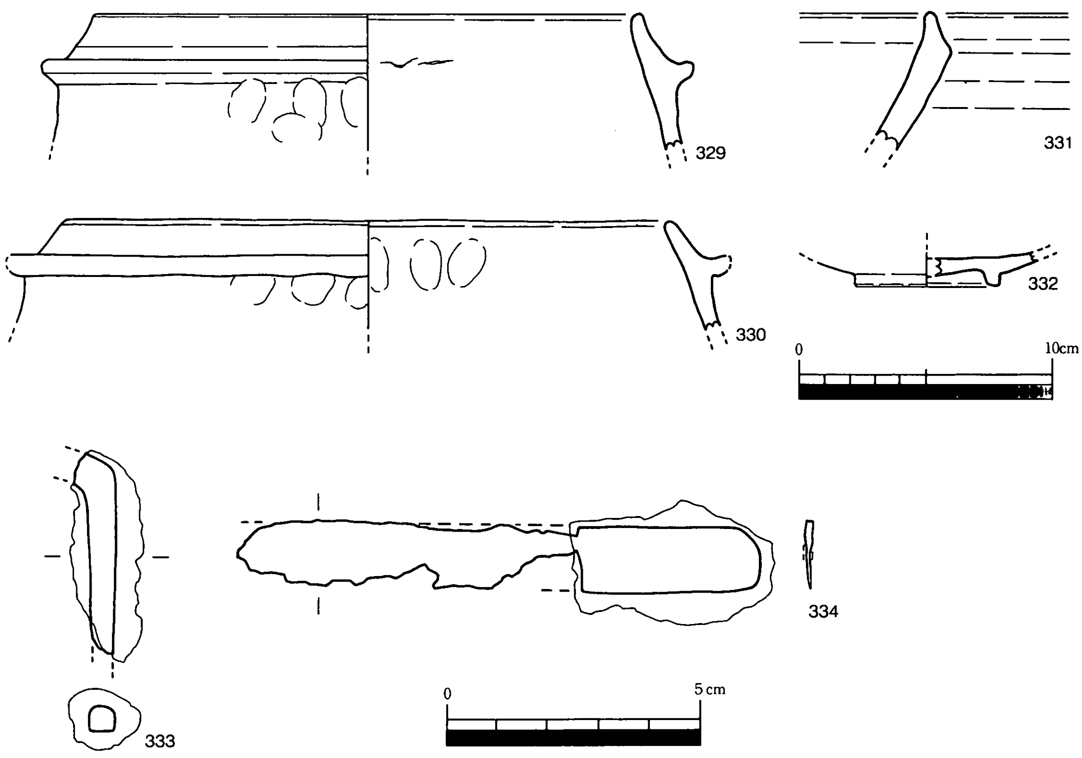
314は須恵器杯蓋で、TK47に比定され、5世紀後半。315は須恵器杯で、口縁部は直線的に伸び、端部丸い。佐藤1993Ⅰ-2で7世紀後半。316は須恵器杯で、体部は椀形で部分的に緑釉が見られる。317は須恵質こね鉢の口縁部片で、時期は不明である。318は須恵質こね鉢口縁部片で、片桐Ⅲ-⑥～⑦に比定され、15世紀後半～16世紀前半である。319は、土師質土鍋口縁部片で、時期は不明である。320は須恵器壺底部で、直線的に立ち上がる体部から佐藤1993Ⅲ-1～4、9世紀後半～10世紀後半と考えられる。321は土師質羽釜口縁部片で、鍔は水平で細くなる。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。322は土師質羽釜口縁部片で、鍔は短くやや下がり気味に付く。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。323は土師質羽釜口縁部片で、鍔は短く水平である。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。324は土師質羽釜口縁部片で、鍔はやや上向きに付く。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。325は土師質羽釜口縁部片で、鍔は短い。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。326は土師質羽釜口縁部片で、鍔は短く水平に付く。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。327・328は、土師質土鍋もしくは羽釜の脚である。329は土師質羽釜口縁部片で、鍔は短い。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。330は土師質羽釜口縁部片で、鍔はやや上向きに付く。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。331は土師質こね鉢口縁部で、片口端部を上方に拡張する。片桐Ⅲ-⑤～⑥で15世紀。332は陶器椀もしくは皿で、内外面に施釉が見られる。333は鉄釘片で、先端部・頭部が欠損している。頭部側で「L」字に屈曲させている。334は鉄刀子と考えられる資料であるが、錆と剥落により原形をとどめていない。

③　Ⅰ区東包含層（第81図）

335は土師質小皿で、底部ヘラ切り、口縁部は短く立ち上がる。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。336は白磁椀である。337は土師質羽釜口縁部片で、鍔は短く断面三角形である。片桐Ⅲ-①～⑦で14世紀～16世紀前半。



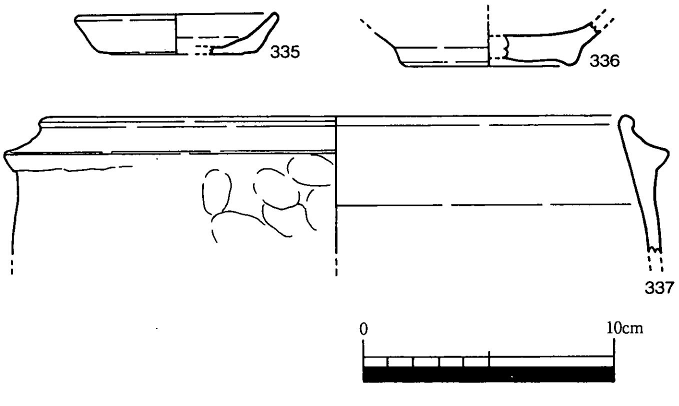
第79図　Ⅰ区中包含層出土遺物実測図（1）



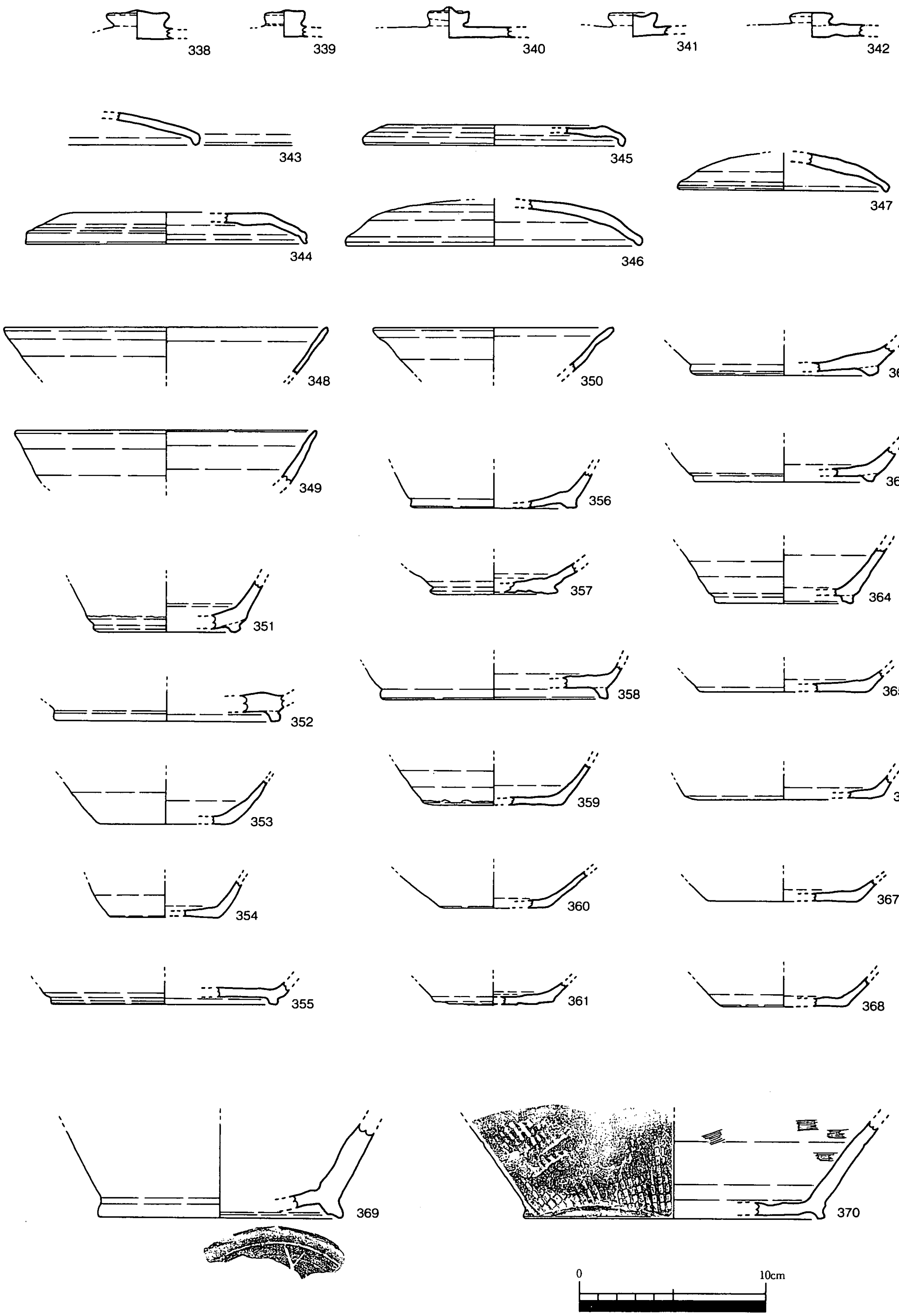
第80図　Ⅰ区中包含層出土遺物実測図（2）

④　Ⅱ区西包含層（第82～85図）

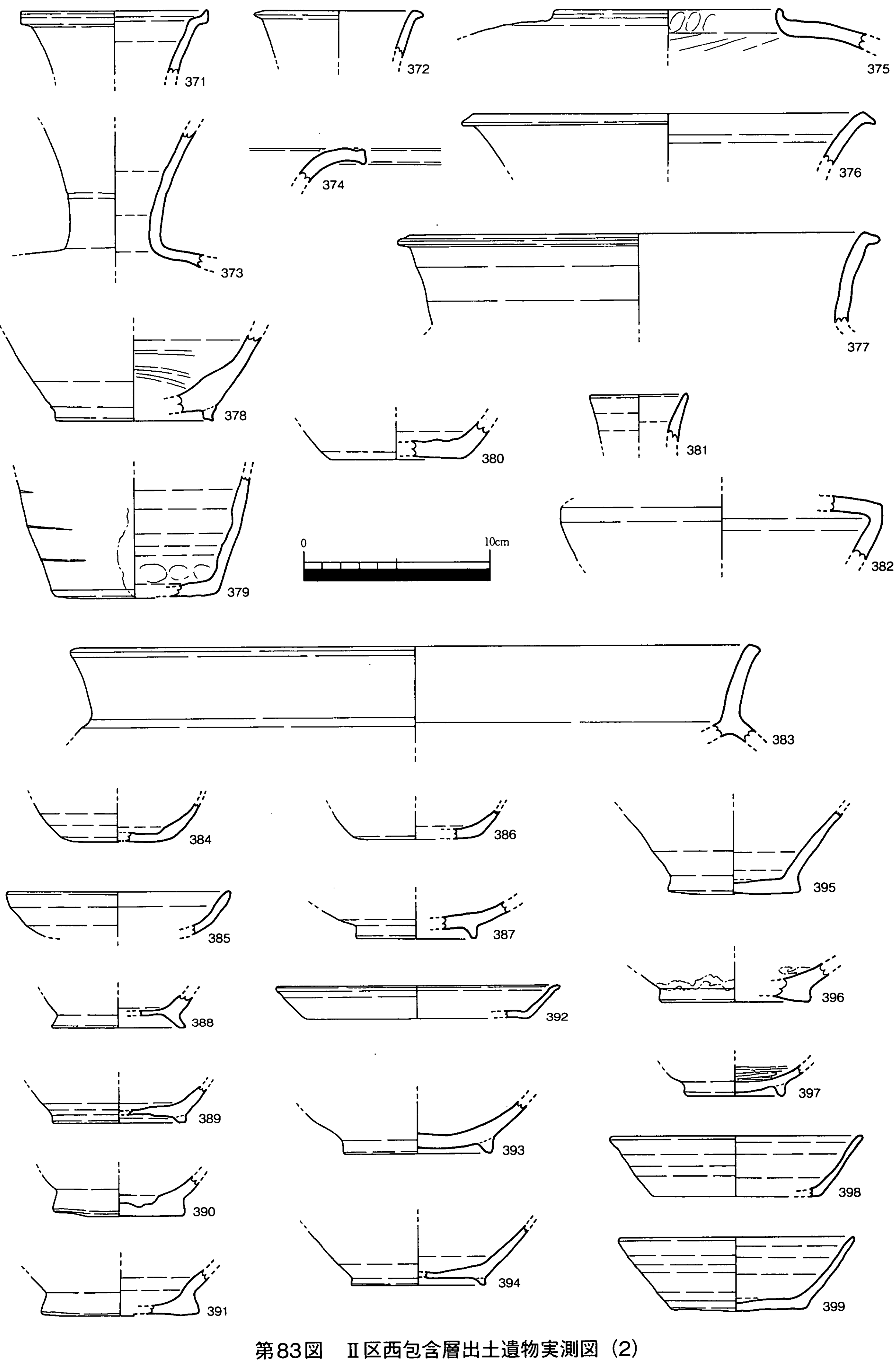
338は須恵器杯蓋摘みで、扁平な形である。佐藤1993 Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。339は須恵器杯蓋摘みで、ボタン状を呈している。佐藤1993 Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。340は須恵器杯蓋摘みで、扁平な形である。佐藤1993 Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。341は須恵器杯蓋摘みで、扁平な形である。佐藤1993 Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。342は須恵器杯蓋摘みで、扁平な形である。佐藤1993 Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。343は須恵器杯蓋で、端部を下方に拡張している。佐藤1993 Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。344・345は須恵器杯蓋で、天井部は平坦、端部を下方に拡張している。佐藤1993 Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。346・347は須恵器杯蓋で、天井部からなだらかに下降し端部は丸く終わる。佐藤1993 Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。348は須恵器杯で、体部は直線的に伸び端部は丸く終わる。7世紀後半～9世紀後半頃。349は須恵器杯で、体部は直線的に伸び、少し外反して端部は細く終わる。7世紀



第81図　Ⅰ区東包含層出土遺物実測図



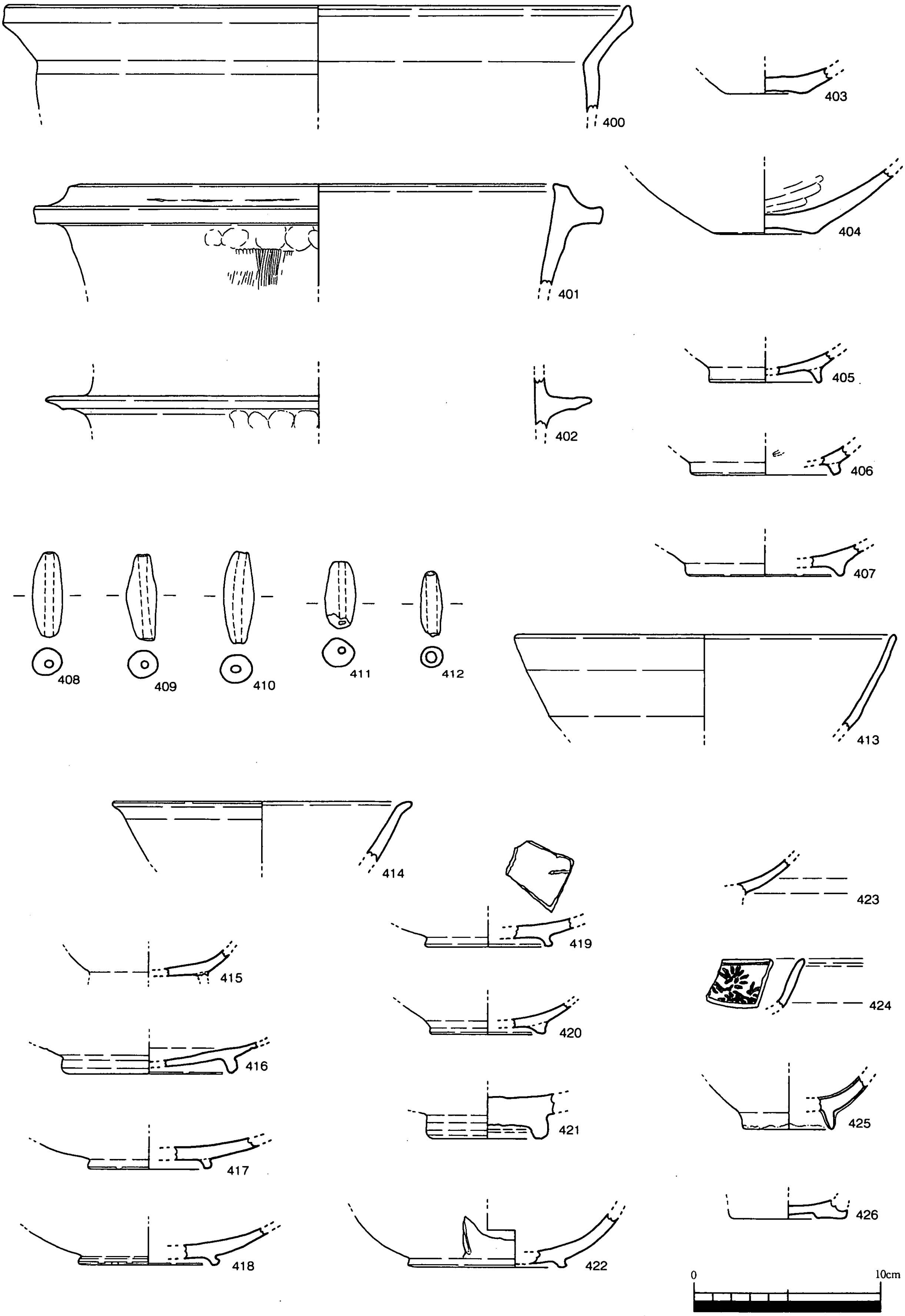
第82図　Ⅱ区西包含層出土遺物実測図（1）



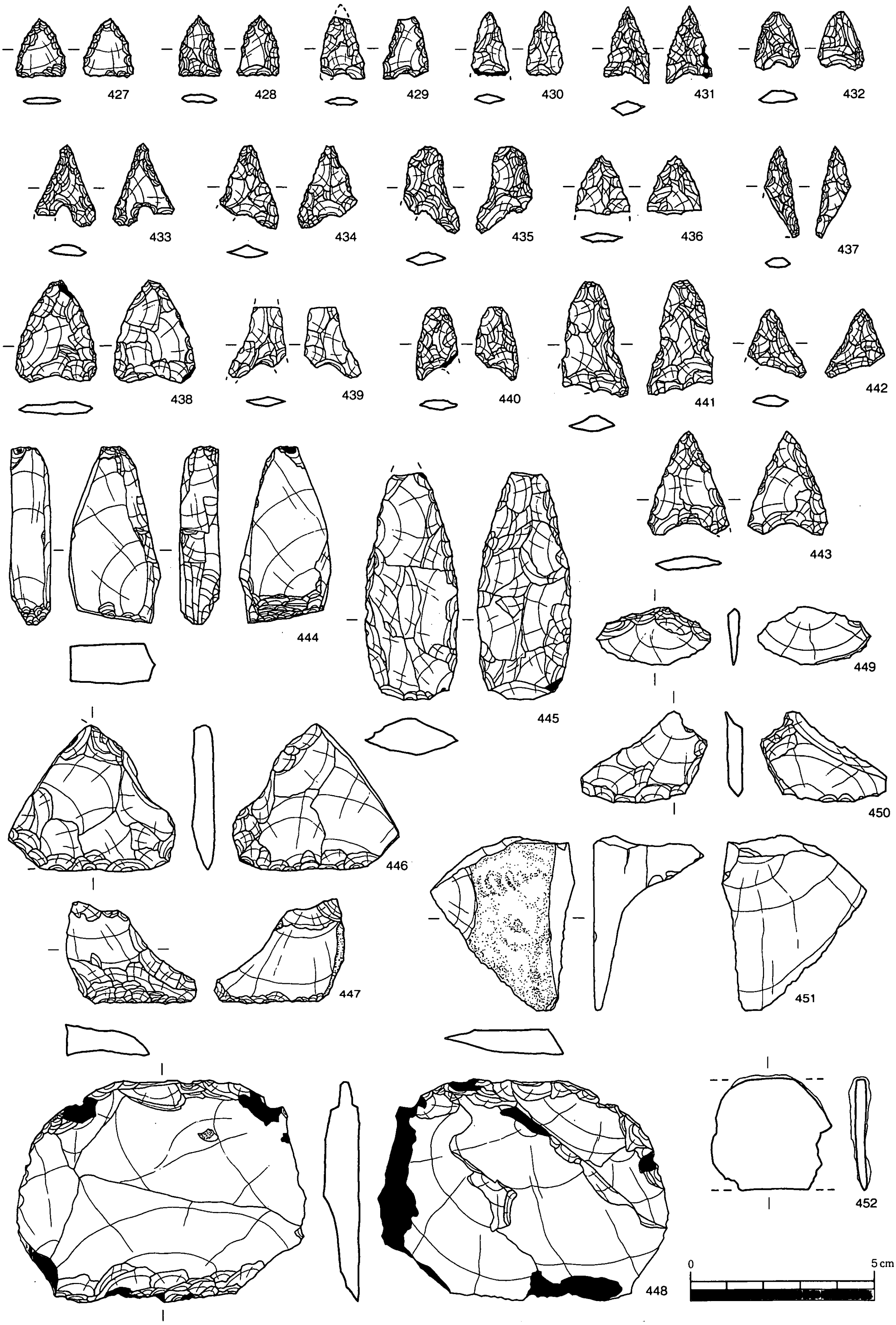
第83図　Ⅱ区西包含層出土遺物実測図（2）

後半～9世紀後半頃。350は須恵器杯で、体部は直線的に伸び端部は丸く終わる。7世紀後半～9世紀後半頃。351は須恵器杯底部片で、高台は丸く、外側に踏ん張る。佐藤1993Ⅲ－1～3で9世紀後半～10世紀中頃。352は須恵器杯底部片で、高台は四角く垂直に降下する。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。353・354は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から内湾気味に上方に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。355は須恵器杯底部片で、高台は四角く垂直に降下する。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。356は須恵器杯底部片で、高台は四角く、若干外に踏ん張る。かかと上がりである。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。357は須恵器杯底部片で、ヘラ切りの円板高台である。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。358は須恵器杯底部片で、高台は四角く、若干外に踏ん張る。体部は内湾気味に立ち上がる。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。359は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。360は須恵器杯底部片で、体部は直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。361は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。362は須恵器杯底部片で、高台は逆台形を呈し垂直に降下する。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。363は須恵器杯底部片で、高台は逆台形を呈し垂直に降下する。高台は低い。佐藤1993Ⅱ－1～5で8世紀～9世紀中頃。364は須恵器杯底部片で、高台は四角く、垂直に降下する。かかと上がりである。佐藤1993Ⅲ－1～3で9世紀後半～10世紀中頃。365は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。366は須恵器杯底部片で、体部は平坦な底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。367・368は須恵器杯底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。7世紀後半～9世紀後半頃。369は須恵器壺底部片で、高台は四角く、外側に踏ん張る。かかと上がりである。底面にヘラ記号「×」？が見られる。佐藤1993Ⅱ－2で8世紀中頃。370は須恵器壺底部片で、高台は四角く、外側に踏ん張る。外面には格子状叩きが見られる。9世紀代ヵ。371は須恵器壺口縁部片で、体部から直線的に立ち上がった後、水平に短く伸び、端部は上方に拡張する。佐藤1993Ⅱ－2～Ⅲ－4で8世紀中頃～10世紀後半。372は須恵器壺口縁部片で、口縁端部外面側を拡張する。佐藤1993Ⅱ－2～Ⅲ－4で8世紀中頃～10世紀後半。373は須恵器壺頸部片で、頸部中位より下に形骸化した沈線が見られる。佐藤1993Ⅱ－2～Ⅲ－4で8世紀中頃～10世紀後半。374は須恵器壺口縁部片で、口縁端部は四角く作る。佐藤1993Ⅱ－2～Ⅲ－4で8世紀中頃～10世紀後半。375は須恵器短頸壺口縁部片で、垂直に短く伸び、口縁部を形成する。時期は不明。376は須恵器壺口縁部片で、外反気味に立ち上がり、外面側端部を拡張する。佐藤1993Ⅱ－2～Ⅲ－4で8世紀中頃～10世紀後半。377は須恵器壺口縁部片で、体部からやや外反気味に立ち上がり、外面側端部を拡張する。佐藤1993Ⅱ－2～Ⅲ－4で8世紀中頃～10世紀後半。378は須恵器壺底部片で、四角く垂直に降下する高台を持つ。体部は内湾気味に立ち上がる。佐藤1993Ⅱ－2で8世紀中頃。379・380は須恵器壺底部片で、体部はヘラ切り底から直線的に立ち上がる。佐藤1993Ⅲ－1～4で9世紀後半～10世紀後半。381は須恵器平瓶

口縁部片で、短く外反気味に立ち上がる。9世紀頃ヵ。382は須恵器平瓶体部片で、底部から直線的に立ち上がった後、直角に近く屈曲する体部を持つ。9世紀頃ヵ。383は土師質の土器で、器種は不明である。384は土師器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。385は土師器杯で、体部は内湾気味に立ち上がり、端部を細く仕上げる。386は土師器杯で、内湾気味に立ち上がる体部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。387は土師器椀で、三角形の高台が垂直に降下する。388は土師器椀で、四角形の高い高台が外側に踏ん張る。体部が直線的に伸びる様相が見られる。389は土師器椀で、四角形の高台が少し外側に踏ん張る。390・391は土師器円盤状高台杯である。片桐Ⅱで11～13世紀。392は土師器皿で、口縁部は底部から直線的に立ち上がる。平城Ⅵ～Ⅶ式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。393は土師器椀で、三角形の高台が少し外側に踏ん張る。394は土師器椀で、四角形の高台が少し外側に踏ん張る。395は土師器円盤状高台杯である。396も同様な器形を持つ。片桐Ⅱで11～13世紀。397は須恵器杯で、三角形の高台が垂直に降下する。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。398は須恵器杯で、外面から判断して生焼け状態の資料であると考えている。佐藤1993Ⅲ-1で9世紀後半。399は須恵器杯で、体部はヘラ切りの底部からほぼ直線的に立ち上がる。佐藤1993Ⅲ-1で9世紀後半。400は土師質甕で、体部は半球状、外反して短く伸びる口縁部を持つ。端部は上端を拡張している。片桐Ⅰ-②～④で10世紀。401は土師質羽釜で、直線的に開く口縁部を持ち、四角く水平に伸びる鍔を持つ。体部外面はハケ調整である。片桐Ⅰ-②で10世紀前半。402は土師質羽釜で、鍔部分のみの出土である。鍔は水平に伸び先端が細く終わる。片桐Ⅰ-①～②で9世紀後半～10世紀前半。403・404はやや上げ底の底部で、色調・胎土・形態から縄文時代晩期の深鉢底部と考えられる。405は黒色土器椀の底部で、垂直に下りる三角形の高台を持つ。12～13世紀頃ヵ。406は黒色土器椀の底部で、垂直に下りる四角形の高台を持つ。12～13世紀頃ヵ。407は黒色土器椀の底部で、垂直に下りる三角形の高台を持つが、405に比べて高台が低い。12～13世紀頃ヵ。408～412は紡錘形の土錘である。413は黒色土器椀の口縁部で、内湾気味に開く口縁部を持つ。12～13世紀頃ヵ。414は緑釉椀の口縁部で、直線的に開いた後、端部を外傾させて終わる。415は緑釉椀の底部である。416は緑釉椀の底部で、外側に踏ん張る高い高台を持つ。417は緑釉椀の底部で、垂直に下りる低い高台を持つ。418～420は緑釉椀の底部で、外側に踏ん張る低い高台を持つ。421は緑釉椀の底部で、垂直に下りる厚くしっかりした高台を持つ。422は緑釉椀の底部で、外側に踏ん張る低い高台を持つ。体部は内湾気味に外上方に伸びる。423は緑釉椀の体部片である。424は肥前染付皿の口縁部で、型絵を用いていることから、明治時代以降のものと考えられる。425は青磁椀の底部で、三角形の高い高台を持つ。13～14世紀ヵ。426は白磁椀の底部で、四角く幅広の削り出し高台を持つ。新しいヵ。427～443は石鏃である。形態的に正三角形や二等辺三角形、平基式や凹基式など多様なものを含む。比較的小形の石鏃が多く、この点に注目すれば縄文時代の範囲内で考えうる資料である。444は彫器と考えられる資料で、片側側面に細い



第84図　Ⅱ区西包含層出土遺物実測図（3）

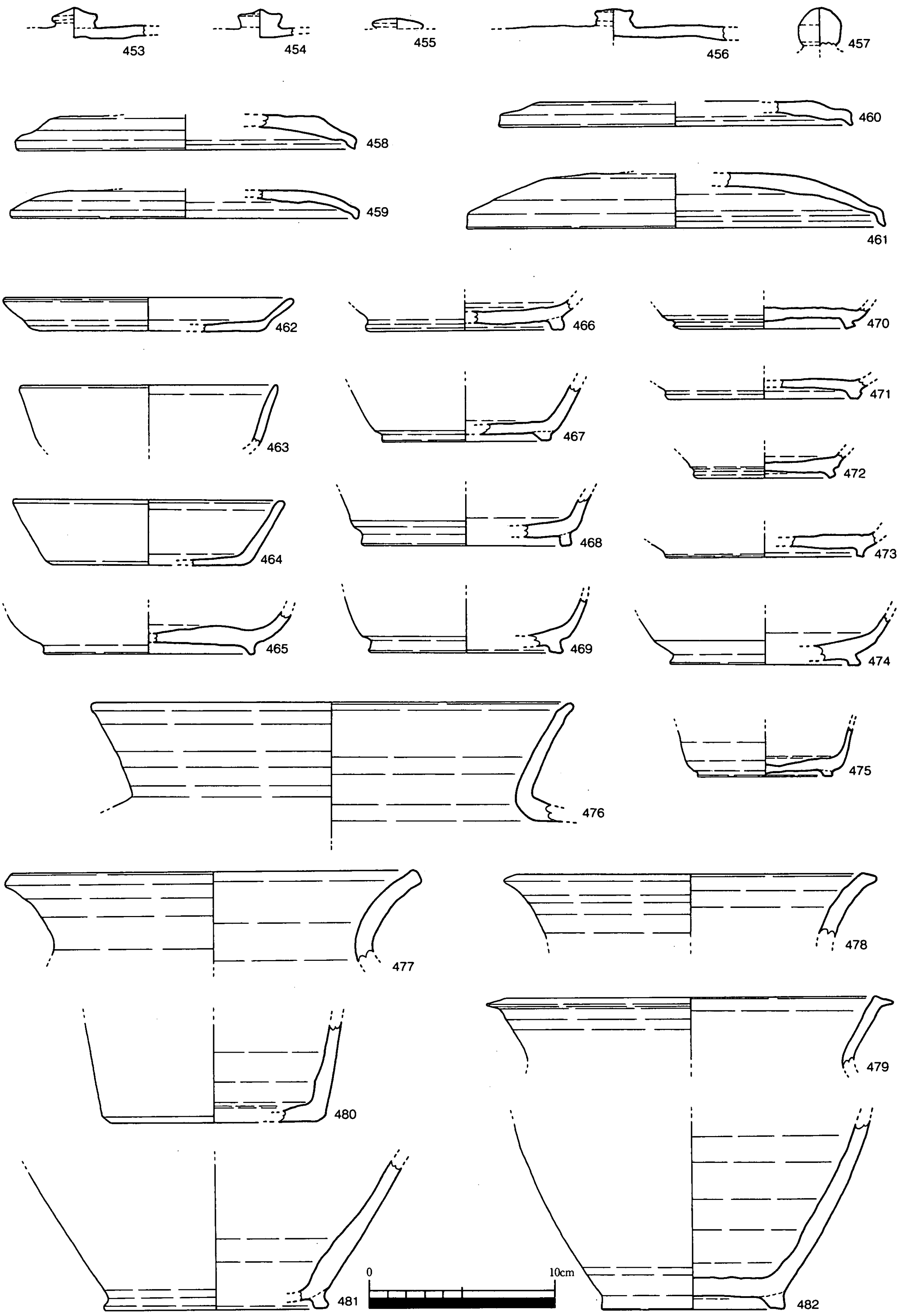


第85図　Ⅱ区西包含層出土遺物実測図（4）

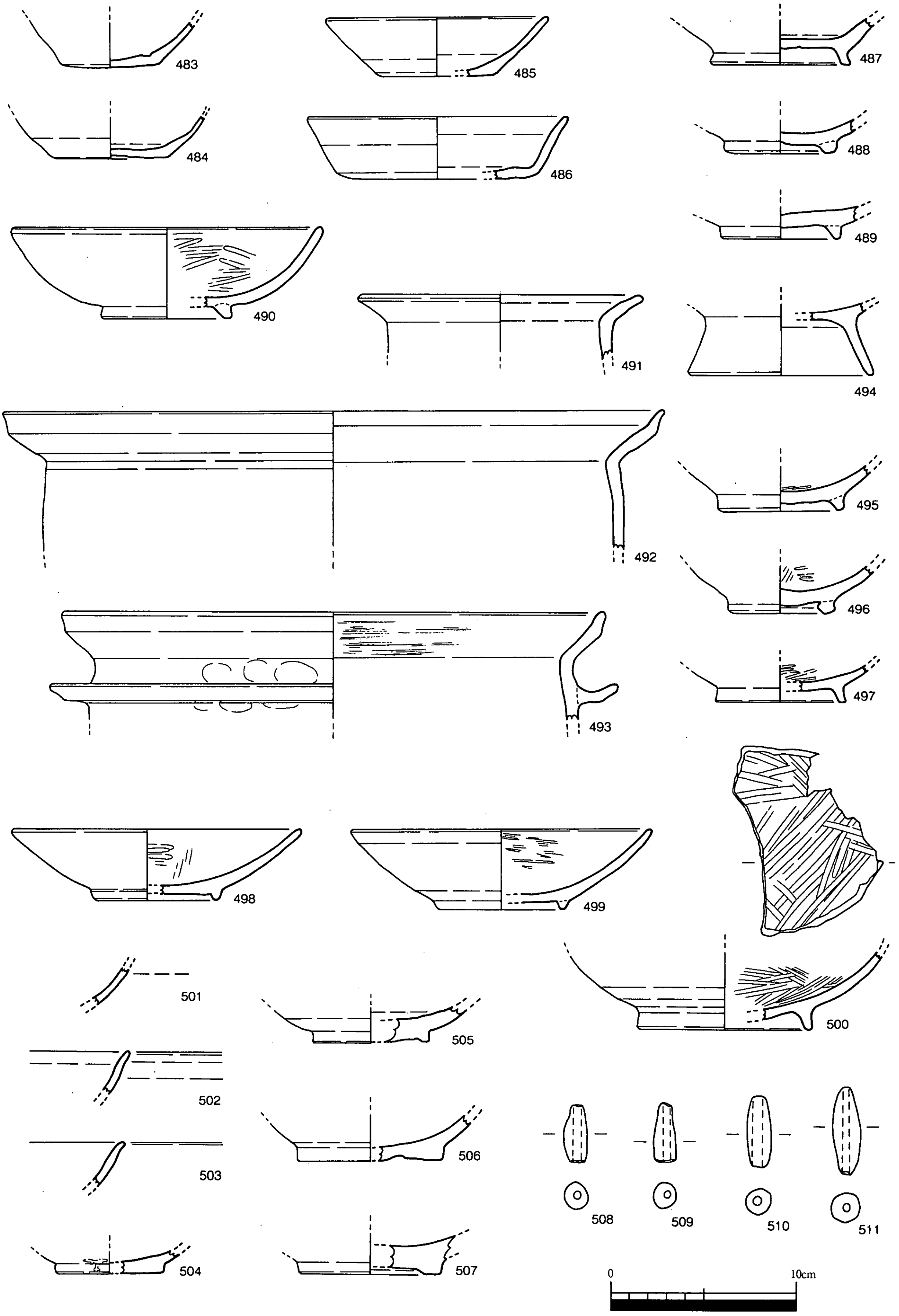
剥離痕が認められる。445は尖頭器で、先端部を欠損している。両側面に加工が見られるが、全体的には荒い調整である。446は打製石包丁片で、加工を施した刃部と両端に見られる抉りが確認される。447はスクレイパー片で、両面縁辺に調整が施されている。448はスクレイパーで、縁辺に調整が施される。449はサヌカイト剥片である。450は二次調整が加えられた剥片である。451は剥片である。452は薄い鉄板状の破片で、全体の形は不明である。

⑤　Ⅱ区東包含層（第86～88図）

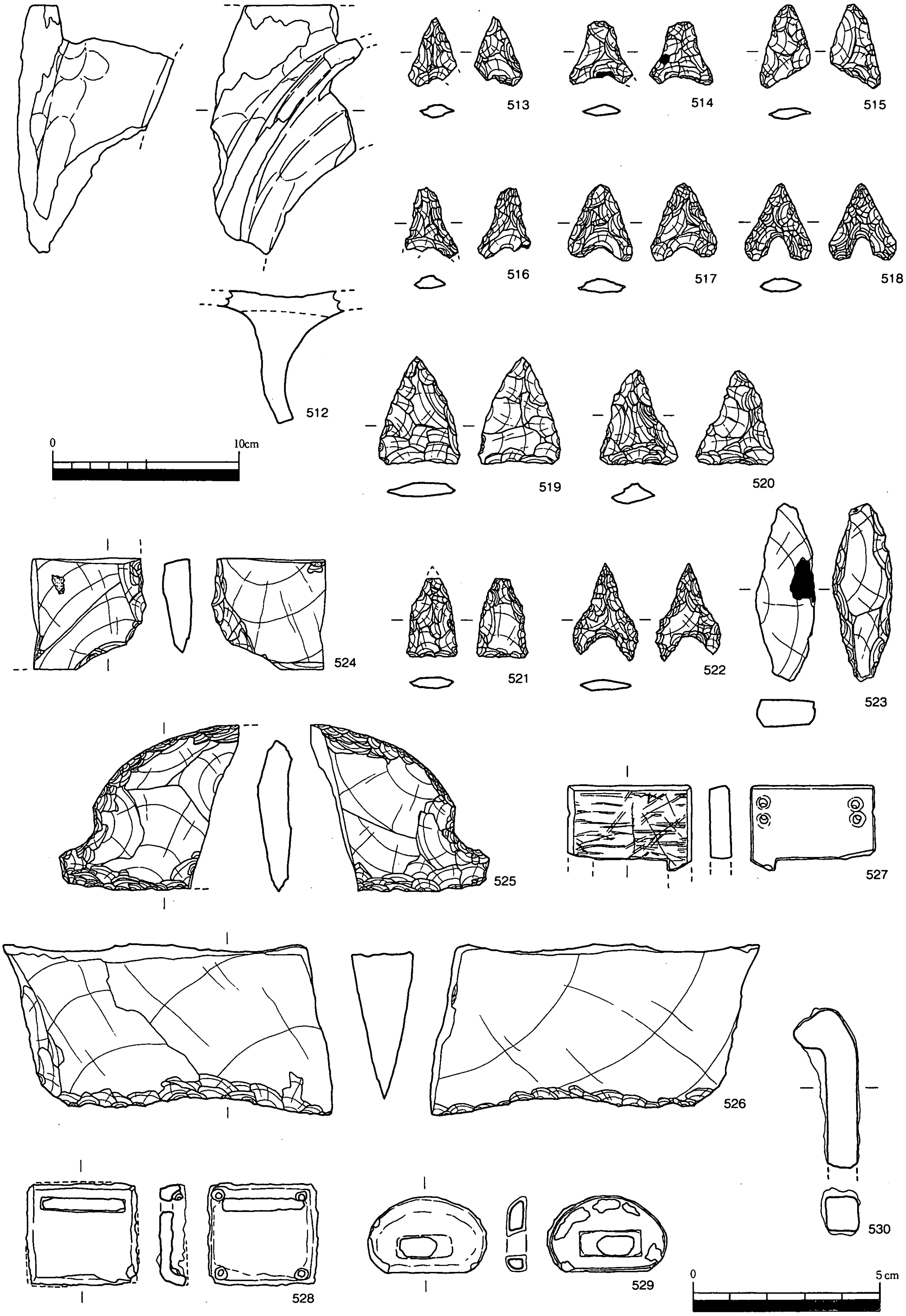
453・454は須恵器杯蓋の宝珠摘みである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。455は須恵器杯蓋の扁平摘みである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。456は須恵器杯蓋のボタン状摘みである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。457は須恵器杯蓋の丸みを持つ宝珠摘みである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。458・460は須恵器杯蓋で、体部は扁平な天井部から下方に屈曲して伸び、端部は下方に拡張して鋭く終わる。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。459は須恵器杯蓋で、体部は扁平な天井部から下方になだらかに下り、端部はあまり拡張せずに終わる。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。461は須恵器杯蓋で、体部は扁平な天井部から下方になだらかに下り、端部は下方に拡張して終わる。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。462は須恵器皿で、底部から外反気味に短く伸びる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-5で9世紀中頃。463は須恵器杯で、底部から外反気味に伸びる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。464は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に伸びる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。465は須恵器杯で、低く垂直に下がる高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。466・468・469・470・474は須恵器杯で、外側に踏ん張る四角く低い高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。467は須恵器杯で、低く垂直に下がる高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。471・473は須恵器杯で、低く垂直に下がる高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。472は須恵器杯で、低く垂直に下がる高台を持つ。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。475は須恵器杯で、佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。476は須恵器壺の口縁部で、体部から直線的に外上方に伸び、端部内側に段を持つ。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。477・478は須恵器壺の口縁部で、体部から外反して伸びる。端部は面を持つ。478は端部がやや外側に拡張されている。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。479は須恵器壺の口縁部で、体部から直線的に伸び、端部を外側に拡張している。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。480は須恵器壺底部で、平坦な底部から直線的に開く体部を持つ。佐藤1993Ⅲ-1～4で9世紀後半～10世紀後半。481は須恵器壺底部で、直線的に開く体部を持ち、底部との境に外側に踏ん張る高台が見られる。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。482は須恵器壺底部で、内湾気味に開く体部を持ち、底部との境に垂直に下がる高台が見られる。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。483は土師器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に開く体



第86図　Ⅱ区東包含層出土遺物実測図（1）

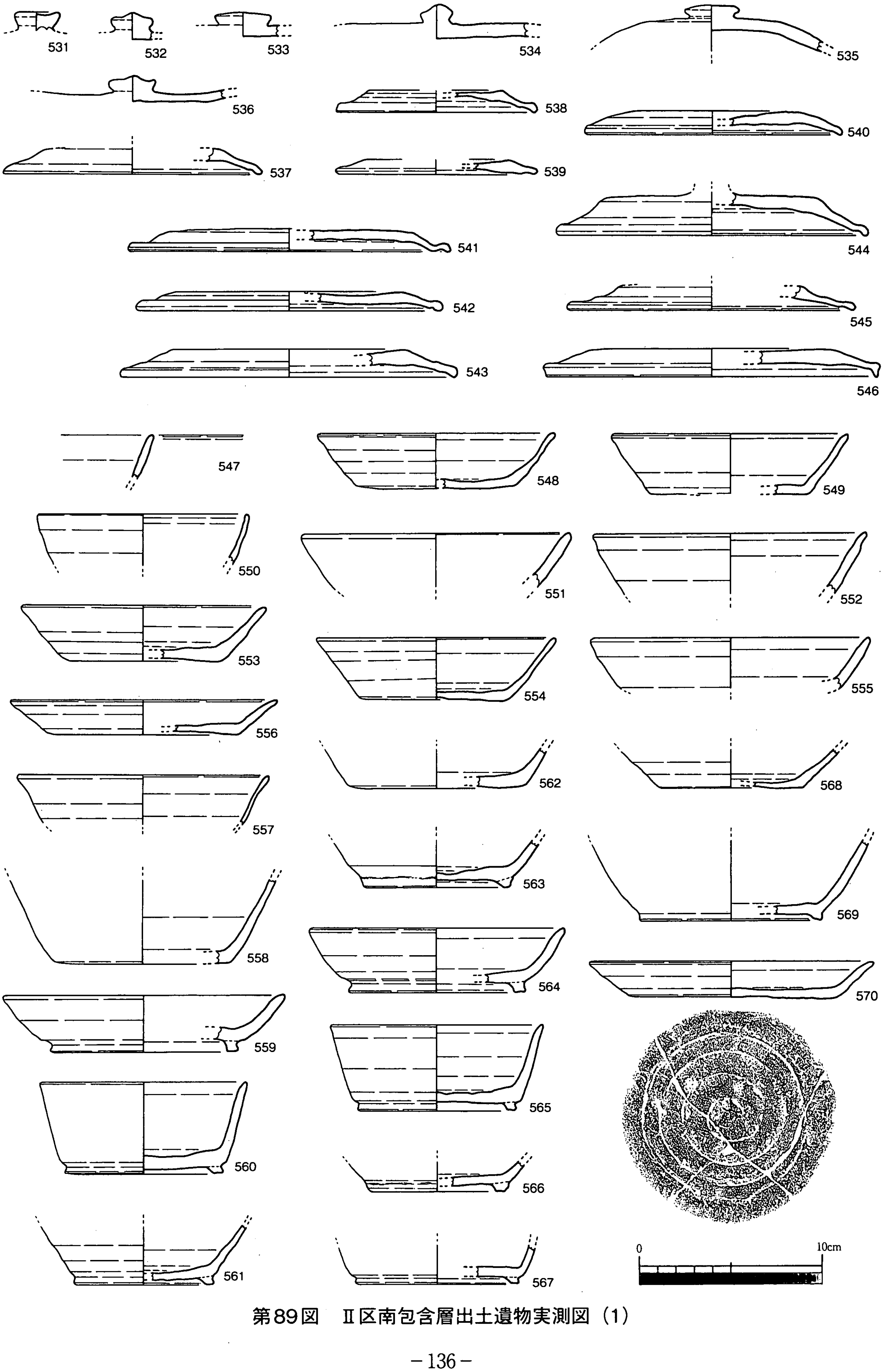


第87図　Ⅱ区東包含層出土遺物実測図（2）

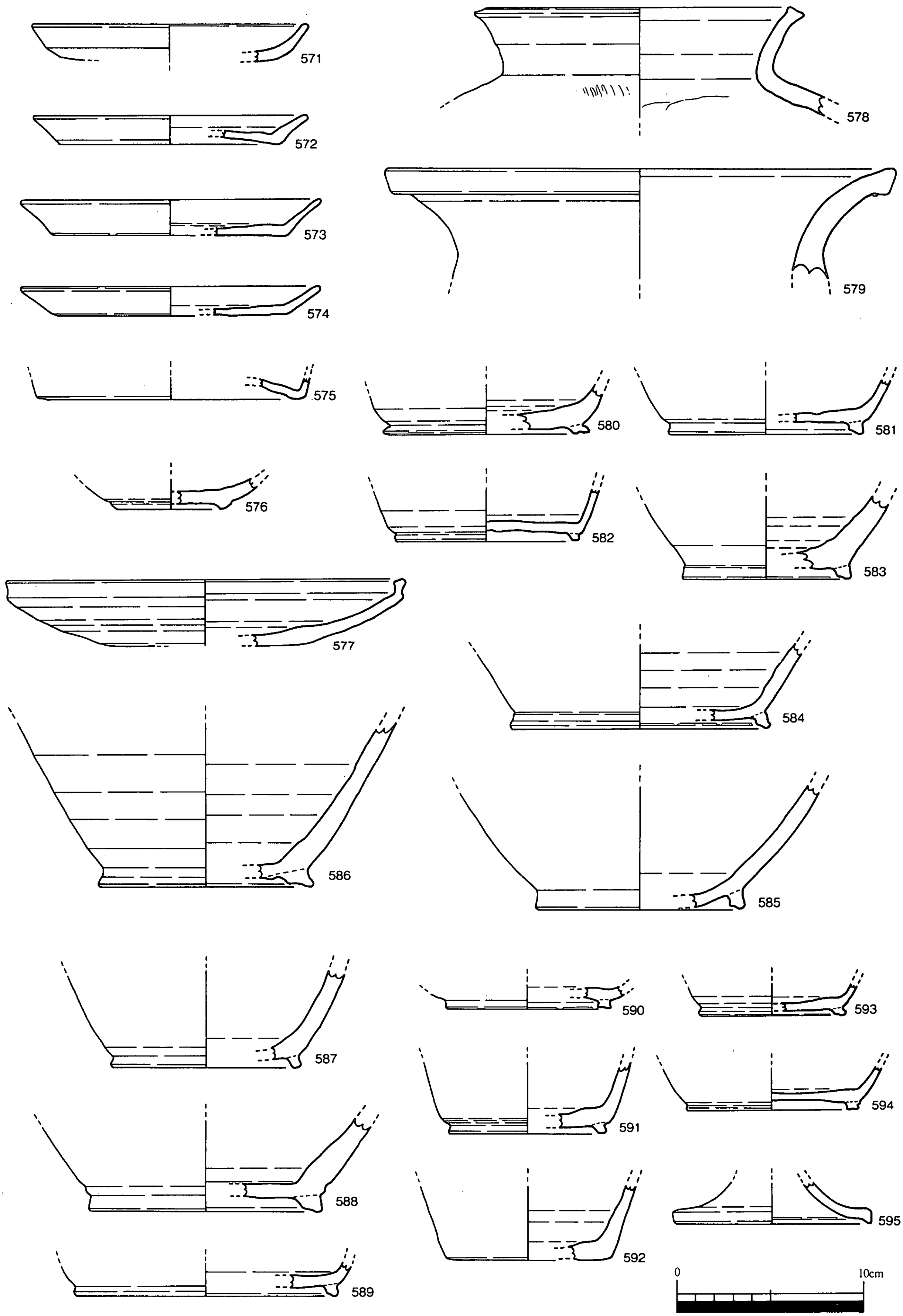


第88図　Ⅱ区東包含層出土遺物実測図（3）

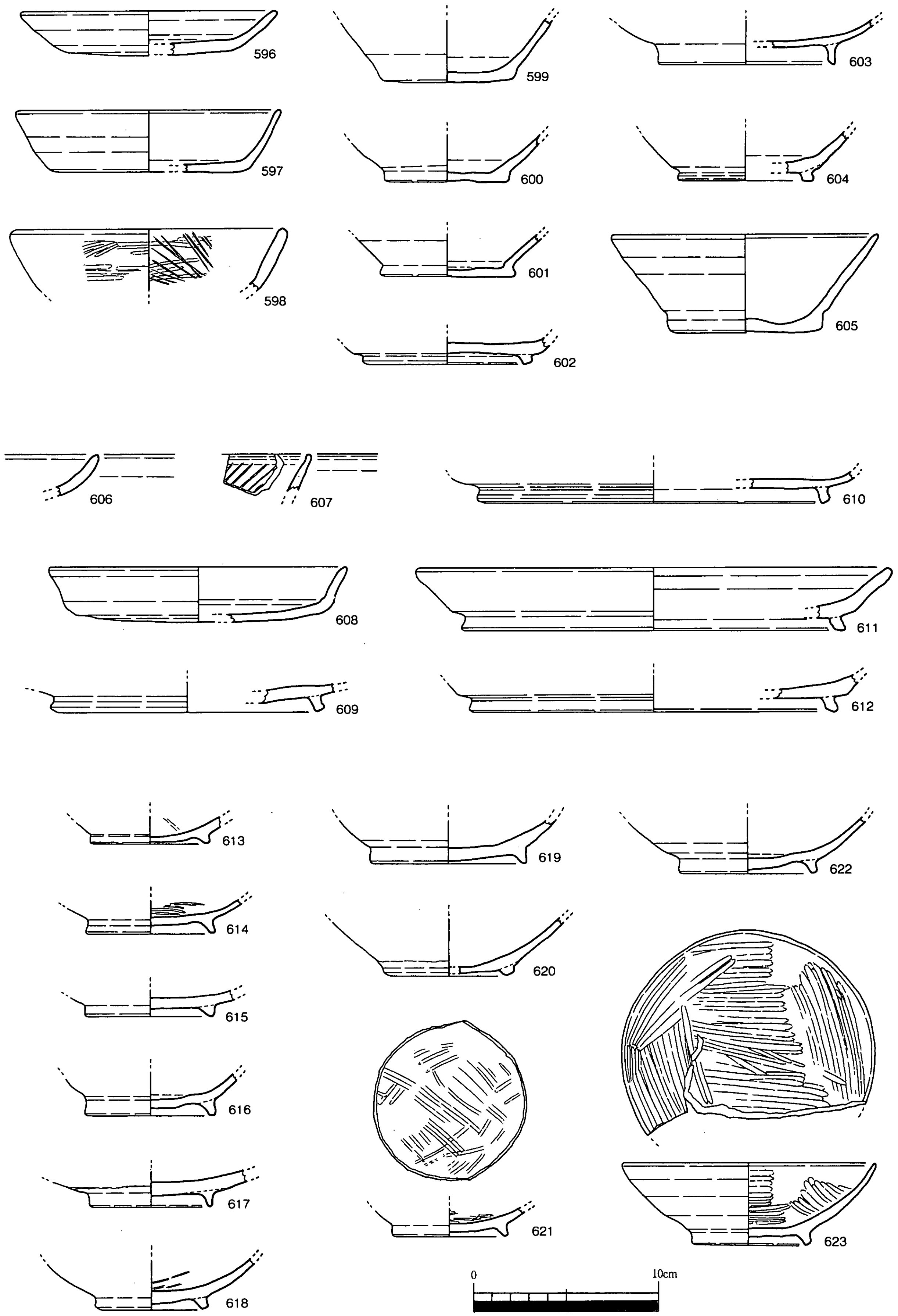
部を持つ。484は土師器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に開く体部を持つ。485は土師器杯で、底部から直線的に開き、端部が丸く終わる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。486は土師器杯で、ヘラ切りの底部から外反気味に開く体部を持ち、口縁部は丸く終わる。佐藤2000Ⅱ-3～4で13世紀第2～4四半期。487は土師器椀で、細く外側に踏ん張る高台を持つ。488は土師器椀で、低く垂直に下りる高台を持つ。489は土師器椀で、低く垂直に下りる高台を持つ。490は土師器椀で、低く外側に踏ん張る高台を持ち、体部は内湾気味に開く。端部は丸く終わり、内面にはヘラミガキが見られる。片桐Ⅱ-⑧～⑨で13世紀。491は土師質甕で、垂直の体部から屈曲して直線的に短く伸びる口縁部を持つ。片桐Ⅱ-④で12世紀前半。492は土師質甕で、やや丸みを持った体部から屈曲して直線的に短く伸びる口縁部を持つ。口縁端部は下側を強く横ナデすることで先端部を細く終わらせる。片桐Ⅰ-②～④で10世紀。493は土師質羽釜で、形態は492同様である。鍔は口頸部との境からやや下がって水平に伸び、やや受け口状になって終わる。片桐Ⅰ-①～②で9世紀後半～10世紀前半。494は土師器椀A2で、外側に踏ん張る高い高台を持つ。片桐Ⅱ-⑤～⑥で12世紀。495は黒色土器椀で、低く垂直に下りる高台を持つ。12～13世紀頃ヵ。496は黒色土器椀で、低く垂直に下りる高台を持つ。高台は他に比べて厚い。12～13世紀頃ヵ。497は黒色土器椀で、外側に踏ん張る高い高台を持つ。12～13世紀頃ヵ。498・499は黒色土器椀で、浅い内湾気味の体部に垂直に下りる高台を持つ。体部内面には口縁に平行するヘラミガキが見られる。片桐Ⅱ-⑧で13世紀中頃。500は黒色土器椀で、外側に踏ん張るシャープな高台を持つ。内面にはヘラミガキが見られるが、残存状況からヘラミガキのパターンは不明である。12～13世紀頃ヵ。501は緑釉椀の体部片である。502は緑釉椀？の口縁部片である。口縁端部に切込みが認められる。503は緑釉椀の口縁部片である。504は緑釉皿？の底部で、削り出し高台である。505・506は緑釉椀の底部で、削り出し高台である。底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。この内、506では体部と底部の境及び底面の一部の釉が淡緑色である。507は白磁椀の底部で、削り出し高台である。508～511は紡錘型の土錘である。512は土師質竈の焚口部分の破片である。513～522は石鏃で、小形品が多く、多様な形態を含むことから縄文時代から弥生時代の時間幅をもつ資料であると考えられる。523は尖頭器と考えているが、片面のみの加工であることから石鏃の可能性もある。524はサヌカイトの剥片である。525は、刃部が明瞭で両端にある抉りが見られることから、打製石包丁の一部と考えられる。526は、三角柱の一縁辺に両側から調整が施されており、スクレイパーと考えられる。527は石製の巡方である。下部が欠損している。方形の透かしがあり、裏面には2コーナーに各2穴の穿孔が見られるが、2穴はつながっていない。未製品の可能性もあるが、他の取り付け方法も想定されるのではないかと考えている。両面及び他の側面も丁寧な磨きが行われている。528は銅製の巡方である。裏面四隅に鋲が見られる。2.8cm×3.0cm×0.8cmを測る。529は銅製の丸鞆である。2.0cm×3.2cm×0.6cmを測る。530は鉄釘である。頭部は「L」字に屈曲しており、先端部ともに欠損していると考えられる。



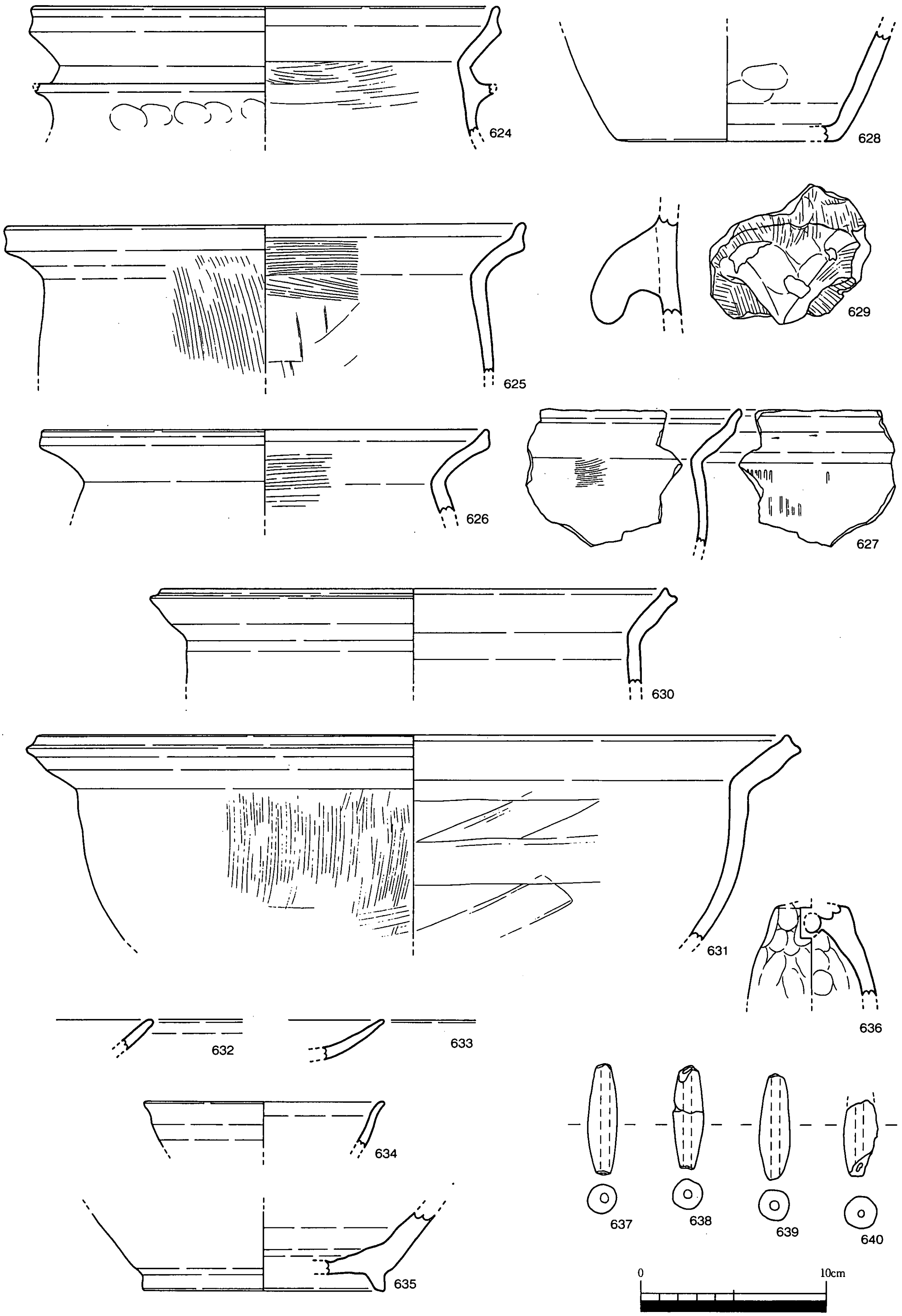
第89図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（1）



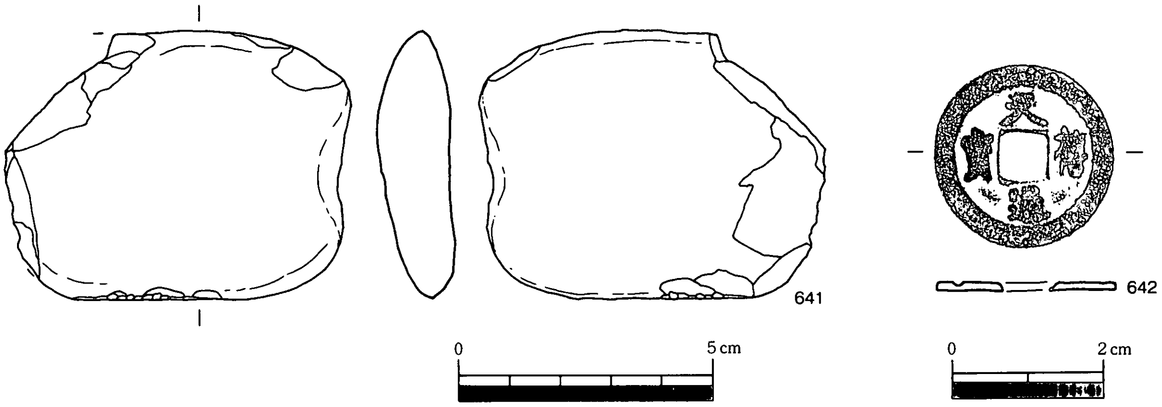
第90図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（2）



第91図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（3）



第92図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（4）



第93図　Ⅱ区南包含層出土遺物実測図（5）

⑥　Ⅱ区南包含層（第89～93図）

531は須恵器杯蓋ボタン状の摘みである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。532は須恵器杯蓋宝珠摘みである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。533は須恵器杯蓋扁平摘みである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。534は須恵器杯蓋宝珠摘みである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。535は須恵器壺蓋と考えられる。天井部に扁平な摘みが見られ、狭い平坦部から屈曲して下がる体部を持つ。天井部が狭く器高が高いと想定されるため、杯蓋ではなく壺蓋としておく。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。536は須恵器杯蓋の摘みである。佐藤1993Ⅰ-1～Ⅱ-5で7世紀中頃～9世紀中頃。537・539・540・542・543は須恵器杯蓋である。平坦な天井部から屈曲して下がり、端部を丸く終わらせる。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。538・544～546は須恵器杯蓋である。平坦な天井部から屈曲して下がり、端部を下方に拡張して終わる。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。541は須恵器杯蓋である。平坦な天井部から屈曲して下がり、少し水平方向に伸びた後、端部を下方に拡張して終わる。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。547は須恵器杯口縁部片である。口縁部は直線的に伸び、端部は丸く終わる。7世紀後半～9世紀後半頃。548は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がり、端部を少し外反させる。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。553・554は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、端部を少し外反させる。佐藤1993Ⅲ-1で9世紀後半。549は須恵器杯で、体部は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部を少し外反させる。佐藤1993Ⅲ-1で9世紀後半。555は須恵器皿で、体部は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部を少し外反させる。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。550～552は須恵器杯で、内湾して立ち上がる口縁部を持つ。552は、口縁端部外面に強いヨコナデを施し、端部を細く仕上げている。7世紀後半～9世紀後半頃556は須恵器皿で、ヘラ切りの底部から直線的に短く立ち上がる口縁部を持つ。口径・底径が大きく、口縁部の器高が低いことから皿と判断した。佐藤1993Ⅱ-5で9世紀中頃。557は須恵器杯で、内湾気味に立ち上がり、端部下で

外反する口縁部を持つ。他の杯と比べて器壁が薄い。7世紀後半～9世紀後半頃。558は須恵器杯と考えている。口縁端部は出土していないが、器壁が薄く、器高があまり高くないと想定されることから、大形の杯と判断した。7世紀後半～9世紀後半頃。559は須恵器杯で、底面から内湾気味に短く立ち上がる口縁部を持ち、端部は丸く終わる。口縁部と底部との境より底部側に垂直に下がる四角い高台を持つ。高台がなければ、皿と考えるような形態である。佐藤1993Ⅱ-3～4で8世紀後半～9世紀前半。560は須恵器杯である。内湾気味に高く伸びる口縁部を持ち、端部は細く終わる。高台は底部と体部の境より内側にあり、外側に踏ん張り、器高は低い。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。561は須恵器杯で、底部から直線的に開く体部を持つ。体部と底部の境に垂直に下がる高台が見られる。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。562は須恵器杯で、底部からやや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。7世紀後半～9世紀後半頃。563は須恵器杯で、底部からやや内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、底部との境に垂直に下がる三角形の高台が見られる。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。564は須恵器杯で、底部から内湾して立ち上がり、端部で外反する口縁部を持つ。底部との境から外側に踏ん張る高台が見られる。佐藤1993Ⅱ-3～4で8世紀後半～9世紀前半。565は須恵器杯で、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。底部との境から内側に低く四角い高台が見られる。佐藤1993Ⅱ-2～5で8世紀中頃～9世紀中頃。566は須恵器杯で、シャープさに欠く高台を持つ。佐藤1993Ⅲ-1～3で9世紀後半～10世紀中頃。567は須恵器杯で、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。底部との境に垂直に下がる低い高台が見られる。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。568は須恵器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に開く口縁部を持つ。7世紀後半～9世紀後半頃。569は須恵器杯で、底部から内湾して伸びる口縁部を持つ。底部との境に低い高台が見られる。他に比べて大振りな杯である。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。570は須恵器皿で、ヘラ切りの底部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-5で9世紀中頃。571は須恵器皿で、ヘラ切りの底部からなだらかに内湾して立ち上がる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。572～574は須恵器皿で、一部の機種はヘラ切りの底部から外反気味に短く屈曲して立ち上がる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-5で9世紀中頃。575は須恵器壺底部で、底部がやや上げ底になっている。時期は不明。576は須恵器杯で、底部との境に断面三角形の高台を持つ。577は須恵器高杯の杯部と考えられる。杯蓋と同様の形態を持つが、口径が大きく、口縁端部の作りもヨコナデにより変化しており、ここでは高杯として取り扱う。佐藤1993Ⅱ-4で9世紀前半頃ヵ。578は須恵器壺の口縁部である。球形の体部から「く」の字に外反して端部を両側に拡張する口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。579も同様の須恵器壺口縁部である。佐藤1993Ⅱ-2～Ⅲ-4で8世紀中頃～10世紀後半。580は須恵器杯底部で、外側に踏ん張る低い高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。581・582は須恵器杯底部で、ほぼ垂直に下がる高台を持つ。高台は体部との境から内側に付く。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。583～588は

須恵器壺底部である。これらの資料は、体部との境に高台を持つ。佐藤1993 II-2で8世紀中頃。589・590は須恵器杯である。高台は垂直に下がり、体部は内湾して立ち上がる。佐藤1993 II-1～5で8世紀～9世紀中頃。591は深めの須恵器杯で、高台は外側に踏ん張り、体部は直線的に開く。佐藤1993 II-1～5で8世紀～9世紀中頃。592は須恵器壺底部と考えられる資料で、平底の底部から直線的に開く体部を持つ。佐藤1993 III-1～4で9世紀後半～10世紀後半。593・594は須恵器杯で、高台を持つ。佐藤1993 II-1～5で8世紀～9世紀中頃。595は須恵器高杯脚部で、「ハ」の字に広がり、端部を下方に拡張して終わる。時期は不明である。596は土師器杯である。ヘラ切りの底部からなだらかに口縁部に至り、端部は丸く終わる。佐藤2000 II-3～5で13世紀。597は土師器杯で、ヘラ切りの底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000 II-3～4で13世紀第2～4四半期。598は土師器杯で、直線的に伸びる口縁部を持つ。器壁は厚く、内外面にはヘラミガキが確認できる。599・600・601は土師器円盤状高台杯で、ヘラ切りの底部から直線的に伸びる口縁部を持つ。片桐IIで11～13世紀。602は土師器椀で、体部との境から内側に高台を持つ。603は土師器椀で、体部との境に細く長い高台を持つ。604は土師器椀で、体部との境に高台を持つ。605は土師器円盤状高台杯で、ヘラ切りの突出した円板状高台から直線的に開く口縁部を持つ。片桐IIで11～13世紀。606は土師器皿の口縁部であろう。赤色の化粧土が見られる。平城VI～VII式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。607は土師器皿の口縁部で、内面にヘラミガキによる櫛描文が見られる。平城VI～VII式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。608は土師器皿で、ヘラ切りの底部から外反気味に短く伸びる口縁部を持つ。平城VI～VII式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。609・610は土師器皿の底部で、外に踏ん張る高台を持つ。赤色の化粧土が見られる。平城VI～VII式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。611・612は土師器皿で、底部から外反気味に短く伸びる口縁部を持つ。体部との境から内側に外に踏ん張る高台を持つ。612には赤色の化粧土が見られる。平城VI～VII式に相当すると思われ、9世紀前半頃に比定しておく。613～615・617・618は黒色土器椀の底部で、内面にはヘラミガキが観察される。12～13世紀頃ヵ。616・619は土師器椀の底部である。620は黒色土器椀で、底部から直線的に開く体部を持つ。底部との境に蒲鉾状断面の高台が見られる。内面にはヘラミガキが認められる。621は黒色土器椀の底部で、内面には格子状のヘラミガキが見られる。12～13世紀頃ヵ。622は黒色土器椀の底部で、内面にはヘラミガキが見られる。12～13世紀頃ヵ。623は黒色土器椀で、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、端部は丸く終わる。高台は外に踏ん張り、内面にはヘラミガキが見られる。片桐II-⑦～⑧で13世紀前半～中頃。624は土師質羽釜の口縁部で、体部は「く」の字に屈曲した後、摘み上げ状態で直立する。鍔は水平に伸びるが先端が欠損している。片桐I-①～②で9世紀後半～10世紀前半。625は土師質甕の口縁部で、ほぼ直立する体部から「く」の字に外反し、端部が上方に拡張して終わる。内外面ともハケ目調整が顕著である。片桐I-②～④で10世紀。626は土師質甕の口縁部で、砲弾型と思われ

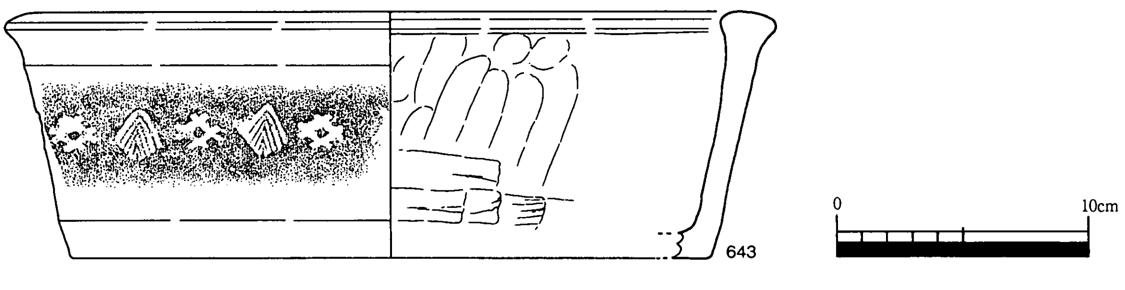
る体部から「く」の字に外反し、端部を上方に少し拡張して終わる。内面には横方向のハケ目が見られる。片桐Ⅰ－④で10世紀後半。627は土師質甕の口縁部である。時期不明。628は土師質火鉢の底部と考えられる資料である。平坦な底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。629は竈の取っ手と考えられる。630は土師質甕の口縁部で、直立する体部から「く」の字に伸びる口縁部を持つ。片桐Ⅱ－⑦～⑧で13世紀。631は土師質土鍋で、半球状の体部から「く」の字に伸びる口縁部を持つ。体部外面はハケ目である。片桐Ⅱ－⑦～⑧で13世紀。632は緑釉土器の口縁部片である。椀と考えられる。633は緑釉土器の口縁部片である。傾きから皿と考えられる。634は緑釉土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がった後、端部で外反する。635は近世陶器の可能性がある鉢の底部と考えられる。高台は底部との境にほぼ直立している。636は土師質イイダコ壺で、釣手及び口縁部が欠損している。637～640は紡錘形の土錘である。641は扁平な石で、側面の一つには抉りが見られることから石錘の可能性を考えている。642は銅銭で「天□通宝」と読める。□部分は不明で、銭種を確定することができない。

この調査区の包含層から出土した資料については、「概ね9～12世紀の須恵器・土師器・黒色土器椀各種と共に、銅製巡方・丸鞆各1個、緑軸陶器・灰柚陶器、瓦、鞴羽口・鉄滓等がある。瓦は50片前後が出土している。瓦当文部分を欠いているので、詳細な時期比定が困難であるが、凸面には格子叩きか縄蓆文叩きを見、凹面には布目痕をとどめる。偶発的な混入とは考えがたい出土量であり、今次調査で検出した建物で瓦葺き構造を想定することは困難であるが、周辺にそうした建物が存在した可能性がある。また鞴羽口・鉄滓は、付近に鍛冶工房の存在を想定させる。区画東端付近でまとまった炭・焼土ブロックを検出しておりこの想定を支える。」と概報に記載されているが、出土している資料に年代幅があることから、本調査区で検出された遺構との関連については不明である。

⑦　Ⅱ区（第94図）

Ⅱ区取り上げ遺物で、地区は不明である。

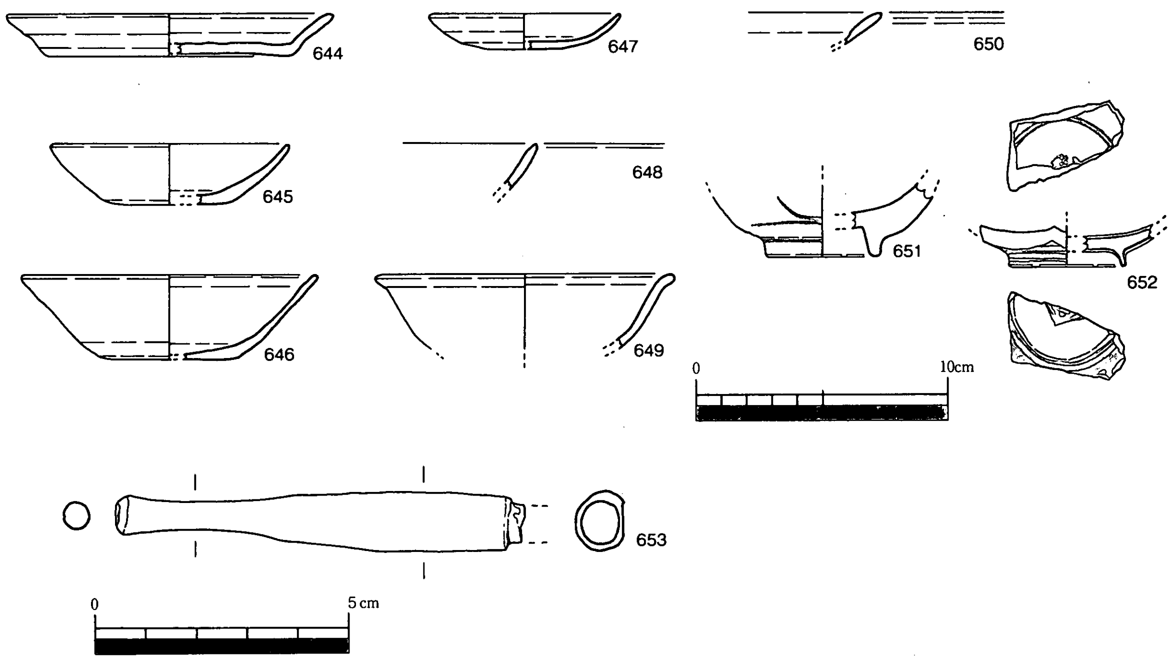
643は土師質鉢である。底部から直線的に立ち上がり口縁端部を肥厚させている。外面には井桁と山形のスタンプを交互に配置している。近世以降の土器と考えられる。



第94図　Ⅱ区包含層出土遺物実測図

⑧　Ⅲ区西包含層（第95図）

644は須恵器皿で、ヘラ切りの底部から短く外反する口縁部を持つ。佐藤1993Ⅱ-3で8世紀後半。645は土師器杯で、底部から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-4～5で13世紀第3四半期～14世紀前半。646は土師器杯で、ヘラ切りの底部から直線的に広がる口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀。647は備前焼小皿である。近世ヵ。648は施釉陶器の口縁部で、浅い椀と考えられる。649は緑釉陶器椀で、内湾気味に立ち上がり、端部で外反する口縁部を持つ。650は青磁小皿の口縁部で、見込み部分との境に凹線が見られる。13～14世紀ヵ。651は陶胎染付の椀で、外面に文様を描く。652は肥前系染付の椀で、内外面に文様を描く。653はキセルの吸い口である。



第95図　Ⅲ区西包含層出土遺物実測図

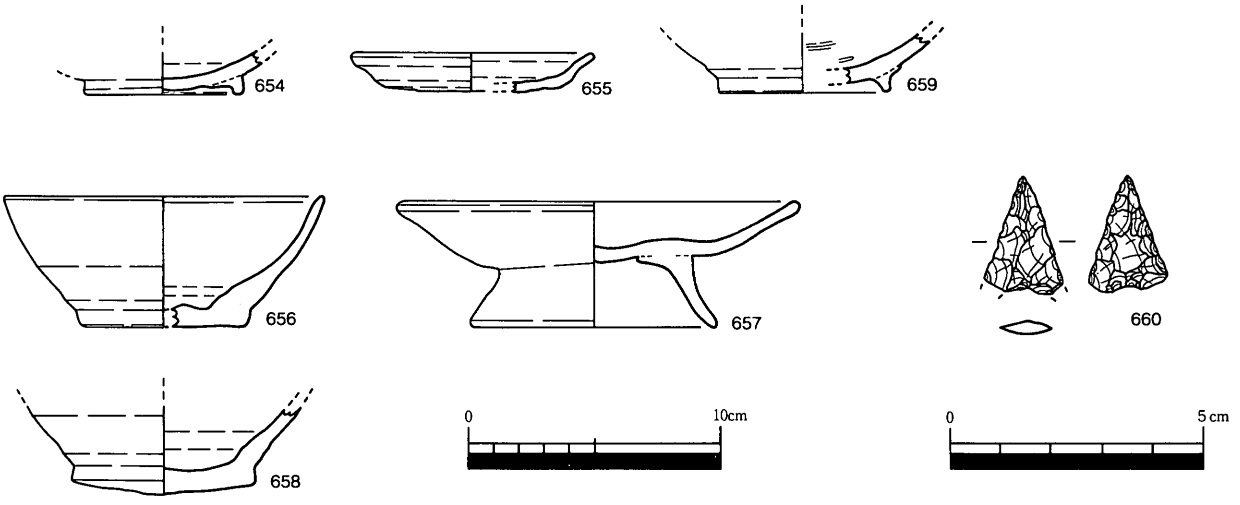
⑨　Ⅵ区包含層（第96図）

654は須恵器杯底部で、底部との境に高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-1～5で8世紀～9世紀中頃。655は土師器小皿で、ヘラ切りの底部から短く外反する口縁部を持つ。佐藤2000Ⅱ-3～5で13世紀第2四半期～14世紀前半。656・658は土師器円盤状高台杯で、円板高台から内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。片桐Ⅱで11～13世紀。657は土師器椀A2で、「ハ」の字に開く高い高台を持つ。片桐Ⅱ-⑤～⑥で12世紀。659は黒色土器椀の底部である。12～13世紀頃ヵ。660は石鏃で、二等辺三角形の小形鏃である。

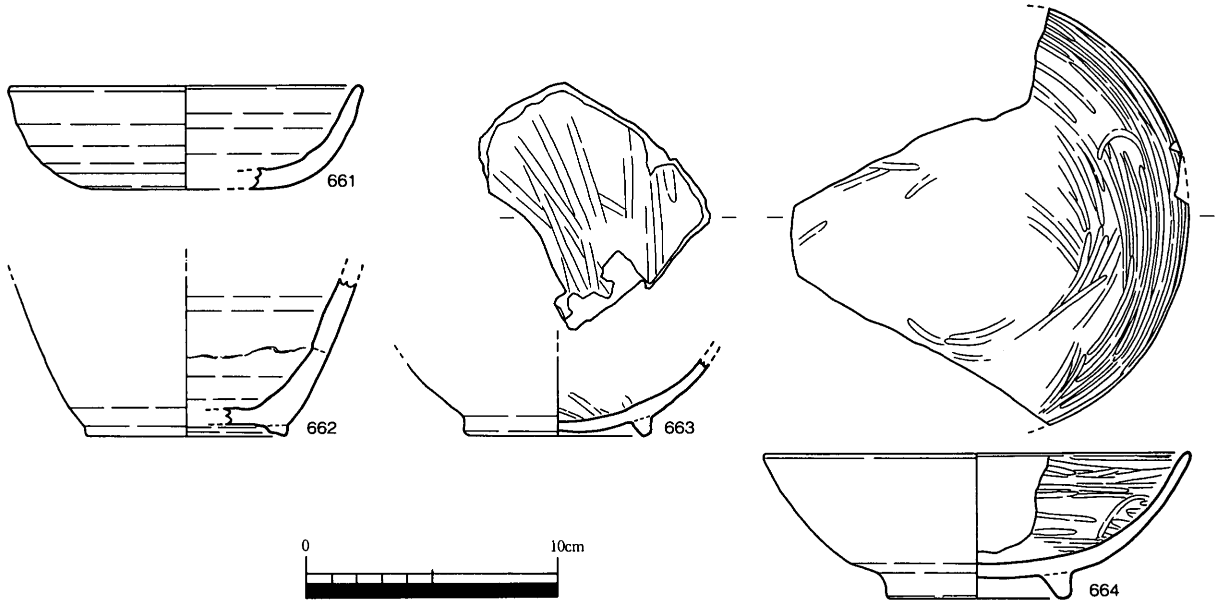
⑩　包含層（第97図）

地区は不明である。

661は須恵器杯で、底部から緩やかに立ち上がる口縁部を持つ。佐藤1993Ⅰ-2で7世紀後半。662は須恵器壺底部で、低い高台を持つ。佐藤1993Ⅱ-2で8世紀中頃。663は黒色



第96図　Ⅵ区包含層出土遺物実測図



第97図　包含層出土遺物実測図

土器椀で、内面にはヘラミガキが見られる。12～13世紀頃ヵ。664は黒色土器椀で、内面には口縁部に平行する方向のヘラミガキが見られる。片桐Ⅱ-⑦～⑧で13世紀前半～中頃。

第4章　まとめ

第1節　遺構の変遷

「第3章第3節遺構・遺物」では、検出された遺構を掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑など種類ごとに分けて説明した。これらのデータから、買田岡下遺跡の時期別変遷を明らかにする。なお、出土遺物のない遺構については、検出方位、位置、遺構の先後関係を考慮して当該時期と推定したものもある。また、出土遺物も当該遺構に伴うと判断できないものもあるが、説明上は当該遺構と伴に説明を加えている。

第1期　縄文時代頃

この時期の遺構は検出されておらず、Ⅱ区西から底部片が出土しているほか、Ⅱ区東・西の包含層から当該期の石鏃が出土しているのみである。地形的には、調査区の南側に当該期の遺跡が広がる可能性がある。

第2期　弥生時代末～古墳時代前期（第98図）

この時期の遺構は、SD37、SD40～42の溝状遺構のみで、住居跡は確認されていない。土器が多量に投棄されていたSD37は、何らかの祭祀が行われたであろうことが推測でき、当該期に廃絶する。SD40～42は、そのまま機能を維持した状態で次の古墳時代中期まで継続使用される。

第3期　古墳時代中頃（第99図）

当該期の遺構は、先の時期から継続的に機能したと考えられるSD40～42のみである。ただし、包含層を含めて古墳時代後期の資料が出土していないことから、継続使用された理由については不明である。

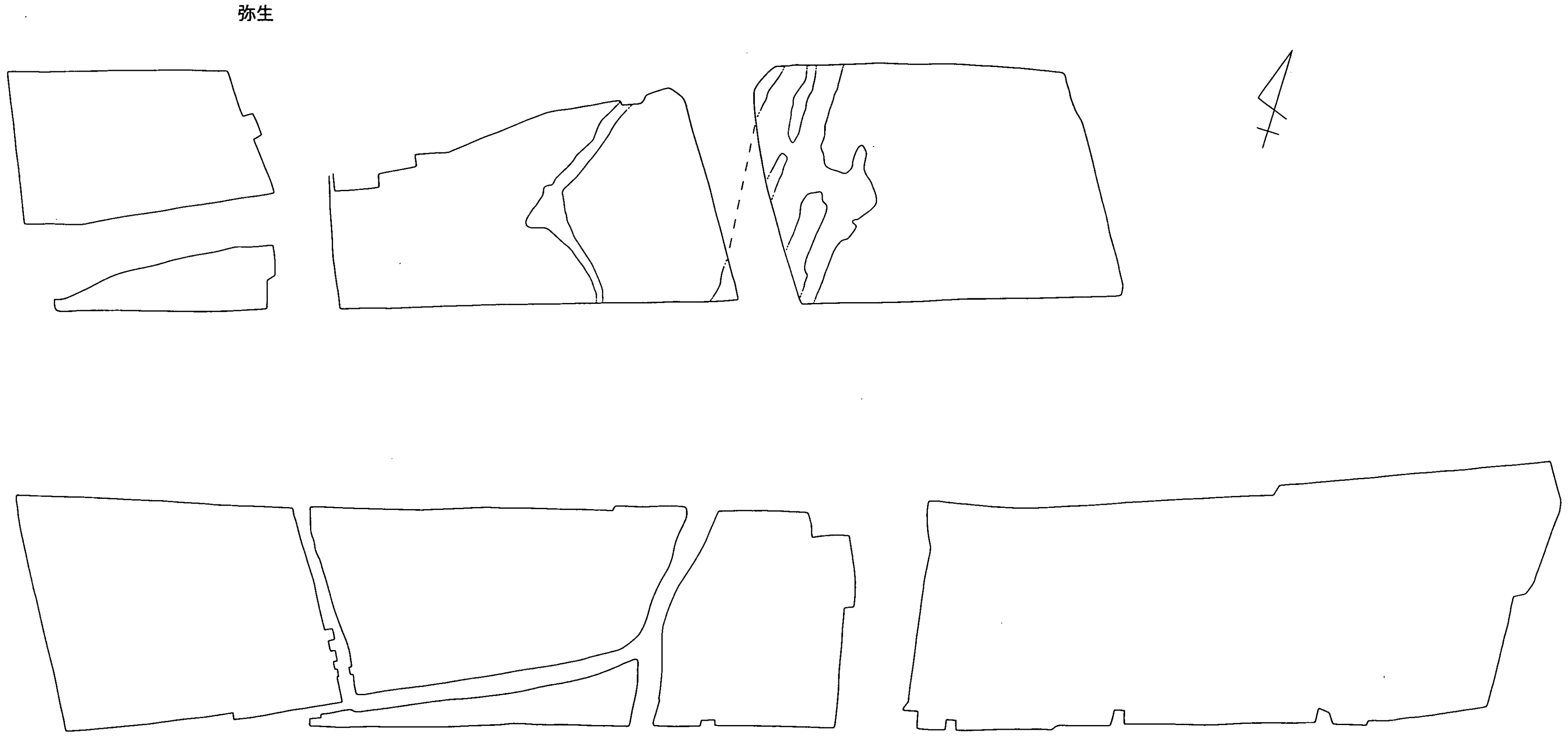
第4期　平安時代前半（第100図）

Ⅰ区西SD02、Ⅱ区西・東・南のSD55～57・72・68やSB20～25、Ⅲ区西SD74～77などがこの時期に該当する。当該期の集落はⅡ区に限られており、地形的に限定された範囲に屋敷などが営まれたことが分かる。また、Ⅰ区西の小溝群は、概報でも指摘されているように、畑地に伴う溝状遺構の可能性が高く、Ⅰ区全体が生産域であった可能性がある。Ⅰ区の大半は、次の時期の集落形成により小溝群が削平された可能性を考えておく。Ⅲ区東・Ⅳ区のSD78は、その性格が不明である。

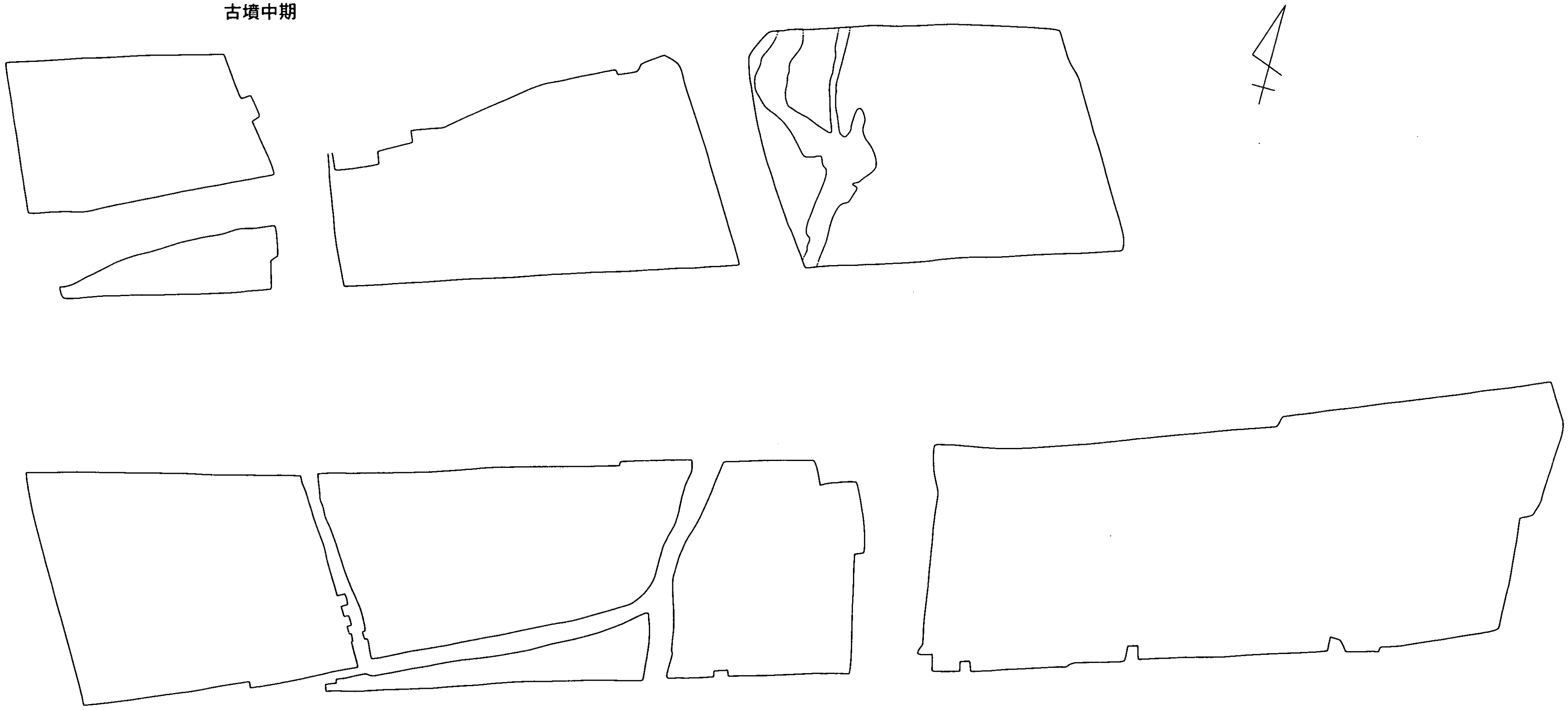
第5期　室町時代前半（第101図）

今回の調査範囲内では、当該期の遺構が最も多く検出されている。西端のⅥ区では溝状遺構、Ⅰ区西では土坑、Ⅰ区中では東西・北の3方向を溝状遺構で区画された集落跡及び土坑、Ⅱ区南、Ⅲ区西・東、Ⅳ区の溝状遺構がある。中心はⅠ区中の集落跡で、この地区の東西に見られる溝状遺構は生産に伴うものと考えられる。

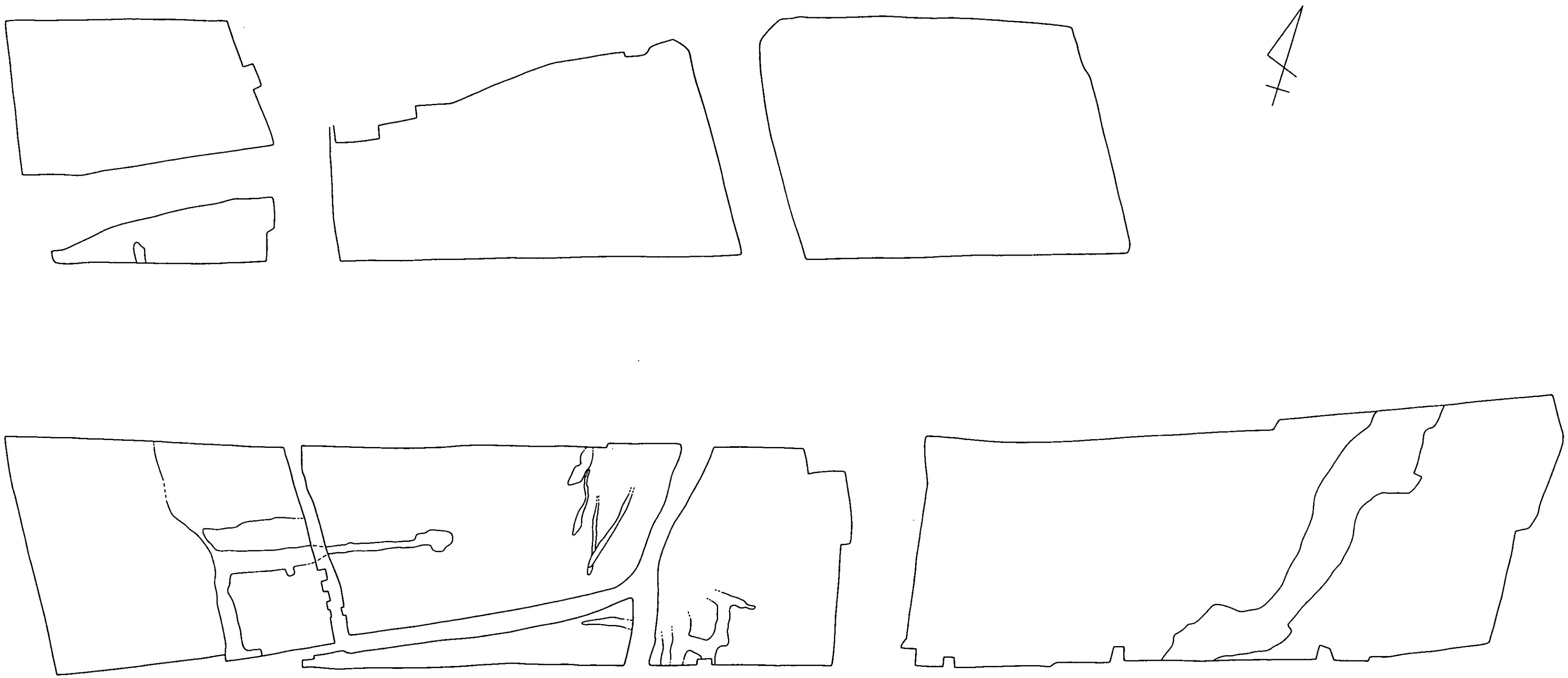
Ⅰ区中の掘立柱建物跡は、SB01～17までの17棟を復元したが、前述したように、当該



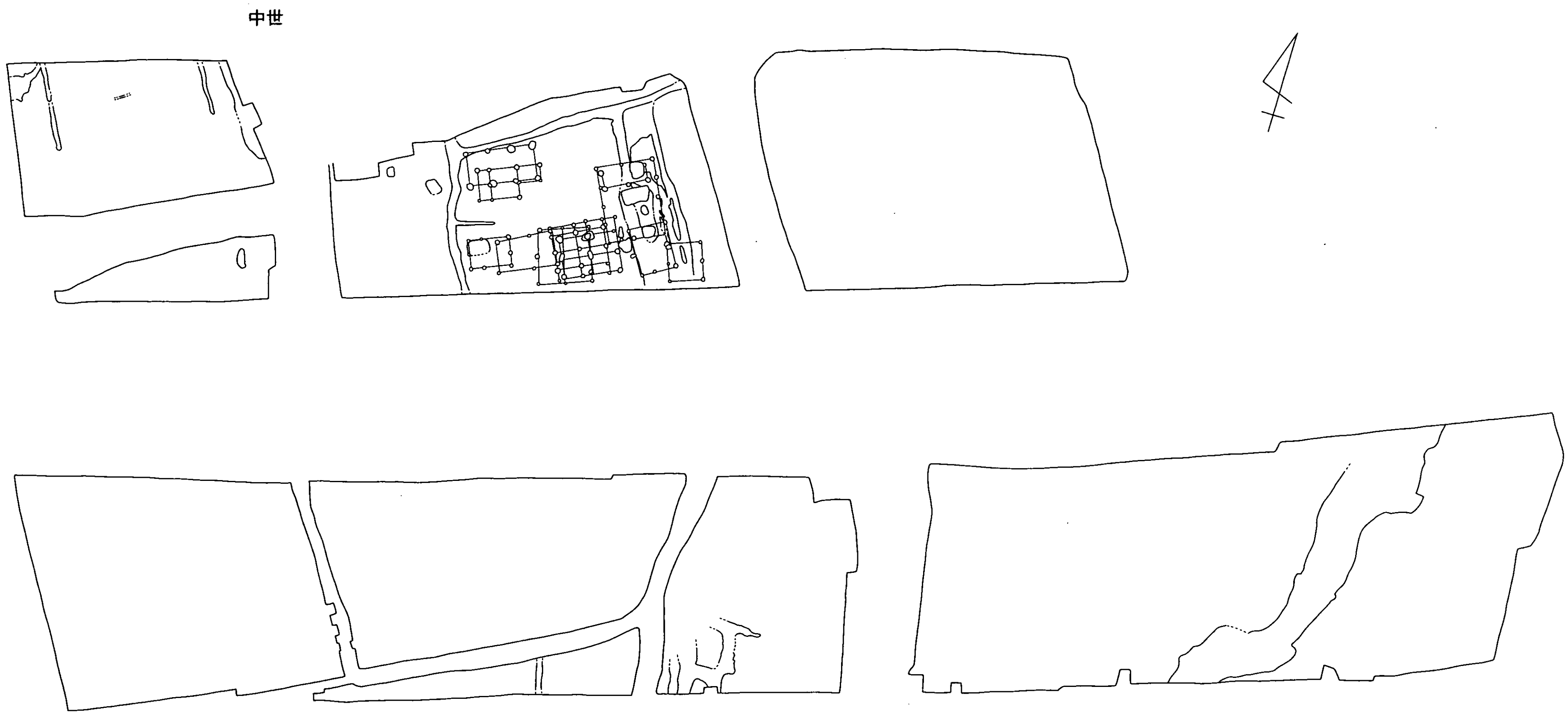
第98図　遺構変遷図（1）



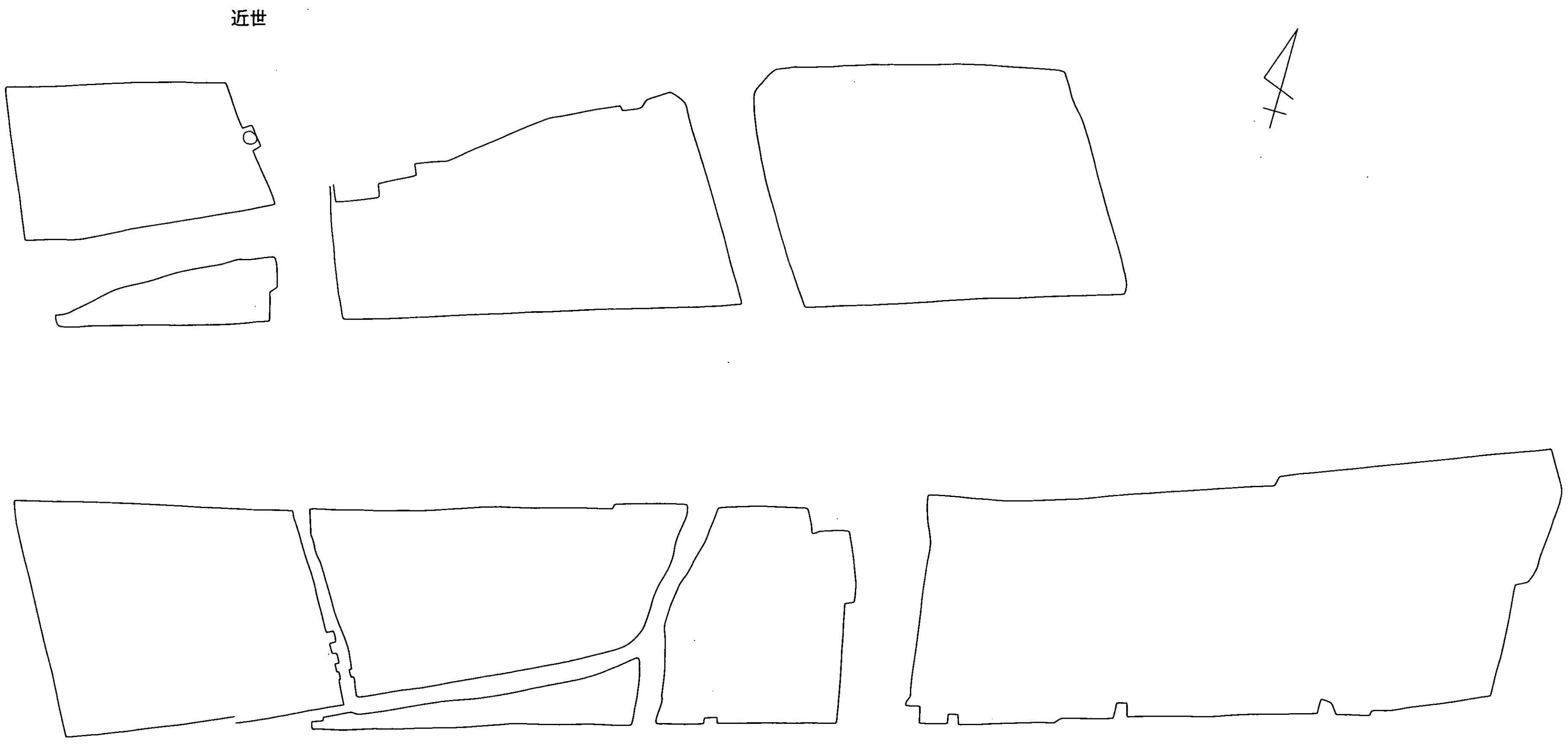
第99図　遺構変遷図（2）



第100図　遺構変遷図（3）



第101図　遺構変遷図（4）



第102図　遺構変遷図（5）

期の柱穴が多数検出されていることから、なお増加する可能性がある。また、いくつかの大形土坑が掘立柱建物跡の内側に重なることから、概報でも屋内の貯蔵穴の可能性が指摘されているが、同規模の土坑で掘立柱建物跡に重複しないものもあり、積極的に裏付ける根拠が見当たらない。

また、掘立柱建物跡の重複や方位の問題もあり、複数の小期に区分される可能性があるが、柱穴出土の資料の評価が定まらず、あえて区分することをしていない。これは、出土遺物が、掘立柱建物跡の建設時に入った（入れられた）ものか、廃絶時もしくはその後に入ったものかの判断を明確にできないことによる。

第6期　江戸時代（第102図）

当該期の遺構はⅥ区SB30・31のみで、集落の一部ではなく、単発的な遺構であると考えられる。

以上のように、買田岡下遺跡は第4期、第5期を中心とする集落遺跡の一部が主体を占め、集落の本体は隣接する調査区南側に広がることが予想される。また、第1期・第2期・第3期の遺構も同様に南側に広がる可能性がある。

第2節　SD37出土土器について

SD37から出土した土器は、廃棄状態から一括資料と認定しており、概報作成段階で、「SD37上層から良好な古式土師器の一括資料を得た。確認した器種と推定個体数は次の通りとなる。二重口縁壷3、広口壷3、甕15、高杯8、小形鉢8、有孔鉢1、小形器台1、小形壷5。」とされている。（各器種の個体数は本報告で変更）

また位置付けについては、「当地方では二重口縁壷は下川津Ⅵ式期から一般化する。その段階では口縁立ち上がり部の反りの強い形態であるが、本資料ではその部分がややだれた後出的な形態に変化している。広口壷では口縁部がラッパ状に開く形態と、頸部中位で強く折れて口縁部が短く水平に開く形態とがある。口縁部に文様帯をもつ例はない。甕は3種ある。やや反り気味に短く開く「く」字状口縁を持ち、体部に叩き目を残し、内面ヘラ削りが上端に及ばない伝統的形態、短く開く「く」字口縁の端部を弱く摘みあげ、体部外面は緻密な斜ハケで仕上げ、内面下半ヘラ削り、上半部に顕著な指押さえを残した形態、およびやや内湾気味に立ち上がる口縁部で端部を小さく肥厚させた形態がある。後2者は各々東阿波型甕、布留甕の模倣形態と見られる。量的には東阿波型甕模倣形態が多い。吉備系の二重口縁甕は見られない。高杯の杯部はやや深目で中位の屈曲は鋭いが上半部はあまり開かない。脚部はやや中膨らみの筒状の軸部から強く折れて短く開く裾部をもつ。脚部に透かし孔はない。また外面ハケ調整が多いがヘラ磨きも認める。小形鉢はいずれも浅目の椀形態で丸底。非常に粗雑化しており、多くの個体で外面に絞り目状の細かい亀裂を認める。小形器台は脚部が長く調整はやや粗雑、杯部は貫通孔がある。小形壷は張りの弱い体部に短い口縁部を付す形態。全体に分厚く調整も比較的粗雑である。

上記した諸点および、小形丸底土器や小形精製鉢を欠くこと、高杯が増加して小形鉢に

匹敵する量に達していること等が本資料の特徴である。こうした点から本資料は布留式古段階に並行すると考える。本地域の土器編年に照らせば、下川津Ⅵ式とⅦ式の間の空白期の一部を埋める内容である。既存の資料では一定の地域差を考慮に入れつつも豊中町延命遺跡SD16資料に最も近く、これよりもやや後出するとみられる。」とされている。

ここで先行様式の概要を提示し、買田岡下遺跡SD37の位置付けについて少し整理しておく。

下川津遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の土器は、大久保によって下川津Ⅰ式～Ⅶ式に分ける案が提示されている。(大久保1990) その内、今回対象となる下川津Ⅵ式・Ⅶ式についてその概要を引用する。

下川津Ⅵ式は、「(前略) Ⅴ式段階に盛興した壺口縁部文様帯は全く残らない。高杯も前代までの系統とは異なる。直接的か間接的かは別として畿内地方の影響を想定しうる形態が出現する。(中略)

壺 広口壺では単純にラッパ状に開く口縁部と立上り部が外反する二重口縁とが認められる。また最大径の低いやや扁平な球状を呈する体部に内湾気味の短い口縁部を持つ小形壺もある。

甕 薄く直線的に開く口縁部形態は先行する時期に見られなかった要素である。この期に至って初めて内面体部上端までヘラ削りを施した個体が出現する。上端まで達しない伝統的なヘラ削りは専ら縦方向にのみ施されていたが、上端部で横に削るため口縁部下端内面の稜線が際立っている。ただし伝統的なヘラ削りに留まり、口縁部の屈曲もそれらに比べればやや緩やかな個体も残存している。

また胎土は全く異なり、体部の球形化をほぼ達成しているが、口縁部形状・調整技法の点でＢ類甕もしくはそれの影響を受けた阿波東部における当該期の甕に類似した一群の甕がこの時期に認められる。

鉢 浅いボウル状を呈し外面に顕著に指押さえをとどめるやや粗雑な形態が多い。前代までの深めの形態は姿を消す。

高杯 それまでの伝統的な形態とは全く異質の「土師器」的な形態のものに代わる。ただし脚裾部がまだかなり大きく、僅かながら内湾傾向を保つ点で古い様相を残す。また口縁部を弱く折り曲げる形態はこの期特有の要素である。」

下川津Ⅶ式は、「ごく一部の器種が判明しているだけで一時期を設定するには尚早であるが、典型的には高杯において明確にⅥ式とは区別できる資料である。

壺 球形の体部に内湾気味に僅かに開く口縁部を持った小形壺がある。

甕 資料が少ないため断定はし難いが、口縁部を緩く折り返して外反気味に開く伝統的な形態は認められない。

高杯 杯部の屈曲はかなりだれており脚裾は軸から強く折れて水平に短く開く。また軸部内面にヘラ削りを加える個体も認められる。」とされている。

次に、延命遺跡SD16出土土器は、報告書では「SD16はSD15が（中略）二つに分れ

た北側のもので、蛇行はしているもののほぼ西方に流路を取っている。（中略）埋土は基本的にSD15と同じであるが（中略）下層である砂層がごく少量になると思われる。遺物は、この流路が広がった部分の上層灰黒色粘質土で多数出土したが、ほとんどが小片ばかりで実測可能なものはごく少量であった。」また、「SD15の上層の時期は鉢が多く出土しており、やや古手の高杯も出土しているが、甕が胴長で底部丸底化していることから布留古段階に当たるものと思われる。」とされている。

買田岡下遺跡SD37の土器は、先に大久保が記述しているように、二重口縁壺などに下川津Ⅵ式に比べて後出する要素が見られること、甕などについては類似する様相も見られること、高杯はⅥ式に近いことなどから、Ⅵ式とⅦ式の間に入る一群であることは問題ないと理解している。ただし、前述したように、Ⅶ式については資料が不足しており、Ⅵ式同等の資料とはいえないことから、可能性として、買田岡下遺跡SD37の土器が、Ⅵ式とⅦ式をうめる標準資料となるのか、Ⅵ式新段階の標準資料となるのかなどの判断は、今後当該期やⅦ式相当の資料の増加を待って再度検討したい。

なお、延命遺跡SD16資料については、買田岡下遺跡SD37出土の二重口縁壺に類似した資料が見当たらず、資料数も限られていることから、同時期と判断することに躊躇を覚える。この点についても今後を待ちたい。

大久保徹也　1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、本州四国連絡橋公団

片桐孝浩　1990「延命遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第八冊』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団

観　察　表

第４表　土器観察表

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
1	7		Ⅰ区中	SP482	土師質土器	羽釜	20.4			ナデ、刷毛目、指押さえ、摩滅	ナデ、刷毛目	口縁部 1/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
3	.8	41	Ⅰ区中	SP488	土師器	小皿	9.1	2.0	5.2	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	4/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
4	10		Ⅰ区中	SP299	土師質土器	土鍋				摩滅、ナデ	ナデ	口縁部破片	10YR5/2 灰黄褐	10YR8/3 浅黄橙	
5	11		Ⅰ区中	SP100	土師器	小皿	8.0	0.9	7.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	1/8	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	
6	11		Ⅰ区中	SP521	土師質土器	土釜				指ナデ	板ナデ	脚破片	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
7	13	41	Ⅰ区中	SP208	土師器	小皿	7.2	0.9	5.8	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	8/8	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/2 灰白	
8	14	41	Ⅰ区中	SP343	東播系須恵器	捏鉢	28.0			回転ナデ、指押さえ	回転ナデ	2/8	10YR6/3 褐灰	10YR6/3 褐灰	
13	15		Ⅰ区中	SP360	土師質土器	羽釜	18.2			ナデ、指押さえ	刷毛目、ナデ	口縁部 1/8	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
17	17		Ⅰ区中	SP644	土師器	杯	11.6	2.6	5.8	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 2/8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
18	17		Ⅰ区中	SP644	土師器	杯	9.8	3.7	5.6	回転ナデ	回転ナデ	3/8	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR7/4 にぶい橙	
19	17		Ⅰ区中	SP644	土師質土器	土鍋	43.9			ナデ、指押さえ後ナデ	ナデ	口縁部破片	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	
20	17		Ⅰ区中	SP644	土師質土器	土鍋	46.7			指押さえ	ナデ	口縁部破片	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/1 褐灰	
21	17	41	Ⅰ区中	SP644	土師質土器	脚付羽釜	26.6			指押さえ、指ナデ、格子タタキ目、ナデ	ナデ、刷毛目、指押さえ	3/8	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	
24	20		Ⅰ区中	SP505	土師器	杯	10.3	2.8	6.8	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	2.5YR7/8 橙	2.5YR7/8 橙	
25	20		Ⅰ区中	SP505	土師器	杯	12.0	2.3	8.6	ナデ、ヘラ切り	ナデ	口縁部破片	2.5YR7/8 橙	2.5YR7/8 橙	
26	20		Ⅰ区中	SP505	土師器	小皿	6.9	1.0	5.4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	3/8	10YR8/6 黄橙	10YR8/6 黄橙	
27	20		Ⅰ区中	SP505	土師質土器	羽釜	16.0			ナデ、刷毛目、摩滅	ナデ、刷毛目	体部 1/8	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	
28	22		Ⅰ区中	SP662	土師器	杯	10.6			回転ナデ	回転ナデ	体部 1/8	10YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	
29	23		Ⅰ区中	SP165	土師器	杯	13.0			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	2.5Y7/8 橙	2.5Y7/8 橙	
30	25		Ⅱ区西	SP830、831	須恵器	蓋				回転ナデ	ナデ	つまみ部 8/8	N7/ 灰白	N5/ 灰	
31	25		Ⅱ区西	SP848	土師質土器	土鍋				ナデ	ナデ、刷毛目	口縁部破片	10YR7/1 灰白	10YR6/1 褐灰	
32	26		Ⅱ区南	SP880	須恵器	皿	15.0	1.9	11.2	回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り	回転ナデ	口縁部 1/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
33	28		Ⅱ区南	SP903	土師器	杯	15.4			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	7.5YR8/1 灰白	7.5YR8/1 灰白	
34	29		Ⅱ区南	SP1518	須恵器	杯	12.9			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N6/ 灰	N6/ 灰	
35	29		Ⅱ区南	SP1518	須恵器	皿	16.2	2.2	13.0	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ	1/8	7.5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
36	29		Ⅱ区南	SP1531	須恵器	皿				回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N6/ 灰	N6/ 灰	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
37	29		Ⅱ区南	SP1531	須恵器	皿			9.0	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	底部1/8	N4/ 灰	N6/ 灰	
38	29		Ⅱ区南	SP1521	須恵器	壺（底部）			11.6	回転ナデ	回転ナデ	底部1/8	N4/ 灰	2.5GY8/1 灰白	
39	30		Ⅵ区	SK73	陶器	椀			4.7	施釉、ナデ	施釉	底部8/8	5Y6/2 灰オリーブ	5Y6/2 灰オリーブ	
40	30		Ⅵ区	SP1120	土師質土器	土鍋				横ナデ	横ナデ	口縁部破片	2.5Y4/1 黄灰	7.5YR7/3 にぶい橙	
41	30	42	Ⅵ区	SP1276	肥前系磁器	皿	13.5	3.1	8.4	施釉、ヘラケズリ	施釉	口縁部3/8	5B7/1 明青灰	5B7/1 明青灰	
43	33		Ⅰ区中	SP145	土師器	小皿	6.2	1.0	5.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部4/8	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙	
46	33		Ⅰ区中	SP184	土師器	杯	12.6			回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ	底部1/8	5YR8/4 淡橙	7.5YR8/4 浅黄橙	
47	33		Ⅰ区中	SP210	土師器	杯	13.1			ナデ	ナデ	口縁部1/8	5YR8/3 淡橙	5YR8/3 淡橙	
48	33		Ⅰ区中	SP292	土師質土器	羽釜	23.9			?、ナデ、指押さえ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ、板ナデ	口縁部1/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	
49	33		Ⅰ区中	SP308	土師質土器	鉢	32.6			回転ナデ、ナデ後指押さえ	回転ナデ	口縁部破片	5YR8/2 灰白	5YR7/3 にぶい橙	
50	33		Ⅰ区中	SP336	土師器	小皿	6.5	1.1	5.2	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2/8	5YR8/2 灰白	5YR7/2 明褐灰	
51	33		Ⅰ区中	SP352	土師質土器	羽釜				ナデ、指押さえ	ナデ、刷毛目	口縁部破片	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	
54	33		Ⅰ区中	SP380	土師器	小皿	7.2	1.2	6.6	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部1/8	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	
55	33		Ⅰ区中	SP403	土師質土器	土鍋	43.0			指押さえ後ナデ	ナデ	口縁部破片	10YR4/2 灰黄褐	10YR8/3 浅黄橙	
56	33		Ⅰ区中	SP411	土師質土器	羽釜				ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR7/3 にぶい橙	
57	33		Ⅰ区中	SP462	土師器	椀	15.0			回転ナデ、摩滅	回転ナデ、摩滅	1/8	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	
58	33		Ⅰ区中	SP489	土師器	小皿	7.0	1.1	5.6	ナデ、ヘラ切り	ナデ	口縁部1/8	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	
60	33		Ⅰ区中	SP526	土師器	杯	10.8			回転ナデ	回転ナデ	口縁部1/8	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	
62	33		Ⅰ区中	SP639	土師質土器	羽釜	24.5			ナデ、指押さえ	刷毛目	口縁部1/8	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
64	20		Ⅰ区中	SP664	土師質土器	土鍋	46.0			ナデ、板ナデ、指押さえ	ナデ、刷毛目	口縁部1/8	7.5YR4/3 褐	10YR5/3 にぶい黄褐	
65	34		Ⅰ区中	SP670	土師質土器	鉢	35.0			回転ナデ、回転ヘラケズリ、指押さえ後ナデ	ナデ	口縁部破片	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	
66	34	42	Ⅵ区	SP1046	陶器	小壺	4.3	3.6	3.6	回転ナデ	回転ナデ	8/8	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	
67	34		Ⅵ区	SP1065	土師器	椀			7.4	回転ナデ	ヘラミガキ	底部3/8	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	
68	34		Ⅵ区	SP1079	土師器	杯	16.0			回転ヘラケズリ	ナデ	口縁部3/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
69	34		Ⅵ区	SP1124	黒色土器A類	椀			8.2	回転ナデ	ヘラミガキ	底部1/8	10YR3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	
70	34		Ⅵ区	SP1149	土師器	杯	14.0			回転ナデ、指押さえ、ナデ	板ナデ	口縁部破片	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
71	34		Ⅵ区	SP1162	土師器	杯			7.0	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 6/8	7.5YR8/4 浅黄橙	5YR7/4 にぶい橙	
77	34		Ⅵ区	SP1224	土師質土器	羽釜				指ナデ	—	脚 1 本	7.5YR8/6 浅黄橙	—	
78	34		Ⅵ区	SP1232	土師質土器	羽釜	20.4			横ナデ、ナデ、格子タタキ目	横ナデ、ナデ	2/8	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR4/2 灰褐	
79	35		Ⅵ区	SP1267	土師質土器	羽釜	20.0			横ナデ、ナデ	ナデ	口縁部破片	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	
80	35		Ⅵ区	SP1287	土師質土器	土鍋	35.6			ナデ、板ナデ、指押さえ	ナデ、刷毛目	口縁部 1/8	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	
81	35	42	Ⅵ区	SP1343	備前焼	擂鉢	28.0	15.0	12.0	ナデ、摩滅、指押さえ	卸目	6/8	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
82	35		Ⅵ区	SP1384	土師質土器	羽釜	22.8			指ナデ、ナデ	ナデ	口縁部 1/8	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	
83	35		Ⅱ区南	SP1535	須恵器	杯蓋				回転ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ	つまみ部 6/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
84	35		Ⅱ区南	SP1536	須恵器	杯			5.9	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
85	35		Ⅱ区南	SP1536	須恵器	杯蓋	15.4	1.2	11.0	回転ナデ	回転ナデ	体部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
86	35		Ⅱ区南	SP1538	須恵器	杯	13.3		9.2	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
87	35	42	Ⅱ区南	SP1538	須恵器	高台付杯	16.3	6.6	10.0	回転ヘラケズリ、回転ナデ、ヘラ切り	回転ヘラケズリ、回転ナデ	底部 3/8	N6 ／灰	N6 ／灰	
88	35		Ⅱ区南	SP1538	土師質土器	土鍋	26.6			ナデ、刷毛目	ナデ	口縁部 1/8	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR6/4 にぶい橙	
89	35		Ⅱ区南	SP1546	須恵器	高台付杯(底部)			8.9	回転ナデ、回転ヘラケズリ、ナデ	回転ナデ	底部 1/8	N7/ 灰白	N6/ 灰	
90	37		Ⅰ区西	SD02	土師質土器	羽釜				ナデ、指押さえ	ナデ	体部 1/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
96	41		Ⅰ区中	SD28～31複合部	土師器	杯	10.1	2.5	6.2	回転ナデ	回転ナデ	1/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
97	41		Ⅰ区中	SD28～31複合部	土師器	杯	10.2	1.9	6.0	ナデ	ナデ	3/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
98	41		Ⅰ区中	SD28～31複合部	土師器	杯	9.5	2.4	6.0	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	2/8	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
99	41		Ⅰ区中	SK37、SD28	土師器	杯			5.5	回転ナデ後ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ後ナデ	4/8	10YR8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙	
100	41		Ⅰ区中	SD48、SD28～31合流部、SD29、30	土師質土器	擂鉢			12.3	指押さえ後ナデ、ナデ	ナデ後卸目、ナデ	底部 2/8	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	
101	41		Ⅰ区中	SD28～31複合部	土師器	小皿	6.1	0.8	5.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	1/8	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	
102	41		Ⅰ区中	SD28～31複合部	土師質土器	捏鉢	28.0			ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	口縁部 1/8	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
103	41		I区中	SD28	土師質土器	羽釜	23.2			回転ナデ、指押さえ、格子タタキ目	回転ナデ	口縁部 1/8	7.5Y5/4 にぶい褐	10YR7/3 にぶい黄橙	
104	41		I区中	SD48、SD28～31 合流部	土師質土器	羽釜	26.8			ナデ、指押さえ、格子タタキ目、ヘラケズリ後ナデ	ナデ、板ナデ	脚 3 本	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
105	41		I区中	SD48、SD28～31 合流部	土師質土器	羽釜	27.0			ナデ、指押さえ後ナデ	ナデ	口縁部 1/8	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	
106	41		I区中	SD48、SD28～31 合流部	土師質土器	羽釜	28.8			ナデ、指押さえ、格子タタキ目	ナデ	口縁部 1/8	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	
107	42		I区中	SD28～31複合部	土師質土器	羽釜	25.4			回転ナデ、ナデ、指押さえ	指押さえ、板ナデ	口縁部 1/8	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	
108	42		I区中	SD28～31複合部	土師質土器	羽釜	19.6			ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	口縁部 1/8	5YR6/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	
109	42		I区中	SD28～31複合部	土師質土器	羽釜	25.2			ナデ、指押さえ	ナデ、板ナデ	口縁部 1/8	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR8/3 浅黄橙	
110	42		I区中	SD28～31複合部	土師質土器	土鍋	44.0			横ナデ	横ナデ	3/8	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR6/4 にぶい橙	
111	42		I区中	SD28～31複合部	土師質土器	土鍋	42.5			横ナデ、板ナデ、刷毛目後ナデ	横ナデ	口縁部 1/8	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR7/4 にぶい橙	
112	42		I区中	SD28～31複合部	土師質土器	土鍋	45.2			ナデ、指押さえ	回転ナデ	口縁部 1/8	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	
113	45	43	I区中	SD37	土師質土器	広口壺	17.8	379？	9.0？	横ナデ、刷毛目、タタキ目後刷毛目	横ナデ、指押さえ、ヘラケズリ	6/8	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	
114	45	43	I区中	SD37	弥生土器	広口壺	18.5			ナデ、刷毛目	板ナデ、指ナデ、ナデ、摩滅	口縁部 4/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
115	45	43	I区中	SD37	弥生土器	壺	18.7			ナデ、(一部ヘラミガキが残る)	ナデ、摩滅	口縁部 8/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
116	45	43	I区中	SD37	弥生土器	広口壺	19.0			板ナデ後ナデ	指押さえ後ナデ	口縁部 8/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
117	45		I区中	SD37	弥生土器	広口壺				回転ナデ	摩滅	口縁部破片	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	
118	45		I区中	SD37	弥生土器	広口壺	15.5			ナデ	ナデ、板ナデ	頸部 1/8	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	
119	45		I区中	SD37	弥生土器	広口壺	18.6			回転ナデ	ナデ、指押さえ	口縁部 1/8	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR7/4 にぶい橙	
120	45		I区中	SD37	弥生土器	広口壺	19.6			ナデ	ナデ	口縁部 1/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	
121	45	43	I区中	SD37	弥生土器	広口壺	17.6			ナデ、ヘラミガキ	ナデ、板ナデ	口縁部 1/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
122	45		I区中	SD37	弥生土器	小型丸底壺			2.0	横ナデ、刷毛目	指ナデ	体部 6/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
123	45	43	I区中	SD37	土師器	小型丸底壺				ナデ、刷毛目、指押さえ	ナデ、刷毛目	6/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
124	46		I区中	SD37	弥生土器	甕	11.8			ナデ	ナデ、ヘラケズリ	口縁部 1/8	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
125	46	43	I区中	SD37	弥生土器	甕	12.5	17.3		ナデ、刷毛目、板ナデ	ナデ、指押さえ、ヘラケズリ	6/8	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	
126	46		I区中	SD37	土師質土器	甕	14.2			ナデ、刷毛目	ナデ、指押さえ	1/8	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	
127	46		I区中	SD37	土師質土器	甕	13.2			ナデ、刷毛目	ナデ、指押さえ	口縁部 4/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
128	46		I区中	SD37	弥生土器	甕	14.0			ナデ、摩滅	ナデ、指押さえ	口縁部 2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
129	46	44	I区中	SD37	弥生土器	高杯	14.1			ナデ、刷毛目	ナデ、板ナデ後刷毛目	杯部 5/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
130	46		I区中	SD37	弥生土器	高杯	15.0			ナデ	ナデ、ヘラミガキ	口縁部 2/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
131	46		I区中	SD37	弥生土器	高杯	14.0			横ナデ、刷毛目	横ナデ、板ナデ、ナデ	杯部 6/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
132	46	44	I区中	SD37	弥生土器	高杯	15.2			ナデ、ナデ後刷毛目	ナデ、ナデ後ヘラミガキ	杯部 6/8	10YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	
133	46		I区中	SD37	弥生土器	高杯	13.4			摩滅	ヘラミガキ、ナデ	杯部 3/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
134	46		I区中	SD37	弥生土器	器台			9.0	板ナデ、ナデ	ナデ、刷毛目	口縁部 2/8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
135	46	44	I区中	SD37	弥生土器	高杯			11.2	指ナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ、板ナデ、ナデ	脚部 8/8	10YR8/4 浅黄橙	2.5YR7/4 淡赤橙	
136	46		I区中	SD37	弥生土器	高杯				摩滅	ナデ	脚部 5/8	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	
137	46	44	I区中	SD37	土師器	小型鉢	7.9	3.1		指押さえ	指押さえ	6/8	10YR8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙	
138	46	44	I区中	SD37	弥生土器	鉢	8.8			板ナデ	板ナデ	5/8	2.5Y8/2 灰白	10YR6/2 灰黄褐	
139	46		I区中	SD37	土師質土器	鉢	12.4	4.7	3.6	ナデ	板ナデ後ナデ	6/8	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	
140	46	44	I区中	SD37	弥生土器	鉢	10.0	3.8	6.0	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	7/8	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	
141	46	44	I区中	SD37	弥生土器	鉢	12.3			摩滅、指押さえ、ナデ	板ナデ、指押さえ	6/8	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
142	46	44	I区中	SD37	土師器	鉢	13.9			摩滅、板ナデ	摩滅、板ナデ	7/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
143	47	45	I区中	SD37	弥生土器	小型壺			2.3	摩滅、指押さえ、ナデ	指ナデ	6/8	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	
144	47	45	I区中	SD37	弥生土器	小型壺	7.6			ナデ、刷毛目後指押さえ	指押さえ、板ナデ	7/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
145	47		I区中	SD37	弥生土器	小型壺	11.0			摩滅、ナデ、刷毛目	ナデ、指ナデ、板ナデ、指押さえ	2/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
146	47		I区中	SD37	弥生土器	小型壺	12.5			摩滅	摩滅	口縁部 2/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
147	47		I区中	SD37	弥生土器	甕	15.6	20.2		ナデ	板ナデ、ナデ、ヘラケズリ	2/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
148	47	45	I区中	SD37	弥生土器	甕	14.4			横ナデ、板ナデ	横ナデ、指ナデ、ヘラケズリ	3/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
149	47		I区中	SD37	弥生土器	甕	13.4			ナデ、指押さえ、タタキ目	ナデ、指押さえ	口縁部 1/8	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR7/4 にぶい褐	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
150	47		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	甕	13.8			ナデ	ナデ、指押さえ	口縁部 3/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
151	47		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	甕	10.4			剥離、ナデ	剥離、ヘラケズリ	口縁部 1/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
152	47		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	甕	20.4			ナデ、指押さえ、摩滅	ナデ、指押さえ	口縁部 1/8	5YR7/4 にぶい橙	10YR8/2 灰白	
153	47		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	甕	17.3			タタキ目後ナデ	ナデ、ヘラケズリ後ナデ	口縁部 2/8	5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
154	47		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	壺				ナデ、板ナデ、タタキ目、指押さえ	指押さえ、指ナデ	頸部 1/8	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
155	48	44	Ⅰ区中	SD37	弥生土器	鉢	12.8	5.9		ナデ	ナデ	4/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
156	48		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	鉢	9.7	6.3	3.2	指押さえ後板ナデ、ナデ	ナデ	2/8	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	
157	48	44	Ⅰ区中	SD37	弥生土器	鉢	13.5	6.0		指押さえ後ナデ、摩滅	ナデ	5/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
158	48		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	鉢	17.8	9.3	6.3	指押さえ、摩滅	ナデ（一部タタキ目あり）、摩滅	6/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
159	48		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	鉢			3.4	ナデ	指押さえ後ナデ	底部 2/8	5YR6/3 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	
160	48		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	鉢	12.8			ナデ、板ナデ	ナデ	口縁部 1/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
161	48		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	鉢	15.9			ナデ、ヘラケズリ	ナデ	口縁部 1/8	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
162	48		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	甕	29.8			摩滅	摩滅	口縁部破片	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
163	48		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	鉢	26.6			ナデ	ナデ、指押さえ	口縁部破片	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
164	48		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	鉢	32.8			ナデ	ナデ、指押さえ	口縁部 1/8	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
165	48		Ⅰ区中	SD37	弥生土器	底部			5.8	摩滅	摩滅	底部 8/8	5YR4/3 にぶい赤褐	10YR4/1 褐灰	
166	49	48	Ⅰ区中	包含層	青磁	椀			5.8	施釉	施釉	底部 2/8	10Y5/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	
167	49		Ⅰ区中	包含層	須恵器	壺（底部）			11.0	格子タタキ目後ナデ、ヘラケズリ、ナデ	回転ナデ、指押さえ、ナデ	底部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
168	49		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	甕	32.2			回転ナデ、ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	10YR2/2 黒褐	7.5YR7/4 にぶい橙	
169	49		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜				指ナデ	刷毛目後指押さえ	脚 5/8	10YR5/2 灰黄褐	10YR8/4 浅黄橙	
170	49		Ⅰ区中	SD48	土師質土器	羽釜	27.5			ナデ、指押さえ	ナデ、刷毛目	口縁部 1/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
171	51		Ⅰ区東	SD41	弥生土器	壺	10.9			指押さえ、ナデ、刷毛目	ナデ、指押さえ	口縁部 1/8	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	
172	51		Ⅰ区東	SD40、41	弥生土器	壺（底部）			4.0	摩滅	摩滅	底部 5/8	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR5/3 にぶい褐	
173	51		Ⅰ区東	SD40、41	弥生土器	小型丸底壺	9.2			指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ（砂粒あり）	口縁部 3/8	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
174	51		Ⅰ区東	SD41	土師器	鉢	12.3			板ナデ、ナデ	刷毛目	5/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
175	51	45	Ⅰ区東	SD41	土師器	鉢	12.8			ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	4/8	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	
176	51		Ⅰ区東	SD40、41	須恵器	杯	8.8			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	3/8	N6/ 灰	N6/ 灰	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
177	51	45	Ⅰ区東	SD41	須恵器	杯	10.0	5.0		回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	7/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
178	51		Ⅰ区東	SD41	須恵器	杯	9.6			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	1/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
179	51		Ⅰ区東	SD41	須恵器	杯	10.4			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	口縁部 2/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
180	52		Ⅱ区南	SD55	土師器	椀			5.4	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 2/8	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	
181	52		Ⅱ区西	SD55	須恵器	杯			6.4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	N8/ 灰白	N8/ 灰白	
182			Ⅱ区西	SD56	土師器	椀			9.2	摩滅	摩滅	底部 1/8	5YR7/3 にぶい橙	5YR7/3 にぶい橙	
183	52		Ⅱ区西	SD55	土師質土器	土鍋	36.0			ナデ	?	口縁部破片	5YR6/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
184	54		Ⅱ区東	SD69	須恵器	杯			8.0	ナデ	ナデ	底部 2/8	5YR8/1 灰白	5YR8/1 灰白	
185	56	45	Ⅱ区南	SD67	土師器	杯	13.2	3.4	6.6	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	5/8	7.5Y8/3 浅黄橙	7.5Y6/6 橙	
186	56		Ⅱ区南	SD68	土師器	杯	13.0	3.0	8.2	回転ナデ	回転ナデ	2/8	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄	
187	56		Ⅱ区南	SD68	須恵器	壺	13.5			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	5Y5/1 灰	5Y7/1 灰白	
188	56		Ⅱ区南	SD68	須恵器	杯			8.6	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 2/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
189	56		Ⅱ区南	SD68	土師質土器	甕	30.0			横ナデ、刷毛目	刷毛目、横ナデ、板ナデ	1/8	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	
190	57		Ⅲ区西	SD74	須恵器	杯			6.0	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	底部 3/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
191	57		Ⅲ区西	SD74	須恵器	杯（高台部分）			9.6	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 2/8	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	
192	57		Ⅲ区西	SD74	黒色土器	椀			7.6	回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	7.5YR8/3 浅黄橙	5YR4/1 灰	
193	57		Ⅲ区西	SD74	土師器	椀			6.6	回転ナデ	摩滅	底部 4/8	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
194	57		Ⅲ区西	SD74	黒色土器	椀			7.6	ナデ、ヘラケズリ、ナデ	ナデ	底部 1/8	10YR8/2 灰白	2.5Y5/1 黄灰	
195	57		Ⅲ区西	SD74	土師器	杯	13.3	2.7	7.0	ナデ、ヘラ切り	ナデ	底部 3/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
196	57		Ⅲ区西	SD74	須恵器	杯	9.4			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
197	57	45	Ⅲ区西	SD74	土師器	杯	11.2	3.4	6.2	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	5/8	5YR6/6 橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
198	57		Ⅲ区西	SD74	土師器	杯			6.5	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 7/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
199	57		Ⅲ区西	SD74	土師器	杯			2.7	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 3/8	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	
200	57		Ⅲ区西	SD74	土師器	杯	12.0	3.5	6.0	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	3/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	
201	57		Ⅲ区西	SD74	土師質土器	羽釜				ナデ	指押さえ	体部破片	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
202	58		Ⅲ区西	SD74	黒色土器	椀			6.5	回転ナデ	ヘラミガキ	底部 1/8	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y4/1 黄灰	
203	58		Ⅲ区西	SD74	須恵器	椀			9.0	回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	底部 2/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
204	58		Ⅲ区西	SD74	土師器	小型器台	12.4	3.0	5.8	ナデ	ナデ	5/8	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	
205	58	45	Ⅲ区西	SD76	須恵器	杯	13.2	3.5	6.7	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	7/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
206	58		Ⅲ区西	SD74	土師器	杯	10.9	2.8	7.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	5/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
207	58		Ⅲ区西	SD74	土師器	杯			7.5	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	7/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
208	58		Ⅲ区西	SD74	土師器	円盤状高台杯			6.9	摩滅	回転ナデ	底部 4/8	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	
209	58		Ⅳ区西	SD74	土師器	円盤状高台杯			7.3	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 8/8	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	
210	58		Ⅲ区西	SD74	土師器	円盤状高台杯			7.0	ナデ	ナデ	底部 2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
211	58		Ⅲ区西	SD74	土師器	円盤状高台杯	8.4			ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ	底部 1/8	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	
212	58		Ⅲ区西	SD74	土師器	円盤状高台杯			7.8	ナデ	ナデ	底部 2/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
213	58		Ⅲ区西	SD74	黒色土器A類	椀	13.0	5.4	7.1	摩滅	ヘラミガキ	2/8	5YR7/4 にぶい橙	N3/ 暗灰	
214	58		Ⅲ区西	SD74	土師器	椀			7.0	回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	底部 6/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
215	58		Ⅲ区西	SD76	須恵器	壺			10.0	回転ナデ、回転ナデ後指押さえ、ナデ	回転ナデ、剥離	3/8	N4/ 灰	N5/ 灰	
218	59		Ⅲ区東	SD78	須恵器	壺	15.0			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
219	59		Ⅲ区東	SD78	須恵器	壺（底部）			9.2	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
220	59		Ⅳ区	SD78	須恵器	壺（底部）			7.7	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	N5/ 灰	N6/ 灰	
221	59		Ⅲ区東	SD78	須恵器	壺（底部）			7.5	回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	5Y6/1 灰	5Y8/1 灰白	
222	59		Ⅳ区	SD78	須恵器	壺（底部）			8.9	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 1/8	2.5Y6/1 黄灰	N7/ 灰白	
223	59		Ⅲ区東	SD78	須恵器	杯			11.1	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	
224	59		Ⅳ区	SD79	土師器	椀			5.5	ナデ	ヘラミガキ、摩滅	底部 5/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
225	59		Ⅳ区	SD78	土師器	椀			6.0	摩滅	摩滅	底部 4/8	5YR5/3 にぶい赤褐	7.5YR8/4 浅黄橙	
226	59		Ⅲ区東	SD78	須恵器	壺（底部）			12.0	回転ナデ	板ナデ	底部 1/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
227	59	45	Ⅲ区東	SD78	黒色土器A類	椀			6.4	回転ナデ、ヘラ切り	ヘラミガキ、摩滅	底部 7/8	2.5Y8/2 灰白	N3/ 暗灰	
228	59		Ⅲ区東	SD78	黒色土器	椀			7.0	ヘラケズリ	ヘラミガキ	底部 3/4	10YR8/3 浅黄橙	5Y3/1 オリーブ黒	
229	59		Ⅲ区東	SD78	土師器	椀			6.2	ナデ、ヘラケズリ、ナデ	ナデ	底部 3/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	
230	59		Ⅲ区東	SD78	土師器	円盤状高台杯			7.8	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
231	59		Ⅳ区	SD78	土師器	円盤状高台杯			7.6	ナデ	ナデ	底部 1/8	10YR8/4 浅黄橙	7.5YR6/6 橙	
232	59		Ⅲ区東	SD78	土師器	円盤状高台杯			7.3	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 8/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	
233	59	45	Ⅳ区	SD78	須恵器	皿	13.0	2.1	9.7	回転ナデ、ヘラ切り、火襷	回転ナデ、火襷	8/3	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
234	59		Ⅲ区東	SD78	土師器	杯	13.0	3.0	8.0	摩滅	摩滅	1/8	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	
235	59		Ⅲ区東	SD78	土師器	杯			8.9	摩滅	摩滅	底部 1/8	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	
236	59		Ⅲ区東	SD78	須恵器	皿			11.0	回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ	口縁部 1/4	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
237	59		Ⅳ区	SD78	須恵器	杯			6.8	回転ナデ、火襷	回転ナデ	底部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
238	59	46	Ⅲ区東	SD78	緑釉	杯蓋	13.0			回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	破片	10Y7/2 灰白	10Y7/2 灰白	
239	59		Ⅲ区東	SD78	土師器	杯			6.1	指押さえ、ナデ	ナデ	底部 2/8	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	
240	59		Ⅳ区	SD78	須恵器	壺（底部）			9.0	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、指押さえ	底部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
246	60	48	Ⅳ区	SD78	瓦(須恵質)	丸瓦	最大長 15.0	最大幅 9.6	最大厚 2.3	（凸面）板ナデ	（凹面）布目痕	4/8	（凸面）5Y7/1 灰白	（凹面）N3/ 暗灰	
247	60		Ⅳ区	SD78	瓦(須恵質)	平瓦	最大長 4.4	最大幅 2.0	最大幅 1.9	（凸面）縄タタキ目	（凹面）布目痕	破片	（凸面）N6/ 灰	（凸面）N6/ 灰	
248	60		Ⅳ区	SD78	瓦(須恵質)	平瓦	最大長 6.2	最大幅 5.9	最大厚 1.6	（凸面）縄タタキ目、板ナデ	（凹面）布目痕	破片	（凸面）N5/ 灰	(凹面)N5/ 灰	
249	60		Ⅳ区	SD78	瓦(須恵質)	丸瓦	最大長 5.4	最大幅 6.2	最大厚 1.6	（凸面）板ナデ	（凹面）布目痕	破片	（凸面）N4/ 灰	（凹面）N4/ 灰	
257	63		Ⅵ区	SD79	土師器	杯	13.4			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
258	63	48	Ⅵ区	SD79	土師器	杯	12.0	3.8	7.1	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	5/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
259	63		Ⅵ区	SD83	土師器	杯	13.4	2.9	7.9	回転ナデ	回転ナデ	2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
260	63		Ⅵ区	SD83	土師器	杯	13.8	2.6	8.7	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	5/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
261	63		Ⅵ区	SD79	土師器	杯	11.0	1.9	6.8	回転ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ヘラケズリ、ナデ	口縁部 2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
262	63		Ⅵ区	SD79	土師器	杯	10.8	2.6	2.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
263	63		Ⅵ区	SD80	土師質土器	小皿	8.5	1.2	6.0	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
264	63		Ⅵ区	SD79	土師器	杯			6.0	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	4/8	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
265	63		Ⅵ区	SD79	土師器	杯			6.0	回転ヘラケズリ、ヘラ切り	ナデ、ナデ後板ナデ	底部 5/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
266	63		Ⅵ区	SD83	土師器	椀			6.5	回転ナデ	回転ナデ	底部 8/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
269	65		Ⅰ区西	SK01	土師器	椀（底部）			6.8	ナデ	ナデ	底部 2/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
270	65		Ⅰ区西	SK03	黒色土器A類	椀			7.8	ナデ	ナデ	底部 1/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y3/1 黒褐	
271	65		Ⅰ区西	SK03	須恵器	壺（底部）			12.9	ナデ	回転ナデ	底部 1/8	5Y6/1 灰	N5/ 灰	
272	65		Ⅰ区西	SK03	須恵器	壺（底部）			14.2	ナデ、摩滅	指押さえ、ナデ	底部 1/8	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	
273	66		Ⅰ区中	SK07	土師器	小皿	6.1	1.1	5.4	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	7.5YR8/3 浅黄橙	5YR7/6 橙	
274	66		Ⅰ区中	SK12	土師器	杯			5.3	ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り	ナデ	底部 6/8	10YR7/1 灰白	10YR8/2 灰白	
275	67		Ⅰ区中	SK13	土師器	杯	12.0	2.5	8.0	回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	
276	67		Ⅰ区中	SK22	土師質土器	羽釜	22.6			ナデ	板ナデ	口縁部破片	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
277	67		Ⅰ区中	SK22	土師質土器	土鍋	39.7			ナデ、指ナデ、格子タタキ目	ナデ、板ナデ	1/8	10YR3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	
278	67		Ⅰ区中	SK25	土師器	杯	10.4	1.8	6.4	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	1/8	7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	
279	67		Ⅰ区中	SK25	土師質土器	小皿	6.4	0.9	5.4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	1/8	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	
282	68		Ⅰ区中	SK34	土師器	杯	10.3	2.2	6.3	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、指押さえ	1/8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
283	68		Ⅰ区中	SK34	土師器	杯	10.2			回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	
286	68		Ⅰ区中	SK35	土師器	小皿	6.4	2.5	5.2	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	4/8	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	
287	68		Ⅰ区中	SK35	土師器	小皿	6.6	1.5	5.2	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	5/8	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/8 橙	
288	69		Ⅰ区中	SK37	土師質土器	小皿	5.4	1.0	4.4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	3/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
289	69	48	Ⅰ区中	SK37	土師器	杯	9.7	2.2	6.0	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	5/8	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	
290	69		Ⅰ区中	SK37	土師器	杯	10.5	3.3	7.5	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	
291	69	48	Ⅰ区中	SK37	土師器	杯	10.2	2.7	5.1	回転ナデ、板目痕	回転ナデ	6/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	
292	69		Ⅰ区中	SK37	土師器	杯			5.5	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 8/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
293	69		Ⅰ区中	SK37	土師質土器	土鍋				横ナデ、ナデ	横ナデ、板ナデ	口縁部破片	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
294	69		Ⅰ区中	SK37	土師質土器	羽釜	24.6			ナデ、指押さえ、板ナデ	ナデ	口縁部 1/8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
295	69	48	Ⅰ区中	SK37	青磁	椀				施釉、回転ヘラケズリ	施釉	体部 3/8	7.5Y6/1 灰	10Y6/2 オリーブ灰	
296	70	49	Ⅰ区中	SK38	白磁	椀	18.1			施釉	施釉	口縁部破片	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	
297	70	49	Ⅰ区中	SK40	土師器	杯	9.8		6.2	回転ナデ	回転ナデ	4/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
299	72	50	Ⅰ区中	SK52 №2	土師質土器	土鍋	16.8	9.5		ナデ、指押さえ	ナデ	7/8	2.5YR6/8 橙	7.5YR7/3 にぶい橙	
300	72		Ⅰ区中	SK52	土師器	杯			5.7	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	6/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
301	72	50	Ⅰ区中	SK52	土師質土器	小皿	8.6	1.4	7.2	ナデ、ヘラ切り	ヘラケズリ、ナデ	口縁部 7/8	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	
302	72	50	Ⅰ区中	SK52	土師質土器	小皿	8.2	1.5	6.8	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	6/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	
303	73		Ⅰ区中	SK53	土師質土器	甕				横ナデ	横ナデ、刷毛目	口縁部破片	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
304	73		Ⅰ区中	SK53	備前焼	甕（底部）			35.6	板ナデ、ナデ、ヘラケズリ	板ナデ、ナデ	2/8	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	
306	74		Ⅰ区東	SK42	土師質土器	小皿	7.1	1.5	4.8	回転ナデ、板目痕	回転ナデ、回転ナデ後ナデ	3/8	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	
307	76		Ⅵ区	SK74	土師質土器	羽釜	24.0			ナデ、指押さえ後ナデ、指押さえ	ナデ、板ナデ	口縁部破片	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
308	76	50	Ⅵ区	SK74	土師器	土錘	最大長 4.2	最大幅 1.4	最大厚 1.4	ナデ	ナデ	8/8	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	
309	77	51	Ⅵ区	SK77	土師質土器	焙烙	50.4			ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ、板ナデ	4/8	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR6/4 にぶい橙	
310	78	51	Ⅰ区西	包含層	青磁	椀				施釉	施釉	口縁部破片	5Y6/3 オリーブ黄	5Y6/3 オリーブ黄	
311	78		Ⅰ区西	包含層	土師器	杯			5.8	回転ナデ、回転ヘラ切り	ナデ	底部 3/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
312	78		Ⅰ区西	包含層	土師質土器	羽釜	24.2			指押さえ後ナデ、ナデ、指押さえ	板ナデ	口縁部 1/8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	
313	78		Ⅰ区西	包含層	備前焼？	擂鉢			12.8	ナデ、横ナデ	横ナデ後卸目	底部 2/8	5YR6/3 にぶい橙	5YR6/6 橙	
314	79		Ⅰ区中	包含層	須恵器	杯蓋	12.5			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
315	79		Ⅰ区中	包含層	須恵器	杯	13.6			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
316	79		Ⅰ区中	包含層	須恵器	杯	17.0			回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
317	79		Ⅰ区中	包含層	須恵器	捏鉢				ナデ、指押さえ、板ナデ	ナデ、刷毛目	口縁部破片	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
318	79		Ⅰ区中	包含層	須恵器	捏鉢				ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	
319	79		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	土鍋				ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR7/4 にぶい橙	
320	79		Ⅰ区中	包含層	須恵器	壺（底部）			12.8	回転ナデ、板ナデ後回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	底部 2/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
321	79		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜				ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	
322	79		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜	24.3			指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ、ナデ	口縁部 1/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
323	79		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜	26.0			ナデ、板ナデ	ナデ	口縁部 1/8	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	
324	79		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜	26.4			ナデ、ヘラケズリ、指押さえ	ナデ、ナデ後指押さえ	口縁部 1/8	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/6 明褐	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
325	79		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜	31.0			ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部 1/8	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	
326	79		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜	29.8			ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	
327	79		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜				指ナデ、指押さえ、ナデ	指ナデ、指押さえ、ナデ	脚 1 本	7.5YR6/3 にぶい褐	5YR6/6 橙	
328	79		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜				指ナデ	指押さえ	脚 1 本	10YR5/1 褐灰	10YR6/3 にぶい黄橙	
329	80		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜	21.4			ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
330	80		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	羽釜	23.8			ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	口縁部破片	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
331	80		Ⅰ区中	包含層	土師質土器	捏鉢				回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰	
332	80	51	Ⅰ区中	包含層	陶器	皿			5.8	施釉	施釉	底部 1/8	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
335	81		Ⅰ区東	SX01	土師質土器	小皿	7.7	1.5	6.1	回転ナデ、ヘラ切り後板目痕	回転ナデ	3/8	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/1 褐灰	
336	81	49	Ⅰ区東	包含層	白磁	椀			6.4	回転ヘラケズリ、回転ナデ	施釉	底部 2/8	5Y8/1 灰	5Y8/1 灰	
337	81		Ⅰ区東	SX01	土師質土器	羽釜	22.7			ナデ、指押さえ	ナデ	口縁部破片	10YR7/6 明黄褐	7.5YR7/6 橙	
338	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ	ナデ	つまみ部 6/8	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	
339	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋				ナデ	ナデ	つまみ部 7/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
340	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ	回転ナデ	つまみ部 8/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
341	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋				ナデ	ナデ	つまみ部 6/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
342	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋				ナデ、回転ナデ	回転ナデ	つまみ部 5/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
343	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N4/ 灰	N7/ 灰白	
344	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋	15.0	1.6	11.2	回転ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ	口縁部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
345	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋	13.8			回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
346	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋	15.6			回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	口縁部破片	N6/ 灰	N6/ 灰	
347	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	蓋	11.0			ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
348	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯				回転ナデ	回転ナデ	1/8	N5/ 灰	N6/ 灰	
349	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯	16.0			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
350	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯	12.9			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
351	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			7.8	回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
352	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			12.0	回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	N5/ 灰	N6/ 灰	
353	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			7.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
354	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			5.8	回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	N5/ 灰	N5/ 灰	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
355	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			12.0	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	底部 1/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
356	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			8.9	回転ナデ、ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
357	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			6.8	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 3/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
358	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			12.1	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
359	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			7.4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	2.5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	
360	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			5.9	回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
361	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			6.3	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 2/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	
362	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			10.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
363	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			9.4	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	底部 2/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
364	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			7.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
365	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			9.0	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
366	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			10.5	回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
367	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			8.0	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	5Y6/2 灰オリーブ	5Y6/2 灰オリーブ	
368	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯			6.6	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
369	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺（底部）	13.1			ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り	ナデ	底部破片	5Y5/1 灰	N7/ 灰白	
370	82		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺（底部）			16.0	格子タタキ目、ヘラケズリ、ナデ	板ナデ、ナデ	底部破片	N5/ 灰	N6/ 灰	
371	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺			9.9	回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	2.5YR5/2 灰赤	2.5Y5/1 赤灰	
372	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺	9.0			回転ナデ	摩滅	口縁部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
373	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺				回転ナデ	回転ナデ	頸部 5/8	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	
374	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺				回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
375	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	短頸壺			21.0	ナデ	ナデ	底部破片	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	
375	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺	11.9			ナデ	指押さえ、板ナデ	口縁部破片	N6/ 灰	N6/ 灰	
376	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺			21.0	ナデ	ナデ	脚部破片	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	
377	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺	24.2			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	N5/ 灰	N6/ 灰	
378	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺（底部）			8.4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 2/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
379	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺（底部）			8.6	ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、指押さえ	底部 2/8	N5/ 灰	N6/ 灰	
380	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	壺（底部）			7.0	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 3/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
381	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	平瓶	5.2			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 2/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
382	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	平瓶				ナデ	回転ナデ	体部破片	N7/ 灰白	N5/ 灰	
383	83		Ⅱ区西	包含層	土師質土器	竈？				摩滅	摩滅	口縁部破片	7.5Y8/4 浅黄橙	7.5Y8/4 浅黄橙	
384	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	杯			6.0	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	底部 3/8	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	
385	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	杯	11.9			摩滅	摩滅	口縁部破片	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
386	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	杯			6.8	ナデ	ナデ	底部 2/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
387	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	椀			6.5	ナデ、ヘラケズリ	ナデ	口縁部 2/8	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白	
388	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	椀			7.1	回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
389	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	椀			7.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 2/8	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5Y8/2 灰白	
390	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	杯			7.1	ナデ	回転ナデ	底部 8/8	10YR8/2 灰白	10YR6/2 灰黄褐	
391	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	杯			8.4	ナデ	ナデ	底部 2/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
392	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	皿	15.2	1.8	12.0	回転ナデ	回転ナデ	2/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	
393	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	椀			7.9	摩滅	摩滅	底部 4/8	10YR8/1 灰白	2.5Y4/1 黄灰	
394	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	椀			7.2	ナデ	回転ナデ	底部 3/8	2.5Y8/2 灰白	5YR6/4 にぶい橙	
395	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	杯			7.0	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 8/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
396	83	51	Ⅱ区西	包含層	土師器	杯			8.0	ナデ、施釉、ヘラ切り	施釉、ナデ	底部 1/8	2.5Y8/1 灰白、2.5GY7/1 明オリーブ灰	2.5Y8/1 灰白、2.5GY7/1 明オリーブ灰	
397	83		Ⅱ区西	包含層	土師器	杯			5.0	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	ヘラミガキ	底部 3/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
398	83		Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯	13.3	3.2	9.0	回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
399	83	52	Ⅱ区西	包含層	須恵器	杯	12.5	3.9	7.2	回転ナデ、ヘラケズリ、回転ヘラ切り	回転ナデ	6/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
400	84		Ⅱ区西	包含層	土師質土器	甕	33.2			摩滅	摩滅	口縁部 1/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
401	84		Ⅱ区西	包含層	土師質土器	羽釜	25.3			ナデ、指押さえ、刷毛目	ナデ	口縁部 1/8	10YR4/1 褐灰	10YR6/2 灰黄褐	
402	84		Ⅱ区西	包含層	土師質土器	羽釜				横ナデ、指押さえ	横ナデ	体部 1/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
403	84		Ⅱ区西	包含層	縄文土器	深鉢(底部)			4.4	ナデ	ナデ	底部 8/8	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y3/1 黒褐	
404	84		Ⅱ区西	包含層	縄文土器	深鉢(底部)			5.5	摩滅	板ナデ	底部 8/8	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/3 にぶい黄	
405	84		Ⅱ区西	包含層	黒色土器Ａ類	椀			6.0	ナデ	摩滅	底部 1/8	7.5YR8/6 浅黄橙	2.5Y3/1 黒褐	
406	84		Ⅱ区西	包含層	黒色土器Ａ類	椀			7.2	ナデ	ヘラミガキ	1/8	10YR8/2 灰白	2.5Y3/1 黒褐	
407	84		Ⅱ区西	包含層	黒色土器Ａ類	椀			8.3	摩滅	摩滅	底部 2/8	10YR8/1 灰白	10YR5/1 褐灰	
408	84	50	Ⅱ区西	包含層	土師器	土錘	最大長 4.5	最大幅 1.6	最大厚 1.6	ナデ	ナデ	8/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
409	84	50	Ⅱ区西	包含層	土師器	土錘	最大長 4.5	最大幅 1.6	最大厚 1.6	ナデ	ナデ	8/8	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	
410	84	50	Ⅱ区西	包含層	土師器	土錘	最大長 4.8	最大幅 1.7	最大厚 1.6	ナデ	ナデ	7/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
411	84		Ⅱ区西	包含層	土師器	土錘	最大長 3.5	最大幅 1.7	最大厚 1.5	ナデ	ナデ	6/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
412	84	50	Ⅱ区西	包含層	土師器	土錘	最大長 3.5	最大幅 1.2	最大厚 1.1	ナデ	ナデ	7/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	
413	84		Ⅱ区西	包含層	黒色土器Ａ類	椀	20.2			ナデ	ナデ	口縁部破片	2.5Y8/2 灰白	2.5Y4/1 黄灰	
414	84	52	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀	15.6			施釉	施釉	口縁部 1/8	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	
415	84	52	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀				回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	体部 1/8	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白	
416	84	52	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀			8.9	施釉、回転ナデ	施釉、ヘラ切り	底部 1/8	5Y7/1 灰白、10Y6/2 オリーブ灰	5Y7/1 灰白、10Y6/2 オリーブ灰	
417	84	46	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀			6.6	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	底部 1/8	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	
418	84	46	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀			7.5	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	底部 2/8	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	
419	84	49	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀			6.8	施釉	施釉	底部 1/8	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	
420	84	46	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀			6.2	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	底部 1/8	2.5GY7/1 明オリーブ灰	2.5GY7/1 明オリーブ灰	
421	84		Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀			5.9	施釉、削り出し高台	施釉	底部 4/8	5GY7/1 明オリーブ灰、5YR7/3 にぶい橙	5GY7/1 明オリーブ灰	
422	84	46	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀			7.7	施釉	施釉	底部 1/8	10Y7/2 灰白	10Y7/2 灰白	
423	84	52	Ⅱ区西	包含層	緑釉陶器	椀				施釉	施釉	体部破片	10Y7/2 灰白	10Y7/2 灰白	
424	84		Ⅱ区西	包含層	陶胎染付	皿				施釉	施釉	口縁部破片	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	
425	84		Ⅱ区西	包含層	青磁	椀			4.8	施釉	施釉	底部 1/8	10GY6/1 緑灰	10GY6/1 緑灰	
426	84	49	Ⅱ区西	包含層	白磁	椀			6.1	回転ナデ	施釉	底部 1/8	5Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	
453	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ、回転ヘラケズリ	ナデ	4/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
454	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ	回転ナデ	つまみ部 8/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
455	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	蓋				ナデ	ナデ	つまみ部 8/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
456	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ、ヘラ切り	ナデ	つまみ部 8/8	N5/ 灰	N5/ 灰	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
457	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ	回転ナデ	つまみ部8/8	N7/ 灰白		
458	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯蓋	18.2			回転ヘラ切り、回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	10YR6/1 褐灰	N4/ 灰	
459	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯蓋		1.5	18.6	回転ヘラケズリ、回転ナデ	ナデ、回転ナデ	2/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
460	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯蓋	19.0			回転ナデ	回転ナデ	1/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
461	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯蓋			22.3	回転ナデ	回転ナデ	1/8	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	
462	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	皿	15.3	1.8	12.8	回転ナデ	回転ナデ	1/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
463	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯	13.6			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 2/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
464	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯	14.5	3.4	11.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	1/8	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	
465	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			11.4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 3/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
466	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			10.6	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ、ナデ	4/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
467	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			9.0	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
468	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			11.2	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	底部 1/8	N6/ 灰	2.5Y8/1 灰白	
469	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			10.4	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	底部破片	N6/ 灰	N7/ 灰白	
470	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			9.7	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
471	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			10.2	回転ナデ	ナデ	底部 1/8	N6/ 灰	N5/ 灰	
472	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			7.6	回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
473	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			10.6	回転ナデ、底面爪痕？	ナデ	底部 2/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
474	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			10.0	回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
475	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	杯			7.3	回転ナデ、ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 2/8	N4/ 灰	N5/ 灰	
476	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺	25.6			回転ナデ、タタキ目	回転ナデ、指ナデ	口縁部 1/8	N5/ 灰	N7/ 灰白	
477	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺	21.5			自然釉	自然釉	口縁部 1/8	2.5GY5/1 オリーブ灰	2.5GY5/1 オリーブ灰	
478	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺	20.0			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
479	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺	21.8			施釉、回転ナデ	施釉	口縁部 1/8	N6/ 灰	7.5Y5/2 灰オリーブ	
480	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺（底部）			11.2	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	1/8	N5/ 灰	N7/ 灰白	
481	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺（底部）			12.0	ナデ、回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
482	86		Ⅱ区東	包含層	須恵器	壺（底部）			10.0	ナデ、回転ナデ	回転ナデ、ナデ	4/8	N7/ 灰白	N6/ 灰	
483	87		Ⅱ区東	包含層	土師器	杯			5.3	回転ナデ、ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ	底部 4/8	5YR8/3 淡橙	5YR8/3 淡橙	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
484	87		Ⅱ区東	包含層	土師器	杯			6.3	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 8/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	
485	87	54	Ⅱ区東	包含層	土師器	杯	11.9	3.1	6.0	ナデ	ナデ	4/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
486	87		Ⅱ区東	包含層	土師器	杯	13.8	3.3	9.2	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	1/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
487	87		Ⅱ区東	包含層	土師器	椀			7.5	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 5/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	
488	87		Ⅱ区東	包含層	土師器	椀			5.9	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 3/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	
489	87		Ⅱ区東	包含層	土師器	椀			6.4	回転ナデ	ナデ	底部 2/8	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y6/1 黄灰	
490	87		Ⅱ区東	包含層	土師器	椀	16.4	4.8	7.0	ナデ	ヘラミガキ	1/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	
491	87		Ⅱ区東	包含層	土師質土器	甕	14.8			ナデ、摩滅	ナデ	口縁部 1/8	5YR6/6 橙	10YR3/1 黒褐	
492	87		Ⅱ区東	包含層	土師質土器	甕	35.6			横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	口縁部破片	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	
493	87		Ⅱ区東	包含層	土師質土器	羽釜	29.0			回転ナデ、指押さえ	刷毛目、ナデ	口縁部 1/8	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
494	87		Ⅱ区東	包含層	土師器	椀			10.0	横ナデ	ナデ、横ナデ	底部 7/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
495	87		Ⅱ区東	包含層	黒色土器A類	椀			6.8	回転ナデ、ヘラ切り	ヘラミガキ	6/8	2.5Y8/2 灰白	7.5Y3/1 オリーブ黒	
496	87		Ⅱ区東	包含層	黒色土器A類	椀			4.8	ナデ	ヘラミガキ	底部 7/8	2.5Y7/2 灰黄	7.5Y2/1 黒	
497	87		Ⅱ区東	包含層	黒色土器A類	椀			7.0	回転ナデ	ヘラミガキ	底部 1/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR2/1 黒	
498	87		Ⅱ区東	包含層	黒色土器A類	椀	16.3	3.8	7.4	ナデ	ヘラミガキ	3/8	2.5Y7/2 灰黄	5Y3/1 オリーブ黒	
499	87	54	Ⅱ区東	包含層	黒色土器A類	椀	16.0	4.2	6.8	ナデ	ヘラミガキ	3/8	10YR8/2 灰白	10YR3/1 黒褐	
500	87		Ⅱ区東	包含層	黒色土器A類	椀			9.4	回転ナデ、ナデ	ヘラミガキ	底部 2/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR2/1 黒	
501	87	54	Ⅱ区東	包含層	緑釉陶器	椀				施釉	施釉	体部破片	7.5Y6/3 オリーブ黄	7.5Y5/3 灰オリーブ	
502	87	54	Ⅱ区東	包含層	緑釉陶器	椀？				施釉	施釉	口縁部破片	7.5Y5/3 灰オリーブ	7.5Y5/3 灰オリーブ	
503	87	54	Ⅱ区東	包含層	緑釉陶器	椀				施釉	施釉	口縁部破片	7.5Y5/3 灰オリーブ	7.5Y5/3 灰オリーブ	
504	87	51	Ⅱ区東	包含層	緑釉陶器	皿？			5.8	ナデ、施釉	ナデ、施釉	底部 1/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白	
505	87		Ⅱ区東	包含層	緑釉陶器	椀			6.2	施釉	施釉	底部 1/8	2.5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	
506	87		Ⅱ区東	包含層	緑釉陶器	椀			7.6	施釉	施釉	2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
507	87	49	Ⅱ区東	包含層	白磁	椀			7.4	施釉、ナデ	施釉	底部 1/8	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	
508	87	50	Ⅱ区東	包含層	土師器	土錘	最大長 3.1	最大幅 1.3	最大厚 1.4	ナデ	ナデ	7/8	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	
509	87		Ⅱ区東	包含層	土師器	土錘				ナデ	ナデ	7/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
510	87	50	Ⅱ区東	包含層	土師器	土錘	最大長 3.8	最大幅 1.3	最大厚 1.4	摩滅	ナデ	8/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
511	87	50	Ⅱ区東	包含層	土師器	土錘	最大長 4.7	最大幅 1.5	最大厚 1.5	ナデ	ナデ	8/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
512	88		Ⅱ区東	包含層	土師質土器	竈				ナデ	ナデ	体部破片	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	
531	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋				ナデ	ナデ	つまみ部 8/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
532	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ	回転ナデ	つまみ部 7/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
533	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ	回転ナデ	つまみ部 8/8	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	
534	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ	回転ナデ	3/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
535	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2/8	5GY8/1 灰白	5GY8/1 灰白	
536	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋				回転ナデ	回転ナデ後ナデ	つまみ部 8/8	N3/ 暗灰	N4/ 灰	
537	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	14.0			回転ナデ	回転ナデ	1/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
538	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	11.0	1.2	7.5	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
539	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	10.7			回転ナデ	回転ナデ	1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
540	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	13.8			回転ナデ	回転ナデ、ナデ	口縁部 1/8	2.5GY3/1 暗オリーブ灰	7.5GY4/1 暗緑灰	
541	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	17.6	1.2	13.6	ヘラ切り、回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ後板ナデ	口縁部 1/8	5Y4/1 灰	5Y5/1 灰	
542	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	16.4	1.0	12.4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	口縁部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
543	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	18.1			回転ヘラ切り、回転ナデ	回転ナデ	1/8	N8/3 灰白	N6/ 灰	
544	89	55	Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	16.8			回転ヘラ切り後ナデ、回転ナデ	回転ナデ、ナデ	3/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
545	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	15.4			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N6/ 灰	N5/ 灰	
546	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	蓋	18.2	1.5	13.1	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	底部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
547	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯				回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N5/ 灰	N5/ 灰	
548	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	13.0	3.0	8.7	回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	
549	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	12.8		8.7	回転ナデ	回転ナデ	1/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
550	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	11.4			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	N3/ 灰	N3/ 灰	
551	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	14.4			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8			
552	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	14.8			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	10Y6/1 灰	10Y7/1 灰白	
553	89	55	Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	13.1	3.0	8.2	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	4/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
554	89	55	Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	13.0	3.3	8.4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	5/8	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
555	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	皿	15.0			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 2/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
556	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	皿	14.6	1.9	10.4	回転ナデ、ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	口縁部 1/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
557	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	13.7			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	10YR5/2 灰黄褐	N5/ 灰	
558	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			9.8	回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
559	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	15.3	3.1	10.2	回転ナデ	回転ナデ	1/8	N5/ 灰	N7/ 灰白	
560	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	13.3	4.9	8.6	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2/8	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄	
561	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			7.5	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	7.5YR5/3 にぶい褐	N4/ 灰	
562	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			9.7	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 1/8	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	
563	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			8.0	回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	3/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
564	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	13.8	3.6	9.6	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	3/8	5Y6/1 灰	N6/ 灰	
565	89	55	Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯	11.5	4.7	8.4	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	3/8	7.5Y5/1 灰	2.5Y6/2 灰黄	
566	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			7.3	回転ナデ、ナデ	回転ナデ後ナデ	底部 3/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
567	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			8.7	回転ナデ	回転ナデ	底部 3/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
568	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			7.9	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
569	89		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			9.8	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	底部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
570	89	56	Ⅱ区南	包含層	須恵器	皿	15.4	2.1	10.9	回転ナデ、ヘラケズリ、回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	7/8	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	
571	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	皿	14.6			回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	口縁部 1/8	N8/ 灰白	5Y8/1 灰白	
572	90	56	Ⅱ区南	包含層	須恵器	皿	14.6	1.5	11.8	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ、回転ナデ後ナデ	2/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
573	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	皿	16.1	1.9	12.6	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	3/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
574	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	皿	15.7			回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	口縁部 1/8	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
575	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	盤ｏｒ皿			14.4	施釉、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	N3/ 暗灰	N4/ 灰	
576	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			5.8	ナデ	ナデ	底部 3/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
577	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	高杯	21.1			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	2/8	7.5Y5/1 灰	10YR5/1 褐灰	
578	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺	16.3			回転ナデ、タタキ目	回転ナデ	口縁部 1/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
579	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺	26.9			回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	N8/ 灰白	N8/ 灰白	
580	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯（底部）			9.7	回転ナデ	回転ナデ	3/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
581	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯（底部）			5.3	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	3/8	N4/ 灰	10Y6/1 灰	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
582	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯（底部）			9.7	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	4/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
583	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺（底部）			8.8	ヘラケズリ後ナデ、ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 2/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
584	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺（底部）			13.4	回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	N5/ 灰	N6/ 灰	
585	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺（底部）			11.1	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ後ナデ	底部 2/8	N4/ 灰	N4/ 灰	
586	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺（底部）			11.4	回転ナデ、ヘラケズリ、ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
587	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺（底部）			10.0	回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	N7/ 灰白	N7/ 灰白	
588	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺（底部）			12.3	回転ナデ	回転ナデ、自然釉	底部 1/8	N5/ 灰	N7/ 灰白	
589	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			13.8	回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	N6/ 灰	N6/ 灰	
590	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯			8.5	回転ナデ	回転ナデ	底部 1/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
591	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺			8.4	回転ナデ	回転ナデ	底部 3/8	10Y4/1 灰	2.5Y6/2 灰黄	
592	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	壺			8.8	回転ナデ、自然釉	回転ナデ	底部 2/8	2.5GY8/1 灰白	N8/ 灰白	
593	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯（底部）			7.7	回転ナデ、自然釉、回転ヘラ切り	回転ナデ、自然釉	3/8	7.5Y7/1 灰白	10Y6/1 灰	
594	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	杯（底部）			9.0	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	底部 4/8	N5/ 灰	N5/ 灰	
595	90		Ⅱ区南	包含層	須恵器	高坏				回転ナデ	回転ナデ	脚部 2/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
596	91	56	Ⅱ区南	包含層	土師器	杯	13.5	2.3	8.6	回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	
597	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	杯	14.0	3.3	10.7	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	3/8	2.5YR7/4 淡赤橙	10YR7/2 にぶい黄橙	
598	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	杯	14.4			ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ後櫛描文	口縁部破片	5YR6/6 橙	5YR5/4 にぶい赤褐	赤
599	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	杯	7.0			ナデ、回転ヘラ切り後ナデ	ナデ	底部 5/8	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
600	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	杯			6.6	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 8/8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	
601	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	杯			7.2	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ、ナデ	3/8	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	
602	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	杯			9.1	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	3/8	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	
603	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	椀			9.4	ナデ、回転ナデ	ナデ	3/8	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/6 明赤褐	
604	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	杯			7.2	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
605	91	56	Ⅱ区南	包含層	土師器	杯	14.3	5.1	8.2	回転ナデ、ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ	底部 5/8	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	
606	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	皿				回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	赤色化粧土
607	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	皿				回転ナデ	回転ナデ、櫛描文	口縁部破片	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	内外面丹

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
608	91	56	Ⅱ区南	包含層	土師器	皿	16.0	2.9	14.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2/8	2.5YR7/6 橙	2.5YR7/6 橙	
609	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	皿			14.0	回転ナデ、ヘラケズリ	ナデ	底部 1/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	赤色化粧土
610	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	皿			18.0	回転ナデ	ヘラミガキ	底部 1/8	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	赤色化粧土
611	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	皿	25.0	3.3	20.4	摩滅、回転ナデ	摩滅	1/8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	赤色顔料付着
612	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	皿			19.8	回転ナデ	剥離	底部 1/8	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	赤色化粧土
613	91		Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	椀			6.4	回転ナデ、ヘラ切り	ヘラミガキ	底部 8/8	2.5Y8/3 淡黄	7.5Y3/1 オリーブ黒	
614	91		Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	椀			6.8	回転ナデ、ヘラ切り	ヘラミガキ	底部 8/8	2.5Y6/1 黄灰	5Y3/1 オリーブ黒	
615	91		Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	椀			6.6	回転ナデ、回転ヘラ切り	ヘラミガキ	底部 7/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	
616	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	椀			6.8	回転ナデ、ナデ	摩滅	底部 8/8	10YR7/3 にぶい黄橙	5Y3/1 オリーブ黒	
617	91		Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	椀			6.3	回転ナデ、ヘラ切り	ヘラミガキ	6/8	7.5YR8/6 浅黄橙	5Y3/1 オリーブ黒	赤色顔料付着
618	91		Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	椀			6.0	ナデ	ヘラミガキ後ナデ	底部 2/8	10YR8/2 灰白	2.5Y2/1 黒	
619	91		Ⅱ区南	包含層	土師器	椀			8.4	ナデ	ナデ	底部 3/8	5YR7/4 にぶい橙	5Y3/1 オリーブ黒	
620	91		Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	椀			6.2	回転ナデ、ヘラ切り	ヘラミガキ	3/8	2.5Y6/2 灰黄	5Y3/1 オリーブ黒	
621	91		Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	椀			6.2	ナデ	ヘラミガキ	底部 7/8	10YR8/3 浅黄橙	5Y2/1 黒	
622	91		Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	椀			7.0	回転ナデ、ナデ	ヘラミガキ	4/8	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	
623	91	56	Ⅱ区南	包含層	黒色土器A類	椀	13.6	4.3	6.3	ヘラケズリ、回転ナデ	ヘラミガキ、ナデ	5/8	2.5Y7/1 灰白	5Y3/1 オリーブ黒	
624	92		Ⅱ区南・東	包含層	土師質土器	羽釜	24.8			ナデ、指押さえ	ナデ、刷毛目	口縁部 1/8	10YR7/1 灰白	10YR4/1 褐灰	
625	92		Ⅱ区南	包含層	土師質土器	甕	27.6			横ナデ、刷毛目	横ナデ、刷毛目、板ナデ	口縁部 1/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
626	92		Ⅱ区南	包含層	土師質土器	甕	24.0			横ナデ	横ナデ、刷毛目	口縁部 1/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
627	92		Ⅱ区南	包含層	土師質土器	甕				ナデ、ヘラケズリ	刷毛目、板ナデ、ナデ	口縁部破片	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	
628	92		Ⅱ区南	包含層	土師質土器	火鉢			11.9	横ナデ	ナデ、横ナデ	体部破片	10YR7/1 灰白	10YR5/2 灰黄褐	
629	92		Ⅱ区南	包含層	土師器	竈？				刷毛目、ナデ	ナデ、指押さえ	肥手部 8/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	
630	92		Ⅱ区南	包含層	土師質土器	甕	27.0			ナデ	ナデ	口縁部 1/8	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	
631	92		Ⅱ区南	包含層	土師質土器	土鍋	40.2			ナデ、刷毛目	ナデ、板ナデ	口縁部 1/8	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
632	92	54	Ⅱ区南	包含層	緑釉土器	椀				施釉	施釉	口縁部破片	7.5Y6/3 オリーブ黄	7.5Y6/3 オリーブ黄	
633	92	54	Ⅱ区南	包含層	緑釉土器	皿				回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	口縁部破片	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	
634	92	51	Ⅱ区南	包含層	緑釉土器	椀	13.0			施釉	施釉	口縁部破片	7.5Y3/4 暗オリーブ	7.5Y3/4 暗オリーブ	
635	92		Ⅱ区南	包含層	陶器	鉢			12.8	ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ、刷毛目	底部 1/8	2.5GY3/1 暗オリーブ灰	N4/ 灰	

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整（外面）	調整（内面）	残存率	色調（外面）	色調（内面）	備考
636	92		Ⅱ区南	包含層	土師器	蛸壺				ナデ	指押さえ	2/8	5YR6/6 橙	5YR4/6 赤褐	
637	92	50	Ⅱ区南	包含層	土師器	土錘				ナデ	ナデ	8/8	7.5Y3/1 オリーブ黒	7.5Y3/1 オリーブ黒	
638	92	50	Ⅱ区南	包含層	土師器	土錘				ナデ	ナデ	8/8	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	
639	92	50	Ⅱ区南	包含層	土師器	土錘				ナデ	ナデ	8/8	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	
640	92		Ⅱ区南	包含層	土師器	土錘	最大長 4.1	最大幅 1.8	最大厚 1.7	ナデ	ナデ	5/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
643	94		Ⅱ区	包含層	土師質土器	鉢	27.0	9.7	25.2	ナデ	板ナデ、ナデ	1/8	2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/4 淡黄	
644	95		Ⅲ区西	包含層	須恵器	皿	12.8	1.6	9.4	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	
645	95		Ⅲ区西	包含層	土師器	杯	9.4	2.3	5.0	摩滅	摩滅	2/8	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	
646	95		Ⅲ区西	包含層	土師器	杯	11.6	3.3	5.6	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	2/8	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/2 灰白	
647	95		Ⅲ区西	包含層	備前焼	小皿	7.4	1.3	5.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	1/8	2.5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	
648	95	49	Ⅲ区西	包含層	陶器	椀				施釉	施釉	口縁部破片	7.5Y7/2 灰白	7.5Y7/2 灰白	
649	95	52	Ⅲ区西	包含層	緑釉陶器	椀	11.4			施釉、回転ナデ	施釉	口縁部 1/8	10Y7/2 灰白	10Y7/2 灰白	
650	95	54	Ⅲ区西	包含層	青磁	小皿				施釉	施釉	口縁部破片	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	
651	95		Ⅲ区西	包含層	陶胎染付	椀			4.3	施釉	施釉	底部 1/8	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	
652	95		Ⅲ区西	包含層	肥前系染付	椀			4.6	施釉	施釉	底部 3/8	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白	
654	96		Ⅵ区	包含層	須恵器	杯			6.2	回転ナデ、ヘラ切り	ナデ	底部 8/8	10Y6/1 灰	2.5Y8/3 淡黄	
655	96		Ⅵ区	包含層	土師器	小皿	7.4	1.5	4.9	回転ナデ、回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	
656	96		Ⅵ区	包含層	土師器	円盤状高台杯	12.6	5.1	6.6	回転ナデ、板ナデ	回転ナデ	2/8	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	
657	96	56	Ⅵ区	包含層	土師器	杯	15.4	4.9	9.4	回転ナデ	回転ナデ	4/8	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	
658	96		Ⅵ区	包含層	土師器	円盤状高台杯			7.1	回転ナデ、回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	底部 8/8	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	
659	96		Ⅵ区	包含層	黒色土器A類	椀			6.7	摩滅	ヘラミガキ	2/8	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR2/1 黒	
661	97		－	包含層	須恵器	杯	13.8			回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	2/8	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	
662	97		－	包含層	須恵器	壺（底部）			7.9	回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り	回転ナデ	3/8	N4/ 灰	N5/ 灰	
663	97		－	包含層	黒色土器A類	椀			7.5	ヘラ切り、回転ナデ	ヘラミガキ	底部 4/8	10YR8/2 灰白	10YR2/1 黒	
664	97	56	－	包含層	黒色土器A類	椀	16.8	5.7	7.0	回転ナデ、回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	3/8	10YR8/1 灰白	10YR2/1 黒	

第5表　石器観察表

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺　構　名	器　種	現存長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	材　　質
16	16	41	Ⅰ区中	SP333	砥石	5.8	4.1	1.0	41.02	流紋岩
22	18		Ⅰ区中	SP409	スクレイパー	9.5	3.5	0.9	30.64	サヌカイト
216	58		Ⅲ区西	SD74	不明	6.5	5.5	3.75	51.95	軽石
241	59	47	Ⅲ区東	SD78	石鏃	2.3	1.8	0.4	0.91	サヌカイト
250	61		Ⅳ区	SD78	石斧	10.9	4.5	2.3	188.46	結晶片岩
251	61	47	Ⅳ区	SD78	石鏃	3.7	2.0	0.4	2.07	サヌカイト
252	61		Ⅳ区	SD78	剥片	4.9	2.1	0.9	8.75	サヌカイト
253	61		Ⅳ区	SD78	スクレイパー	7.6	3.5	0.9	18.17	サヌカイト
254	61		Ⅳ区	SD78	剥片	8.5	4.9	1.3	39.13	サヌカイト
255	61		Ⅳ区	SD78	剥片	9.0	4.6	1.1	51.38	
267	63		Ⅵ区	SD83	剥片	4.0	2.7	0.8	5.97	サヌカイト
268	63		Ⅵ区	SD83	砥石	5.85	5.5	3.9	161.97	サヌカイト
427	85	53	Ⅱ区西		石鏃	1.5	1.3	0.2	0.45	サヌカイト
428	85	53	Ⅱ区西		石鏃	1.6	1.1	0.2	0.44	サヌカイト
429	85	53	Ⅱ区西		石鏃	1.7	1.2	0.2	0.45	サヌカイト
430	85	47	Ⅱ区西		石鏃	1.7	1.0	0.3	0.39	サヌカイト
431	85	47	Ⅱ区西		石鏃	2.0	1.2	0.4	0.51	サヌカイト
432	85	53	Ⅱ区西		石鏃	1.6	1.3	0.4	0.65	サヌカイト
433	85	47	Ⅱ区西		石鏃	2.2	1.6	0.3	0.75	サヌカイト
434	85	47	Ⅱ区西		石鏃	2.2	1.6	0.4	0.63	サヌカイト
435	85	53	Ⅱ区西		石鏃	2.3	1.5	0.4	0.76	サヌカイト
436	85	53	Ⅱ区西		石鏃	1.6	1.4	0.2	0.45	サヌカイト
437	85	53	Ⅱ区西		石鏃	2.4	0.9	0.3	0.36	サヌカイト
438	85	53	Ⅱ区西		石鏃	2.8	2.2	0.4	2.13	サヌカイト
439	85	47	Ⅱ区西		石鏃	1.9	1.6	0.3	0.63	サヌカイト
440	85	53	Ⅱ区西		石鏃	2.0	1.1	0.3	0.58	サヌカイト
441	85	47	Ⅱ区西		石鏃	3.1	1.8	0.5	1.94	サヌカイト
442	85	53	Ⅱ区西		石鏃	1.9	1.6	0.3	0.47	サヌカイト
443	85	47	Ⅱ区西		石鏃	2.8	2.2	0.4	1.59	サヌカイト

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺　構　名	器　種	現存長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	材　　質
444	85		Ⅱ区西		彫器	4.8	2.5	1.1	17.23	サヌカイト
445	85	41	Ⅱ区西		尖頭器	6.1	2.6	1.0	16.57	サヌカイト
446	85		Ⅱ区西		石庖丁	4.0	4.5	0.6	11.02	サヌカイト
447	85		Ⅱ区西		スクレイパー	2.9	3.6	0.8	5.55	サヌカイト
448	85		Ⅱ区西		スクレイパー	7.9	6.0	1.0	59.75	サヌカイト
449	85		Ⅱ区西		剥片	3.1	1.6	0.3	1.15	サヌカイト
450	85		Ⅱ区西		二次調整剥片	3.4	2.4	0.4	3.32	サヌカイト
451	85		Ⅱ区西		剥片	4.8	4.0	0.7	19.59	サヌカイト
513	88	53	Ⅱ区東		石鏃	1.8	1.3	0.4	0.51	サヌカイト
514	88	53	Ⅱ区東		石鏃	1.7	1.7	0.3	0.55	サヌカイト
515	88	47	Ⅱ区東		石鏃	2.3	1.3	0.3	0.75	サヌカイト
516	88	47	Ⅱ区東		石鏃	1.9	1.4	0.3	0.51	サヌカイト
517	88	47	Ⅱ区東		石鏃	2.0	1.7	0.4	0.86	サヌカイト
518	88	47	Ⅱ区東		石鏃	2.0	1.8	0.3	0.75	サヌカイト
519	88	47	Ⅱ区東		石鏃	2.8	2.2	0.4	2.07	サヌカイト
520	88	53	Ⅱ区東		石鏃	2.5	2.1	0.5	2.49	サヌカイト
521	88	47	Ⅱ区東		石鏃	2.1	1.4	0.3	0.90	サヌカイト
522	88	53	Ⅱ区東		石鏃	2.6	1.7	0.3	0.67	サヌカイト
523	88		Ⅱ区東		尖頭器	4.7	1.6	0.7	6.10	サヌカイト
524	88		Ⅱ区東		剥片	3.1	3.0	0.8	10.45	サヌカイト
525	88		Ⅱ区東		石庖丁	4.8	4.4	0.9	18.13	サヌカイト
526	88		Ⅱ区東		スクレイパー	8.8	4.7	1.7	64.01	
527	88	41	Ⅱ区東		石帯	2.3	3.3	0.6	8.53	安山岩
641	93	41	Ⅱ区南		石錘	6.8	5.2	1.6	77.44	
660	96	53	Ⅵ区		石鏃	2.3	1.5	0.3	0.66	サヌカイト

第６表　鉄器観察表

報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺　構　名	器　種	現存長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	材　質
2	7		Ｉ区中	SP482	釘	2.5	0.7	0.5	5.12	鉄
9	14		Ｉ区中	SP191	釘	3.9	0.8	0.5	11.81	鉄
10	14		Ｉ区中	SP191	釘	2.6	0.8	0.5	9.37	鉄
11	14		Ｉ区中	SP529	釘	4.9	1.0	0.5	19.77	鉄
12	14		Ｉ区中	SP529	釘	6.3	0.6	0.6	24.77	鉄
14	15		Ｉ区中	SP562	刀子	11.2	1.4	0.4	22.7	鉄
15	15		Ｉ区中	SP327	釘	5.4	0.6	0.5	8.74	鉄
23	18		Ｉ区中	SP646	銅銭	−	−	0.1	0.96	銅
42	33		Ｉ区中	SP144	刀	5.8	2.3	0.7	14.8	鉄
44	33		Ｉ区中	SP152	釘	5.1	0.5	0.5	15.68	鉄
45	33		Ｉ区中	SP160	銅銭	−	−	0.1	0.41	銅
52	33		Ｉ区中	SP367	釘	5.6	0.5	0.5	14.03	鉄
53	33		Ｉ区中	SP370	釘	4.8	1.0	0.5	6.68	鉄
59	33		Ｉ区中	SP522	釘	7.4	0.9	0.5	20.47	鉄
61	33		Ｉ区中	SP628	不明	3.1	2.5	0.7	27.65	鉄
63	34		Ｉ区中	SP659	釘	4.8	1.0	0.5	8.5	鉄
72	34		Ⅵ区	SP1167	釘	6.6	0.4	0.4	11.24	鉄
73	34		Ｖ区	SP1179	釘	3.8	0.4	0.3	2.44	鉄
74	34		Ⅵ区	SP1179	釘	3.0	0.4	0.4	3.66	鉄
75	34		Ⅵ区	SP1179	不明	2.7	2.3	0.4	4.12	鉄
76	34		Ⅵ区	SP1179	不明	5.4	2.9	0.6	14.41	鉄
91	39		Ｉ区中	SD28 ～ 31 合流部	不明	3.1	3.1	1.5	36.35	鉄
92	39		Ｉ区中	SD28 ～ 30 合流部	不明	5.3	4.3	0.3	27.92	鉄
93	39		Ｉ区中	SD28 ～ 31 合流部	不明	5.7	2.0	1.7	42.22	鉄
94	39		Ｉ区中	SD29、30 複合部	釘	6.3	0.4	0.4	12.49	鉄
95	39		Ｉ区中	SD48､SD28～31合流部	釘	5.0	0.6	0.6	13.78	鉄
217	58		Ⅲ区西	SD74	釘	4.4	1.0	0.5	9.55	鉄
242	52		Ⅲ区東	SD78	不明	3.0	2.9	0.2	15.77	鉄

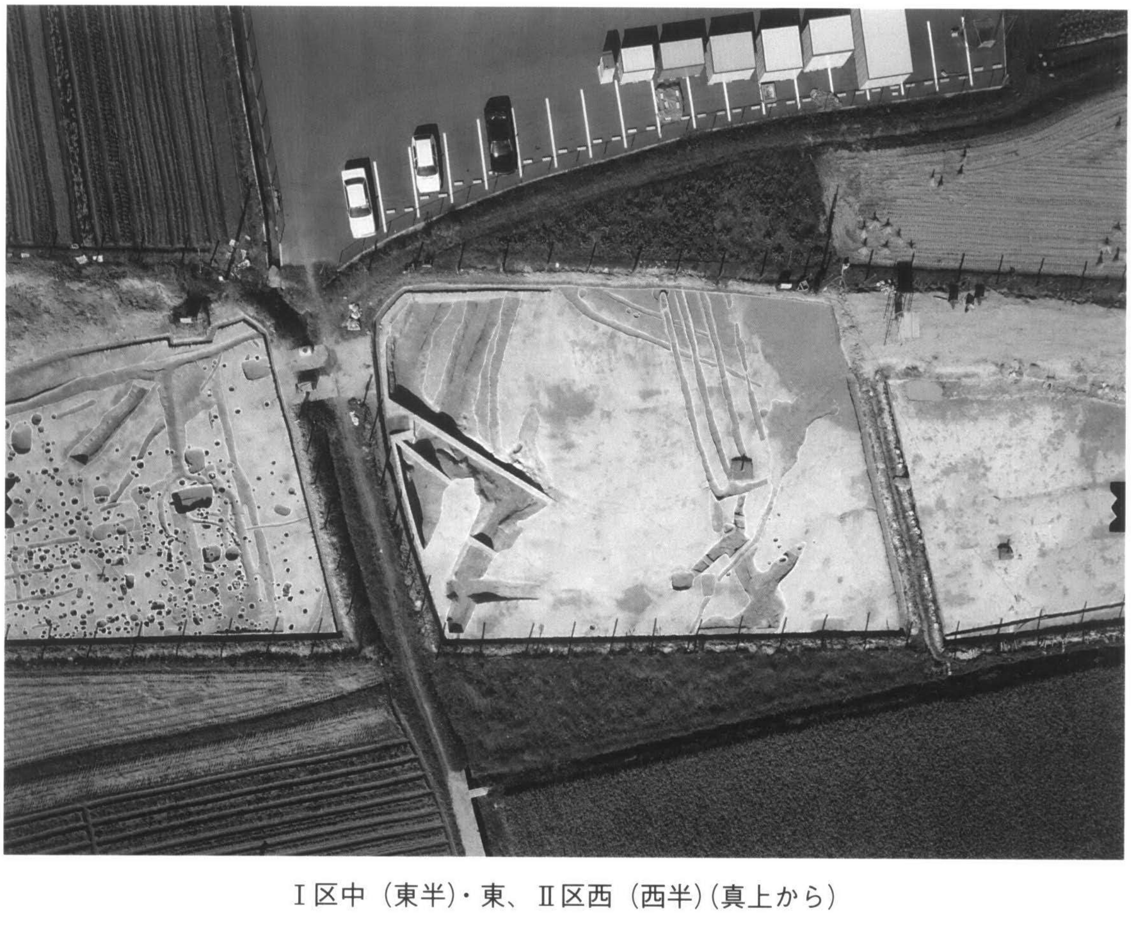
報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺　構　名	器　種	現存長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	材　質
243	59		Ⅲ区東	SD78	不明	1.6	0.9	0.2	3.17	鉄
280	67		Ⅰ区中	SK25	釘	6.4	0.7	0.4	9.49	鉄
281	68		Ⅰ区中	SK33	釘	5.5	0.7	0.7	13.57	鉄
284	68		Ⅰ区中	SK34	釘	5.3	0.5	0.5	10.38	鉄
285	68		Ⅰ区中	SK34 内検出 pit676	鋤先	8.0	4.8	1.1	43.56	鉄
298	71	50	Ⅰ区中	SK45	刀	29.8	2.8	0.8	181.79	鉄
305	73		Ⅰ区中	SK53	釘	6.0	0.9	0.9	6.09	鉄
333	80		Ⅰ区中	上面精査	釘	3.7	0.5	0.5	10.95	鉄
334	80		Ⅰ区中	北東隅分電盤下	刀子？	10.3	0.8	0.2	33.12	鉄
452	85		Ⅱ区西	東南拡張部包含層等	不明	3.3	3.0	0.3	6.53	鉄
528	88	55	Ⅱ区東	包含層	帯金具(巡方)	3.0	2.8	0.7	11.83	鉄、銅
529	88	55	Ⅱ区東	包含層	帯金具(丸鞆)	3.2	2.0	0.5	5.36	鉄、銅
530	88		Ⅱ区東	包含層	釘	4.3	0.9	0.9	13.44	鉄
642	93		Ⅱ区南	包含層	銅銭	2.4	2.4	0.1	3.36	銅
653	95		Ⅲ区西	ガリかけ	キセル	8.1	1.2	1.0	10.59	鉄

第７表　木器観察表

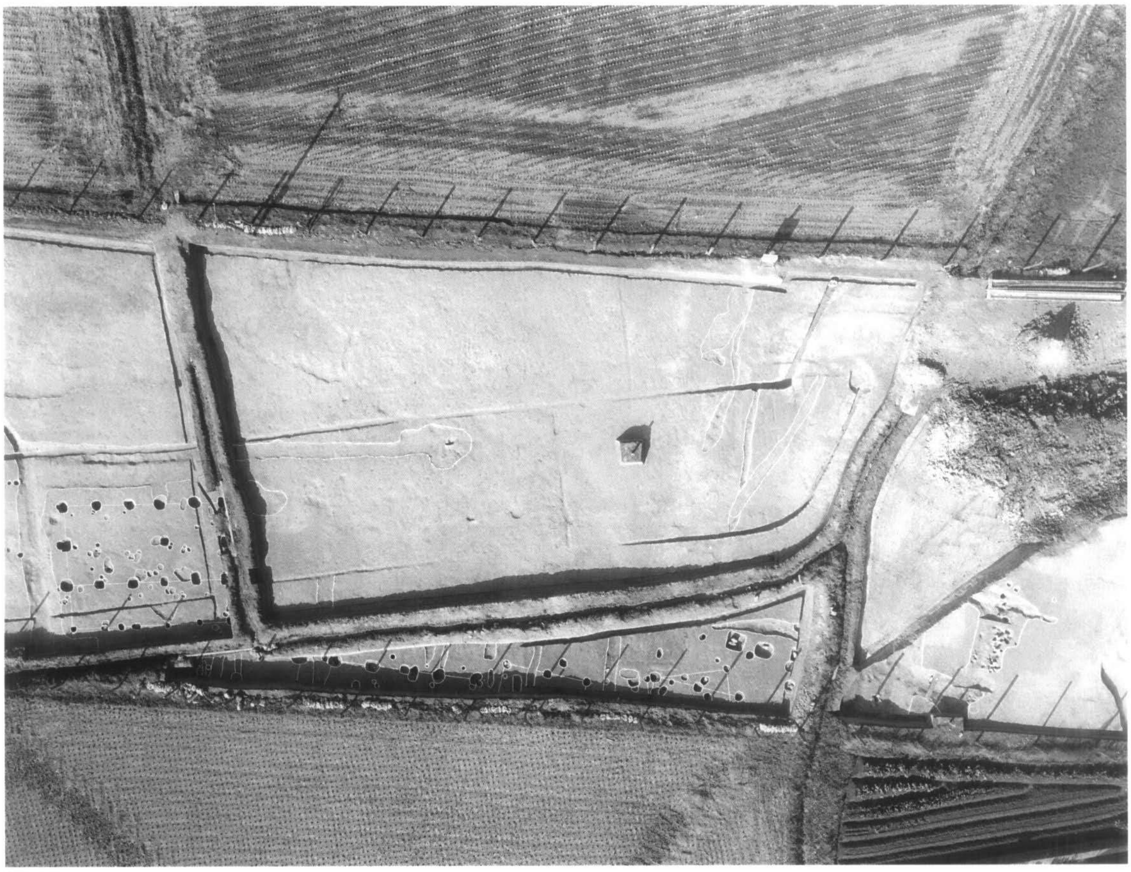
報文番号	挿図番号	図版番号	出土地区	遺　構　名	器　種	現存長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	材　質
244	59		Ⅲ区	SD78	木片	13.4	0.9	0.8	不明	
245	59		Ⅲ区	SD78	木片	12.0	1.1	0.7	不明	
256	61		Ⅳ区	SD78	板片	3.3	2.7	0.6	不明	

写 真 図 版

Ⅰ区西・中（真上から）



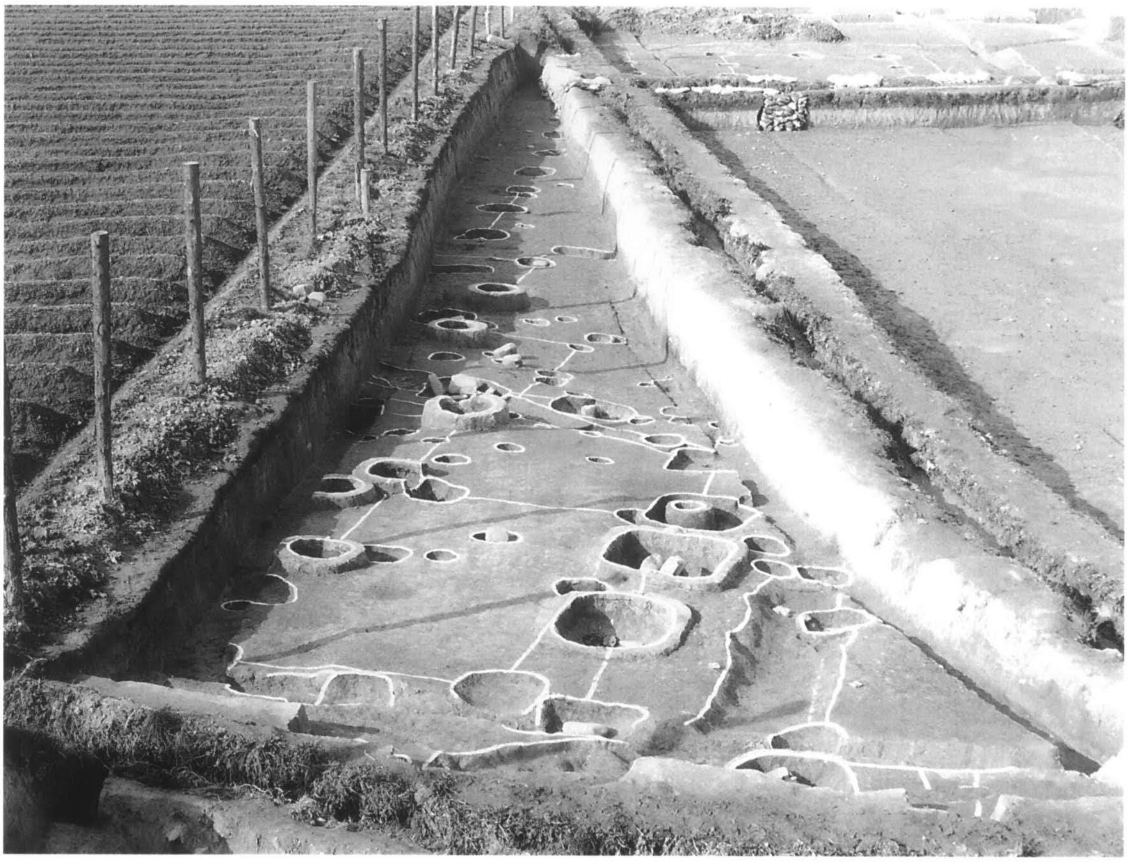
Ⅰ区中（東半）・東、Ⅱ区西（西半）（真上から）



Ⅱ区西（東半）・東・南東・南、Ⅲ区西（真上から）

Ⅲ区東・Ⅳ区（真上から）

Ⅵ区（真上から）



Ⅱ区南　全景（東から）

Ⅱ区南　検出遺構全景（東から）

Ⅱ区東　縄文河道調査風景（西から）

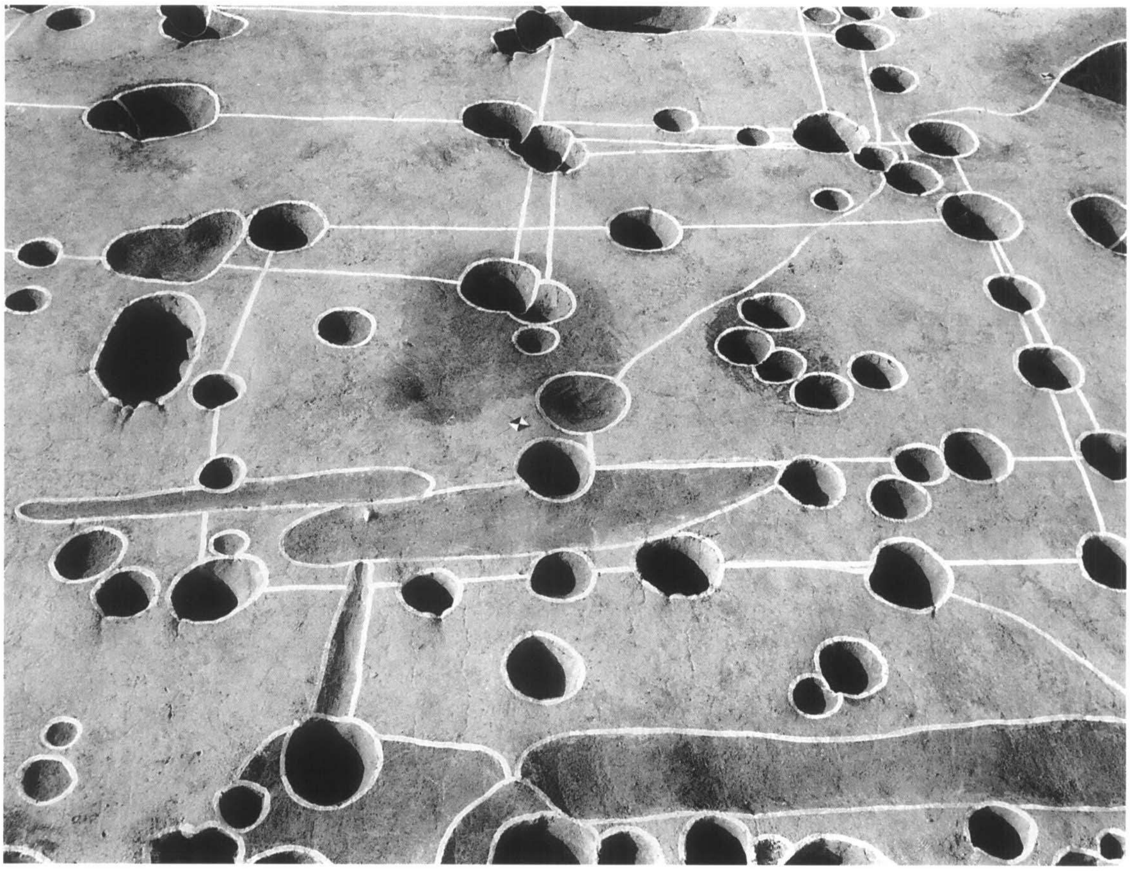
Ⅱ区西　北壁西部断面（南から）

Ⅱ区西　北壁東部断面（南から）

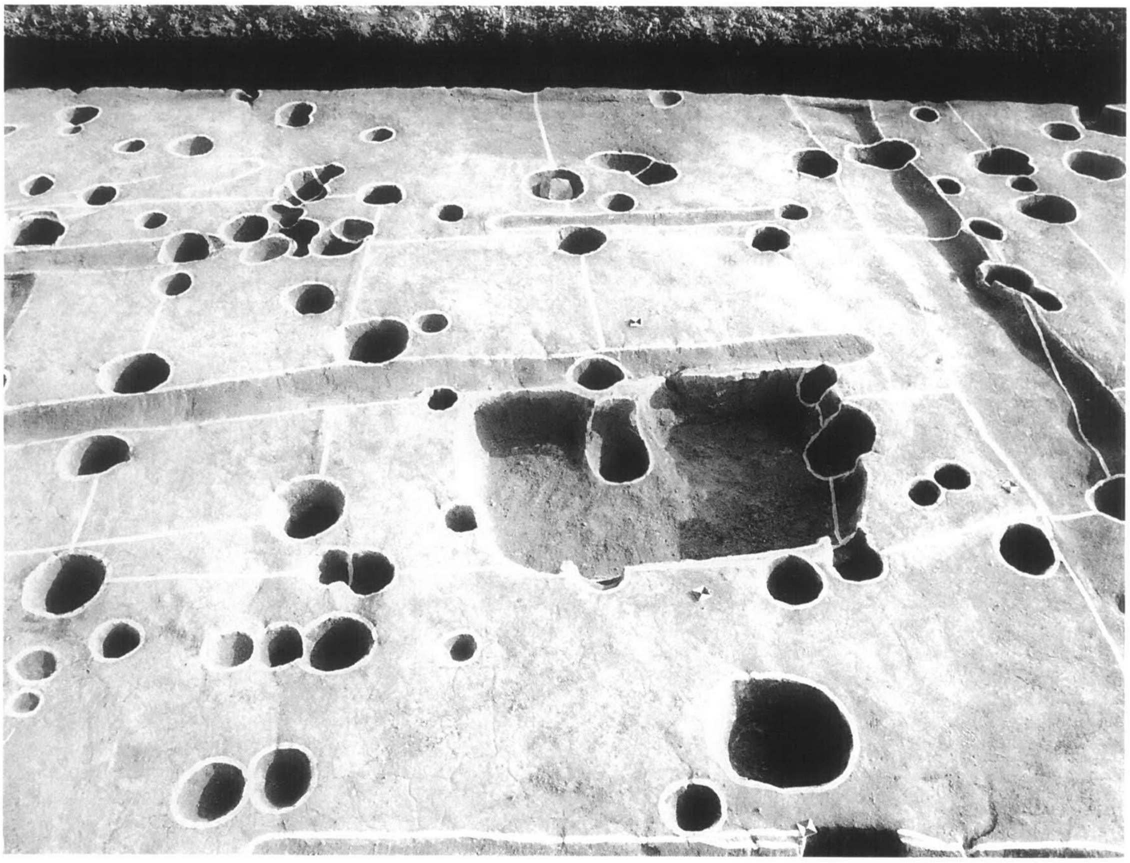
図版6

Ⅳ区全景（西から）

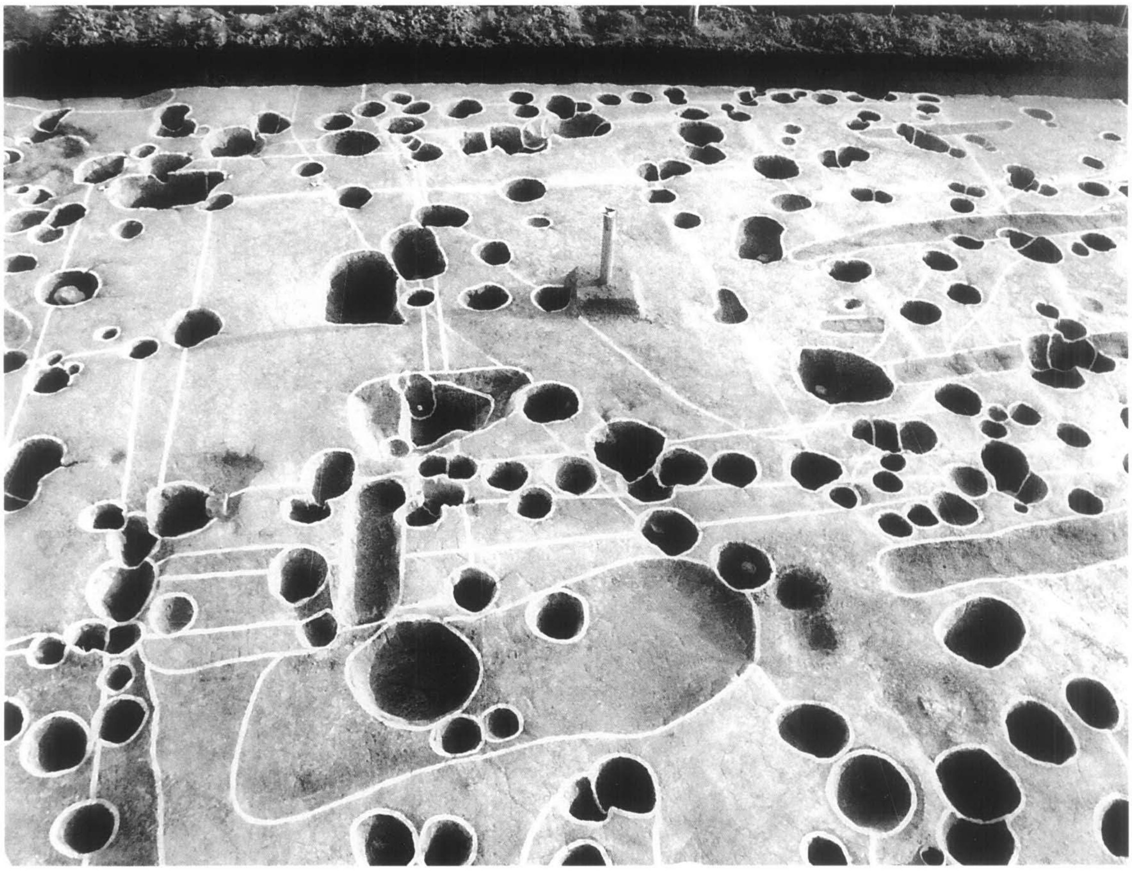
SB01・02（南から）



SB03・04（南から）

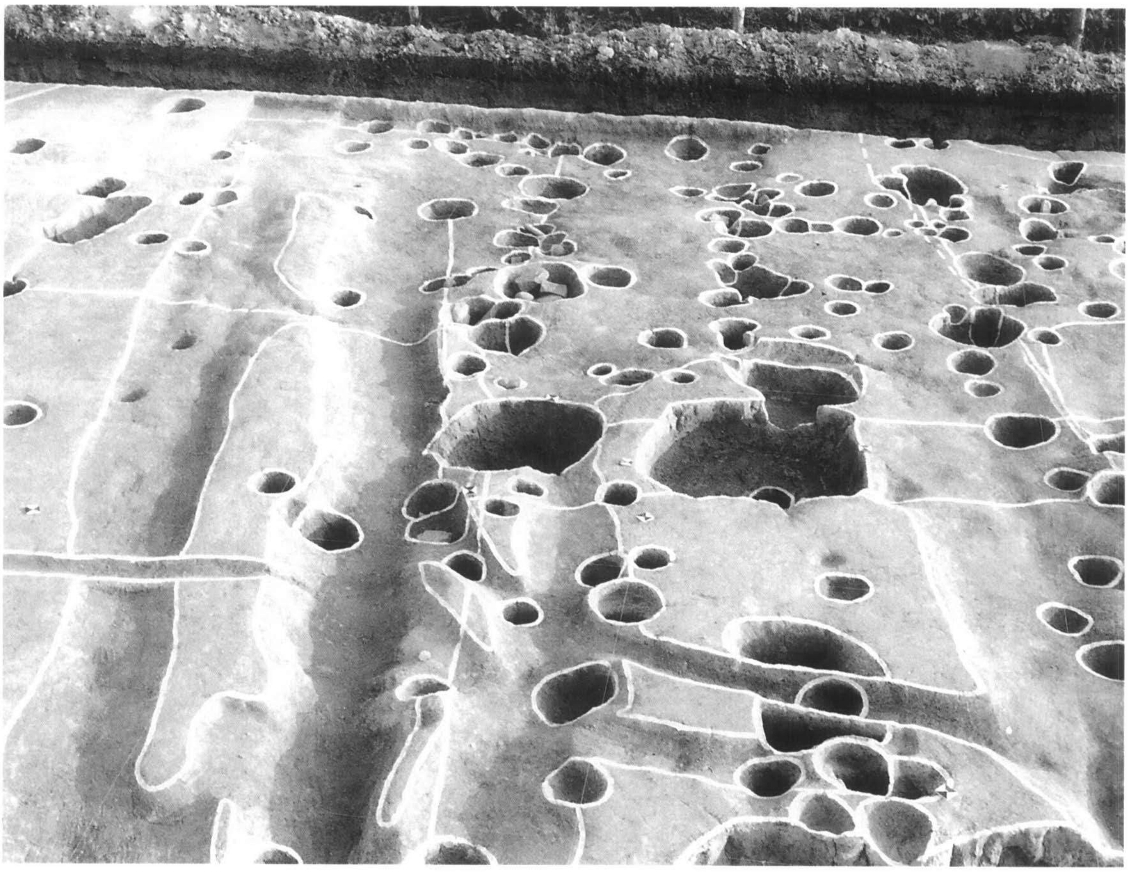


SB05・06（北から）

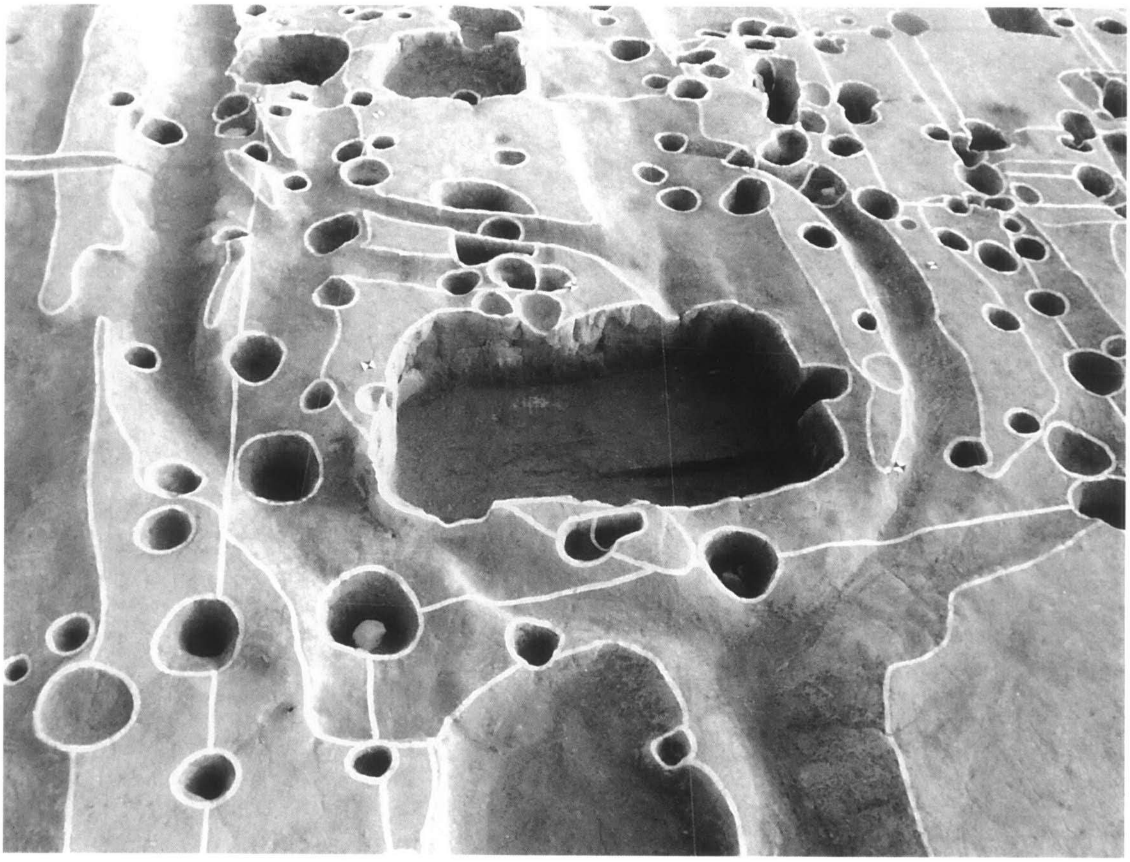


SB07 ～ 09（北から）

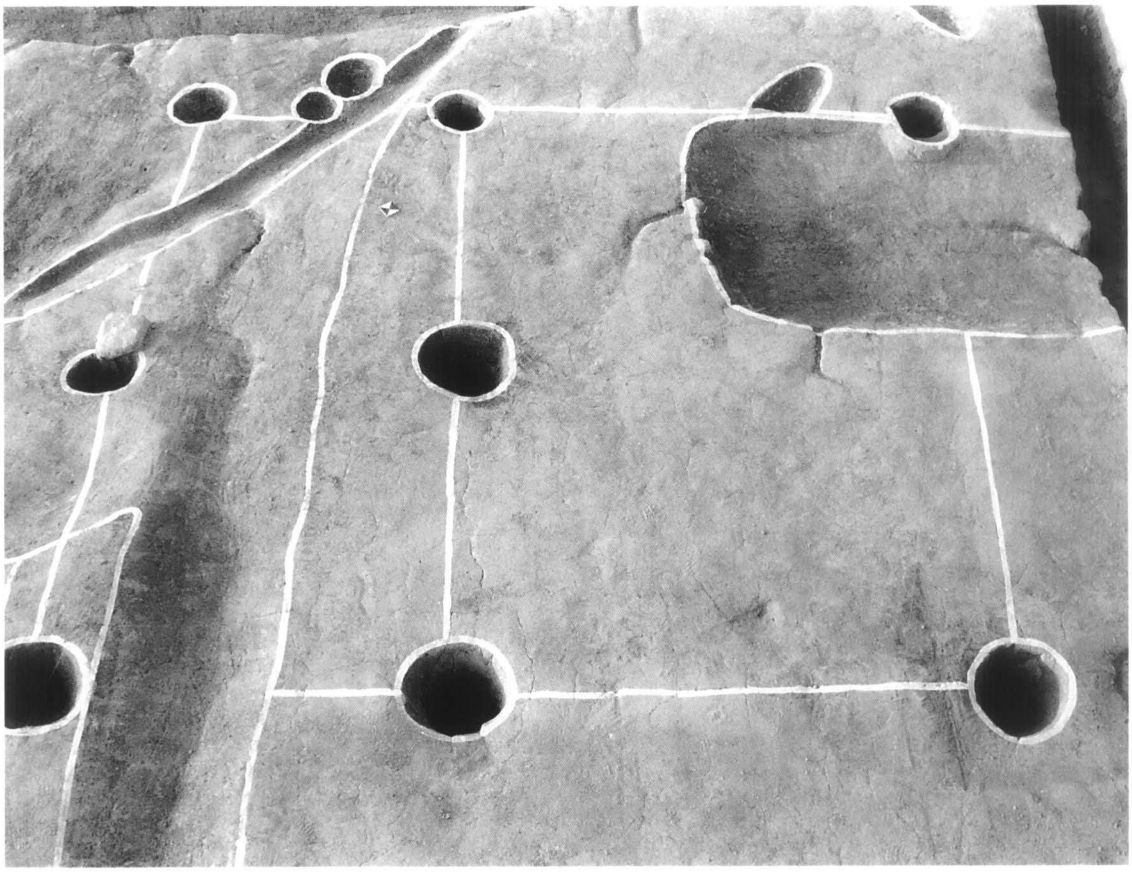
SP208（SB07）土器出土状況



SB10・11（北から）



SB13・15（北から）



SB14（南から）

SB16・17（北から）